
男爵は嘲笑う

謳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男爵は嘲笑う

【Nコード】

N83060

【作者名】

謳

【あらすじ】

両親を早くに亡くし、探偵業を営む叔父夫婦に引き取られ生活する24歳の芳生ユリは、叔父とともに依頼主である”純・美術館”を訪れる。

美術館には、数年前から世界各国で希少な宝飾品を盗み、暗躍する怪盗”男爵”からの予告状が届けられていた。

そこで”男爵”を追う正体不明の青年・蕪木 了と出会ったユリは、

了と、美術館館長の友人で小さな砂漠の国から来た少女・クレアとともに、”男爵”を追う。

事件を追う中、取り戻していく昔の記憶、クレアの過去、了の秘密…。

最後に思い出すのは、一体何の記憶なのか。

”男爵”とは何者なのか…。

文章校正中

たまに編集しますが、話に変更はありません。

おかしい表現、直すべき(差別用語のような)表現を見つけた場合は、是非ご指摘ください。

キャラ設定などはこちら↓<http://www.pixiv.net/member/illustrist.php?tag=E7%94%B7%E7%88%B5>

4月28日 1

あの日出会ったあの子は、とても朗らかに笑い、優しく温かな風を纏っているように見えた。

恐らく海外出張に向かうのであろう両親は、空港の搭乗口の前で、離陸時間の迫るアナウンスに慌てながら、娘に色色と声をかけている。そんな両親を、あの子は「大丈夫、大丈夫」と笑って見送っていた。

だから…。

だから、あの時、あの爆発音が聞こえ、悲鳴と怒号が飛び交う中、目を見開いたまま、涙も流さないで呆然と立ち尽くすあの子は、避難を促すボクの腕の中で、ひたすら、現実を忘れてしまおうと思っていたに違いない。

だから…、だから…。

「…あれ？」

さつきから同じところを廻っている気がする。

「あれ？」

何度見回しても、大して景色が変わらない。

「…迷っちゃった…かも…。」

迷子は芳生よしおユリの専売特許だった。

今年、二四になった。

訳あって大学を一年休学した後、昨年何とか卒業し、今は育ての

親である叔父が経営する探偵事務所の仕事を無理矢理手伝っている。無理矢理というのは、叔父がそれを許してくれないからだ。

就職する気がないのではなく、叔父と一緒に仕事があった。今日もその叔父にくっついて依頼人に会いに来たのだが、好奇心からきよるきよると見回っているうちに叔父と逸れてしまった。

それに気がついたときには、既に自分の現在地までよく判らない状況になっていて、さらに自ら追い討ちをかけるように叔父を探し回った結果、迷子という敗北宣言を自身に向けて行わなければならなくなってしまった。

訪れたのは、都内で最近建てられた、財団法人 大鳥純忠会が運営する”純・美術館”^{すみ}。 ”純・フォーラム”^{すみ}という広大な敷地を有する多目的エリアの一角にある美術館で、都内の施設の中でも、最も大きな物である。

大正や明治を想わせる白茶のレンガ造りの外見で、正面右側に聳える六角形の塔がなんとも味のある建物だ。

館内も床が市松模様になっていたり、展示室にも窓のある、一見美術館とは思えない造りなのだが、いったん展示物が搬入されれば、その窓には重厚な遮光カーテンが何枚も重ねてかかり、真つ暗闇の中にライトアップされる美術品は、建物の雰囲気とあいまって、より一層味わい深く輝く。

だが今は、近々開催される”シリング王国”の国宝を展示する展示会用に、全館内装をリニューアル中という事で、今はところどころがブルーシートで覆われている。

決して大き過ぎる施設ではないのだが、同じような展示室が並び、同じようにブルーシートが敷かれているので、ユリのような”迷子スキル”の高い者ならば、十分迷うであろう状況ではある。

依頼主は、この美術館の館長だという話は聞いていた。

だから、「館長室に行けば、会えると思うのよね」と考え、館長室を探していたのだ。

だが、その館長室の場所が館内案内図のどこにも載っていないも

のだから、歩き回って探す他なかった。

そして結局、迷子、という事になったのだった。

「どこかに人いないかな……。あ。」

きよろきよろとしながら更に歩いていると、二人の人陰が見えた。

一人はどうやら警備員のようだった。

もう一人は、特に制服を着ている訳ではないが、偉そうに警備員に指示をする仕草をしたり、紙を見合ったりしている。背の高い、若い男だった。

「今改装工事中で一般人の出入りは一切禁止だから、ここにいるって事は、美術館の関係者の人も。あの人に聞いてみよう。」

警備員ではなくその男に尋ねようと思ったユリは、真っ直ぐ男に歩み寄った。

「あのう……。」

声が聞こえるくらいまで近付いたところで、ユリが男の背中に声をかけた。

男は首だけをこちらに軽く向け、さらに横目で睨み付けるようにユリに振り向いた。

丹精な顔立ちだが、少し眠たそうな目元の奥で、鋭さを帯びた瞳が光っていた。

髪は整えられてはいるのだが、雑多に荒れているようにも見えた。薄グレーのジップアップのジャケットの襟を、長い襟足に負けないくらいの長い首元で立て、濃いグレーのジーンズを穿いている。そのジーンズも、長い脚に合わせて作ったかのようにぴったりと形良く穿きこなされていて、恐らく一般的に「格好のよい」と言われ、もてはやされるタイプのその男は、偉そうに腰に手をやったまま、ユリを一瞥して、「ん？」と素っ気無く言った。

見るからに不機嫌なその男の表情に、ユリは一瞬身動きをした。「すみません、迷ってしまっ……。」

館長室へ行きたいんですけど、どう行ったらいいんでしょう？」

「館長室？ なにに？」

「連れが、この美術館の方とお話してるはずなんですけど、一緒に
ついて来て、はぐれちゃって…。」

答えると、男は少し間を置いて、

「あ、そう。」

と言つて立ち去ってしまった。

「え？ あ！ ちょっと…」

そのあまりに素っ気無さすぎる対応にユリはムっとして、こんな
短いやり取りで人を嫌う事があるのかと、思わず「何よ、不親切ね
！」と口に出して言った。

すると、突然後ろから「すいませんね、不親切で」と声がした。

慌てて振り返ると、さっきの男が不機嫌な表情のまま、腰に手を
当てて立っていた。そして、バツの悪い表情を浮かべるユリに、

「こちらでも仕事中でね。」

館長室までご案内しましょう。ついて来なさい。」

と言い、足早に歩き出した。

「よろしく願います。」

低い声で答えて、ユリはその背中を追いかけながら、

（何なのよこいつ、えらっそうに！）

と、心の中で悪態を吐いた。

4月28日 2

足の早い男の後を、ユリは小走りについて行った。

いくつか同じような部屋を抜け、非常階段のような階段を下りた。そこで、自分が今まで二階にいた事を知る。

歩き出してから、人ともあまりすれ違わず、そして男は無言。

元来お喋りなユリは、この状況が苦痛だった。

「美術館の関係者の方なんですか？」

堪らず声をかけると、男はちらりと目だけでユリを振り返ってから、「まあ、関係者といえば関係者だけど」と答えた。

不機嫌なのは変わらないらしかったが、沈黙よりマシと、ユリは構わず喋り出した。

「この美術館大きいですよねえ。」

この都で一番大きな美術館だし、展示室だけじゃなくて、音楽ホールとか、会議室とか、パーティ会場まであって。

改装工事後にやる”シリング王国・王家の財宝展”も凄く楽しみなんですよ！

シリング王国の国王の奥さんが愛用してたアクセサリとか展示するんですよ？ 楽しみだなあ。

特にポスターにもなってる”紅い^{なみた}涙”！ あの大きなカルセドニの付いたネックレス、凄いですよね！」

シリング王国は、中近東にある小さな国だ。

ユリも詳しくは知らないが、その王家に伝わる国宝級の装飾品が、一週間後の五月四日から展示される。

特に”紅い涙”と呼ばれるネックレスは、大きな紅いカルセドニを贅沢に使った雄雄しいデザインの装飾品で、その石の大きさからも注目を集めていた。

男は少し呆れたようにため息を吐いて、歩きながらも今度はしっかりと振り返ると、興奮気味に語るユリを見た。

「君、ここに何しに来たの？」

「え？ ああ、叔父が探偵をしてるんですよ。」

それで、美術館で依頼人と待ち合わせをしてるっていつので、ついで来たんです。」

「じゃあ、探偵事務所の人？」

「いいえ、私はただの付き添いです。」

そこまで聞いて、「そう」と興味なさそうな声で言い、男は視線を前に戻した。

「着きましたよ。」

男が足を止めた。

二歩ほど後ろを歩いていたユリも、足を止める。

いつの間にか職員通路らしき廊下を歩いていて、すぐそこにある突き当たりには、両開きの大きな扉があった。ドアには『館長室』と記されている。

「あああ、よかった。一時はどうなる事かと…。」

有難うございました。」

深々と頭を下げ、ユリは礼を言った。

そして、「じゃあ」と言って前へ一歩踏み出すと、男が扉とユリの間に立ち塞がった。

「ああ、ちよつと。」

「はい？」

怪訝そうにユリが見上げると、男は涼しい顔を崩さずに、

「君、関係者ではないんでしょう？」

今、君の叔父さんとやらと依頼主が話しているところだから、立ち入りは遠慮して貰わないと。」

と言った。

「え！？ だつて…！」

「守秘義務って言う言葉、知ってるでしょ？」

親族に探偵業をする者がいるなら、そういう事くらいは弁えてくれないと。」

人を小馬鹿にしたような見下した態度でのうのうと言い放つ男に、ユリが食ってかかる。

「あ…あなた何なんです!?!」

「君は知る必要ないでしょ。」

尚も平然と答える男に、ユリの中の何かがブチッと音を立てて切れた。

「いいわ!　こっちだって名乗れない人に止められる筋合いもないわ!

入ってやる!」

男を強引に除け、扉に近付こうとするユリを、男が慌てて止めた。

「ちょ!」

その瞬間、

「何の騒ぎです!?!」

館長室の扉が開き、中から男が出てきた。

眼鏡をかけ、よれよれのシャツを二着ほど重ね着したガリガリの中年男が、困惑し切った顔で立っていた。

「叔父さん!」

それはユリが無理矢理着いて来た、叔父で探偵の芳生たくみ 匠だった。

「騒いでいたのはユリか…。みつともない。」

困惑を呆れた顔に歪め直して、匠が言った。

すると、傍らで慌てていた男が「芳生さん」と、匠に声をかけた。

「ああ、蕪木さん。」

「叔父さん、知ってる人?」

ユリが訊ねると、匠はまた慌てた様子で、「当たり前だ!　今回の依頼でお世話になる警察の担当の方だぞ!」と答えたので、ユリは勢いよく、男のジャケットを掴んでいた手を離した。

「え…、警察…?」

「蕪木かぶらぎ 了さんとあるだよ。」

匠が紹介すると、蕪木と呼ばれた男は「どうも」と無愛想に言った。

「芳生 ユリです…。」

その…、ごめんなさい…」

親に怒られる小学生のように肩を竦めて謝るユリに、了は無愛想を不機嫌に変えて「どういたしまして」と答えた。

（むっ！ かわいくない！）

反省の意を瞬時に棄て、ユリはハッキリと、ムっとした表情をした。

その表情に、また要らぬ文句の一つも言いそうな雰囲気を感じた匠が切り出した。

「ちょうど良かったよ、ユリ。」

今回は人手が足りなくてね、手伝ってもらおうと思ってるんだ。一緒に話を聞いてくれないか？」

その言葉に、ユリの顔がぱつと切り替わる。

この一年間、ずっと待ち望んでいた言葉が、ついに匠の口から聞けたのだ。

「え！ やる！ 聞く…！」

興奮気味に答えるユリに苦笑して、匠は了に視線を移した。

「蕪木さんは…。」

匠の表情から『どうする？』という問いを察した了は、

「そうですね。話自体はもう聞いていますが、芳生さんがいらっしゃるなら、貴重な意見が聞けるかも知れない。

同席させて下さい。」

と答えた。

「よかった、お願いします。」

場の空気がやっと変わった事にほっと胸を撫で下ろした匠は、にこりと笑って、館長室へ戻って行った。

続いて、了を避けて室内へ入ろうとしたユリは、とても嫌な事に気がついた。

（あっ…ということは、こいつと一緒に仕事……。げ…。）

横目でチラリと了を見上げると、そんなユリの考えなどお見通し

のような、小憎らしいニヤリ顔をし、すぐに涼しい顔に戻って先に室内へと入っていった。

「んな！ なんなのアイツは！」

ユリは再び湧き上がった怒りで顔を真っ赤にして、床を一つ、だん！と踏み鳴らした。

4月28日 3

ユリを初めとする館長室に揃った面々は、小さな来客用のソファセットを囲んで、何故か立っていた。

「揃ったね。先に紹介してしまおうか。」

そう言うと、匠は時計回りに紹介を始める。

「こちらはこの美術館の館長の、菅野^{すがの}さん。」

ユリの左隣に立つ年配の男を紹介する。

菅野は丸く小さな眼鏡をかけ、髪を丁寧にセットした五〇代くらいの男性で、匠よりさらに痩せ細っていた。

頬はこけ、細い垂れ目と眉が、見た目を必要以上に病弱にしていた。

身なりには気を遣っているようで、丁寧にアイロンのかけられたシャツに、スラッグスとセットのベストを着、袖元に黒い硝子玉のカフスを着けている。

紹介されて、菅野が深く頭を下げる。

「こっちは私の姪の、ユリと言います。」

彼女には、今回少し私の手伝いをして貰おうと考えています。」

続いてユリが紹介された。

菅野は、見た目よりも健康そうな声で「よろしく願いますよ」と言った。

「で…」と続けて、匠が了を紹介する。

「こちらが蕪木 了さん。警察の刑事です。」

既に菅野と了は面識があるらしいが、改めて菅野が頭を下げた。

「お世話になります。」

「よろしく願います。」

（刑事…。一応偉い人なのかしらね…。）

廊下での不機嫌な様子もなかったので、ユリも「改めて、よろしく願います」と声をかけた。

すると了は、表情をさつと不機嫌に変えて、「…どういたしまして」と答えた。

(コイツは~~~~~。)

無愛想を通り越し、完全に嫌味を伴う態度に、ユリの怒りが再沸した。その様子を見かねて、匠が宥める。

「まあまあ…。」

では館長、お話をお願いします。」

「承知しました」菅野が事の経緯を語り始める。

「昨日、この様な手紙が届きました。」

周りの人間に、ソファに腰をかける様促しながら、菅野は大事そうに手に持っていた赤い手紙のようなものを、真ん中のテーブルに置いた。

「あ、これ新聞にこの間載ってた！」

今世界中で話題になってる、「男爵」って怪盗の予告状！」

二年ほど前になるだろうか、自ら「男爵」と名乗る怪盗が出現した。「男爵」は世界各国の豪邸や、美術館、博物館、資料館などの施設を狙い、貴重で高価な装飾品を盗み回っていた。

その際、必ず予告状が出される。その予告状は、赤い二つ折りのカードで、堂々と肉筆による犯行予告が書かれている。

本物か否かはさて置き、世界の珍事件と称する新聞の特集コーナーに、カラー写真付きで掲載されていたのを、ユリが偶然見たのだ。そうです。

狙いは来週うちで開催する「シリング王国」の展示会の目玉である「紅い泪」。」

「大胆！」

「コラコラ…」茶々を入れるユリを、匠が嗜める。

「でも、予告状も本物のようだね。」

前の事件の時の予告状を見せて貰ったことがあるが、まったく同じものだ。

大胆にも肉筆での予告状。

筆跡鑑定をしても、少なくとも書いた人物は同一人物だと結果が出るだろうね。」

赤い予告状を手に取り、雑多にパタパタと揺らしながら、匠が言った。

「予告時間は、ちょうど一週間後の開催初日の〇時きっかり。」

この予告状以外に連絡はありません。」

そこまで言って、菅野の顔が一層曇った。

「ただ、開催初日のその時間は、ちょうどオープニングセレモニーの真っ最中で、ゲストにはシリング王国の駐日大使とその娘さんが出席されているのです。」

この御仁方に何らかの危害が及ばないかも危惧しております…。

「

「夜中にセレモニーやるんですか？」

「ええ。日中はなるべく、一般のお客様へ美術館を開放したいので…。」

「セレモニーの時間をズラすとか、出来ないんですか？」とユリが訊ねると、菅野はがっくりと肩を落として、

「それも考えましたが、ちょっととはつきりとは申し上げられないのですが、色々事情がありまして、それも難しく…。」

と、歯切れの悪い返答をした。

「予告時間、”紅い泪”はどういう状態なんですか？」

今度は了が訊ねる。

「当館には、地下五階に高いレベルのセキュリティがかかっている美術品の保管倉庫があります。その中に更に厳重なセキュリティをかけてある小部屋がありまして、展示が終わった後翌日の展示が始まるまで、基本的にはその部屋で保管をします。」

菅野は答え、そして「ただ…」と続けた。

「セレモニー中、出席者から希望があれば、会場へお出ししなければなりません。希望がなければ、そのまま動かす事もないのですが…。」

「断れないんですか？」とユリが聞くと、
「難しいですね…」。

セレモニーの参加者のほとんどが、この美術館に出資して下さっている投資家の方々、云わばこの館のパトロンですから。

三か月前に展示会を企画して、短時間で資金調達など難しい事に対応して下さった方々ですし、要望があれば、お出ししない訳に行きません…」。

菅野は首を振って、言いながらため息を吐いた。

「そんなあ…」。

ユリが声を上げると、了が平然と「ま、だから俺たちや君たちが呼ばれた訳だが…」と言う。

菅野はただ下を向いたまま「申し訳ありません…」と言うだけだった。かなり憔悴している様子なので、匠が声をかけた。

「菅野さんが謝る事ではありませんよ。」

とにかく、当日の警備状況などの確認をきちんとしましょう。」
その言葉に、了が続ける。

「今、改装後の美術館の見取り図を、施工会社や工事業者に問い合わせせて取り寄せていますので、警備の配置などはそれからで。」

先に、その地下の保管倉庫とやらについて聞きたいのですが…」。
てきぱきと話を展開させる了に、菅野が少し顔を上げて、
「そうですね。」

私よりもっと詳しい人間がいますから、彼を呼びましょう。
ちよっとお待ちいただけますか。」

と言い、席を立とうとしたので、了は手でそれを制した。

「ああ、結構です。」

その”彼”は今どこに？」

「地下二階にセキュリテイルームがあります。彼は随時そこに。」

名前は、飛澤^{とびさわこうへい} 康平。当館の警備責任者です。」

飛澤の名を聞いて、即座に了が立ち上がった。

「有難うございます。」

私たちがそこへ向かいます。彼に連絡だけしておいていただけですか。」

「わかりました。」

了は菅野の返答を聞く間も惜しそうにユリに顔を向けた。

そして少々困惑気味の表情を浮かべ、「…えつと…」ともごついたので、「な、何よ…」とユリが身を退いた。

その様子を見かねた匠が、しかし面白そうなものを見る顔で了のフオローをする。

「ユリ、蕪木さんと一緒に、飛澤さんに会って来てくれないか。」

「ちょ！ ええええええええ！！ こいつと二人で！！」

ユリは驚き、了は即座に不機嫌な顔をする。

「”こいつ”？」

「何か不満でも？」

「大いに。」

お互い心象が悪い者同士、しかも口が達者な者同士のようなのだ。似た者同士だから、言い合いも止め処なく続きそうに思えた。

「まあまあ。ユリも大人しくしてくれよ…。」

匠が宥めると、ユリが不貞腐れながら「…悪かったわよ…」と言いい、了も黙った。そして、ふいつと踵を返して、「さっさと行くぞ」と言い、館長室を出て行ってしまった。

（えらっそうに！）

ユリは膨れながらも、了のあとを追った。

4月28日 4

地下へと歩き始めて十五分ほど経つ。

その間ユリは、無言のまま早足で歩く了の背中を、追いかけた。

(ムカツク程、無口ね…。)

いけ好かないが、無言にも堪えられないユリが、話しかけた。

「刑事さんになってどのくらい？」

突然後ろからかけられた問いに、了は一瞬後ろを向きかけ、熟考した後、

「警視庁の刑事課に配属になったのが、今から六年少し前。」

と淡白に答えた。

「へえ」。高校卒業して直ぐに？」

尚も続けるユリに、了は小さくため息を吐いたあと、諦めて答えた。

「大学院卒業してすぐに。」

「えっ」と、了の答えにユリが驚いた。

「ちょっと待ってよ。同い年くらいの人じゃないの!？」

「君とは多分半周以上違うだろうね。」

「ウソ!」声を上げるユリに、「嘔吐いてどうする」と了が冷静に答えた。

ユリにとって立場はどうあれ、近い歳であれだけ横柄な態度であれば、十分嫌う理由になった。しかし、かなりの年上となれば、話は変わってくる。

「…ごめんなさい…。そんな大人の人だと思わなくて…」

ユリが謝ると、了は眉を顰めて「歳の問題なのか…」と呟いた。
「うっ…。そういう意味でもないんだけど…」

歳の問題では確かにないのだが、意見の捕らえ方も変わってくる、という考え方なのだが、早々理解されるものでもないのだろう。

個人的なことを少し知り始めると、どんどん知りたくなってくる。

「何故、刑事に？」とさらに問うと、了が黙ったので、ユリは慌てた。

「あ、なんか、言えない事情があるなら、話変えるわ。」

そう言うと、了も何故か慌てて「そういう訳でもないが…」と答えた。

「人に話すほどの理由もないなと思って…」

「何となくなつたの、警察に!？」

「そういうお前は、興味本位で探偵になつたんだろ？」

言われて苛つとしたのか、了が言い返した。

ユリも釣られてけんか腰になる。

「ふんっ残念！　そこまで能天気じゃないわよ！」

「能天気自体は認めるんだな？」

ニヤリともせず了に言われ、「な!!!」とユリが爆発寸前に怒った瞬間、了が足を止めた。

「ほら。着いたぞ。」

言われて辺りを見回すと、いつの間にか照明の少し暗い廊下になっていた。

了の向こうに、『セキユリティ・ルーム』と書かれたプレートが掲げられた鉄扉が見える。

廊下の壁や床は、美術館内とは思えないほど、地上階のそれと異なる材質で作られていた。

床はつるりとして鈍い光沢を放ち、壁は薄汚れていて、パイプが天井との角を蛇のように這っていた。

「おお、秘密基地って感じね、地下だけに。」

ユリが言うと、了が肩を落として息を吐いた。呆れたのだ。

「それにしても、この美術館、本当に広いのね…。ずいぶん遠かったじゃない？」

さらにユリが言うと、了は腰に手を当てて、今度はあからさまに呆れた顔をした。

「もしかとは思ったが、お前は何も見てなかったのか…。」

「え？」

「この事件に関わるなら、館内を見て回ったほうがいいと思って、気を利かせてわざわざ遠回りをしながら回ってやったというのに…」

「

恩着せがましく言うのに、「そんなの言ってくれなきゃ判らないわよー！」とユリが声を荒げたので、了が「お前ね…」とため息混じりに嗜めようとしたところ、ユリの後ろから突如^{入り口}声^がした。

「おやおや、喧嘩するほど仲がいいとはいうけど、こんなところでイチャつかれちゃ、俺も困っちゃうな。」

あっけらかんと緊張感のない、大きな声が突然聞こえたので、ユリも了も目を見開いて驚いた。

慌てて振り向くと、ガタイの大きな作業服の男が仁王立ちしてにこにこ笑っていた。

「だっ、誰がイチャついてるっていうんですか！」

ユリが了に向けようとしていた怒りを男にぶつけると、男は大笑いをしながら「元気のいい彼女だなア！」と、了に言った。

言われた了は、深く項垂れて一瞬放心したあと、咳払いをした。

「…コホン…」

あの、飛澤さんを訪ねて来たのですが。菅野館長から、連絡をいただいています。」

了が言くと、男は「おー！ 警察の人か！」とさらに大きな声を出した。

「さっき館長から連絡が来て、待ってたところだよ！

取り敢えず、入りなよ！」

どうやら、彼が飛澤のようだった。

4月28日 5

飛澤が、鉄扉の脇の装置に胸ポケットから取り出したカードを掲げると、軽やかな電子音が鳴って、次いでカチャリと錠が外れる音がした。

セキュリティ・ルームへの立ち入りは、専用のカードで制限されているのだろう。

飛澤はカードを元のポケットに入れ直し、ノブを捻った。ぐいつと押すと、見た目どおりの重い金属が擦れる音を立てながら、扉が開いた。

先に中に入った飛澤が、扉を大きく開けて二人を中へと促す。

一歩足を踏み入れると、ヴン…という独特のモーター音が聞こえた。薄暗い照明が、場を異空間のように演出している。無数のボタンやらツマミやらが並ぶ操作版を挿んで、美術館内に置かれた全ての監視カメラの映像が映し出されたモニタが、チラチラと蒼白い光を溢れさせながら並んでいる。

「わぁ！ かつこいい！ 中はもつと秘密基地って感じ！」

ユリがはしゃぐと、「はしゃぐな」と了が呆れた。

さらに飛澤が、

「そう怒るなよ、刑事さん。可愛いじゃねえの。若いつてのはいいもんだよ。」

と茶々を入れたので、了は目を瞑って思いつきり鼻から息を吸った。そして、「…もういいです…」と一気に鼻から空気を吐き出す。

粗方呆れ果てたのち、ふっと了が顔を上げる。

「地下の保管倉庫について、お話を伺いに来ました。」

「おう、聞いているよ！ 案内しろって言われてる。」

すぐに見に行くかい？」

了に、飛澤が軽快に答える。

「そうですか。」

では、折角なので、このセキュリティ・ルームについて教えていただいた後にでも。」

「あいよ！ で、何が聞きたいんだ？」

「ユリ。」

このやり取りの間、面白そうに辺りを見回し、緊張感もまるで持ち合わせていないユリを、了が呼んだ。

勝手に話を進めた挙句、突然呼び捨てで呼ばれ、ユリはムツとした顔をする。

（ちよっと！ 何てヤツ！）

内心いきり立っているユリを、了は涼しげに眺めている。

「名探偵さんのお手並み拝見と行きたいんだがな。」

言葉とは裏腹な、「先に質問させてやる」という横柄な態度が滲み出ている。

（何よその態度は！ んもおおお！ 目にもの見せてやるわ！）

探偵としての初仕事、開始だ。

「飛澤さん、このセキュリティ・ルーム、かつこいいですね！」

了に対する態度とは一変、にこりと笑って、ユリが切り出した。了は冷やかな表情で見守る。

「だろ！ お嬢ちゃん、解るねえ。」

「ハイテクって感じ！」

「だろ！？」

実際、今年の初めに導入された新しいセキュリティシステムを管理してる部屋だ。

ま、言ってみりゃ、秘密基地の司令室だな！」

特撮マニアによくある発想である。

「新しいシステム？」

「おう。」

シリングの展示会が決まったんでな、以前から薦めてた新システムの導入を、館長が決定したのよ。」

「どういう？」

「まずは、高解像度監視カメラの導入だな。

以前は解像度も低くて、録画も七十二時間おきにデータを重ね撮りしてたんで、遡ろうとしても最大三日前までだったんだが、新しく導入したヤツは、特殊データ圧縮技術とやらのお蔭で解像度も高くなって、おまけに一六八時間までデータを遡れるようになったのよ！」

興奮気味に説明をする飛澤に、ユリも「すごい！」と興奮してみせる。

「すげーだろ！」と、飛澤も上機嫌だ。

実際、ユリは何が凄いのか理解していないはずだ、と了は思う。そんな了の胸の内を察する事もなく、飛澤が続ける。

「んで、夜間赤外線センサーだ。

館内中の床上三〇センチのところにセンサー網が張ってある。

天井からぶら下がって来ない限りは、移動には困難な仕掛けだな。このセンサーは、ＩＤカードを持った人間が引つかかってもうんともすんとも言わないが、持っていないヤツが引つかかると、アラームが作動するようになってる。

このアラームは、この美術館を壊すか、このセンサーを完全に取外すかしない限り、解除出来ないようになってる。

で、もう一つが、これから案内する保管倉庫よ。」

ここで、それまで満面の笑みを浮かべていた飛澤も顔が、悪巧みをしているようなニヤリ顔に変わった。

「行つてから説明するが、あそこにや、一度入ってセキュリティが働いちまったら最後、このメインルームで許可を出すまで、扉は開かないようになってる。」

ここだけの話、とでも言いたげな声で話す飛澤に、よく理解していないユリが「へえ…」と相槌を打つ。

「まあ、あとは行つて説明したほうが解り易いし、どんだけ強固かつても納得いくだろうからな、向こうで説明するよ。」

といい、飛澤は再び満面の笑みを浮かべた。

責任者だけあつて、機能はしっかりと把握しているようだ。

理解はしていないが、そのところは汲めたユリは、ふと、飛澤の経歴が知りたくなった。

「飛澤さんは、いつからこの仕事を？」

「この美術館の担当になつたのは、三年くらい前だな。」

「担当？」

「オレは警備会社の人間で、この美術館の職員じゃねえんだよ。」

「ああ！　そうか。」

「じゃあ、その警備会社には三年前から？」

「いやあ、この美術館に来る前に、七年くらい別の施設の警備担当をしていたからな。」

今の会社には十年か。」

ユリの問いに、飛澤が答える。

「へえ、長いんですね。」

「古株の一人つて感じだな。」

確かに十年もいれば、それなりに会社での位置付けも上がるだろうし、社員の出入りも数多く見てきただろう。そんな事を考えていた了は、ユリをちらりと見た。

何か考えているのか、何も考えていないのか、世間話でもするよ
うに、ユリはにこにことしている。

「この美術館の担当になつた切欠つて、ありました？」

これではインタビューである。切欠と言われても…。

「ん〜。」

前の施設の紹介があつたつて聞いた事はあるが…。

オレは言われた仕事をこなすだけだからな！」

と、当然の答えが返ってきた。

了は”紹介”という言葉が気になった。業者を斡旋、という事なのだろうが、どういう経緯があつての事か、情報として得ておくべきだと思つたのだ。それはユリも同じだったのか、「前の施設つて？」と聞いた。

”前の施設”と一度は伏せたので、言い淀むかと思ったが、意外にすんなりと飛澤は答えた。

「シリング大使館だよ。」

「いやあ、偶然ってあるもんだな！」

悠長に笑う飛澤を、ユリの陰で了が睨んだ。

シリング大使館から、この美術館へ業者の斡旋がなされた。そんな事があるだろうか。どこかで何か繋がっているのだろうか。そこに何か思惑があつたのだろうか。

飛澤が笑うように、ただの偶然かもしれない。

シリング大使館から、美術館へ警備会社が斡旋された事も。

飛澤の担当が変わった事も。

今回シリング王国の展示会が行われる事も。

男爵が、そのシリングの国宝を狙っている事も。

否、職業柄とはいえ、考えすぎなのか……。了は小さく首を振った。そんな了の疑惑を他所に、ユリが話題を変えた。

「そうそう。菅野館長について、聞かせて下さい。」

急に質問染みた口調になった。関係者の人柄を知る事も、捜査には無用の事ではない。かもしれない。

ユリの口調に合わせるかのように、飛澤の表情が和らいだ。「あの人は、よく出来た人だよ。」としみじみ言う。

「いつも冷静で人当たりもよくてさ、騙され易そうでもあるけどな。今回の”シリング王国”の展示会がこの美術館で出来るのも、元はといえば館長の人徳のお蔭なんだぜ？」

大した人だよ。ほんつと。」

何度も頷きながら、飛澤は感慨深げに言った。

「どういう事？」

気になる。女の子だから、井戸端会議のような噂話や、人の過去の話には興味がある。

「詳しくは知らないがな、ちらっと聞いた話だと、昔、今の在日シリング大使がまだただの大使館職員だった時分、家族旅行で来日し

た事があつたらしいんだけどな。

ある日、大使の末娘が逸れて迷子になったらいいんだ。」

”迷子”と聞いて、ユリは了をちらりと見た。了はユリの視線に気付かず、腕組をした。ユリが視線を戻すと、釣られたのか飛澤も腕組をしていた。

「んで、家族も日本にはそれほど詳しくないし、娘も日本語なんて話せないから、一向に見付からなくてな、交番やら何やらに届けつつ、右往左往しているところへ、館長が娘を連れて、シリング大使館に現れたらしい。」

偶然、出会ったのか。

「何でもその頃、シリング王国周辺の地域の文化について研究してたらしくて、偶然その日、公園でシリングの歴史書を読んでたんだと。」

そこへ迷子の娘が、その本の表紙を見て、館長に話しかけた。」

「きつと藁にも縋る気持ちだったんだろうなあ。」と、飛澤が付け加えた。

「でも偶然にも、シリング国語も勉強してた館長が相手だった。

母国語しか離せない娘と、何とか会話が出来て、大使館に連れて行った。

と、そういう訳らしい。

大使一家とはその後、時折手紙のやり取りをする仲になったらしくてな、美術館の館長になったとき、いつか自分の国の展示会をやってくれて、大使から頼まれたらしいんだ。」

ユリは、偶然とはここまで繋がるものなのかと、ふと思う。

何気なく聞き流してしまいがちな、この”偶然”の話が、何故かとても気になった。

しかし詳しく知らないと言うわりに、話の内容はずいぶんと具体的だ…。

「その後、まあ色々あって、やっと今回、展示会の開催まで漕ぎ着けたって訳さ。」

きつと、あの日、あそこで本を読んでなかったら、娘にも会えなかったし、展示会も出来なかっただろうって、館長も大喜びだよ。」

飛澤がまとめにかかったので、ユリも大袈裟に驚いてみせた。

「へえ！ そんな事が！」

普段のユリなら、本気で感心していた事だろう。

だが、探偵と言う立場を意識すると、それに付随して、色々な情報の中を探りたくなる。内心では、「よく出来た話だわ」と思っていた。

が、一方で、真実だとして、別に感心すべき事はある。

「まさに仁徳ね！」

誰かさんにも見習って欲しいわ！」

そう言つて、ユリが了をキツと見た。

了は知らん顔、という表情で、目を閉じて聞いていない振りをしている。

二人のやり取りに、飛澤がニヤリと笑つて「そろそろ、行くかい？」と聞いた。

ユリは「そうね」と口にしかけて再び了を見た。

『先に質問させてやる』という言葉思い出したのだ。

”先に”と言う以上、了も聞きたい事はあるのだろう、と瞬時に判断した。そこには、また嫌味を言われたくない、という防衛本能のようなものが働いた可能性がある。

ユリの視線を合図に、「最後に、一つだけ。」と、今まで黙っていた了が口を開いた。

「館長から、我々にここを案内する理由について説明は受けましたか？」

了の質問に、ユリが眉を顰めた。どういう意味だろう。

「おう、なんか、消防法の関連で、設備の見学だとか難しい事言つてたが？」

と、本当にそんな説明だったのかと驚くほど、無茶苦茶な説明が

飛澤の口から出た。

思わずユリが「え？」と声を漏らす。

その傍らで、了は邪悪に口の端を上げて言った。

「そのとおりです。」

有難うございます。とても参考になった。

この調子で、保管倉庫についても教えて下さい。」

「勉強して帰りたい。」と続ける了に、飛澤も満更ではない笑みを浮かべた。

「任せときな！」

答えて、飛澤は鉄扉を開いた。

内側からは、鍵の操作は必要ないらしく、すんなりと扉を開けて出て行った。了も続く。

数歩遅れてセキュリティ・ルームを出たユリの頭の中では、どういう事かという疑問が回っていた。

そして、了のあの笑みの意味も、よく解らなかった。

4月28日 6

飛澤に案内され、セキュリティ・ルームから更に廊下の奥へ進むと、下り階段が現れた。階段の踊り場を二度通過しただろうか、再び廊下に出、その突き当たりに先程より更に重々しい風合いの鉄扉が現れた。

道中の飛澤の説明によると、廊下には、体温に反応するセンサーが壁一面に備わっていて、セキュリティカードを持った人間以外が通ると、アラームが鳴るようになっていらしい。

セキュリティ・ルームと同じように、飛澤が胸ポケットからカードを取り出し、扉の傍らのディスプレイに翳すと、今度は透明の操作盤が引き出され、アルファベットと数字が浮かび上がった。

飛澤は自分の体を壁のようにして立ち、ユリと了に操作盤を打つ手が見えないようにして、何度か盤を押した。押すたびに、軽やかな電子音が鳴る。

合計十回、電子音が鳴った後、ガチャリと錠が下りる音と、何かのモーター音が聞こえたあと、飛澤がノブを捻って扉を押す。

ぐぐ、とゆっくり開く扉の隙間から、テレピン油の匂いだろうか、普段嗅ぐ事のないねっとりとした匂いがした。次いで、鉄の錆びたような匂いや、冷たい風が漏れる。

中に入ると、予想以上に高い天井の駄々広い空間に、いくつもの大きなコンテナの並ぶ光景が、目の前に広がる。

照明は暗く、各所に見える非常灯や赤いセンサー灯が、物々しい雰囲気を出している。

「ここが保管倉庫。

美術館の常時展示品を一時的に保管したり、次の展示会の展示物を保管する場所だ。

美術品ってのは、室温だとか湿度だとかに敏感なものも多いからな。

エリア毎に温度調整が出来るようにしてあったりするんで、どうしても広くなるのよ。」

エリアとは、コンテナの事なのだろう。つまり、コンテナ毎に、温度や湿度調整機能が備わっているのだ。

「ちょうど、上の美術館と、隣の大ホールを合わせたくらいの広さだな。」

”隣の大ホール”とは、フォーラムの敷地内の、美術館の隣にある多目的ホールの事で、広さはこの美術館と同じほどある。

「それで、さらにデリケートなヤツは、別の”小部屋”に保管するのさ。」

”小部屋”。菅野が言っていたのが、その小部屋の事なのだろう。 ”小部屋”は、倉庫の奥に、ひっそりと”置かれていた”。つるりとした真新しい金属の箱に、スライド式と思われる扉が1枚ついている。継ぎ目はなく、まるで金属を箱状に流し込んで固めたような感じた。

床面、と言うより、底面以外は、倉庫のどことも接していない。

倉庫の一角に、少し広い空きスペースを設け、そこにどん、と置いただけの。そう、まさに”置いた”という表現がぴったりののだ。小部屋の扉を、飛澤が開ける。スライド式というのに、隙間は皆無に等しいように見えた。

扉が開くと、中へと促された。

一歩足を踏み入れると、照明もなにもついていない、少し手狭なワンルームという広さの部屋のようだった。

”紅い泪”用のものだろうか、真ん中にぽつんと台座が立っている以外、何も無い。

了が目だけで中を見回す。ユリも一通り眺めるが、特に特殊なセキユリティがかけられているような様子は見受けられなかった。

「どこか変わったところか…？」

ユリが問うと、飛澤がにやりと笑った。

「お。」

お嬢ちゃんは流石に気付かないかな？」

続けて、「こっちにーちゃんは気付いたみたいだが…」と了を見た。

了は天井と壁の境を射るように見つめている。

「え！？

なんか悔しい！」

ユリが言っと、了は見上げたまま言った。

「よく見る。なにもない。」

言われて、ユリが見回す。

確かに、通気口すらない。

そして…、

「監視カメラもない…。どうして？」

倉庫の内部には監視カメラは何台か付いていた。その中の空間といえど、監視カメラくらいは付けるだろうと思う。

「カメラを設置するって事は、線を通すって事だ。

館長の意向で、この部屋には、出入り口以外の一切の進入経路を作らないと言われた。

当然通気口なんていうデカイ口は空けられないし、カメラの線を通す事も出来ない。

その代わり、ここに許可なく入った者は、外のメインルームでロツクを解除してもらうまで、絶対出られない。」

「壁に穴を開けたり…。」

飛澤の説明に、ユリが食いつく。

飛澤は得意げに、胸を張った。

「この部屋の壁は分子レベルで隙間のない、空気すら通さない特殊合金で出来ていて、工事用のでかいドリルか、ダイナマイトを山程持ってこない限り、傷を付けることも出来ないのさ。」

どうだ、とでも言わんばかりだ。

「ロツクを解除出来るのは？」

「ロツクの解除キーを知っているのはただ一人。

菅野館長だけ。」

「え！？　じゃあ…。」

そう聞くと、陳腐な妄想をする。

「仮に館長が何の連絡手段も持たずにこの中に閉じ込められちゃったら…。」

「諦めるしかないな。」

了はくすりとせすに呟いた。

「気付いたところで、解体してみたら館長の死蝋が横たわってた、なんて事にもなり兼ねん。」

「ええ？」

流石に数日くらいなら…。」

慄くユリに、了は冷ややかに続ける。

「考えてみれば判る事だ。」

これだけ狭い部屋に、通気口もない。恐らく扉の隙間もほぼないと見ていいだろう。

そんな中で、数日、酸素を消費し続けるんだぞ？」

どうなるか、行く末を想像するのは容易だ。

「あ…。」と、ユリが小さく息を飲む。

「館長はこの部屋を、保管庫ではなく、展示品に手を出す者を捕獲するための檻として導入したんだろう。」

「まさか！」

「この小部屋には、展示品の中でも一番大事な”紅い泪”を保管する。」

ユリは”紅い泪”が何なのか、知ってるか？」

「この展示会の目玉、でしょ？」

至極一般的な知識だ。それ以上は、調べたこともないので知らない。

すると、飛澤が口を挿んだ。

「なかなか、普通の人は知らないかもな。」

「え？」

「紅い泪」つてのは、シリング王国の現国王が、今は亡き奥さんに捧げた思い出の宝石さ。財宝の中でも、一際貴重な国宝だよな。保管に神経質になるのも解るってもんよ。

この小部屋だけじゃ安心出来なくて、展示中は夜も更に警備員を配置するんだ。」

妃へ贈った大切な宝。

だから嚴重に保管するというのは解る。

ただその「嚴重さ」が問題なのだ。

小部屋が意味するところは、「不届き者の命は問わない」という最終的結論が添えてある事で、それを、あの菅野が決めたとは、そんなに理解出来ない、というのがユリの意見なのだ。

「警備員に、倉庫内の監視カメラに、出口のない小部屋。

嚴重ですね。」

何かが燻ったような煙たい顔をするユリの傍らで、了がにやりと笑って言った。了が笑うとき、大抵は何か思うところがあるのだろう、とユリも段々判ってきた。誘導尋問が巧いのだろう。と思う。

「いやあ、それでも抜け道はあるからなあ。」

了に言われて、しかし、飛澤が否定した。

「どこに!？」

完璧ではないだろう。しかし、この小部屋に閉じ込められたら、それこそ最期のような気がする。もう何も解らない、という顔で見上げるユリに、了が答える。

「飛澤さんはさつきから、「許可なく」と繰り返している。

言葉の通り、「許可がなければセキュリティが働く」という事だが、つまり…。」

「あ、そうか。

許可があるときなら、侵入しても閉じ込められないのね…。」

許可がある状態で、それを「侵入」というのかは疑問だが…。

「そういう事だな。

まあ、そんな万が一みたいな事は、そうそう起きないだろうから

な。」

何重にも張られたセキュリティを潜り、この小部屋への立ち入りを許可されている状態で盗み出す。そんなあからさまな窃盗行為があるだろうか、と、それはユリも思う。

許可が下りている状態、それは即ち、セキュリティ・ルームで警備員が見、菅野がそれを認知している状態なのだから。

「そうよね。」

この小部屋は、云わば見せしめなのだろう、と思う。

これだけ破り難いセキュリティがかかっていますよ、というアピールをしておけば、そうそう手は出さないだろう、という意思が存在するのだろう、と。

だが、ユリと飛澤が暢気に笑う傍らで、了は独り、眉間に皺を寄せていた。

4月28日 7

地下倉庫の仕組みは大凡理解をした。

取り敢えず、細かなところは後で更に情報を得ていけばいい。

了とユリは館長室へ戻る事にした。

戻りの間も、了は無口だった。

しかし、後姿を見る限り、行きの無口とは様子が違う事は、ユリでも解った。

あの”小部屋”は、説明された事以上に、恐らく緻密で嚴重なセキュリティがかけられていて、且つ、あの”小部屋”の存在自体が、有効な脅迫材料なのだろうと思う。

ただ、現に”男爵”から予告が来ている事も、忘れてはならない事だ。”男爵”は、話題になった二年前の事件以来、数々の窃盗を容易く成し遂げ、今も逃走中である。

正体不明、単独犯なのか、複数犯によるものなのか、それすら解らないのだ。

そんな、窃盗の名人宜しい”男爵”なら、保管倉庫の小部屋の情報くらいは得ている筈だ。だから、それはつまり、”小部屋”自体で与えたい脅迫には何の効果もなかった、という事にならないだろうか。

そしてもつと疑問なのは、予告状の事実を飛澤が知らないらしい事だった。

こんな”小部屋”を用意しておきながら、飛澤には言わない。

理由を聞けば納得出来る事かも知れないが、安直に考えれば、矛盾に他ならない。

「ねえ……」

話しかける事を躊躇って、暫くは了の背中を眺めていたユリだったが、やはり聞いておきたい事はあった。

呼ばれて、了が少し首を後ろに回し、すぐに前に戻した。

「館長、どうして飛澤さんに、私たちのこと嘔吐いたのかな？」

「さあな。」

素っ気無い答えが返ってくる。

「もしかして、すでに館長に変装して、この状況を笑ってるかもよ。」

「かもな。」

「むっ。不真面目！」

「そんな事はない。」

声に抑揚がない。

「じゃあなんでそんな答えしかしてくれないの？」

ユリが必死に食いつく。

嫌味を言われるならまだいい。否、良くないが、いいとしても、相手にされないのでは、一緒にいる意味がない。

そんなユリの心情を知ってか知らずか、了が冷たく答える。

「お前と議論しても始まらん。」

「な！！！！！！」

出会って、一番嫌な事を言われた気がした。

探偵としての実績は、確かにない。

ただ、力になれないと判断されるほどの失敗も、まだした覚えがない。

ユリは頭の血管が切れたような気がして、大声を張り上げた。

「もういいわよ！」

そう言って、ずんずんと大股で了を追い抜いた。

館長室までの道がまだよく解っていないとか、そういう事すら忘れるくらい、腹立たしかった。

追い抜き様、了が驚いた顔をした様子が、視界の隅に映った。

そしてユリが完全に追い抜いたとき、了が一瞬困ったような顔をしたように見えた。

気のせいだと思い、どんどん歩いて行くと、暫くして、少し離れた後方から「おい……」と声がした。

「ゆっくり歩けよ。」

「なんでよっ！」

キッと振り向くと、了が怪訝な顔でユリを見て、一言呟いた。

「また迷子になるぞ。」

「っ……」ユリは、謝罪の言葉でもあるかと期待した自分を罵った。

この男が謝る訳がない。

揚げ足どころか、相手の足を自分から揚げ、更にその足を掬うのだから。

ユリが頬を膨らませたまま絶句していると、了は面白いものを見たような、満足げなニヤリ顔をした。

（くっそおおおううう！　くやしい……。）

完全におもちゃだった。

4月28日 8

ユリと了が館長室に戻ると、匠が出迎えた。

「おかえり。二人とも」

「ただいまあ」「戻りました」と各々答える。

「どうだった？」

匠がどちらにともなく訊ねると、逸早くソファにぐったりと座り込んだユリの傍らに立った了が、うつすら苦笑をしながら答えた。

「スキさえつかねければ、”小部屋”については充分過ぎる設備ですね。」

設備というか、あれはもう、完全な罠だ、というのが本音だが、そこは言わないでおく。

「些か神経質すぎるとお思いでしょうね。」

館長室の奥にあるデスクで書類整理をしていた菅野が、自嘲するように言った。

すると、了はニヤリと笑って、「いえ」と即答する。

「むしろ、あれくらいないと、足りないでしょうね。」

「あのシステムと”小部屋”を導入して、やっとあの”男爵”と〇の地点で並んだ、という気分ですよ…。」

あの”男爵”に狙われると思うと、どうしても神経過敏になってしまっていますね…。」

そう続ける菅野に、了はさらにニヤリとする。

「なるほどね。」

ぼんやり見上げながらやり取りを眺めていたユリが怪訝な顔をする。そして、窓辺で話を聞いていた匠を見るが、にこにここと笑っているだけで、了の様子には何の疑問も持っていない様だった。

勘繰りすぎなのかな、とユリは首を傾げた。

そんなユリを見下ろしながら、了はこっそり吹き出しそうになるのを堪えて口に手をやり、「ちよっと、電話を貸して頂けますか。」

夕方に一報を入れると、上司と約束してしまして。」と話を変えた。
「ああ、どうぞ。」

「この机の上のをお使い下さい。」

菅野が言って、席を立った。

「お借りします。」

了が机に歩み寄り、手早く電話をかける。

菅野がユリの向かいのソファに腰を下ろしたので、匠もユリの隣に腰を下ろした。

「そんなに凄かったのか？」

小部屋の話に戻す。

「うん、もう、兎に角凄いつて感じね。」

見た目が派手とかじゃなくて。」

表現力のなさ、というより、理解力のなさは自覚している。

凄い、という以外に言葉のボキャブラリーがないのだ。

匠も、姪の事なのでそれは理解している。が、言うほど馬鹿でない事も解っている。

「ほう。」

「じゃあ、ここはユリに任せるか。」

と、今までとは一変、ここに来て急に色々任される事に、ユリは喜びと不安と両方を感じていた。

「え!？」

「いつ、いいわよ私は雑用で! そういう大事なことは叔父さんが...。」

首をブンブン振って答えると、匠はにこにここと笑ったまま、「いやいや。ユリなら出来るさ。」と軽く答えた。

「信用してくれるのは、嬉しいけど...。」

「と言いながら、刑事さんとなら大丈夫かもしれないけど、とも思う。」

初仕事で勝手が解らない。だから、せめて誰かがいれば。

(そういえば、あいつは...。)

電話をかける了の後姿を見る。好いてはいないが、知らない人間よりは、こいつと一緒の方がマシ、と思う。完全に背中をこちらに向けているので、表情は窺い知れない。ソファセットと机も離れているので、声も微かにしか聞こえない。

「ええ、その辺は問題なさそうです。…了解しました。…そうですね。…はい。…はい。…は？」

何度か電話の向こうの相手に返事をしたあと、了が小さく驚き聞き返した。「北代警部補が？」知らぬ名前が出てきた。

（北代警部補？）

聞き耳を立てると、もう少し大きく了の声が聞こえる。

「…はあ…。…判りました。判りましたってば。」

少々やけくそ気味に返事をしている。

今日初めて出会って、色々嫌味を言われて来た中で、初めて聞く戸惑い気味の声でもあった。

（お？ 苦手人物？）

ユリはなんとなく、弱点を掴んだような高揚感を覚えた。了と電話の相手との会話はまだ続く。

「はい？ ああ、”芳生さん”です。」

（お、私たちのことね。）

自分たちの事をどう伝えるのか。ユリがそわそわすると、期待を裏切る言葉がはつきり聞こえた。

「一人お転婆さんがいますが、大丈夫でしょう。」

（んな！）

おもちゃ扱い、こども扱い。ユリはプライドは高くないほうだと思っているが、さすがにここまで馬鹿にされると、癪に障る。

ユリは了の背中を思いつき睨み付け、小さく舌を出す。

「…はい。…はい。…一日一回で勘弁して下さい。…そうです。…了解しました。」

では、明日このくらいの時間に。」

そう言っただが電話を切ったので、ユリは急いで顔を元に戻した。

が、振り向き様、了はユリを不機嫌な顔で見、「盗み聞きをするな。」と嗜めた。

「何の事？」と素知らぬ顔をするが、了の勘の鋭さに内心冷や汗が噴き出る思いだ。

「君は判り易いんだよ。」

畳み掛けるように、了が言った。

「むっ、失礼しちゃう。」

反論してはみるものの、完全に見透かしている了に、これ以上の抵抗は無用と判断しつつある自分もいる。

観念、の意を込めて、若干の抵抗も込めて、ユリは改めて了に、べ、と舌を出して見せた。了はそんなユリに呆れたあと、すばやく表情を戻して匠を見る。

「芳生さん、明日、こちらからもう一人捜査員を加えます。」

彼には基本的に、表向きの警備と菅野館長の護衛について担当してもらいます。」

「先程ちらりと聞こえましたが、北代さんですね？」

菅野が反応する。

「はい。」

要人警護については手馴れていますので、警備などに限っては、ご安心ください。」

「それは心強い。」

どうやら、菅野は北代を知っているようだ。

「すると、」

と、匠がつるつるとした顎を摩りながら切り出す。

「地下は…。」

警備対象人物は地上階にいるのが基本だ。すると、狙われている”紅い泪”ほか、セキュリティ・ルームとのやり取りや連携をメインに行動する”地下組”は…。

「不本意ながら、私が。」

「うげえ。」

お互いぐったりしながら、了とユリがそれぞれ言う。

「コラコラ、ユリ。」

匠が苦笑する。

「蕪木さんが一緒なら、安心して任せられます。」

ふしだらな娘ですが…。」

「フツツカ、でしょ！ しかも古いのよ！ 何よ叔父さんまで！」

「日頃の行いってヤツだな。」

膝を拳でバンバン叩いて抗議するユリを、了がニヤリと笑った。

その不敵な笑みを、ユリは頬を思いっきり膨らませて睨んだ。

（くっそう！

今に見てる、蕪木 了！）

宣戦布告せずにはおれない。

4月28日 9

館長室での宣戦布告から、何だかんだと様々な確認やら手続きやらがあり、家に着いたのは二〇時を回っていた。

遅めの食事を済ませ、風呂から上がったてすぐに自室に籠る。

明日から仕事を本格的に開始する。

そして何故か、集合時間が匠の事務所に六時と言われた。

自慢ではないが、迷子スキルの高さや並んで、朝が弱い。

しかし、やっと匠に仕事をさせて貰えるのだ、弱音は吐けない。

「取り敢えず、探偵たる者、まずは情報整理！」

ユリは独り言を言いながら、一冊の手帳を開いた。

この手帳は、ユリが匠の事務所で働くとき買ったもので、それから約一年、何にも使わず、この時のためだけにとつてあった手帳だ。

初めてのメモが、世界的に有名な”男爵”に関する事件のメモになるとは、ユリ本人も驚いた。

「まずは…、事件についてね。」

財団法人 大鳥純忠会が運営・管理するフォーラム”純・フォーラム”の中にある”純・美術館”に、昨日未明届けられた一通の予告状が発端…、と。」

内容は、今話題の”男爵”と名乗る怪盗が、近々”純・美術館”で開催される”シリング王国・財宝展”で展示される目玉美術品、”紅い涙”を盗む、というもの。

予告時間は、開催初日の〇時ぴったりに。

その時間は、シリング大使や、財団・美術館関係者が集まって、セレモニーが行われている。

さらにその時間、”紅い涙”は、最近導入したばかりの”超密閉型地下倉庫”に保管されている。が、セレモニーの参加者で、見たいという人が現れれば、パーティ会場へ持ち出される可能性がある。

「予告状については、叔父さん曰く『本物』。

悪戯の可能性は低い。

…このくらいかな。」

丸や四角で囲んだ単語を矢印で結びながら、まとめる。

「次に、”男爵”…。

今世間を騒がせている世界的な怪盗。

怪盗って、今時古臭いかしら…。

でも強盗って言うのとも、ちょっと違うんだよなあ。」

新聞やテレビで騒がれ、一躍大怪盗として有名になった最初の事件は、二年前のイギリスでの事件だったと記憶している。

大英博物館に保管されていた宝飾品が盗まれた。

前々日に、今回美術館に届けられたものと同じ”赤い紙に白インクでトレードマークをプリントした予告状”が届けられていたが、大英博物館が悪戯と判断して対応しなかった事が、当時のニュースでは大きく取り上げられていた。

その後も、各国の美術館や博物館に予告状を送っては、まんまと盗み出してる。

盗んだものが、その後どうなったかも、”男爵”の正体も不明、という事だ。

「”男爵”については、明日叔父さんたちに聞いてみよう。

次は…、菅野館長さん。」

”純・美術館”の館長。今回の依頼主でもある。

シリング大使とは古くからの友人で、その縁で今回の”シリング王国”の展示会が開催される。

”男爵”が狙っているのは、展示会の目玉”紅い泪”。

警備責任者の飛澤の話だと、既に亡くなっている、現国王の奥様に纏わる装飾品で、今回一番重要な国宝だという。

何故、数ある国宝のうち、”紅い泪”を狙うのか。

国宝の最たるものだからか。

それとも、何か理由があるのか。

”男爵”という名前が出たことで忘れられがちだが、個人的な因縁や恨みの可能性は、決して〇ではない。と思う。だが、

「館長さん自身は、とてもおっとりしていた印象だわ。」

特に人に恨まれたりつてというのは考え難い感じ。

でも予告に関しては、警察に相談したり、探偵を雇うくらい心配している見える一方で、飛澤さんには私たちの事もちゃんと説明していなかったり、何だかちょっと理解出来ないところもあるけど……。

「何か考えがあるのかも……。」と声に出しながら、その言葉自体をメモする。

「関係者としては、飛澤さんの事もメモしておかないとね。」

”純・美術館”の地下にある、セキュリティ・ルームの責任者である。

美術館の職員ではなく、警備会社からの出向という話だった。

その警備会社には十年ほど勤務しているらしい。そして、

「美術館の担当になる前は、シリング大使館の担当だったらしいけど、これは大使館の推薦があつたらしいって、飛澤さんが言ってたわね。」

さらに、地下倉庫のセキュリティシステムや、あの”小部屋”の導入を薦めたのは、飛澤の警備会社だという。

「因みに、導入は今年の初め。」

飛澤自身は、豪快な性格で、見るからに体育会系な印象だった。

「気のいい人だから、きちんと対応すれば、きちんとそれに答えてくれそうな印象だわ。」

とメモして、ふと思い出す。

「そういえば、”小部屋”の話しとき、あいつが館長に変なこと聞いてたわね……。」

館長も”これでやっと〇地点で並んだ気分”とか言ってたけど……。何の事かしら……。」

飽く迄も、事件を前提に、だが、何の変哲もない会話のようでは

ある。

が、何となく違和感も残る。

会話以上に、了のあの”笑み”が気になるのだ。絶対、何か考えての発言に違いなかった。

が、考えたところで、解る事ではない。

「今のところは、このくらいかしらね。」

そう言つて、ユリはペンを仕舞いかける。

「…関係者つて言えば…」

正に、今考えていた了も関係者ではある。

「思い出ただけでも腹が立つわ！」

まとめたくないけど、こいつも関係者だから一応まとめないと！」

蕪木了。警視庁の刑事。…なのだろうか。

「つていうか、あいつ何者なのかしら。」

警部とか、巡查とか、階級も聞かなかったわ…。」

歳は、三〇代前半。

「減らず口の減らないヤツ。」

減らないから減らず口つていうのよね、きっと。

兎に角一言多い、口の悪いヤツつていう印象しかないわ。」

心象は全くよくない。

ただ、事件に関しては別で、飛澤への態度や、館長との会話で何か含ませるなど、事件について少し考えがあるような行動が多い。

「人間としては判らないけど、刑事としては頼りになる人なのかも…。」

そこまで言つて、後悔する。「ああ、でも…。」

「最初に会ったときから憎ったらしかたし、すぐ人の揚げ足取りし、兎に角、あの嫌味な言葉遣いと、してやったりみたいな笑顔だけは止めて欲しいわ！」

散々ではあるが、一点だけは、責めるところを知らない。「ちょっと、タイプだけど…。」

ユリは、欠点らしい部分を全てメモしながらも、

「なんかアイツの事考えると苛々するわ！」

と、ブツブツ言う。

「明日は朝六時には事務所に集合って言われたし、早く寝よ！」
怒りを忘れるには、寝るのが一番だ。

ユリはガサツに手帳を仕舞い、ベッドに転がった。

部屋を眺める。

何故かツルの絡まる古い洋風の家の外観と、白い細い枠の格子窓に合わせて、家具も白を基調に丁寧に集めたお気に入りの部屋だ。だが、自分の家ではない。

この家は、父の弟である匠と、妻のカナエ夫妻の家だ。

四階建ての小さなビルで、一階と二階に匠の探偵事務所を置き、三階から四階までを自宅に使っている。

匠・カナエ夫妻には子供がおらず、ユリには両親がいない。

だから引き取ってもらったのだ。

小さな頃から、何か難しい仕事をしている匠が大好きだった。

そして、料理が上手で、少し太ったカナエも。

両親は、そろって海外を飛び回る研究者だった。実は今も、一体何の研究をしていたのか知らないでいる。とにかく多忙を極めた両親が残した財産は多額すぎて、まだ子供だったユリには手のつけようもなかった。

だから、大好きな匠とカナエに、その全てを委ねた。

子供のいない匠とカナエは、ユリを我が子のように可愛がってくれた。それは今でも変わらない。

だから、叔父、叔母ではあるが、親でもある。

匠もカナエも、両親の遺産にはあまり手をつけていないらしい。

もう使わないユリの家は処分してしまい、その金でこのビルの補強をしたくらいで、本当に何も使っていないようだった。

質素な夫婦だったが、ユリにはその在り方が、本当に有り難かった。

だから、少しは役に立ちたいのだ。

頑張っている、と自己顕示するつもりはないが、頑張っていることには違いない。

明日から、予告の日までの数日、ユリにとってどんな数日になるのか、胸の中は好奇心と不安と、何故か感じる少しの哀しみで、いっぱいだった。

4月29日 1

母の遺体は見る事が出来なかった。

父は無表情のままで。

私は兄と二人で、ただ泣いた。

綺麗で、優しく、良い香りのする大好きな母。

こんなに悲しいのに、父はいつもどおり仕事に出かけ、あまり家に帰って来なかった。

そしてやがて、兄がいなくなった。

私の心の支えは、”あの人”から来る、ささやかな便りだけ。

私の心は、”あの人”でいっぱい…。

ピピピ…と、耳障りな機械音が聞こえる。

「ぐう」とも「うう」とも聞こえる音を喉で鳴らして、まだ目を閉じたまま、手で音源を探す。

ひやりと固い何かが手にあたり、指先でボタンを探し、押すと、音が止んだ。

そこでようやく目を開け、手に持っているものを見る。

「五時半…。」

口に出して、暫しまどろみに浸り、不意にユリはがばっと起き上がった。

「…ヤバイ…」

余裕を持つてかけたつもりだったけど、仕度する時間を入れるの忘れてたわ…」

不覚…。叔父さんに怒られる…。」

身支度をし、食事をするのに三〇分では足りない。計算違いをした…。

ユリは取り敢えずバタバタと洗顔を終え、着替えを始めた。

着替えのあとは髪だ。

いつの間にか肩甲骨くらいまで伸びた髪を、雑多に結い上げる。続いて化粧だ。が、この時点で既に四十五分を過ぎていた。

「…してもしなくても変わらないか…。」

化粧は諦めた。

早朝だという事も忘れ、足音を思いっきり立てて階段を下りる。

途中、カナエに怒られた。ユリは、「ごめんなさい」と叫んで、事務所へ走る。

「叔父さんおはよう！」

遅くなつてごめん！」

三階から一度外階段を使って一階へ降り、一階の事務所の入り口へ走り込む。

息を切らして屈み込むユリを、匠はニヤリと笑った。

「やっと来たか。」

まあ、走つて来たようだし、初日としては上出来かな。」

「ごめんごめん。」

仕度する時間を計算してなくて…。」

「まあ、取り敢えず出よう。」

そう言つて、匠はまだ息の切れているユリの横を通り過ぎ、事務所を出て行ってしまった。ユリも慌てて追いかける。

入り口前で立ち止まった匠が、ぽつりと呟いた。

「…まだか。」

ちよつと待とう。」

「待ち合わせ？」

「うん。」

蕪木クンがね、迎えに来てくれるって言うから。」

匠の返事に、ユリがすっとんきょうな声を上げる。

「はぁ！？

ちよつと、朝からあいつの顔見るの！？」

「コラコラ、ユリ。」

そんな事言つてると、いつか蕪木クンに頭が上がりなくなるぞ。」

匠が大笑いをする。

「どういう意味よ？」

ユリが眉間に皺を寄せると、匠は「まだ秘密」と、意味有り気に笑った。

「お待たせしてすみません。」

突如、声がした。

ユリが振り返ると、了がいた。

（キタ…。）

げんなりとするユリを無視して、了は匠に声をかけた。

「おはようございます。」

「おはようございます。」

迎えに来てもらっちゃって、申し訳ないね。」

片手を挙げて挨拶をしながら、匠が苦笑した。

「とんでもない。」

狭い車ですが、どうぞ。」

そう言つて、了が自身の後ろを振り返る。

そこには、ぴかぴかに磨き上げられたスポーツタイプの高級外車が停まっていた。

（な！ 超高級メーカーの今年のニューモデル！

イチ地方公務員がなんでこんな車に乗れるのよ！！？）

海外メーカーでも一、二を争う高級車として有名なメーカーの、最新モデルカー。ディーラーの広告では、確かオプション品込みで

七〇〇万円前後だったはずだ。

高給取りと思われがちな公務員だが、言うほど身入りが多い訳ではない。

これほどの高級車を取り回すのは、無理があるのだ。

緑かった深いブルーのボディが、滑らかに輝いている。

助手席のドアを開けて乗り込もうとする匠が、なんだかとてもみすばらしく見える。

（こいつ何者なの…。）

驚いたままの表情で了を見やると、了は暫しユリと見つめあい…。

一瞬、昨日と同様の、忌々しいほど憎たらしいニヤリ顔をして、すぐに真顔に戻して運転席に乗り込んだ。

（んな！）

今日もきつと、こんな調子で馬鹿にされるのだろう。

朝早く起きる事より、そっちのほうが鬱々とする。

ユリは深くため息を吐いて、助手席の脇でシートを倒してユリが乗るのを待っている匠に歩み寄った。

4月29日 2

発進してから、匠はいやにご機嫌だった。

「かつこいいね。今年のニューモデル。」

大変だったでしょ？」

「大変でしたよ。」と了。

「発表日の翌日にディーラーに行っただんですけど、すでに受注いっぱい半年待ちとか言われて。」

「はあ〜！　すごい人気だね。」

「凄かったですね。」

でも、初回出荷分の一台に欠陥が出て、たまたま一台だけ、しかも改造車で、その改造パーツに原因があったんですけど、欠陥って聞いただけでキャンセルが相次いだらしくて、先に入ってた別の顧客分をまわして貰ったんです。」

その話は、ユリもワイドショーで聞いた事があった。

若者に人気の高いこのメーカーの車は、ボディではなく、エンジンやランプなど、細かなところに改造を加えられる事が多いらしい。今回の、つまり、了が乗ってきたこの車も、発売開始からすぐに改造を加えたものが多くあったらしいが、そのうちの一台が、走行中にエンジン付近から出火したのだった。

出火の第一報は本当に大々的にメディアによって流された。

大抵はこのメーカーではなく、若者を批難する内容にこじつけられ、『これだから若者は…』という年寄り思考の強い報道だった気がする。

元々非難対象が若者だったものだから、改造車で、しかも改造した部分からの出火という調査結果が出ても、取り上げるニュースメディアは少なかった。そして、うやむやなまま、立ち消えのように続報自体を聞かなくなってしまったのだ。

「だから、実際は一カ月半くらいだったかな。納車まで。」

「ラッキーだったねえ。」

あの時は、欠陥かってニュース以降はニュースにもならなかったもんね。

だから暫くは、欠陥じゃないって知らない人もいたくらいだからね。」

「ディーラーでもDM出したり色々やったらいいんですけどね。」

まあでも、そのお蔭でボクが先に貰えたんで」

「人徳ってところかな？」匠が言うと、了が苦笑した。

「いやいや、たまたまですよ。」

その様子に、ユリが思わず問う。

「なんで、叔父さんには丁寧で、私は扱いがゾンザイなのよ？」

言われて、膨れっ面で聞くユリを、了が一瞥した。

「それこそ人徳ってものだ。」

「な！！？」

二人のやり取りに、匠が大笑いをする。

「叔父さんも笑ってないでよ！」

姪が馬鹿にされてるって言うのに！」

腹を抱え「巧いねー！」などと大笑いをする匠を、後部座席から首を出してユリが嗜めた。

その様子をちらりと横目で見て、了はゆっくりブレーキをかけて車を停めた。

「着きましたよ。」

目の前に、美術館前に広がる大きな庭園と、それを囲む樹木と正門が見えた。

「ありがとう、助かったよ。」

匠が車を降り、シートを前に倒す。ユリも「よっ」と言いながら降りる。

「いえいえ。」

ボクはこいつを仕舞ってきますんで、先に館長室へ向かってください。

北代警部補も着いている頃かと思ひますので。」

「ああ、そうだったね。了解。

ではまたあとで。」

そう言つて、匠はシートを戻し、丁寧にドアを閉めた。

了の車はスウと匠とユリの前を通り、庭園の角を曲がつて消えた。

「さ、行こうか。」

「うん。」

歩き出す匠のあとを、ユリが追いかける。

朝露の滴る芝生が敷き詰められた庭園は、まだ柔らかい朝日の光を受けて、キラキラと光った。

白い石畳の小路を、正門から美術館へ向けて歩く。

その向こうには、大ホールの、モスクのような特徴的な屋根が見える。

小路は美術館前で、小さな噴水を中心に広がり、エントランスへ続く。

エントランス前には、昨日はいなかった警官が独り立っており、匠が近付くと、警官は小さく会釈をした。

通行許可という意味だろう。

匠は美術館へと入つていった。

ユリも小走りで追いかけると、ロビー右にある喫茶店の前で、入つてきたユリに挨拶する警備員がいた。ユリは一瞬首を傾げ、「あ」と言つて思ひ出した。

昨日、了に初めて話しかけたときに、一緒にいた警備員だ。

ユリは笑顔で会釈すると、匠が消えた『関係者以外立ち入り禁止』のプレートのかかった扉を開けた。

4月29日 3

「おはようございます。」

館長室に入り、匠が挨拶をすると、ソファに腰掛けていた菅野が立ち上がった。

「ああ、芳生さん、おはようございます。」

ユリさんも、今日もよろしくお願いします。」

「はい！」

「それから…」と言って、菅野は、立ち上がったために自分の陰になってしまった人物を振り返った。

「こちらが北代警部補です。」

紹介された人物は、のっそりと立ち上がって、「北代です。よろしくお願いします。」と言った。

少し小太りで背の低い、目つきやや悪い中年男性だった。

「こちらこそ、お世話になります。」

匠が挨拶をする。

ユリも合わせて頭を下げる。

（なんか、如何にもって感じの人。）

何となく頑固者っぽい気もする風貌の北代に、ユリはイマイチ好感を持てずにいた。

「蕪木君と一緒に聞きましたか？」

北代がふてぶてしく訊ねた。

匠はにこにこしながら、「蕪木くんなら、車を駐車場に止めるんで、後から来ますよ。」と答える。

「そうですか。」

では、彼が来てから、警備についてのご説明を始めます。」

「ああ、そうでしたね！」

その話がまだだった。」

言って大笑いをする匠を、北代がジロリと睨んだ。

どうやら、匠も北代は好かないらしい。

睨み付ける様子が、またなんとも嫌な感じた。

（あいつとはまた違う感じの悪さね…）

ユリがむくれると、背中のドアが開いた。

「遅くなりました。」と言って、了が入ってきた。

「遅いぞ、蕪木。」

苛ついた様子で北代が言うと、了は一言「失礼」と言って、菅野に視線を移した。

「館長、おはようございます。」

「おはようございます。」

今日もよろしく願います。」

菅野がにこやかに言う。

心なしか、昨日より血色がいいように見える。

「ではさっそく、警備についてのご説明を始めます。」

よろしいかな？」

場を仕切ろうとする北代に、菅野と、争いごとを好まない匠は素直に従ったが、了は表情を不機嫌に変えた。

（何？ 急に不機嫌になったわ…。）

了も北代が嫌いな様だ。

ソファセットを全員で囲み、北代がテーブルに美術館の全体設計図を広げる。

「まず、美術館の全体地図です。改装工事後の設計図になっております。

展示物が置かれるのは、二階のみです。」

そう言って、二階の図を指す。

「三階のセレモニーホールは、展示会初日、つまり予告日時に開催セレモニーが行われているパーティ会場にあたります。

ここの警備は、当日、会場内に四人配置予定です。

因みに、会場への出入り口は一つしかありません。」

早口に説明は続く。

「監視カメラなどは、常時作動している訳ですね？」

匠が訊ねる。

「そうです。」

三階には、その他にラウンジが新設されますが、こちらには一人配置します。」

指さしながら、そそくさと話を進めていく。

ユリはもちろん指を追うだけだ。

匠と了は、恐らく理解しながら話を聞いているのだろう。了は、表情は不機嫌なままだが…。

北代は細かに警備の配置についての説明を行っていく。三階の次は二階、次は一階…と続くのだが、要約すると、ありとあらゆる出入り口に警官を配置する、という、工夫も何もないものだった。

ここまで細かく、多くの人員を割いたと言う事を誇張したいのが見え見えで、途中からは、時折ちらりと隣のをを見ては、了と目が合いそうになると視線を戻す、という暇つぶしをしていた。

ただ、警備、という点に於いて、抜けがない事だけは明確に解る配置にはなっているので、北代の功績は、この人数の警官を手配した、というところが大きいのだろうと思う。

セキュリティ・ルームのある地下の警備の話になると、北代が眉間に寄せていた皺をさらに深く寄せた。

地下だけは警官のみ、という訳には行かず、飛澤を始めとする、美術館の警備員たちが混ざって担当するという。

当然といえば、当然とも思うが、北代にとっては気に入らない事のようにだ。

「事務所や、館長室の警備はどうなっているんですか？」

一通り説明が終わった頃に、匠が尋ねた。

「職員の事務所と館長室の一带は、各入り口に一人ずつ待機させます。」

巡回は一階の巡回役が回る予定です。」

答えて、「どうですか？」と北代が全員の顔を見やった。

「お任せします。」

ずいぶん人手も割いて頂いているようですし、うちのセキュリティシステムも同時に動作していますから、今のところ特に心配な事は何もないですね。」

菅野が、恐らく北代が一番言っただけで欲しいであろう言葉を返す。

菅野の返答に、北代は予想通り満足げな顔をして、了を見た。

「蕪木君はどうか？」

「警備については、一任していますから、特にありません。」

了は北代と目を合わせず、地図を見つめたまま、不機嫌な顔を崩さずに答えた。そして、「口を出すほど、うちからも人員は出せませんし」と付け加える。

（「うち」？

違う部署なのかな？）

ユリが首を傾げると、了がちらりとユリを見て、小さく肩を竦めた。

深くは訊ねるな、という意味なのか、ユリには見当がつかない。

「探偵さん…、は意見の在り様がないですな？」

最後に、嫌味のように匠に尋ねる。

「ええ、完全に不得意分野ですから。」

匠が笑いながら答えると、北代は深く頷いて、

「結構。」

では、私は早速当日までの警備配置の検討に向かいますので、これで失礼しますぞ。」

と言っただけ、「ありがとうございました。」という菅野に目もくれず、さっさと館長室を出て行ってしまった。

北代の足音が聞こえなくなるまで、みな暫く何も言わなかったが、やがて、ふうと溜め息をつきながら、了が口を開いた。

「で、実際のところはなんですか、芳生さん？」

「うん」と、匠が答える。何を考えているのか、顔は笑いつぱなしだ。顔の造りがそうなのだから仕方がないのだが、匠は往往にして、

緊張感がないと咎められる。

「死角があるかどうかは、改装工事が終わってみたいとなんとも言えないかな。」

地図上では完璧でも、今の時点では机上の空論に過ぎないから。」

実際、配置してみるまでは、本当に見えない場所があるかどうかも判らない。

「そういうもの？」

「そうさ。」

ユリの問いに答えて、匠はニヤリとした。

「だから、どこかで予行演習がしたいなあ、と思ってるんだけどね。」

匠の提案に、ユリが食いつく。

「え！？　じゃ、じゃあ、男爵役やりたい！」

興奮するユリに「お前じゃダメだ」と言いかけた了を、「意外に適役かも知れませんか」と菅野が遮った。

「館長……」

了が困惑する。これ以上、要らぬことでユリを興奮させたくなかった。どこことなく、トラブルメーカーのような空気を感じているのだ。

「男爵の予期せぬ行動を、無意識に再現する事が出来るかも知れませんがねえ。」

「しかし……」

すっかり困り果てた了に、菅野が笑った。

「いえいえ。」

第一、万が一やる場合は、の話でしょ？」

菅野なりの、お茶目だったようだ。

菅野の言葉に、了が胸を撫で下ろし、匠が大笑いをする。

「な、何よみんなして！」

菅野にまで弄られて、むくれたユリに、匠がにひひと笑って、話を切り替えた。

「まあ、取り敢えずは、下見だな。」

「そうですね」と、了が頷く。

「改装工事のシートやら何やらが取れない限り、当日の想定は難しい。」

とはいえ、改装も、今は細部を残すのみとなっているようだから、位置関係や距離感を覚えるには不都合はない。

今のうちに、美術館の空間に慣れておかないとな。

取り敢えず、各自適当に歩き回ってみようか。」

「二時間くらいを目処にしましょうか。」

了が言う。

「そうだね。」

では、菅野館長はここに残っていただいて、ボクらは二時間後、ここに集合。」

パン、と手を叩いて、一時解散となった。

4月29日 4

ブルーシートで覆われた二階の展示室を回る。

どの部屋も同じような造りで、同じようにブルーシートがかかる。前方にも、後方にも、左右にも隣の部屋への通路があつて、ミラーハウスにいるようだった。

この展示室に入って、どのくらいウロウロしていただろう。すっかり方向感覚を見失い、ユリは途方に暮れた。

「け…結構広いわね…。しかも同じような部屋ばかり…。」
言いながら、ユリは冷や汗をかいた。

「このパターンはもしか…。」

認めるか否か、自身の中で議論していると、突然後ろから嫌味つたらしい声が聞こえた。

「ほう、もう迷子か。」

（うつ…。嫌味な声…。）

嫌々ながら振り返ると、ニヤリと笑う了が立っていた。

苛めっ子のように腕組をしている。

「な、何言つてんのよ？」

迷子なんかになってないわよっ」

（くっ。迂闊だったわ！

こいつの接近を許してしまうなんて！）

ユリが腹の中でジタバタもがいていると、見透かしたように了が言う。

「ほう？」

不敵に笑う。

（この不敵な笑いがまたムカツクわ…。

いい歳のオトナのくせに…。）

ユリがキツと睨むと、了は表情を変えずに「迷子じゃないなら、手助けはいらんな」と言つて、微かに躊躇いつつも同行を許して欲

しいと思いかけたユリを置いて、行ってしまった。

(…ほ、ほんとうに行っちゃった…)

仕方ない…。

この中を知るために回ってるんだし、もうちょっと頑張ろう…。(心細さに早くも挫けそうになりながら、ユリはむん、と氣力を呼び起こす。

よく見比べると、展示室それぞれ大きさが何パターンかにわかれている事が判った。

建物の形の都合上、完全に一致はしないものの、広さは全部で三種類ほどあるようだ。

先程の北代が広げた地図を思い起こす。

確か、展示室は三種類あったはずだ。そして、今いる部屋は、三種類のうちの中くらいのような気がする。

と言うことは、「ここは中展示室か。」と、ユリは独り言を言う。

「さつきも来たのかしら？」

だが、ここでさらに地図を思い出す。

問題は部屋の大きさの違いが判っただけでは、解決しそうになかった。

というのは、その三種類の展示室、それぞれ複数あったのだ。

「中ホールって、確か三つあったような…。あれ？ 二つだったわけ…。

どの中ホールなのよ…。」

結局、迷子なのだ…。

ブツブツと言いながら困り果てるユリの後ろから、また声が聞こえた。

「お前ね…。」

今度は、呆れている風だった。

振り返ると、やはり了がいた。

声のとおり、呆れている。

(くっそう…)

悔しさが溢れるものの、泣きそうな顔をしているのも事実で、ユリは素直に降参した。

「迷ったあ…。」

「見りや判る。」

小学生の引率の先生のような気がして、了が首を振った。なんて手のかかる子なのだろう…。

そして、「行くぞ」と言ってユリを手招きする。

ゆっくり歩きながら、「このフロアが何階かはさすがに解ってるよな？」と問う。

「二階…。」

そう答えながら、ベそをかくユリに、「泣くな。」と了が呆れたまま言う。

「このフロアは、特別展示室を左下に仮に置くと、そこから楕円形状に二つの中展示室と四つの小展示室が左右対称に並んで、その楕円の中に二つの同じ大きさの大展示室があるんだ。」

了が、宙に指で絵を描きながら説明を始める。

各展示室とも、出入り口は基本的に三箇所。左右隣の展示室への入り口と、真ん中の大展示室への入り口だ。ただし、大展示室は、隣接するホールと同数の、四箇所の出入り口がある。

その楕円に含まれない特別展示室には、中展示室一つとロビーが隣接しているので、出入り口は二箇所だ。

その特別展示室の、真上の位置にエレベータホールやエスカレータ、非常階段のあるスペースがある。

構造的には、そこまでややこしくないようだった。では何故迷ったのだろう…。

「うんと…」

「お前が迷った理由は、ぐるっと回れば判りやすい場所を、蛇行して回ってたからだ。おまけにキョロキョロと視線を動かす事で、方向感覚を失ってしまった。」

同じサイズの展示室は作りもほぼ同じ。おまけにどこもまだブル

ーシートが貼ってあったりして、余計に見分け難い。

二階の改装が一番進行が早いから、状態は昨日よりはいいものの、同じようなものだ。

昨日お前が迷ったのも、それが原因さ。」

ただ理論的な解説をされただけなのだが、出会って初めて嫌味ではない言葉を言われて、ユリの涙腺が緩む。

「うう…。」

「だから泣くな…。」

了が困った。涙目に映る了を見ながら、本当は、”いい人”なのかも知れない、とユリは思う。

「次、三階行くぞ。」

ついでにか、三階も案内してくれるらしい。

二階から三階にはエスカレータはなく、エレベータが非常階段を使うしかない。

三階には、予告当日に展示会のオープンセレモニーが開催されるセレモニーホールと、夜間営業のラウンジがあるだけで、一階や二階に比べると、広さは半分にも満たなかった。

「ここがセレモニーホール。」

展示会初日の開催セレモニーが行われる会場だ。

隣が新設のラウンジ。

ここはまだ他より工事が遅れてるみたいで、中には入れない。

確認したら、明日には入り口のシートが外れるらしいから、見るなら明日だな。」

了が指をさしながら説明する。

ユリはもう、ただ「うん」と返事をするだけだ。

すっかり意気消沈のユリを気遣ってか、了が一階は回ったのか訊ねると、ユリはこくりと一つ頷いて答えた。

「うん、一応。」

あとは、館長室に戻れば…。」

そう言うユリに、了がニヤリと笑った。「館長室にな。」

昨日の今日、なのだ。

「うつ……。」と身を引くユリを、了がからかった。

「一人で戻ってみるか？」

「いやあ！ 一人にしないでえ……。」

もうプライドもへったくれもない。今の状態では、多分また館長室に戻れないという強迫観念に囚われ始めていた。思わず了にしがみ付く。

そんな予想外のユリの様子に、了が一瞬焦って、次いで呆れた。

「そんなんでも泣くやつがあるか……。」

言いながら、ユリが利き腕の袖を掴んでいるので、逆腕で行き先を指差す。

「行くぞ。はぐれるなよ。」

今のユリなら、誰かの袖を掴んでも迷子になりそうだと思い、了はユリに見えないように、苦笑した。

4月29日 5

エスカレータを下り、一階へと降りる。

ちょうど、エントランスを真正面に見た状態になった。

「館長室は、正面玄関を正面にして左。」

了が、逆手で指をさす。

利き手のほうは、相変わらずユリが袖を掴んでいる。

「うん。」

答えながらエントランスをみたユリが「あ…」と、小さく声を上げた。

「ん？」

了も見る。

回転扉と、押戸の双方備わっているエントランスの、押戸の扉を押して、一人の少女が入って来た。

長い、ウェーブのかかった金髪の髪が、歩きたびに揺れた。

きちんと着こなした白いツーピースと、その歩き方は、見るからに気品がある。

目隠しに置いてある植木のせいもあってか、エントランスから少し離れていた二人には気付いていないようで、少女は何かメモを見ながらキョロキョロと辺りを見回したあと、館長室のある職員通路の入り口へと歩いて行った。

少女が扉の向こうへ消えると、黙って見入っていたユリが、何故か小声で言った。

「誰だろう？ 如何にもお嬢様って感じ…。」

「…。」

了は黙ったまま、少女の消えた扉を見つめていた。

ユリは、聞いていなかったのかと思い、もう少し声を大きくして言った。

「蕪木さん、あの子誰だか知ってる？」

「蕪木さん」ね。」

ユリに敬称付きで呼ばれた了がからかった。
しっかり聞いていたようだ。

「何よ…。」

年上なんだから、さん付けで当然じゃない。」

急に恥ずかしくなったのか、頬を膨らますユリに、然も当然のよう
に「まあな」と言い、了は再び扉に視線を移した。

「彼女は、シリング大使の娘。」

ほら、昨日飛澤さんが言ってた、”館長が助けた娘”さんだ。」

「ああ！ あの子！」

飛澤から聞いた、菅野とシリング大使の出会いのきっかけとなっ
た娘のことだ。

「遊びに来たのかな？」

たまに、ではあるが、手紙をやり取りする仲なのだそうだ。

母国に纏わる展示会が、知人の勤める美術館で催されるとなれば、
遊びにも来るのだろう。

何だか微笑ましくて、ユリが好奇心いっぱいに言うと、「さあな
と了が素っ気無く言い、「館長室に戻るぞ」と早足で歩き出した。

了の様子が微かに変わったのを察したユリは、了の背中を追いか
けながら、首を傾げながら、少女が職員通路へ入っていくのを追う
了の表情を、何気なく思い出した。

見入る、と言うよりは、どこことなく、待っていた人物が来た、と
いう横顔だった。

そしてその横顔に、ほんの少しの憎しみのような感情が浮き出て
いたような気がして、ユリは一層、首を傾げた。

4月29日 6

館長室に入ると、ユリはすぐにソファの背凭れに手をついて頂垂れた。

「やつと着いた…。」

了に”保護”してもらうまで、ずいぶん長いこと独りでウロウロとしていたので、足がすっかり重くなっていた。

こんな事なら、ヒールの低い靴を履いて来るのだった。

「戻りました。」と、後ろで、先に入っただけの了が言う。

「おかえり。」

ずいぶん早かったじゃないか、ユリ。」

にやにやしながら、匠が言った。

「うっ…。」

結局つれて来てもらった…。」

”惨敗”したかのような泣き顔をして、ユリが答えると、匠が大笑いをした。

「蕪木クン、すまなかったねえ。不出来な部下で。」

「いえいえ、大した迷子っぷりで、暫く見学させてもらいました。」

答える了に、ユリががばつと顔を上げる。

「え!!!!? なっ!」

ユリはてつきり、偶然見かけたところに自分が迷子になっていて、助けてくれたのだと思っていた。

が、実際は、観察されていたのだ…。

「悪趣味!!!!」

「何言ってる。」

途中で助けただけでもありがたいと思え。」

ユリの叫びに、了が不機嫌に答える。が、段々判って来た。

どうやら、了の不機嫌にも二種類あるらしい。

こと、ユリに向けられた不機嫌な顔は、つくり顔に近い気がする。

「むっ…。くっそう…。」

ぐうの音も出ないとはこの事だと、ユリが奥歯を食いしばる。

二人の言い合いが終わったのを見計らって、菅野が歩み寄った。

「やあ、お二人とも、おかえりなさい。」

お疲れ様でした。」

見ると、朝よりさらに、にこにこ機嫌がよさそうだ。

「いえいえ。」と、ユリが返事をして、すぐに「？」となった。

菅野の後ろに、誰かが隠れていた。

その誰かは、菅野の翳から顔をひょこつと出して、不安そうにユリを見ている。

「あ。さっき正面玄関にいた子。」

よく見れば、それはつい今しがたエントランスでみかけた、金髪の少女だった。

「おお、ご存知でしたか？」

「あ、いえ。見かけただけで…。」

「そうでしたか。」

この子は、シリング大使の娘さんの、クレア・バークレイ。」

そう言って、菅野がクレアを見下ろした。

「クレア、この方たちは、セレモニーの日に館内を警備して下さる方々だよ。」

” 紅い涙 ” のボディガードだ。」

菅野が、面々を大まかに紹介した。

クレアはにこりと笑って、「まあ。よろしくお願いいたします。」

クレアです」と、流暢な日本語で言い、頭を下げた。

ユリはクレアをまじまじと見た後、

「館長が昔助けたって言う子が、この子なんですね？」
と言った。

「おやおや、よくご存知で。そうです、その彼女です。」

菅野が笑った。

「お、もしかして、僕だけ知らないのかな？」

匠が笑いながら言ったので、「ああ、そうですね。実は…」と菅野が言いかけると、クレアが菅野の手を慌てて取った。

「ああっ！ おじさまダメ！」

その慌てっぷりに、匠が「おやおや」と笑う。

菅野も笑いながら、

「切欠は彼女にとつて、不名誉な事なんですよ。」

とだけ説明した。何となしに事情を理解した匠が、大笑いをする。

クレアは、困ったような顔をしながら、照れた。

同じ”迷子仲間”であるなら、仲良くなるしかない。ユリは、クレアに近付いて、手を差し出した。

「私、芳生 ユリ。」

私もよく道に迷うのよ…。この美術館でも迷いっぱなし。

気が合うかもね。よろしくね。」

自己紹介をすると、了がすかさず「お前と一緒にするなんて、失礼極まりない。」と茶々を入れる。

「何よ！」

ユリが手を差し出したまま、了を振り返る。

その様子に、クレアがくすくすと笑った。

「よろしく願います。」

言って、ユリの手を握る。

了もユリの隣に立って「蕪木 了です。」と名乗ったが、手は出さなかった。その代わり、「ユリのお守り役です」と要らぬ一言を付け加える。

「誰が頼んだのよ！」

クレアはユリの手を握ったまま、くすりと笑いながらもう一度「よろしく願います」と言った。了を見上げる頬が少し赤らんでいる。

（おや？ もしかして、こういうのタイプ？）

思いながら、隣の了を目だけで見上げる。

了は、笑ってはいないものの、穏やかな顔をしていたが、やはり

視線だけは鋭いままだった。先ほどの表情は、どうやら見間違いや勘違いではないらしい。

「ユリの叔父の、芳生 匠です。」

”切欠”のお話は、いずれは聞きたいところです。」

匠も、了の脇から顔だけ覗かせて挨拶をした。

クレアは、今度はにこりと笑って、三度目の「よろしくお願いいたします」を言った。

「今日は、クレアさんは何か用事で？」

クレアとの握手を解いて、ユリが訊ねた。

「いえ、セレモニーに出席するために来たのですけど、先程日本に着いたばかりで。」

父も今夜は予定があるとかで、おじさ…菅野さんのお宅にお世話になるうかと思つて。」

そう言つてクレアが菅野を見上げると、菅野が思い出したように、困つた表情を浮かべた。

「ああ、そう…、それなんですが…。」

ユリが今日何度目か、首を傾げると、「菅野さん、今日から夜はお忙しいらしいんです」とクレアが言つた。

「お恥ずかしい事に、独り身なものですから、知らないところへ一人彼女を置く訳にも行きませんし…。」

と、言つた後、菅野は匠の顔を窺うように見た。

「芳生さんのお宅へ、今晚泊めて頂くうかと考えていたところなのです。」

菅野が言つと、ユリとクレアが揃つて、「あら！」と言つた。

「ダメよおじさま。初対面の方だし、いきなりお邪魔しては…。」

「いいわよ！　うちは全然大丈夫！

ねえ、叔父さん？」

遠慮するクレアに、ユリが言う。

匠もにこやかな表情を崩さず頷く。

「ああ、こういう仕事柄、いつでも、どなたかをお泊めする準備は

出ていますよ。

我が家でよければ、遠慮なくいらしてください。」

匠の返事に、菅野がほっとした表情をする。

「ああ、よかった。」

クレア、ホテルを借りるのもいいが、やはり心配だ。

ユリさんもいる事だし、そちらのほうが安心出来るだろう。

きつと旅の疲れもとれるよ。」

菅野は、菅野よりは背の低いクレアに視線を合わせるように屈み込んだ。クレアは、少し困った表情のまま、ユリと匠を交互に見た。「ね！」

ユリが一押しすると、クレアも困惑の表情を少し和らげて、「ありがとうございます。では、お言葉に甘えて」と答えた。

「そうだ、せっかくだから、蕪木くんもどう？」

ひと段落したところで、匠が何故か了を誘った。

さすがの了も、これには啞然として「えっ」と言っただけ、絶句してしまった。

「ちよつと、叔父さん！」

ユリも声を上げる。何を言い出すのだ…。

了は、顎に手を当てて少し悩んだあと「泊まるのはちよつと無理ですが…」と、ゆっくり言った。

「仕事帰りに、寄らせて頂きます。」

「おお！ 是非そうしてくれ！」

匠が、ぱつと腕を広げる。そしてすぐに、「さて」と続けた。

「まだ昼前だが、蕪木くんは今日はどうする？」

「ボクは、調べ物をしに、一度職場へ戻ります。」

「そうか。菅野館長は、ご予約があるのでしたね？」

「ええ。」

私はこれから、財団のほうへ向かわなければなりません。

もうそろそろ出ないと間に合わないですが。」

腕時計をちらりと見る菅野に、了が「途中までお送りしましょう。」

「と声をかけた。

「それは助かります。」と菅野も頷く。

「ユリはどうしようか？ ああ、クレアさんも、今日は？」

匠がクレアとユリを見比べた。

「私は…。どうしましょう…。」

問われて、クレアが菅野を見上げた。

「ああ！

なら、私はクレアさんと二人で、街を案内して回るわ！

で、そのまま帰っちゃう。」

どうせ帰ってよいのなら、おしゃべりしながら少し外を回ってみよう、と思い、ユリが匠を見る。

「ああ、そうだね。館長、どうでしょう？」

「ええ、私もそれがいいと思います。

一人では心配ですし。

クレア、ユリさんのいう事をちゃんと聞くんだよ。」

菅野も頷く。

「はい、おじさま」と、クレアからも素直な返事が返ってきた。

「叔父さんはどうするの？」

クレアの返事を待って、ユリが訊ねる。

「僕はちよっと、蕪木クンの上司に用事があるんだ。」

「え？」

「彼の上司とは、学生時代の同級だね。」

「ええええ！？」

意外だ。

妙なところで人脈が繋がる経験がないわけではないが、その繋がりには想像しなかった。

「今回の依頼も、その縁で受けたものなんだよ。」

「そうだったんだ？」

何度が頷いて、ユリは了を見、匠に視線を戻して言った。

「蕪木クンは口悪いですねって、ちゃんと伝えてきてね。」

言われて、了が思いつきり不機嫌な顔をする。
今回の不機嫌は、装ったものではないようだ。

「……。」

了のふくれ面に、匠が大笑いをした。
どうやら今回は、ユリの勝ちらしい。

4月29日 7

「じゃあ、各々出発しますか。」

匠の言葉を合図に、解散になった。

了は、財団の事務所へ向かうと言う菅野を送り届け、さらに匠を連れて了の職場へ向かうらしい。

了とは別れ際に、「迷子になるなよ」「うるっさいわね!」とやり合う事もあったが、特に問題なく各々の行き先へ散っていった。

ユリは、クレアと二人、美術館前の庭園にある小路を歩いている。
「さて。」

どこか行ってみたいところある?」

ユリが聞くと、

「お任せしていいですか?」

この辺は、どこにもあまり行つた事がないので…。」

と言うので、ユリは適当に一回りすることにした。

まず手始めに、美術館のある”純・フォーラム”の隣にある”純・公園”へ向かう。名が示すとおり、この公園も、美術館を運営する財団が所有、運営している。

敷地面積は”純・フォーラム”と同じ。ひたすらに広い公園だ。

平日の午前中と言うこともあり、人は疎らだ。

公園に入るや否や、クレアがもじもじとし始めた。

「どうかした?」

「いつ、いえ!」

即答するクレアに、ユリがにんまりと笑った。

「あつ! もしかして!」

迷子になった公園って、ここ!?」

ユリの推理に、クレアが答える代わりに顔を赤らめる。

「ははあん。ここ広いもんねえ」

しみじみ言うユリに、クレアが答える。

「厳密に言つと、おじさまと会った公園、かな…。」

「どこでみんなと逸れちゃったの？」

「それが、分からないんです」と、クレアが首を振る。

「ずいぶん歩いた事だけは覚えてるんですけど…。」

「そっかあ…。」

でも、きつと怖い思いをしてたんだろうし、思い出したくないのかもね。」

「そうですね。」

無理に思い出さなくてもいいかなって、思ってます。」

そう言つて、クレアがにっこりと笑う。

相変わらず流暢な日本語で、感心する。

ふと、クレアの向こう、公園の樹木の隙間から、美術館の屋根が見えた。

「私が初めて日本に来たときは、まだ美術館はなかったんですね。」

”純・美術館”は、建つて間もない。以前は、”純・美術館”の前身となる”帝都美術館”が、ここから少し離れたところにあつて、”大鳥純忠会”がそれを買収、建て直したのが今の”純・美術館”だ。

「そういえば、日本に来たのは何年前なの？」

「十年くらい前です。私が六歳の頃。」

「十年かあ。なら、全然変わっちゃってるわね。」

ユリが、自分の過去十年を思い浮かべる。本当に、色々変わった。はい。

街の面影は残ってますけど、建物とか、ざっと見たときの風景は、全然違います。」

「あはっ。また迷子になっちゃいそう？」

ユリがからかうと、クレアは「ええ…」と照れ笑いをする。

「大丈夫！ 私なんてしょっちゅう迷子だから！」

すかさずユリがおどけると、今度は二人で大笑いした。

「そっいえば、”紅い泪”って、クレアさんは見た事あるの？」

「はい。一度だけ。」

現国王が、王妃との婚約のときに贈った大きな赤い宝石です。」
「どうやら、”赤い泪”とは装飾品の名ではなく、宝石自体の名前であるらしい。クレアが続ける。」

「ご婚礼のときに、王妃とお会いする機会が来て、そこで見せて頂きました。」

「へえ！」

王妃に直接会ってお話したんだ？」

「ええ。」

王妃は、私の母の双子の姉ですから。つまり、私の伯母様です。クレアがさらに言い、ユリが止まった。

「えっ……。」

ええええええええええ！！！？

「じゃ、じゃあ、王族……？」

驚愕するユリに、クレアが慌てた。

「いえいえ！ そんな。うちはただの一般家庭ですよ。でも、とても光栄な事ですよ。」

うち自体は大した家ではないんです、と付け足す。

「はあああ……。私なら絶対自慢しちゃうなあ。」

呆けた顔で言うと、クレアが笑った。

しゃべりながら歩き、ふと辺りを見回すと、古く白い洋風の建物が
見えた。背の高い塀で囲われ、物々しい有刺鉄線の貼られた鉄柵
が塀の上部に見える。

門の前には、
” シリング大使館 ”
とプレートがあった。

「ここは、
” シリング大使館 ”。 っ て、
知ってるか…。」

独りで言うユリに、クレアがくすりと笑う。

「こども、来るのは十年ぶりなんですよ。」

「でも、お父様は大使でしょ？　もうちょっと頻繁に来てるところだと思ってたけど。」

「ええ、でも、私はシリングに住んでますから。」

仕事の邪魔になつてはいけないので、学校もあるし、日本に来る機会、なかったんです。」

そう言つて、クレアが大使館を見上げる。

「でも、ここは全然変わつてないです。子供の頃の記憶のまま。」
懐かしそうに、目を細める。

「そっかぁ。」

ユリも、クレアに倣つて大使館を見上げる。

見知らぬ異国の、大使館だ。

こうして知らぬ国が、まだまだ沢山あるのだらうと思う。

ユリは暫し感慨に浸り、「いこつか」と声をかけ、大使館を後にした。

振り返り、大通りを歩く。

この辺りまで来ると、公園やフォーラム付近とは違い、スーツ姿の人々が良く目に付く。

大企業や、政府の庁舎が集まつたエリアなのだ。

それら、背の高いビルが並ぶ向こうに、一際背の高い建物が見える。

”帝都ホテル”だ。このホテルは、”純・美術館”の前身である”帝都美術館”を運営していた”帝都グループ”の持ち物で、都内で最高級のホテルとしても名高い。

金色とベージュ、茶と紺を基調とした建物で、ユリも一度だけ入ったことがあるが、普段の生活とかけ離れた調度品の並ぶホテルに、ただただ圧倒されて帰つて来た記憶しかない。

「あの建物は……」

クレアが指をさす。

”帝都ホテル”よ。この辺りで一番高級なホテル。」

ユリが答えると、クレアは「あれが……」と何度か頷いた。

「今日、菅野のおじさまのお宅が駄目だったら、ここに泊まるうかと考えていたんですよ。」

さらりと言うので、ユリが真顔になる。

「うわっ…。さすがお嬢様ね…。」

「そっこのではないんですよ。」

あらぬ誤解を与えてしまったのかと、またクレアが慌てた。

「ここは、以前日本に来たときに、一度泊まった事があるんです。他のホテルの事もよく知らなかったし、美術館も大使館も近いので…。」

何気ない選択なのだと強調するクレアに、ユリが騒ぐ。

「えー、でも羨ましいよ！ 私もこういうホテルに泊まって旅行したい！」

ユリが拳をぐつと握り言うので、クレアが笑った。

「小さい頃からこういうホテルに泊まって旅行なんて、本当に羨ましいなあ。」

尚も言うユリに、クレアが今度は寂しそうに笑った。

「でも、うちは、父が仕事が忙しかったので、全然家族旅行できなかったんですよ。」

「ああ、忙しそうよね、大使さんって。」

具体的にどのような仕事をしているかは解っていないが、偉い人は忙しそうなのだ。

「ええ。」と、クレアも否定しなかった。

暫し、黙々と歩く。

美術館を出て、公園以降はそれぞれ歩けば三〇分以上かった。

ここまであまり休みなく歩いている。そして主要な建物に着くたび、立ち話をする。

そんな事をしているうちに、気付くと陽も和らいで、西に傾きかけていた。

「ちよつと休む？」

「いえ、大丈夫です。」

決して太くはないユリより、さらに二周りほど華奢なクレアは、まったく疲れた様子を見せない。

ずいぶんタフなのだと感心する。

都内でも五本の指に入る高級マンションの前を通る。

企業ビルの立ち並ぶ一画に、突然現れるマンションだが、場所柄も土地柄もあり、住人は有名企業の役員や、国家公務員でもトップに近い役職に就いている人間だという。

そうこうしているうち、警視庁が見えた。

敷地に合わせて無理矢理作ったような、歪な形の建物だ。

「あの建物は？」

訊ねるクレアに、ユリが答える。

「警視庁よ。憎きアイツの勤務先！」

ふくれるユリを笑いながら、クレアの頬がほんのり赤らむ。

「あの方は、警察の方だったんですか…。」

”あの方”という単語に一瞬驚いたあと、「みたいね。よく知らないけど…」と、ユリは再びむくれる。

そんなユリの様子もお構いなしに、クレアは独り照れていた。

「そうですか。」

(ん…。

この反応といい、この表情といい、やっぱり…。

かなあ…?)

ユリは、少々無粋な想像をする。

「そういえば、北代警部補とは会った？」

「北代警部補…？」

「ああ、会ってないんだ？」

「そうよね、私も朝会ったきりだし。」

「ちょっと偉そうなおっさんも、セレモニー当日の警備をしてるのよ。」

「明日会えるかもね。」

ユリの説明に、クレアが「はい」と答える。

ここに関しては、これ以上説明する事はない。

ユリは早々に立ち去りたかった。何か、よからぬ者の気配を感じたからだ。

顔を強張らせ、ぐつと拳を握る。

「……。」

「ユリさん、どうしたんですか？」

不安そうにクレアが問う。

「なんだか、とても嫌な気配を感じるわ……。」

「それはこっちのセリフだ。」

間髪入れず、嫌味な声が聞こえた。

ユリが振り返り、声の主を威嚇する。

「つかー！」

やっぱり会っくんじゃないかと思ってたのよ！　　ったくうー！！」

ジタバタするユリを尻目に、了が涼しい顔で、

「クレアさん、こいつと一緒にいると迷子になるから、この建物だけは覚えておいたほうがいいですよ。」

迷ったらこいつを置いて、一人でここに来るように。」

と言う。

「なんで置いて行く必要があるのよ……。」

「うるさいぞ。君の迷子に人を巻き込むんじゃない。」

「ったく、口を開けば失礼な事ばかり！」

言い合う二人に、クレアがくすくすと笑う。そこへ、

「お、ユリじゃないか。」

と匠の声がした。

「叔父さん！」

「やあ、クレアさん。ユリはちゃんと案内してるかな？」

ユリに手を上げて挨拶をし、クレアを見た。

「はい。とても丁寧に。」

「それはよかった。」

蕪木クンは、仕事上がりかい？」

そう問う匠に、ユリが怪訝な顔をする。匠は了の上司に会いに来たのではなかったか。思えば、了が現れた方向と、匠が来たらしい方向は、全く違う気がする。

「いえ、まだ寄るところがいくつか。」

答えるのに、「働き者だねえ」と匠が笑った。「とんでもないと、了もさらりと受け流す。」

「仕事が終わったら、うちに寄っておくれ。」

「はい。ではまたあとで。」

言つて、了は今度は、匠が来た方向へと歩いて行つた。

向かう方角には、政府の庁舎が並ぶ。

確かあの建物は、検察庁の庁舎ではなかったか……。ユリは臆氣な記憶を探る。

「それはそうと、一通り回ったのかな？」

了の後姿を追っていたユリに、匠が尋ねる。

「うん、この辺りは一通り。」

見回すと、ビルの間から見える空は、すっかりオレンジ色に染まっていた。

「そうか。」

なら、そろそろ時間も遅いし、事務所に戻ろうか。カナエも食事の支度終わってるって言つてたから。

お腹空いたろう？」

「うん！」

勢いよく返事をするユリを、匠とクレアが大笑いした。

4月29日 8

警視庁と事務所は、歩いて三〇分でたどり着く距離にある。

実は、美術館と事務所の距離も、同じようなものだ。

都心の、さらに中心地に位置する区画ではあるが、それでも事務所付近からはちらほらと住宅が立ち並び、少し行けば団地や小さなアパートのある完全な住宅地になる。

事務所はそんな中で、四階建ての比較的背の高い建物だ。

その三、四階にある自宅からの眺めは、とてもよい。そして特に眺めのよい位置にある部屋を、匠夫妻はユリに宛がった。

その事務所の前で、カナエがみなの帰りを待っていた。

遠巻きにカナエを見付けたユリが叫ぶ。

「ただいま！」

手を振ると、カナエも手を振り返した。

小太りで背の低い、エプロン姿のカナエは、風に揺れるショートボブの髪を、振っていた手で押さえ、また手を振り直した。

声の届く距離まで近付いて、クレアが言う。

「お邪魔いたします。」

「おかえり。」

クレアさん、いらっしやい。疲れたでしょう？

お腹空いてない？」

「お腹空いたあ！」

クレアへの問いに、ユリが答える。

「まったく恥ずかしいね！」

「ごめんねえ、こんな子と一緒に疲れたでしょうに。」

苦笑するカナエに、クレアも「楽しかったです！」と笑う。

「取り敢えず、早く上がって。お茶入れてあげるわ。」

そう言って、カナエは匠に目で合図だけして、事務所の脇の階段を登る。

ぞろぞろと三人も続き、家に入る。

普段ユリが脱ぎ散らかしている靴が綺麗に片付けられ、クレア用のスリッパがぽつんと置かれていた。

そそくさとユリが靴を脱ぎ、玄関に上がると、カナエが「靴ちゃんとして!」と叱った。

ダイニングも兼ねる居間に通され、温かい紅茶を出された。

料理好き故に食器にも拘りを持つカナエが選んだティー・セットは、育ちのよいクレアが見てもそうと解るくらいのよい品で、クレアがその事に触れると、カナエは大喜びした。

一口飲むと、体の筋肉がほぐれるような感覚を覚えた。

疲れていないと思っていたのは頭だけだったようだ。

ゆっくりと紅茶を味わうクレアに、カナエが訊ねる。

「どこ見て回ったの?」

「警視庁とか、大使館にも連れて行ってもらいました。」

「よく迷子にならなかったな!」匠が茶化し、「ちよつと!」とユリが応戦する。

「まったく、この子はすぐ迷うから。」

「道が判りづらいのが悪いのよ!」

ユリが言いながらトンとテーブルを叩くと、玄関の呼び鈴が鳴った。

「お、来たかな?」と言って匠が席を立つ。

居間のドアの向こうで、玄関の扉が開く音がし、次いでゴソゴソと会話や何かの物音がする。

やがてドアが開き、匠に続いて了が現れた。

「こんにちは。」

了の姿を確認するや否や、(あ、コイツの事、忘れてたわ...)と思っただけでユリの顔を見て、

「俺の事を忘れてたって顔だ。」

と了が不機嫌な顔をした。

「むっ。」

（カンの鋭いヤツ…。）

何か言ってやろうと思ったが、うまい言葉が出てこずモゴモゴしている間に、キッチンに入っていたカナエが顔を出した。

「あらあら、いらっしやい。」

「お邪魔します。」

突然お邪魔して、申し訳ありません。」

丁寧な挨拶をする了に、カナエが手をヒラヒラとさせた。

「とんでもない。うちの主人が無理矢理呼んだんでしょ？」

ごめんなさいねえ、お疲れなのに。」

ゆっくりしていつてくださいね。」

「ありがとうございます。」

ユリへの不機嫌な表情とは一変、穏やかな顔になった了が頭を下げる。

カナエは了ににこりと笑った後、ユリに「ご飯並べるの手伝って」と声をかけた。

匠は、クレアの対角の席に了を座らせ、その向かいに座った。

そして、了の隣、クレアの向かいをユリの席にし、カナエ用にユリとクレアの間臨時席を設けた。

席が決まって、カナエの自慢料理がテーブルに食み出るほど並び、匠がパンと手を叩いたのを合図に、食事が始まる。

面々、思い思いの会話をしながら、カナエの料理を口へ運ぶ。

「蕪木さんは、”高遠さん”の下で働いてるんですって？」

カナエがサラダを取り分けながら、了に訊ねる。

「はい。そろそろ三年になります。」

「”高遠さん”って、叔父さんの同級生っていう？」

ユリが聞く。

「ああ。」

高遠とは大学の同期でね、色々彼の悪戯に付き合わされたりしたもんさ。」

匠が答えると、了が「昔から”ああ”なんですか？」と聞いた。

「うん。とにかく事件大好き。」

あらゆる事件に首を突っ込んで、何か厄介事を持ち帰って来るオトコだったよ。」

匠が大笑いした。どうやらかなりの厄介者らしい。

高遠とは、匠と同じく同期のカナエが、

「大学二年のときだったかしら、匠さんが、高遠さんの持ってきた厄介事に巻き込まれてね。いつの間にか、ユリのお母さんと私も巻き込まれてて。」

ユリのお母さんとお父さんは、その頃知り合ったのよ。

ある意味、高遠さんのご縁ね。」

と笑いながら、「あら、クレアさん、ちゃんと食べてる？」とクレアにも声をかける。

クレアは「はい」と言いながら、取り分けられた料理を綺麗に食べていた。

「お父さんとお母さんが？ へえ…。」

クレアさん、これカナエちゃんのオススメメニューよ。」

ユリも言いながら、料理を指さす。

「頂いてます。凄く美味しいです。」

にこりとして、クレアが答えると、何故か匠が「それはよかった」と返事をした。

「高遠自身は、相変わらず独身なんだからなあ。」

人の世話を焼くのも好きでね。」

「いい人なんだ？」

ユリが言つと、匠は「ははっ」と笑ったあと、

「それは安直過ぎるなあ。」

とニヤリ顔をした。

「ある意味、日本一のワルモノですからね。」

匠の言葉を受け、了が涼しい顔で言う。

了の言葉に、匠が大笑いをした。

「それは言えてる!」

とても要点を突いていたのか、匠がいつまでもクククと笑った。

「クレアさんは、いつまで日本にいらっしゃるの？」

カナエがクレアに訊ねた。

「一週間くらいを予定しています。」

「あら。その間は、どこに泊まるのかしら？」

「今夜はこちらにお邪魔して…、明日からは父の自宅を予定しているのですが、父は多忙で、帰り時間も区々ですし、付き人もいないので、どうしようかと…」

クレアが困った顔を見ると、笑い終わった匠が「今回は一人きりで来日かな？」と訊ねた。

クレアが「はい」と答える。

「よければ一週間、うちに来てくれてもいいんだけど、ねえ？」
「うん。うちはまったく困らないけど。」

明日にでも、お父さんに聞いてみるといい。」

カナエの提案に匠が頷いて、クレアに微笑んだ。

「ありがとうございます。」

今度は遠慮せず、クレアが素直に言った。

一通り料理がなくなり、各々の腹も満たされた。

「あゝ！ お腹いっぱい！」

食後に出された紅茶を飲みながら、ユリが席に着いたまま伸びをした。

「ユリは、男性の前なんだから、もうちょっと気を遣わないとさ…」

「

見兼ねて匠が嗜める。目の前では了が何も見えていないと言いたげな表情で、紅茶を啜る。

「いいじゃない！」ユリがふくれると、了がティー・カップをソーサーに静かに置いて、ユリを見た。

「迷子に寝坊に大飯喰らい。恐れ入る。」

「なっ！ なんて寝坊の事知ってるのよ！？」

「君の朝の顔を見れば判る。」

ユリが焦ると、了が眉をくいつと上げて、憎たらしい顔をする。
「そんな訳ないでしょ!? 叔父さん言ったでしょ!」

「僕じゃないよ。」と、ニヤニヤしながら匠が言う。
そのやり取りに、クレアが笑った。

「んもお! みんなして!」ユリがふくれた。その顔に一通り笑った後、匠が了を覗き込む。

「そうだ、蕪木クン。

もう少し話出来るかな?」

「はい」了が頷く。

「ユリ、クレアさんにお風呂の案内してあげて。」

洗いものをしていた力ナエが、キッチンカウンターからひよいと顔を出した。

「はい」言ってユリが席を立つと、クレアも倣って立つ。

そのクレアを、了が呼んだ。

「クレアさん。」

「は、はい。」

突然呼ばれて、クレアがどきりとする。そして少しだけ、頬が赤くなる。

(あら、また…。)

ユリが横目でちらりと見る。

「ちょっと早いですが、また明日。」

了に言われて、クレアが照れながら笑う。

「あ、はい、また明日。」

そして恥ずかしそうに頭を下げて、居間を出て行った。

(…何このやり取り…。)

成り行きを見守っていたユリが、怪訝な顔をし、すぐにある事に気付く。

「…、む?

私には挨拶ナシな訳!？」

ふくれるユリを、了はちらりと見て、「じゃあな」と冷たく返し

た。

「むっかつく！ ふんっ！」

勢いでのやり取りだが、解っている。

あの態度はわざとだ。

その証拠に、傍らの匠はニヤニヤと笑ったままだ。

ユリは頭では判りつつも、勢いを抑えられず、ふくれたまま居間を出て行った。

そんなユリを見送りながら、了はニヤリとしたあと、ユリが消えたドアに向かって、微かに、静かに笑った。

4月29日 9

クレアにバスルームの使用方を説明し、来客用のタオルとパジャマを手渡したあと、ユリは一時自室に戻った。

カナエは食事の後片付けに明日の朝食の下準備中、匠と了は事務所へ行ってしまった。

明日も今日と同じ時間に事務所に集合と言われたので、忘れないうちに、ユリは目覚ましをセットし直す。

今朝の教訓を活かし、もう十五分前にセットする。

それをベッドのサイドテーブルに置いた後、ユリはごろんとベッドに転がった。

カチャカチャと洗いの音や、サーというシャワーのような音、バイクが横切る音、複数の靴音が、夜の静けさの中で時折聞こえる。疲れているのか、思考が落ち着かない。

が、ふと、了の顔を思い出した。

「何よ、なんで今あいつを思い浮かべたのよ……。」

と独り言を言い、寝転がったまま首を振り、またぼつつとする。遠くで聞こえていたシャワーの音が止まった。

頭が重くて起き上がらず、そのまま音を聞いていると、やがて引き戸が開き、階段を登る軽い足音が聞こえ、部屋のドアが開いた。

「戻りました。」

クレアの声聞いて、今気付いたかのように、ユリががばっと起き上がる。

「あっ、おかえり！」

じゃあ、私も入ってきちゃうね。

疲れてたら先に寝てていいから。」

そう言っただけ寝ているときに来ていたキャミソールとホットパンツを手に取ると、そそくさと部屋を出た。

静かにドアを閉め、ふう、と一息吐く。

そして部屋の前に伸びる廊下を歩き、階段を下りると、玄関に了の姿が見えた。

「あ。」

ユリが声を出すと、了がユリを見て、「お邪魔様」と言った。

「お帰り？」

「ああ。」

「ふーん。」

ユリが了の真似をして素っ気無く言うと、了がニヤリと笑った。

「寂しいだろ。」

「んなつ。」

何言つてんのよバカ。」

ユリがムキになって言い返すと、匠が「ごめん、見当たらなかったよ」と言いながら、居間から出てきた。

「いいですよ、芳生さん。」

では、これで。今日はお邪魔しました。

久しぶりに大勢で食事をして、楽しかったです。

ありがとうございます。」

「こちらこそ、突然呼びつけてしまって、申し訳なかったね。

またちよくちよく遊びに来ておくれ。」

礼を言つ了に、匠がにこりと笑う。

「はい。またお邪魔します。」

「じゃあ」と言つて踵を返す了の背中に、ユリが「バイバーイ」と声をかける。

すると、了はほんの一瞬、ユリを振り返り、認識出来るか否かと言つほど微かに顔を歪め、低い声で「じゃあな」と言い、出て行った。

（あれ…。なんか、不機嫌だった…？）

首を傾げるが、匠は気付いていない様子でさっさと居間へ戻ってしまったので、気のせいと思いながら、ユリは風呂へ向かった。

まだ夏前だというのに暖かな陽気に加え、今日はクレアと二人、

相当な距離を歩き回って、思いの外汗を掻いていた。

気持ち悪くて、乱暴に服を脱ぎ、思い切り熱いシャワーを浴びる。汗だけではなく、何か重いものも流れていくような気がして、ユリは暫くシャワーの下でぼうつとした。

肌が見る見る赤くなっていく。

少し熱すぎるのか、だが、熱いとは感じない。

さらにシャワーを浴びたところで、ようやく熱さを感じ、手早く髪と体をゴシゴシと洗い、勢いよく湯に浸かる。

ザバッと湯が溢れ、バスルームの床に広がり、すぐに排水溝に吸い込まれていった。

「…はあ…。」

まだ事件に関して二日目なのに、なんか色々あった気がしてならないわ…。」

今日は北代と出会い、美術館で迷い、クレアと出会った。了の想像しえぬ表情を見、高遠の名を聞き、いつもより賑やかな食事をした。

ただそれだけなのに、大量に情報を得たような気がして、脳が重い。

「そうだ、飛澤さん。」

今日は会わなかったな。明日は会えるかなあ。」

ニコニコと笑う飛澤の顔を思い出す。

「高遠さん、か…。」

了の上司ならば、同じように刑事なのだろうか。

聞けば、両親の出会いの切欠になった人物だという。

会ってみたい。

何となしに思って、しかし瞬時にげんなりする。

「会って事は、あいつ経由じゃないと、今の時点では無理なのかも…。あいつの伝手は使いたくないわ…。」

その「あいつ」は、今日静かながらも大量に飯を食べて帰っていた。

その量たるや、普段大飯食らいとカナエがいうユリよりも多かったから、半端ないと思う。料理がテーブルから食み出るほど用意されていた理由が、よく判った。

しかしその割りに、了は見た目にも引き締まった体をしていて、決して太くはない。

「しかし、あいつも何考えて今日ウチに来たのかしら。」

言いながら、話が出来るか訊ねた匠に対する表情が、今思つとても真剣だった事が凄く気になった。

「叔父さんとの話、何だったんだろ。」

帰り、不機嫌だったし……。

帰り際の、あの表情がフラッシュバックする。

「なんだろう……。」

不機嫌、というには語弊があるのかもしれない。

あれは、そう。

思いつめているような、何か言いたげな表情のような気がする。

普段何の躊躇もなく言葉を吐き出しているように見える了が、言い淀む事などあるのだろうか、と思う。

出会って、見てきた表情を一つ一つ思い出す。

昨日の今日だと言うのに、記憶は驚くほど曖昧になっていて、思い出す了の顔も、いまいちはずきりしないではやけている。

「ん？ 何考えてんの私……。」

あー！ 早く出て、クレアさんとお話しよう！

ユリは気付いて苛立ち、バッと立ち上がると、湯を撒き散らしてバスルームを出て行った。

シャワーのせいか、汗を掻くほど火照った体から湯気を立ち昇らせて、ユリは自室に戻った。

クレアは、本棚の近くに座り、積み上げてあった雑誌の一冊をばらばらと捲っていた。

「お待たせー！」

「おかえりなさい。」

戻ったユリに、クレアが微笑む。

「あいつ、帰ったみたい。」

了の帰宅を報告すると、クレアは何度目か、照れ笑いをした。
「そうですか。」

もうちょつとお話してみたかったけど……。」

その様子を確認して、ユリが切り出す。

「うーん。やっぱり、そうか。」

クレアさんて、あいつのこと、気になるんでしょ？」

ズバリ言われて、クレアが手にしていた雑誌をばさりと落とした。

「あ……。」

暫し止まった後、ユリが予想したのとは全く違う、悲しげな笑顔をして、落とした雑誌を閉じなおし、元の場所に戻した。

（ん……？ あれ？ 予想と反応が違う……。）

きょとんとするユリに、クレアがゆっくりと話し始める。

「あの方、兄に少し似ていて……。」

「お兄さん？」

「はい。」

私には、十歳違いの兄がいるんです。

あ、いた、というほうが、いいかしら……。」

手持ち無沙汰な手で、逆の腕を摩るクレアに、ユリが慌てた。

「あ、なんか、話し辛かったら、無理に話さなくてもいいからね？」

「いえ、大丈夫です。」

態度とは真逆の、穏やかな笑顔で、クレアが答える。

何となしに話したがっているような気がして、ユリが訊ねる。

「『いた』っていうのは…?」

「行方不明なんです」と、クレアがさらりと答える。

「え?」

「六年くらい前です。」

突然家を出て、そこから行方知れずです。」

「手がかりもないの?」

「はい。」

手紙も寄越さないし、目撃情報すらありません。

アメリカやイギリス、フランスを始め、各国の情報機関などにもご協力いただいて、何か情報があれば寄せて下さるようにお問い合わせはしているのですが…。

失踪当時も、国内をくまなく搜索してもらったにも拘らず、見付かりませんでしたし、なのにシリングの出国記録も、他国への入国記録もなくて…。」

クレアが困ったような笑顔のまま、話す。

「そうなの…。」

いなくなる理由とか判れば、少しは情報になるのにね。」

「はい。でも私も父も何も…。」

兄は、無口な人でしたけど、とても優しくて穏やかで、でも厳しくもあり。

蕪木さんを見ていたら、急に兄を思い出して、それで…。」

そこまで聞いて、ユリがクレアの前にペタンと座った。

「そうだったのね…。」

事情を知らなかったとはいえ、誤解しちゃってごめんなさい。」

無粋な想像をした自分を恥じた。

「とんでもない。」

ユリさんといると、なんだか凄く安心出来るんです。

私、人見知りで、あまり人付き合いも上手じゃないから、こちらに来て、きつと一人だろうなあって思っていました。

でも、このうちへ誘っていただいて、今日会ったばかりなのにこんなによくしていただいて、とても嬉しいんです。」

にっこりと笑うクレアに、ユリが苦笑する。

「よかったわ。」

実は、ちよつと心配してたんだ。私突っ走っちゃうから…。」

自身の性格は、弁えているつもりだ。

俯いたまま言うユリを、クレアが笑った。

「お姉さんが出来たみたいな気持ちです。」

「私も！」

なんだか、妹が出来たみたいな気持ち！」

一転、満面の笑みで言うユリが、しかし即座に項垂れた。

「姉の私よりよく出来た妹、だけどね…。」

ユリの言葉に、クレアが大笑いした。釣られて、ユリも笑う。

「あ、ねえ、クレアさんの事、私もっと知りたいんだ！」

そう言つて、手を握る。

「はいっ。」

あ、私の事は、呼び捨てにして下さい。」

「え？ でも、大丈夫なのかな…。」

心配するユリに、クレアが言う。「だって、お姉さんだもの」

「そうか…。そうね！」

何故こんなに調子が合うのだろう？

寂しさが、共通しているからかも知れない。と、ふと思った。

思いながら、ユリはベッドに腰かけ、隣に座るように促す。クレ

アは言われるままユリの隣に座り、話し始める。

昼間の印象と変わらない、華奢な体には、来客用のパジャマは大き過ぎていた。

まだ水分の残る髪を結い上げ、触っただけで折れそうな首が露わになっている。

「シリングは、国土の半分が砂漠の、とても暑い国です。

でも、カーネリアンと呼ばれる、真つ赤な鉱石が豊富に採れる地下鉱脈があつて、それを中心に、鉱物売買で国費を賄う国です。

十年程前には、長くお独りだった国王がご婚約を発表されて、そのときに私の伯母でもある王妃に贈った”紅い泪”も、特産品であるカーネリアンで出来ているんですよ。」

「へえ。

カーネリアンって、”夕日色の宝石”って呼ばれてる石の事よね？」

宝石にはあまり詳しくないユリが聞く。

「そう例える国もあるようですね。濃い朱色のとても美しい石です。国自体はとても小さくて、人口も少ないですが、物価も安定していますし、治安も悪くありません。

生活水準は高いほうではありませんが、世界の貧しい国々に比べたら、とても恵まれた豊かな国です。

私は、大使館の職員で外交員でもあった父と、国でも有数の資産家の娘だった母との間に生まれました。」

「おお、スーパ―お金持ちね」と、ユリが驚くと、クレアは「それでもないんですよ」と苦笑した。

「日本のそう言われる方々に比べたら、全然質素ですもの。」
言つて、窓の外を見る。

昼間歩いたホテルや警視庁の明かりが、幻想的に輝いている。

その光景に暫し見入つて、クレアはまた哀しそうに笑つた。

「兄弟は、先程お話した兄以外はいません。

親族は逆に数え切れないくらい。でも、滅多に会いません。」

「なぜ？」

「解りません。

十年前くらいから、徐々に交流がなくなつて、ここ二、三年はまったく……。」

「ふーん……。」

でもそんなものかもねえ。

うちもそんなに親戚との付き合い多くないもの。」

「大人になると、疎遠になってしまいがちですね。」

「うん」と、ユリは頷いて、しみじみしてしまった空気を変えようと、話を切り替える。

「お友達とか、学校は？」

「シリングには、日本で言う”義務教育”に似た制度があつて、五歳から八年間その義務教育機関に通います。

それから、”大学”に近い学校へ進んだり、働き始めたりします。義務ではないですが、兵役制度があるので、希望者は軍で訓練を受けたり、そのまま軍に就職する人もいます。

でも最近は、圧倒的に学校へ進学する人が増えて、働き手が減つたと一時問題になつたくらいです。」

「日本じゃ学校離れが深刻化してるっていうのに、人柄かしらね？」

「どうでしょうか…」と、ユリの相槌に、クレアが笑いながら肩を竦めた。

「進学する事と勤勉な事はイコールではないとは思いますが、でも、学校制度がきちんと確立したのも私が生まれる前後くらいでしたから、まだ真新しくて、可能性を探っているところなのかも知れませんね。

大学には、義務教育終了から最低三年制。機関によっては五年というところもありますか…。

私は三年の学校に通つて、今年卒業なんですよ。」

「おお！ おめでとう！」

「ありがとうございます。」

「やっぱり、卒業論文の提出とかあるの？」

「簡単なレポート提出はあります。」

でも、基本的には単位が足りていれば卒業できますよ。」

「いいなあ。」

ユリも大学は卒業しているが、ずいぶん卒業論文には手を焼いた。

結局ギリギリで、教授の好意によって論文を受け取ってもらえたようなものだ。

「ねえっ、どんなコがお友達にいるの？」

「私の学校は、その、いわゆる上流家庭向けの学校だったので、裕福な家庭の子が多いです。」

でも、みんな明るくて素直で優しい子ばかりですよ。」

「うんうん。男の子のお友達は？」

「私には、残念ながら一人もいません。」

「ええ！？ 声かけられそうなのに！」

「そんな事まったく…。」

みんな、将来のために勉強している子ばかりでしたから。家の家業を継ぐとか、使命のある子が多かったですし。」

「ああ、そうなんだあ。」

ユリが少しがっかりした。女の子だ。浮いた話は大好きだ。

「今年卒業して、そのあとはどうするの？」

「まだ、何も決めていないんです。」

日本で生活しようとも考えていましたし…。」

「へえ！ お父さんのお手伝いとかで？」

「いえ、仕事はまだ決めてないんです。」

「そっかあ。」

困ったらうちに来るといいわ！

きつと叔父さんなら雇ってくれる！」

冗談ではあるが、多分、拒否はしない。

「はい、是非！」

クレアが乗った。

笑いながら、視界に入った時計が、〇時を指そうとしているのに気付いた。

「そろそろ寝ようか。」

明日も早い。

ベッドが大きいから添い寝のつもりだったので、ユリはシーツを

捲って、入るように言う。

「はい。おやすみなさい。」

クレアは滑り込むように体勢を変え、遠慮がちに横になった。
ユリは遠慮なくばたきと倒れる。

「おやすみ。」

誰かと寝るのなど、何年ぶりだろう。

暫しの”妹”の顔を見ながら、ユリはふふっと笑って目を閉じた。

4月30日 1

目の前で、何かが強烈に光った。

そして、遠くのほうで、どん、という音がした。

黒い煙が、青く深く広がる青空に向かって登っていた。

硝子越しに、何かが激しく燃えていた。

ザワザワというささやきが、誰かが叫んだのを期に、悲鳴と怒号に変わった。

泣き叫び、視界の端で崩れ落ちる人影も見えた。

そんな中で…。

足が動かなくて。

何も考えられなくて。

感情の一切が消えてなくなってしまった。

瞬きをする事も出来なくて、ただただ、呆然と、目の前の炎を見つめていた。

やがて誰かが腕を掴んで、肩を揺さぶった。

何か言っている。

耳に入ってくるのに、受け止めることが出来ず、そのまま逆の耳から出て行ってしまったみたい、聞き取ることが出来なかった。

でも微かに覚えている。

あの人は言った。

生きてくれ、と。
笑ってくれ、と。

オレが君の手足になる。

頭にも、口にも、目にもなる。

オレは君のために何でもする。

君がもう一度笑ってくれるなら…

なんでも…

ピピピ…、と、耳障りな機械音が聞こえる。

「ぐう」とも「うう」とも聞こえる音を喉で鳴らして、まだ目を閉じたまま、手で音源を探す。

ひやりと固い何かが手にあたり、指先でボタンを探し、押すと、音が止んだ。

そこでようやく目を開け、手に持っているものを見る。

「五時十五分…。」

口に出して、また目を閉じる。

何故こんなに早くに目覚ましがなっているんだっけ…。

再び見出した夢の中で、ユリが考える。

すると、耳元で、

「ダメですよ、ユリさん。起きないとまた蕪木さんに見抜かれますよ」

と声がした。

「それは嫌だ…。」

”蕪木”で思い出した。

今日も美術館へ行くのだ。

腫れぼったい目を開けると、目の前でクレアが笑った。

「おはようございます。」

「おはよ…。早いねえ。」

クレアはもうすでに、服を着替えていた。

「はい。」

ユリさんは朝弱いんですか？」

「私、朝はめっぼう弱いわ…。」

いつまでも寝ていられるもの。」

最長記録は四日間だと言うと、クレアがくすくすと笑って、

「さつき、カナエさんが朝食の準備が出来たって、知らせてくれませんでしたよ。」

言われて、やっと起き上がる。

そして思い切り伸びた。

横になっていた事で昇っていた血が下がり、頭も冴えてきた。

「よし、ご飯食べて、支度して。」

今日も美術館に行かないといけないからね。」

「はい！」

ユリはまず四階に添えつけられた洗面台で顔を洗い、部屋に戻るとガサガサと着替え始めた。クレアは後ろを向いて、着替えを待った。

着替えを終え、髪を結い上げると、キャミソールもホットパンツも脱ぎっぱなしで、シーツを直す事もせず、急いで居間へ向かう。廊下には、カナエの作ったコーンスープの香りが漂っている。

ユリは思いつきその匂いを吸い込んで、居間のドアを開けた。

「おはよー。」

そう言って、即座に啞然とする。

「…。」

…。

げ。」

何事かと、ユリの陰から顔を出したクレアも、「まあ！」と驚く。了が、匠とともに朝食を摂っていた。

「やあ、クレアさん、おはようございます。」

「お…、おはようございます。」

そう言つて、了はユリに目もくれずに、朝食に視線を戻した。

「私には挨拶なし!？」

「なんであんたがいるのよ!」

「僕が呼んだんだよ。」

迎えに来てもらうお礼にね。」

突っかかるユリに匠が答えると、了が嫌味なほどの哀しげな表情を浮かべた。

「すみません、お邪魔だったようですね。」

「ユリさんにとっては…」と付け加えて、ふう、と溜め息を吐く。

「なっ!」

「あらあら、なあに、ユリ…。お客様に失礼でしょ?」

大騒ぎするユリを、キッチンからスープを運んできたカナエが叱る。

「ごめんなさいね、粗忽な娘で…。」

「いえいえ、奥さんがお気になさる事では…。」

尚も言う了の座る椅子の背凭れを、ユリがバンと叩いた。

「んもおおお! みんなして朝から何なのよう!」

皆がからかっているのは明確で、ふくれるユリの横で、クレアは腹を抱えて笑った。

それから早々と朝食を摂り終え、家を出る。

今日はほんのりと雲がかかって、陽が柔らかく、涼しい一日になりそうだった。

「クレアさんはうちにいてくれてもよかったんだよ?」

みなについて出てきたクレアに、匠が言った。

「はい。」

でもおじさまにも会いたいし。」

クレアが答えると、匠が一瞬顔を曇らせ、すぐにいつもの笑い顔になった。

「ああ、そうだったね。」

(?)

ユリが首を傾げると、目の前に了の車が停まった。

事務所の駐車場に停めてあったのを、取りに行っていたのだ。

「お待たせしました。」

今日は降りずに、助手席側の窓から、運転席からひよいと顔を出して、了が言った。

「ほんつと待ったわ。」

ユリが言うと、了は即座に不機嫌な顔を造って、「気に入らないなら、乗らなくていいぞ」と言い返す。

「むっ！」

…乗せてください…。」

ユリが折れ、了がニヤリする。

(何度見てもムカツクわ、あの笑顔。)

ユリがふくれるのを、また面白そうに見ながら、了が助手席の口ツクを外した。匠が席を倒し、後部座席にクレアとユリを乗せる。

そして席を戻し、車に乗り込んだ。

完全にドアが閉まるのを確認して、了が車を発進させる。

「クレアさん。」

徐に了がクレアに声をかけた。

バックミラーでちらりとクレアを見る。

「は、はい。」

「気分が悪くなったら、言ってください。」

すぐ停めますから。」

「はい。ありがとうございます。」

了の気遣いに、クレアが照れた。

「なんで私にはそういう事言ってくれない訳？」と、すかさず突っ込むユリに、「君は車酔いしそうに見えない」と了も即答し、匠が大笑いした。

最早お決まりとなったやり取りに、クレアも笑う。

「叔父さんはなんで、自分の姪がこれだけ言われてて笑ってるのよ！？」

ユリが匠の耳たぶを引っ張った。「いてて」と言いながら、匠が笑いを堪える。そして、くふふと笑い締めると、匠は穏やかな顔で言う。

「蕪木クンの悪態には、そこはかとなくユリへの愛情が感じられるからねえ。」

「どこによ！？ 寛容すぎよ！」

今しがたの表情はどこへやら、匠はまた大笑いを始める。

すると、匠の笑い声に消されそうなほど小さな声で、クレアが言った。「でも…。」

「ん？」

「匠おじさまのいう事、何となく判ります。」

「クレアまで！？」と、ユリがクレアに顔を近づける。

「あ、違いますよ。」

私の兄も、無口で、時々口調もきつかったけど、その分、相手の事、心配してたから。」

もじもじと指をいじるクレアに、ユリがさらに詰め寄る。

「クレアの立派なお兄さんと、コイツは比べちゃダメよ！」

言われて、それまで黙っていた了がぼつりと呟いた。

「まったく、みんなで勝手な事ばかり…。」

了の愚痴に、匠がまたまた笑った。

笑われて、了がちらりとバックミラーを見る。

後方確認のついでに、ユリの顔が見えた。

おたふく風邪でもひいたように、頬を膨らませて、窓の外を眺めている。

ふと、ユリが了の視線に気付いた。

一瞬だけ、ミラー越しに目が合う。

出会って三日目、ずっと思っていた。

凜と、光の差した瞳だ。

真っ直ぐにものを見つめ、穢れを知らない。

だからたまに、見つめられるのが怖い。

射抜かれそうになるから。

だが、怖い理由はそれだけではない。

了は溢れ出しそうになった記憶をぐっと仕舞い、ユリの視線から逃げるように、ミラーから目を背けた。

4月30日 2

美術館の正門前で匠たちを降ろし、了は駐車場へ車を走らせた。降りた面々は、美術館を目指す。

「おはようございまーす」

館長室を開けて挨拶をする。

が、予想していた菅野の声が聞こえない。

「……あれ？」

「おじさま、いないのかしら……」

ドアの前に立ちふさがったままのユリの陰から、クレアが中を覗く。

「うーん……」

今日もこの時間に来ると言っておいたんだけどな。」

匠がボリボリと頭を搔く。

「館内のどこかにいるのかも。探して来ようか？」

ユリが言くと、「大丈夫かあ？ 迷子にならないか？」と匠は二

やりと笑った。

「しっつれいね、大丈夫よ！ いつてきます！」

ぷいと踵を返して、ユリはエントランスへと向かった。

ロビーに出ると、昨日はちらほらと見えた警備員が、今日はいない事に気付いた。

美術館に来て三日目、ブルーシートも少しずつ取れているようで、毎日違う風景を見せる。

エントランスの脇にある喫茶店を覗くと、南向きの大きな窓からさんさんと太陽の光が差し込んでいる。

「おしゃれな喫茶店だなあ。」

天気がいいと、敷地内の中庭が凄く綺麗なんだよね。

……と、ひたっている場合じゃなかった。

館長、いないみたいね……」

振り回り、対角にあるショップを覗く。

こちらは照明が点いておらず、窓もないので、陽も柵で遮られ、真っ暗だった。

人気も、当然の事ながら、ない。

次いで二階へ向かう。

しん、と静まり返った展示室で、格子柄の床と真っ白の壁、張り巡らされたブルーシートが、なんともシユールな空間を作り出している。

ユリは、昨日了に教わったとおり、小展示室と中展示室からなる楕円状の展示室をぐるりと回ってみる事にした。

左手に壁を、突き当たりに行くまでは真正面の入り口を通り、突き当たりまで行ったら、右手にある入り口に入る。

中、小、小、と周ったところで、再び中展示室に入る。東側の中展示室だ。そこを折り返し地点に、今度は庭を臨む窓を左手に歩くと、また中展示室に辿り付いた。西側、特別展示室に隣接するほうの中展示室だ。

きよろきよろと見回すと、ブルーシートの陰で、キラリと何かが光った。

「あれ？」

拾い上げると、繊細な細工の施されたタイピンのようだった。

「…タイピン…かな。」

誰のだろう？

拾ったところ…。」

ジャケットのポケットに入れ、特別展示室に移動する。

特別展示室は六角形の塔の二階にあり、ベランダが添え付けられている。

ちらりとみると、何故か窓が開いていた。

不思議に思い、ベランダに出てみる。

朝露に濡れた中庭の芝生が、きらきらと光っていた。

「結構広いんだ。」

白く真新しいベランダの手摺りにつかまり、身を乗り出して中庭を見下ろす。

敷地を囲む背の高い樹木の向こうに、高層ビル群が見える。暫し眺めたあと、館内へ戻ろうと振り向いた足に、何かが当たった。

「ん？」

足下を見る。

そこには、黒い硝子玉が落ちていた。

拾い上げると、硝子の裏側が、ピンのようになっている。

「このカフス、どつかで…。」

思い巡らせ、ふと思いついた。

「…あ。館長が着けてたカフスだ。」

注意深く見ていたわけではないが、菅野の袖下についていたカフスに似ている。

「落としちゃったのかな？」

なんだか、今日は落し物をよく拾うわ…。」

独り言をいい、タイピンの入っているポケットに、カフスも仕舞う。

菅野の姿は見えないので、三階へ行く事にして、ユリは特別展示室を出た。

4月30日 3

三階へ上がり、セレモニーホールを覗く。

三階は、一、二階とは違う構造になっていて、特別展示室のある塔の後ろに聳える二本目の塔にのみ、三階というフロアがある。

三階には、セレモニーホールと呼ばれる多目的ホールと、今回の改装で新設されたラウンジのみがある。

セレモニーホールは、二階のロビー部分の天井を低くする事で作った中二階と三階を半々に別け、ロフト付きのホールになっている。これが、窓は東側の壁に、通常三階の高さにしか備わっていない。これは、手前にある塔の屋根に安易に出られないようにするための配慮だと思われるが、結果として、メインの空間には直接日の光が差さない、日中でもとても過ごしやすい空間となったようだ。

ホール内を少し歩き、菅野がいない事を確認する。

「位置的に、あのベランダから上がって来られるのかな？」

後ろにずれてはいるが、ほぼ真上に位置する部屋だ。

窓がないので入り込めはしないが、屋根に登ることは出来そうだと考える。

そして、ふいに在らぬ事を思いつく。「あ、あのカフスって…。」

「まさか、館長、ベランダからセレモニーホールによじ登ろうとして、そのときにカフスが…。」

「んな訳あるか。」

ユリの独り言に、即座に突っ込みが入った。

「む。」

振り向くと、了が立っていた。

またいつもの一言を言われる前に、先に否定しなければ。

「ま…、迷子じゃないわよ！」

ユリが言うつと、了が呆れた。「判ってるよ…。」

「館長、見付かったか？」

「うつん、どこにも…」

聞かれて、ユリが首を振ると、了は「そうか。」と言って、出て初めて神妙な顔をした。

(?)

なに…、その顔は…)

ユリが眉を顰めると、了がすぐに表情を戻した。

「ラウンジは見たか？」

「ただだけど…」

「そうか。」

そう言って、三階ロビーへのロフトに登る階段を駆け上がって行った。

ユリも追いかけて、ともにラウンジを覗くが、菅野の姿は確認できなかった。

「よし、戻ろう。」

一通り探して見付からないのだ。館内にいない可能性が高い。了が言った。

「北代が新しい地図を持って来たらしい。」

「あ、見る見る！」

ユリも同意した。

その後、念の為館内をもう一周したが、結局菅野は見当たらなかった。

館長室に戻ると、まず北代の姿が目に入った。

「ただいまー。」

「戻りました。」

声をかけると、「おかえりなさい」とクレアが答える。

匠と北代も振り返るが、菅野はいない。

「館長、まだ戻ってないの？」

「ああ。」

おかしいと感じるのは誰もが同じで、普段笑い顔の匠も考え込んでいる。出勤している職員に頼み、菅野の自宅へ連絡をしてもらっ

たらしいのだが、結局留守だったらしい。

財団へも問い合わせたが、今日は来てはいないという事だった。
「どこに行ってしまったのかしら…。」

クレアも困惑を隠せない。

「あ、そうそう。」

菅野も心配だが、昨日と違う状況なら、館内でも見つけた。

「中で色々拾っちゃったんだけど…。」

そう言って、ユリがポケットから、二階で拾ったタイピンとカフスを取り出す。

「ん？ これは…。」

匠がカフスに反応する。

「館長が着けていたカフスじゃないか。」

「やっぱりそうだね？」

すると、指でカフスを指しながら独り納得をするユリの後ろで、拾得物を覗き込んだが、目を見開き、息を飲んだ。

そして、突如タイピンを掴み上げる。

「お前、これをどこで拾った!？」

「えっ、な…なによ、いきなり…。」

二階の中展示室で拾ったの。

部屋の間際に落ちてて…。」

突然の事にしどろもどろに答えると、了が、バッと北代を見る。
顔が強張っている。

「北代警部補!」

「!？」

いきなり大声で呼ばれて、北代もたじろぐ。

「捜査員、借ります!」

言うが早いか、了は館長室を走って出て行ってしまった。
その背中に、北代が叫ぶ。

「あ!？」

おっ、おい! 蕪木!」

「ど…どうしちゃったの？」

呆然とするユリの横で、匠だけがニヤリと笑った。

「どうやら、あのタイピン、ただの落し物じゃないみたいだね。」

「え？」

ユリが聞き返すと、匠は、まあ聞けば判るよとも言つような顔で笑い、「ユリ、蕪木君のところに行つてくれ。ボクはクレアさんとここで待つよ。」と言った。

まだ状況を把握出来ないユリは、ただ言われるまま「うん」と頷いて、館長室を出た。が、了が行き先告げずに出て行ってしまったので、今度は了を探す羽目になった。

一階をぐるりと周ったがいなかったので、エスカレータで二階へ上がる。

すると、さきほど見回っていたときとは一変して、二階は少し慌しい空気に変わっていた。

見慣れないスーツ姿の男が数名、警官に指示を出したり、小走りに走り回ったりしている。

（あいつ、どこだろう…。）

何となく声のかけ辛い雰囲気、ユリが不安げに辺りを見回しながら、取り敢えず中展示室へ入ろうとすると、

「ああ、その人、入っちゃダメですよ。」

と止められた。

振り返ると、見覚えのある警備員がいた。

初日に了の傍にいた、そして翌日に、一階の喫茶店でユリに挨拶をした、あの警備員だった。

「え？ ああ、すみません。」

あの、蕪木…刑事は…？」

”刑事”と付けるのに違和感を覚える。

ユリが問うと、警備員が首を捻った。

「蕪木刑事…？」

数秒だが悩んだ警備員は、「ああ！」と言い、

「蕪木さんなら、地下のセキュリティ・ルームに行きましたよ。」
と、下を指差す。

（蕪木”さん”？）

警備員も了の素性を知らないのかと思い、やや疑問は残るものの、ユリは会釈をして地下へ向かった。

「えっと、一昨日歩いたときは、確かこっちのほうへ…。」

一階の職員通路へ戻り、途中にある階段を下る。

本当にこの階段でいいのか不安なまま歩いていると、曲がり角で飛澤に出会った。

「お！ お嬢ちゃん！」

「飛澤さん！」

「このあいだ嬢ちゃんと一緒にいた刑事さんがな、お前さんが迷子になってるだろうから迎えに行ってくれてよ。」

ユリを見た飛澤は、にこにこしながら言った。

「えっ…。」

言われて、ユリが驚く。

「早いところ手を貸して欲しいんだとさ。」

飛澤が急かした。そして、さっさと行ってしまっ。

「あ、はい。」

飛澤を、ユリが追いかけた。

そして、了が気遣ってくれた事に、ほっと胸を撫で下ろし、即座に自分に突っ込む。

（なんで、ほっとしてるのよ…。）

4月30日 4

「おう、兄さん、連れてきたぞ。」

セキユリティ・ルームへ入るなり、飛澤が言った。

飛澤の後ろから前方を覗くと、了がとつもなく不機嫌な顔をしてモニタの前で仁王立ちしている。

いつもどおりの眠そうな目元が、ユリを睨みつける。

薄暗い室内を照らすモニタの光が、その睨みをさらに鋭いものに演出していた。

ユリがどきりとする。

(う…。)

明らかに不機嫌な顔…。)

眉間に皺を寄せ、了の視線に恐怖すると、そんなユリに了が呟いた。

「すまん。」

「…はい？」

突然詫びられて、戸惑う。

「顔を戻す余裕がない。」

何が理由かはまだ判らないが、了は今、かなり焦っているらしい。

「…。」

「…ぷ。」

思わず、ユリが吹きだす。

「笑うな…。」

照れ隠しなのか、今度は本当に不機嫌な顔をして、了が言った。

「ごめんごめん。」

ところで、私の手を借りたいって、どういう事？」

笑いが止まらないユリが訊ねると、了は漸く、落ち着きを取り戻したように表情を和らげる。

「ああ。」

そう言つて、ユリが拾つたタイピンを見せる。

了が入れたのか、タイピンはジッパー付きの小さな透明袋に入れられていた。

「タイピンね。」

「ただのタイピンじゃない。」

ユリが頷きながら言つと、了は真つ直ぐユリを見つめて言つた。

「男爵”のタイピンだ。」

「え!？」

驚くユリに、了が話し始める。

「男爵”は今まで、一度も遺留品が見付からなかった事でも有名なんだ。」

「じゃあ、どうしてそれが男爵”のだって言えるの?」

問うユリに、了が一瞬ぐつと何かを飲み込んで、ユリから目を逸らした。そして少し思いに耽つた後、悔しそうな顔をした。

「…オレは、一度目の前で男爵”を逃した事がある。」

「ええ?」

突然の告白に、ユリが了を覗き込む。

「スウェーデンの事件のとき、たまたま捜査に加えてもらつていた。去年の二回目の事件だ。」

そのとき、そのタイピンを見た。」

了は続ける。

「アイツは、予告状以外、一切の証拠を残さない。」

という事は、そもそもアイツの持ち物の類似品は作れないんだ。

そのタイピンを、世界中のマーケットに照合した結果、一般に流通していない、完全なオーダーメイドだという結論に至つた。」

「それで『男爵”のもの』と断定した訳ね?」

タイピンを見つめる了の横顔に、ユリが頷いた。記憶だけで断定という以上、非公式的なものだろう。恐らく、了の確信だけの上で成り立つ結論ではあるうが、了にはそれで十分なのだろうと思う。

「ああ。」

小さく頷いて、了は丁寧にタイピンの入った袋を、ジャケットのポケットに仕舞う。

「実物が手に入った以上、製造ルートも割り出せるかも知れない。だがまずは、この館内に”男爵”、もしくは”男爵”と接触を持った人間が入ったという事実について調べなくてはならない。」
「うんうん。」

相槌を打ったあと、ユリはぼん、と手を叩く。

「あ、そうか、そこでセキユリティ・ルームなのね。」
「賢くなつたな。」

だいぶ余裕が戻ってきたのか、了はいつものように茶々を入れ、ニヤリと笑った。

「失礼ね！」と、ユリもいつもどおりふくれる。
満足したのか、了はすぐに表情を元に戻した。

「このセキユリティ・ルームの監視カメラは、過去一六八時間分の記録が保存出来るようになってるのは思えてるな？」

昨日一昨日と発見される事のなかった、このタイピンが落ちていた付近に近づいた人間が、ユリ以外にいれば、その人物が容疑者がそれに近い人物と言えるかも知れない。」

了の調査の結果、今回の改装工事は夜に行われているという事だったが、昨夜と二日前の夜は、改装業者は館内に入っていないという事だった。ちなみに、それは予定通りの事だという。

「うんうん。」

ユリが頷き、しかしすぐに思いつく。

「あ、でもさ…、それって…。」

「ん？」

「他にいなかったら……、私って事？」

身に覚えがないのだが、そう言われてしまうのだろう…。

「そうかもな。」

もちろんそんな事は有り得ない事くらい、了も承知している。が、ここは弄るに限る。

またニヤリと笑ったに、ユリが大口を開けた。

「な……っ！」と、抗議を始めようとしたユリの声を、飛澤が遮った。

「兄ちゃん、嬢ちゃん。」

取り敢えず、昨日の晩、ここを閉鎖した後の映像を映すぞ。」

飛澤の言葉に、了が真顔に戻る。

「お願いします。」

返事をして、モニタに視線を移す。ユリも、了に倣ってモニタを見上げる。

数十個並ぶモニタ群の中に、一つ、二周りほど他より大きなモニタがある。それが、ブツッと一瞬消え、ある光景を映し出した。

右上に白い文字で、『中展示』『4 / 29』『18 : 00』と表示されている。

室内を上部から映した映像なので判り難いが、西側の中展示室のようだった。

昨日、十八時頃の中展示室を映しているらしい。

時折、警備員らしき人間の後姿が早足で映り、去って行く。

どうやら、何倍速かで再生しているようだ。

表示されている時間が、数秒で一分、経過している。

「営業時間内は、客の出入りこそないが、改装工事の業者の連中の出入りはある。」

ただ、もう粗方、改装は終わってるから、日中の業者の出入りはそんなに多くない。ちよつと偉いやつがウロウロして帰るだけって感じだな。

実際の作業者も、夜、ちよろつと来て、シート取って細かな点検をしたり、窓だの何だのってデリケートなところの改装だけなんて人数もそんなに必要ないんだとさ。」

と言う事は、昼間に限らず、夜も誰かしらの出入りはあるという事なのだ。

当然の事ながら、セキュリティ・ルームには当直の警備員がいて、

カメラの確認や、定時の見回りは行っているという。

「ただ、昨日は当直のメンツの事情で、見回りの時間が、いつもと違う時間だったんだよ。」

確か、閉館後にすぐと、朝だな。夜中の見回りはやらないで、映像の監視だけだった。」

了が顎を撫でた。

「いずれにしても、日中に落とせば、誰かの目には留まって、何らかの報告が入ってもおかしくない…。」

「なら、やはり閉館後か…。」と眉間に皺を寄せた了が、直視していたモニタに何かを見つけた。

「ん？」

今、一瞬何か映ったな…。

映ったというか、入り込んだというか…。」

『22:05』くらいだった、と了が言つと、「巻き戻します。」と操作していた警備員が言う。

分数が10、9、8と戻っていき、6から5に変わる瞬間、部屋を中心に黒い何かが映った。警備員が、今度はコマ送りでその部分を表示し、一時停止をする。

「これ…、布??」

形状からすると布のようだった。マントがたなびいているかのよう、暗がりの中にそれは映り、そして一瞬にして消えている。

横にいる了が、じっとモニタを凝視している。

「よう、なんなんだい、こりゃ?」

飛澤が、眉をハの字にして問うた。

「これは…。」ユリが言いかけると、

「いや、昨日見回った時に何もなかったところに、誰の持ち物でもないものが落ちてたので、誰かが入り込んだんじゃないかと。」

と了がユリを遮った。すると、飛澤が眉をさらにふにやりと曲げ、

「なんだい、あんたら、ここのセキュリティを信用してないのかい？」

誰かが入り込んだら、瞬時に判るぜ。

「昨日の晩はアラームも鳴らなかったからな、多分部内者だろうぜ？」

と言った。

「…そうか…。」

少し考えてから、了が言う。

何か思いついたのだろうか。

「何？」

ユリが訊ねると、「いや…」と、了が悩んだまま答える。視線は相変わらずモニタに向いたままで、顎に当てていると思っていた指は口許にあった。

微かに、爪を噛む仕草をしてからすぐに腕組をし、モニタを直視したまま飛澤に言う。

「飛澤さん、取り敢えず、朝までの記録を見せてください。」

「おう。」

軽快に答えた飛澤が警備員に指示をする。

黒い何かが映った場所から、先程と同じ倍速で映像が流れていく。そして、〇時に差し掛かったあたりで、突如きらりと、何かが小さく光った。

「あつ、今、キラって！」

ユリが指をさすと、警備員が映像をコマ送りで戻す。

時計が『00:00:00』と『23:59:59』の間で揺れている。その数字のすぐ下、ちょうどユリがタイピンを拾った場所で、窓からの月明かりに照らされ、突然キラリと光った何かが映っている。

「タイピンが落ちたのは、このときなんだな…。」

了の中で、この光はタイピンと確定したらしく、後ろを見向きもせず、片手を挙げて続きを促す。

さらに映像は進んでいき、時計が『03:02』の付近で、また何かが映った。

「…？」

影……か……？」

了が眉を顰める。

「え？」

どのへん？」

ユリが身を乗り出す。映像は、了が声を上げた時点で止まっているが、若干過ぎてしまっていて、何も映っていない。

「そのあたり、コマ送りで見せてください。」

言われて、警備員がゆつくりと巻き戻していく。

やがて画面右端、特別展示室と繋がる入り口付近の床に、ぼんやりと何かが映った。

「影だ……」了が即座に言った。

「人影だ。」

それも、二体……」

特別展示室に誰かがいたという事だろうか。

「同時刻の、特別展示室の映像は観られますか？」

了が言うと、操作をしていた警備員が手際よく映像を切り替えた。表示された時間は『03:02:20』、場所は『特展示』とある。

しかし、映し出された特別展示室の映像には、何も映っていないかった。

「……。」

「どういう事？」

ユリが聞くが、了は上の空のようで、答えもしないまま、また片手を挙げた。合図に合わせて、中展示室の表示に戻り、また映像が進む。

やがて画面全体が明るくなっていき、仄かに光が差し込んだ。

夜が明けたのだ。

時計を見ると『05:58』を過ぎたところだった。

そしてすぐに、見覚えのある姿が三度、カメラ前を行き来した。

「……。」

迷子か…」

紛れもない。ユリの姿だ。了が呆れる。

「違うわよ！」とユリが言うと、後ろで飛澤が笑った。

四度目にカメラ前を通ったところで、ユリがしゃがんだ。

「あ、ピン拾った！」

そのユリの声に答えるように、了が前かがみになっていた姿勢を正した。「ここまででいいな…。」

そして、もういいの？というユリの顔を見た。

手を借りたいと言われはしたが、何もしていない気がする。

…。

芳生さんのところに戻ろう。」

「あ、うん。」

ユリが頷くと、了が小さく頷き返して、飛澤を振り返る。

「飛澤さん、有難うございました。

最後に一つ。

今朝から、館長の姿が見えませんが、何か知りませんか？」

了の問いに、「館長、いないのかい？」と飛澤が答えた。

「さあ、オレはここに五時には来てたが、見かけなかったなあ。

監視カメラにも映ってた記憶もないぜ。」

肩を竦める飛澤に、了は本当に納得した表情で「ありがとうござ

います」と頷いて、

「行こう。」

ユリをちらりと見、さつさとセキュリティ・ルームから出て行っ

てしまう。

「うん。」

飛澤さん、有難うございました。」

ドアの前でユリが頭を下げると、飛澤は腰に手を当てて胸を張り、にかつと笑う。

「いいってことよ！

また困った事があつたら、いつでも来な！」

ユリもにこりと笑い、すぐに踵を返した。

了の足音が、聞こえなくなりそうだったからだ。

廊下を見ると、既に了は角を曲がってしまっていて、姿は見えなかった。

追いつかなくては。

何故か逸れてはいけないう気がして、ユリは走った。

角を曲がると、了の背中が見えた。

姿勢のいい、体格より大きく見える背中だ。

軸がブレず、真っ直ぐ前を見つめて歩いている。

少し長めの髪が、歩くたびにふわりとなびく。

駆け寄り、手を伸ばせば背中に触れるくらいまで近付いたところで、ユリは走るのをやめ、早歩きに変えた。

大きな手がぐっと握り締められ、規則正しく前後に揺れる。

（頭の中、”男爵”でいっぱいって感じ…。）

了を見上げながら、ユリが思う。

すると、まるで見透したようなタイミングで、了がユリを呼んだ。

「ユリ。」

突然呼ばれて、ユリの心臓が一瞬止まる。

「は、はいつ。」

「”男爵”について、どの程度の知識がある？」

了は振り向きもせず、問いかけた。

「…実は、新聞で読む程度の知識しかないの。」

今日、叔父さんに聞こうと思ってた…。」

「そうか。」

ユリの答えに、了が短く言う。そして、

「あとで、”男爵”について可能な限りの情報を教える。

時間を作ってくれ。」

いつもより低い声で、了が言った。

ユリは、やっと認めてくれたような気がして、「うん！」と力強く答える。

そして、セキュリティ・ルームを出たときの気持ちを思い出す。
この人から逸れてはいけない。

確かにそう感じた。

散々ムカツクと繰り返してきた相手だというのに、抱く信頼はいつの間にか篤くなっていた。

それに気付いた瞬間、何かを真っ直ぐに目指す後姿に自分の歩みがついていなくなりそうで、怖くなった。

ふと、了の手を見る。

何で作ったのか、小指に掠り傷が見えた。

すると今、すでに逸れそうになっているような気分になり、ユリは無意識に、了の手を握ろうと手を伸ばし、そしてもう少しで触れる、というところで、急に躊躇い、手を引っ込めた。

予期せぬ感情に、ユリは戸惑った。

手持ち無沙汰になった両手を、祈るように握る。

赦されるなら、その背中にしがみ付いてしまいたいくらい、逸れるのが怖くてたまらなかった。

4月30日 5

了の雰囲気気圧されて、ユリは押し黙ったまま、了に続いて館長室に入る。

「戻りました。」

了が言うと、匠が振り返った。

「おかえり。」

その顔は、何か掴んで来たって顔だな。」

了の顔を見るなり、ニヤリと笑う。

「まだ、確定ではないのですが…。」

了が匠から視線を逸らせた。

いつも自信満々のあいつが、と、了の背中を見守るユリは思った。了は、しかしすぐに匠をみて、「菅野館長は、まだ見付かりませんか？」と問うた。

匠が目を閉じて、ゆっくり首を振る。

みな「そうか…」と言った様子で溜め息をつくとき、

「”男爵”のタイピンだったって？」

何をしていたのか、菅野のデスクの上を眺めていた北代が言った。「十中八九…」と、また煮え切らない声で了が答える。

「今、セキユリティールームで、昨夜ここを閉館してから、今朝、芳生ユリがタイピンを見つけるまでの、監視カメラの映像を確認してきました。」

ほう、という顔をして、北代と匠が聞きの体勢になった。

了はそれを確認して、続ける。

「まず、二二時〇五分、まだピンは落ちていませんが、黒い布状の物体がカメラのフレームに微かに入り込んでいます。」

その後、二三時五九分、金属らしきものの光の反射を、カメラが捕らえています。恐らく、この直前にタイピンが落ちたのでしょう。そして最後、〇三時〇二分、人の影らしきものが二体、映ってい

ました。

これは文字通り、床に映った人の影です。
セキュリティルームの責任者、飛澤氏の話では、昨晚はアラームは鳴らなかつたようです。

ですから、素直に考えれば、”男爵”か、”男爵”に近しい人物が、この館の関係者にいる可能性が高い。”

「しかも、アラームの鳴るレベルのセキュリティを解除する事が可能な権限を持つ人物……」

了の言葉に、匠が続けた。了も頷く。

ユリを始め、今回事件の関係者としてこの美術館に出入りをする人間にも、夜、美術館の床に張り巡らされたセンサーと連動したアラームは解除出来る。

解除と偏に言っても、この館内のそれは些か特殊で、センサー自体はセキュリティ・ルームで館内全体のセンサーを止める方法でしか解除出来ない。そこで、センサーに対して、特定のレベルの許可が下されたカードを造り、それを持つ者は”不審物”ではないと認識させることで、事実上セキュリティを”解除”出来る仕組みになっているらしい。

そして今のところ、そのカードを持つことを赦されているのは、この美術館の警備を勤める警備員の当直の者、ユリ、匠、了、北代、館の職員のうちの数名と、菅野だけだと言う事だった。

「北代警部補」と、了が呼ぶ。

「うん？」

「今、このタイプピンが発見された中展示室を中心に、近辺を調べてもらっています。」

今までの事件同様、指紋などは見付からないとは思いますが、タイプピンほどのものを落としたんです、他にも何か落としているかも知れない。」

可能性にかけて、鑑識班を呼び寄せ、捜査をさせている。
そう説明を受けた北代が、不服そうに眉間に皺を寄せた。

「解った。」

館内の捜査指示は、私が引き継ぐ。」

腕組をし、了を睨む。

了は真つ直ぐに北代に向かい、

「勝手な真似をしました。」

と頭を下げた。北代が「ふん」と鼻を鳴らす。

「仕方あるまい。」

では、私はこれで。

二階にいるので、何かあったら……。」

「わかりました。」

了が言つと、北代はどすどすと大きな足音を立てて、部屋を出て行った。

いつの間にか張り詰めた空気は、北代の足音が聞こえなくなつても緩まなかつた。

ユリが横目でちらりと了を見る。

了は先程まで北代が立っていた場所をただじつと睨みつけていた。その横顔から汲み取れる感情は、ユリの知り得るところではない。匠も黙つたまま、床の一点を眺めていた。

どのくらい時間が経つたか、了が、ふう、と溜め息をついたのを期に、匠がくすくすと笑つた。

「気苦労が多いね。」

言われて、了が匠を振り返り、苦笑した。

「たまに堪えます。」

二人の会話にユリが怪訝な顔をする。

「ときに、芳生さん。」

「うん？」

「ここまでに得られた情報から、芳生さんなら、どんな推理をしますか？」

苦笑をすつと仕舞い込んで、了が匠を見据えた。

その表情に、ユリはまた、少し怖くなる。

地下の廊下で見たあの後姿と同じ雰囲気なのだ。

手の届かないところに、了が心を持っていつてしまう。

そんな了に、匠が微笑んだ。

「嬉しいねえ。」

素人の意見を聞いてくれるのかい？」

その言葉に、了がキツと唇を噛んで俯いた。

「勉強しなければならぬのは、ボクのほうです。」

言われて、匠がさらに柔らかに笑う。

「有り難いよ。」

君の気持ちが…。」

了が僅かに首を振って、匠を見上げ、苦笑した。

相変わらず怪訝な表情のまま、二人のやり取りを眺めていたユリ

は、腹で呟いた。

（何かしら…。」

男同士で…。」

あ、おっさん同士…?）」

「誰がおっさんだ。」

突如、了が不機嫌な顔を造ってユリを見た。

「えっ!？」

声に出してしまったのかと口を抑えると、「君はわかり易過ぎる」

と、了が腰に手を当てた。

「うつ」とたじろぐユリに、匠が大笑いをする。

地下から戻ってから、いまいち了に強く出る気になれない。ユリ

が珍しく圧されているのを見ながら一頻り笑い終えた匠は、何故か

靴を脱ぎ、ソファに登って背凭れに腰掛けた。

「蕪木クン、僕の推理だが…。」

「はい。」

了が姿勢を正す。

「僕は君ほど、”男爵”に関する情報を持っていないから、何とも
言いようがないのが本音だ。」

でも、その上で敢えて推理するならば……。」

匠が人差し指を振った。

「男爵」と菅野館長、延いてはシリリングとの間に、何らかの深い繋がりがあると見ていいと考えている。」

匠の言葉に、ユリが目を見開く。が、了は至って冷静に、表情一つ変えない。

「男爵」とシリリングとの間にも、ですか……。」

「うん。」

平然と答える匠に、了が悔しそうな顔をする。

「……なるほど。」

やはり芳生さんは鋭いですね。」

「いやいや。」

飽く迄も推理だからね。

最初に言ったように、僕は「男爵」についてはそれほど深い理解はない。」

と、匠が両手を振って否定した。しかし、「ただ……。」と続ける。「なんとなくね、何かの目的があって盗みまわっているようにしか見えなくてね。」

そして、シリリング王国の展示会。

この美術館とシリリングの繋がり、館長と大使の繋がり。

今回の条件だけを見ると、どうしても繋がりを考えてしまうものさ。」

この美術館に呼ばれ、訪れた日に、飛澤から聞いたシリリング大使と菅野の「偶然」の出会い。そこから今日までの間に、この美術館とシリリングを結ぶ糸が何本か見えた。

一見ただの偶然でも、それは意図的に創られたものかも知れない。あの時は考えすぎかと首を振ったが、可能性は○ではない。

「そうですね。」

了が頷いて、腕組をした。

ここで、ユリがきょろきょろと室内を見回す。

「そういえば、クレアは？」

「ああ、クレアちゃんなら、中庭へ散歩に行くって、出て行ったよ。昼間のうちは、捜査官もいるし、安全だろうと思ってね。」

匠が答える。「そっか」と、ユリは返事をして、徐に手を叩く。

「あ、ねえ。」

叔父さんと蕪木さんの時間があるなら、”男爵”について教えてよ。」

「ああ、そうだな」と了が頷く。

「僕は構わないけど、”男爵”について日本で一番詳しいのは、蕪木くんだからね。」

匠が肩を竦めて、「僕の話は、役に立たないかもなあ」と続けたので、ユリが了を見上げた。

「…あ、”男爵”オタク？」

ユリの言葉に、了が呆れ、匠が笑った。

その様子に、ユリは少し、ほっとする。

よかった、いつもの了だと。

4月30日 6

”男爵”による、初めての犯行予告及び犯行が行われたのは、今から七年前になる。

七年前の三月七日。

フランスの資産家、リチャード・マルティン卿の屋敷に予告状が届いたのだ。

予告状の内容は、十日の深夜〇時に、屋敷の金庫に保管されている”蒼い薔薇”を盗むというもので、予告状通り、盗まれている。

「大英博物館の事件が一番最初じゃないの？」

ユリ、と言うより、世間一般の知りうる限り、”男爵”という怪名を持つ容疑者の一番最初の事件は、二年前のイギリスの事件だ。

「ああ。あの事件は四〇回目の犯行だ。

一般に公表されている限りでは、あの事件が初めての犯行だけだな。」

館長室のソファに前かがみに座り、膝を支えにぶらりと垂れ下げた両手を組み合わせ、了が上目遣いでユリを見上げた。

「四〇回目！？」

ずいぶん長い事隠してたのね……」

ユリが驚くが、了はそれには答えなかった。

「”蒼い薔薇”は、マルティン卿の奥君が五〇歳の誕生日を迎えた際に、さる友人から送られた品で、シリング原産の黒ダイヤを使用した、薔薇をモチーフとしたアクセサリーだ。

この黒ダイヤは大変希少価値の高いもので、シリング国内でも採掘されるのは稀なものらしい。

”男爵”と自ら名乗ったの犯行と、最初の獲物の希少価値の高さから、当時”男爵”は宝石コレクターなのではないかと推測された。

その年の犯行回数は、全部で十二回。翌年、翌々年は八回。その

翌年は六回。一昨年は五回。

そして昨年は、二回の犯行にとどまっている。

今年に入つての犯行は、今回の予告が初めてだが、いずれも予告状が届いてから十日後前後に犯行日が指定されており、貴金屬類や宝石の類を取り扱う宝石商、富豪たちが身辺警備を厚くし、各々対策をしているにも拘らず、予告された品はまんまと盗み出され、どこぞへと消えてしまう。

「希少価値の高い、珍しいものばかりを盗む。

では、盗んだ品はどうしている？」

盗んだものは、そう易々と転売できるものではない。

闇ルートを含む、ありとあらゆるルートが徹底的に捜査され、その捜査の過程で新たに発掘された闇ルートは膨大な量になった。

にも拘らず、”男爵”が盗み出した宝飾類の行方は知れないまま。一時は、シリング原産の宝石をあしらった宝飾類が狙われているのではと、捜査も絞り込まれたりしたんだが、盗まれたものの中には、シリング原産以外の鉱物を使ったものも数多くあつて、結局その説は否定された。」

宝飾品の入手ルートも、みなそれぞれ異なるが、いずれも友人から贈られたもの、賞や勲章として贈られたもの、持ち主は元より、贈り主それぞれの間にも然程深い接点はなく、”男爵”へ繋がる接点は、未だ見付かつていない。

世界中の然るべき機関が捜査にあたっているが、手がかりを何も掴めないまま、今に至る。

「これが男爵についての概要だ。」

頭の中に溢れるほど持っているのであろう”男爵”についての情報、大まかにまとめ終えた了が、組んでいた両手を解し、すぐに組み直した。

「”蒼い薔薇”のほかには、何が盗まれたの？」

「他にか」と言い、了が即座に答える。

「盗まれたものの中で、特に高価なもの、価値の高いものをいくつ

か上げるなら、フランスからスペイン王国の王室に贈られ、国立中央銀行に一時的に預けられていた”蝶のはばたき”というトータル五〇〇カラットのダイヤをあしらったブローチ、台湾の”故宮博物院”に展示されていた”落陽の光”というエメラルドの原石、日本からリトアニアへ交易友好の証しとして贈られ、”ヴィタウタス大公戦争博物館”に特別展示されていた”兵士の安堵”という時価数千万とも言われる鼈甲のネックレス…。」

そこまで聞いて、ユリが「ほえ…」と声を上げる。

「そのいずれのものにも、何の関わりを見つけれなかったって訳ね。」

「そういう事。」

モノ自体の政治的規模がでかければかいほど、モノの出所は掴み易い。

今のところ、それらのものに注目すべき共通点は、ないとされている。」

「でも、年々、犯行回数が減ってるのね。」

「減ってるね。」

ユリは何故だと思う？」

真っ直ぐにユリを見つめたまま了が問う。

「え、何故…。うーん…。」

向かい側のソファで世間話でも聞くような体勢で聞いていたユリは、問われて背筋を伸ばす。

自分が『盗む立場』だったとしたら、犯行回数が減るのは何故だろうと考える。そこには、何故盗むのか、という根本的な切欠が存在する。

欲しいから盗む。相手を困らせたいから盗む。

切欠をそれに絞ったとして、ならば回数が減る理由は…。

「盗むものがなくなって来たから？」

欲しいものがなくなったのかな…？」

「そうだな。」

さつきも、芳生さんが言っていたが、何か目的があって盗み回っているなら、その目的次第では、盗むものは、盗むほど少なくなっていく。

もちろん、無差別に盗み回っているのなら、『飽きた』という可能性だって否定出来ない。」

「うんうん。」

ユリが頷く。

了の言う『飽きた』が真実なら、だいぶ人間臭い容疑者だと思う。遺留品を残さない犯行の完璧さ、予告どおりに事を成し遂げるという完結さ、正体を掴ませないという完全さ、どれをとっても、有り得ないくらい機械的な気がする。ここにどんな感情があるか、臆気には感じるが表現出来ない。

「犯人像って、出来てるの？」

「出来てるよ。」

ユリの問いに、了がまた即座に答える。

「当ててみるか？」と挑戦的に言われて、ユリが腕組みをする。

「うーん…。」

嚴重な警備を掻い潜って、失敗ナシ。

運がいいのね…。」

と、ユリらしいといえばそれまでだが、少し見当違いな回答をする。

了が呆れた。

「…なに？」

「運がいいって言うのは、人物像として適切だと思うのか？」

可哀相なものでも見るような表情で、了が訊ねた。

「うん」と、ユリが何の迷いもなく答えると、匠が隣で笑った。

了は首をがくりと落とした。

そして肩を揺らして少し笑った後、はあと溜め息を吐いて、ユリを見上げる。「それだけか？」

「計画実行能力は、ズバ抜けて高いわよね。」

「それは同意するところだな。」

やや捻くれた回答をする了に、ユリが「素直じゃないわね」とふくれる。

「盗みの手口は詳しくは知らないけど、どの道、盗み出せてるなら手段自体は問題ではない気がする。」

あ、という事は、目的のためには手段を選ばない人物なのかな…。

┌

最後に付け加えたユリの一言に、了が一瞬ぴくりと眉を顰めた。

本当に一瞬の事だったので、見間違いかと思った。

「何？」と問いたかったが、了の視線があまりに真っ直ぐにユリを射ていて、問う事自体躊躇われた。

眉を顰めたその一瞬の目付きは、今まで見たどの了の目付きより鋭かった、ような気がする。

それでいて、瞳は光がすうっと消えてしまったようにマツトで、感情自体はなかった、ような気がする。

だがそれも一瞬の事で、それと認識する前に何もかもが元に戻ってしまうから、気のせいか見間違いかと思う外なく、ユリはこの日何度目か、戸惑いを覚えた。

ふと気付いたときに感じる、そして一瞬で消えてしまう、了の全体から溢れる得体の知れない何か。

それは、見知らぬ人物と対峙しているときに感じる不安定さとは比べ物にならないくらい、ユリの心を不条理に揺さぶる。

意識的に造る表情は、溢れ出てしまう真の感情を隠すためのものなのかも知れない。

不意に、了が思いを巡らすユリの顔を覗き込んだ。

「目を開けたまま寝るのは特技なのか？」

「寝てないわよ！」

弄られ、つい大声が出る。

ユリの反応にニヤリと笑って、了はまた「それだけか？」と聞いた。

「え…、ああ、うん。

あとはね…。」

ユリは最後に、何となしに思ったことを語った。

「話を聞いていて、一番強く思う事って、『何かを恨んでいる』ような気がするっていうところかな…。」

口に出して、思った。”男爵”の犯行が機械的だと感じた部分に付随する感情が『憎しみ』なら、じっくりくると。

それが何故しつくり来るのかは説明出来ない。

だが、ユリの中でそうであるなら、納得が行った。

興味深そうに、「ほう？」と了が言う。

「叔父さんがさっき、何か目的があって盗み回ってるんじゃないかって言ってたけど、そうだとするなら、転売目的か、コレクションのためかっていう発想が自然だとは思っただけ…。」

でもそれにしては、警備が厳重な場所を多く狙ってるし、きっと何をおいても『これが欲しい』と思って盗んでる感じなの。」

相変わらず、”男爵”の犯行の詳細は把握していない。

だが、今までに盗み取ったものの種別や、存在価値、所有者の世間的な地位から弾き出される難易度は、判り易いほど高い。

わざわざそれらを選ぶ理由は知れないが、そこにある感情は、汲み取る事が出来るかも知れない。

「人がそこまで気持ちを入れて行動する時って、ポジティブな想いより、むしろネガティブな想いが強いときだと思うのよ…。」

頭の中の不確定要素が、言葉にする事で形になっていくのが解った。

これは思い込みというのとは違う、強いて言うなら、直感のようなものだ。

ユリの言葉に、了が呆然とした。

「……………」

「…何よ？」

「まともな事を言ったんで、びつくりした。」

「ちょ！」

どういう意味よ！」

テーブルを叩いて立ち上がったユリに、匠が手を叩いて大笑いした。

呆然とし終えたのか、了がソファの背凭れにぐうっと深く凭れ掛かった。

傍らに置かれたクッションに預けた腕で頬杖をついて、脚を大きく広げて仰け反り座る姿は、とてもふてぶてしかった。

「実行力が高いことは、今までの”実績”で否定の予知はない。」
了が静かに言う。

「運がいい…、というのはさておき、」

「さておかないですよ。」

突っ込むユリをちらりと見て、ニヤリと笑う。

「なるほど、まあ、君らしいと言えば君らしい。」

「だな。」と匠も同意して頷く。

「何よ。」

情報が少なすぎるのよ…。」

そう言っただけユリに苦笑して、了は窓の外に目をやる。

表情はすぐに、真顔に戻った。

「何かを恨んでいるっていうのは、気になるな…。」

「でしょ？」

得意げに、ユリが身を乗り出した。

「とはいえ、何に恨みを抱いているかは、本人以外、神のみぞ知るところか…。」

可能性に過ぎないしな。」

「警察では、どんな犯人だと思ってるの？」

「ん？ …ああ…。」

ユリに聞かれて、了が口籠った。

そしてまた前屈みの姿勢に戻し、今度は組んだ両手の指を遊ばせながら、

「警察：というか、『男爵』を追う公的組織』ってのがあってな、そこでの見解が、警察でも取り入れられている訳だが。」

「そんな組織があるの？」

「まあ、捜査本部のようなものだという解釈で問題ないが…。」

そこでの見解は、手口や、予告状の筆跡から、『幼少の頃から高度な教育を受けた形跡が見られる一方、文体に僅かながら幼い性格が垣間見える』。

つまり、どこことなく純粋な一面を持ち合わせ、センシティブな人物である…と。」

遊ばせている指を見つめながら、了が淡々と説明をする。

「せんしていぶ…。」

「敏感、細やかな、繊細な、という意味だが、まあ要は、神経質とも取れる一面を持っているようだ、と。」

頷くユリ。

「最初の犯行、つまり七年前の三月七日から一年は、一ヶ月に一度のペースで犯行に及んでいるため、犯行が終わってから次の犯行までの間、最長一ヶ月は次の犯行を行う国へ入国し、生活している可能性が高いとの予測から、入国管理、空港のセキュリティチェックを含め、各国の情報を照合した。

だが不思議な事に、期間をどれだけ長くしても短くしても、犯行を行う国を巡っている人物は存在しない。

偽装パスポートの使用の可能性もあるが、該当する記録がない。」

了の指が遊ぶのを止めた。

「あまりに当て嵌まるピースがないために、一時は模倣犯、もしくは複数犯説まで浮上したが、今は同一犯説に落ち着いている。」

「なぜ？」

「大抵の犯行は、犯行予告があるために、選任捜査員だのなんだの、大量の目撃者がいる訳だ。

中には、予告があるたびに現場へ駆けつける他国の捜査員もいる。そんな人間の目の前で、あいつはいつも同じような身のこなしで

現れ、獲物を奪って消えていく。

犯罪成功率の高さから、捜査員や関係者の中にスパイや、変装された者がいるかも知れないと調べるが、なんの痕跡も見つけることが出来ない。」

「訓練すれば、同じように動いたり、同じ体型になったりする事も出来るんじゃない？」

ユリの問いに、「人間、そこまで便利には出来ていないものだ。」と了が答える。

「でもさ、たまに会う人の体型とか、そこまで明確に覚えてるもの？」

確かにそうなのだ。

毎日見ている相手ならともかく、ここ最近ともなれば、それこそ数ヶ月ぶりの目撃になるはずだ。印象より痩せているとか、太っているとか、こんなに背が高かったとか、普段でも再会に伴いふと疑問に思ふ事項は沢山ある。

犯罪者なのだから、写真資料くらいはあるだろう。

だがそれだって、現場でその写真と本人を見比べている人間がいるのかと問われれば、やはりいいのだろうと思う。

なら、『いつも同じように』という印象は、ずいぶん曖昧なものだ。

「お前の言いたい事はよく解る。

ただ、単独犯が複数犯へ変わったところで、結局手がかりがない状況は変わらないんだ…。

結局この七年間、何一つ手がかりを得られないまま、犯行だけが繰り返されている。

警備システムや、警備体制が進歩しているにも拘らず、ヤツには追いつけないでいる。」

「屈辱的だろうね。」

匠が呟くと、了が下を向いたまま苦悶の表情を浮かべる。

「ええ。」

一度は、直に取り逃がしているという。

その悔しさは、計り知れない。

「ふうん…。」

で、さっきのタイピンか…。」

ユリが言つと、了がやつと顔を上げた。

「ああ。」

最初で最後の手がかりかもしれない。

慎重に、確実にやりたい。」

珍しく、了が感情で物をはつきりと言つた、と思つた。

そして、その瞳。ユリを見ているのに、意識がユリにないときの目。

また、前を真つ直ぐに見、ユリなど手の届かないところに心を持つていつてしまった目だ。

何を見ているのか。何を掴もうとしているのか、どこに心を持つて行ってしまうのか。

何故ここまで、『男爵』を追つて来たのか』。

執着とは違うが、『男爵』に対し、執念のようなものを感じる。

それが悔しさなのか、悔しさゆえの執念なのか、ユリには判らない。

暫し見つめ合つて、ユリがぐつと唇を噛む。

唐突に、館長室のドアが開いた。

「失礼します。」

蕪木さん。」

声がしてドアに目をやると、いつも見かける警備員が立っていた。

「はい」と、了が返事をする。

「北代警部補が呼びです。」

「ああ、すぐ行きます。」

警備員は、了の回答を聞いて一礼をし、すぐにドアを閉めた。

立ち上がりながら、「芳生さんも…」と言つ了に、匠が、

「僕はここでクレアちゃんと館長の戻りを待つ事にするよ。」

必要があつたら呼んでくれ。

基本的に、ここでの行動は、ユリに任せようと思っているんだ。」
と、ユリを見た。

「え!？」

初日にも同じ事を言われたが、本気だったのかとユリが驚く。

「出来るね、ユリ?」

いつもと同じ笑顔だが、声は普段よりトーンを落として、真剣さが漂う。

ここまで来たのだ。やらない訳にいかない。

「うん! がんばる!」

拳を握り締め、返事をするユリに、了が一言呟いた。

「心配だ...」

「なっ...」

ユリが反論しようとしたのを振り返ると、了は早足で館長室を出て行ってしまった。

むくれたままドアを見つめるユリに、匠はくすりと笑った後、「ユリ。」と呼んだ。

「蕪木クンはね、口ではああ言っても、いつもお前の事を心配してフォローしてくれてるんだよ。」

「そうかしら...」

そう言いながら、素直じゃないのは自分も同じだと思う。

何となく、常に自分を視界の隅においてくれていることは、ユリも気付いている。

「そのうち判るさ。」

匠が微笑んだ。

あまりに優しく微笑むので、何かあるのかと勘繰る。

ユリが困惑したまま匠を見ていると、後ろから了の声がした。

「行かないのか?」

振り返ると、了が不機嫌な顔をドアの隙間から覗かせている。

「行く! ちょっと待って!」

ユリが踵を返すと、その背中に「頼んだよ」と匠が言った。
「うん！」

振り返し、にこりと笑って返事をする、ユリは了に駆け寄った。
了がドアをもう少しだけ開け、ユリに出るよう促す。

ユリが出ると、後ろ手にドアを閉め、了は早足で職員通路を歩き出した。ユリが追う。

追いながら、地下でしたのと同じように、了の手を見下ろす。

小指の擦り傷が、また目に入る。

思いの外、細く整った指に、手入れされているような綺麗な爪。
その爪の間に、黒い汚れを見付けた。

インクだろうか。

思いながら、了を見上げる。

不意に、了がユリに振り返った。ちらりと見、また前を向く。

そう、そんな感じ、とユリは思う。

ユリを視界の隅に入れる行動が、正に、今の仕草だ。

守られているのだと思う。

何故かは解らないが。

（あ、だからか…。）

ユリが、また小指を見る。

擦り傷が気になったのは、守られていると無意識に解っていたからだ。

ユリを守ろうとしている指に傷がある。

それが関係あるか否かは解らないが、傷がある事が不安なのだ。

それは、守りきってくれないであろうという不安ではなく、守る事で、自己犠牲を伴うのではないかという不安だった。

逸れてはいけない、追いつかなくては、と思ったのはきっと、守るという無言の姿勢からも、それを感じ取ったからなのだと思う。

逸れてはいけないなら、常に傍にいて、どこかに行ってしまうなように掴んでいるしか方法が見付からない。

ユリは了のジャケットの背中の裾を掴んだ。

了が驚いて振り返る。

下を向いたまま裾を掴むユリに、了は小さく首を傾げたあと、ふっと困ったような苦笑をした。

4月30日 7

二階へ上がると、私服警官と思しき人間が、朝より人数を増して忙しく動き回っていた。

隣に立っていた了が、北代を見つけ、声をかける。

「北代警部補。」

「蕪木。」

遺留品と思しきものは、見付かりそうもないな。」

一通りの現場の搜索は終わったのだろう。北代が歩み寄りながら言った。

「じゃあ、タイピンが唯一の手がかりか…。」

了が腕組みをして考え込んだ。

「菅野館長も、まだ連絡が取れないらしい。

予定を把握している事務員に聞いたら、今日は外出・面会に限らず、予定は入っていないそうだ。」

「そうですか…。」

（菅野館長、どこ行っちゃったんだろう…。）

如何なる私用があれど、こういった施設の責任者ともなれば、一報は入れるだろうと思う。しかし、菅野からの連絡はなく、昨日美術館を出て以降の行動を知る者もない。

「菅野館長が”男爵”の関係者である可能性もある。

監視映像記録の人影の件もある。

色々な状況を鑑みて、然るべき手配が必要なんじゃないのかね？」

北代が、じろりと了を睨み上げた。

了は口を噤んだまま、北代から視線を逸らす。

何故だろうか。先ほどから了に、いつもの歯切れのよさが無い…。

「菅野館長の事は…。」

暫く様子を見させてください。」

言葉を選んでいるのだろうか、ゆっくりと言った了に、北代が畳み

掛ける。

「カフスが落ちていた事、もしかすると…。」

「それは…。」

詰め寄られ、柄になく了がたじろぐ。

万が一に、菅野の身に何か起こったのであれば…。

そこに”男爵”が関係しているのであれば…。

否、菅野こそが”男爵”である可能性も、状況からは否定出来ない。

そうならば、捜査は然るべき方面へ、急いで転向しなければならぬ。

「どうするね？」

もう一度圧され、了が俯いたまま頷いた。

「判りました…。」

手配の準備をします。」

満足げにふんぞり返って、「よろしく頼むよ。」と言い、北代はふいと展示室の奥へ行ってしまった。

残された了は、身動きせず、俯いて立ったままだった。

顔には、悔しさが滲み出ている。

「大丈夫…？」

堪らず、声をかける。

こんなとき、いつもの了なら声をかけられるだけ屈辱だと見栄を張るだろう。

でも、今はそんな事連想も出来ないくらい、了は全てのものが落ちてしまったように立ち尽くしている。

ユリに声をかけられて、了はふと顔を上げた。

顔には、もう苦笑いの表情が浮かんでいる。

「君に心配されると、余計情けなくなる。」

「失礼ね！」

せっかく気を遣ったのに、とむくれるユリに、了が吹き出した。
「なっ…。」

何がおかしいのか吹き出した了に言い返そうとするが、同時に、ユリはどきりともしている。

初めて、嫌味なく笑った…。

今まで、どこかしらで裏に秘めたものがあつたような笑顔しかなかった了が、純粹に笑つたのだ。

本当の了は、どれなのだろう…。

ユリが怪訝な顔で了を見上げる。

すると、了を押さえて息を整え、了は真顔に戻つた。

「すまんすまん。」

こんな事をしている場合じゃないな。」

「コロコロ変わりすぎよ…。」

ユリが言つと、「君ほどじゃないよ」と一言嫌味をいい、北代の元へ向かつて歩いて行つた。

その後姿を眺めながら、ユリは再度考える。

一体どれが、本当の了なのだろう、と。

何かを真つ直ぐに見つめ、時折感情の一切を消し去る。不機嫌を装い、嫌味を言うくせに、ユリの手を振り払おうともせず、不意に笑う。

実体のない、雲のような不安定さを醸し出しながらも、そこにいるという安心感をいつの間にか与えられた。

ユリは解らない事に苛立ちを覚え、ぎゅっと拳を握つた。

そして、また逸れてはいけないと思い、了の後を追う。

しかし、一步踏み出した瞬間、中庭からとてつもない悲鳴が聞こえた。

「！ 何！？」

辺りが一斉にどよめく。

キョロキョロと見回すユリに、了が叫んだ。

「ユリ！ 中庭へ！」

「えっ、中庭！？ って、もしかしてクレア！？」

そうだ、中庭には、クレアがいる。

思うが早いか、ユリが走り出す。

下りのエスカレータを駆け下り、エントランスの回転ドアをぐいと押すと、高く吹き上がった噴水の水飛沫が風に吹かれ、少し顔にかかった。

西に傾いた陽は強く、じり、と肌を焼いた。

噴水を回り込み、広い中庭を見回す。

クレアは……いた。

クレアは、中庭の真ん中の花壇に囲まれたベンチの前で、美術館を見、脅えていた。

「クレア――！」

駆け寄り、肩を掴む。

「あ……ああ……ああ……おじさま……。」

「え？」

クレアの言葉に、ユリが、クレアと視線を揃える。

美術館。否、もう少し上だ。

ユリが慎重に視線を動かす。

すると、六角形の塔の上、緑色の屋根に、違和感のある”ものがあつた。

「！？」

目を凝らす。

段々と焦点が合つていき、それは”もの”ではなく”人”だと気付く。

「菅野館長――！！？」

どうしてあんなところに――！！

紛れもなく、それは菅野だった。

仰向けに、そして頭を地面に向け、屋根の上に、まるで投げ捨てられたみたいに倒れていた。

眼鏡だろうか、きらりと光っている。

重力によって腕は地面に向かって下がって、今にもずり落ちそう

だ。

ユリは呆然とその光景に見入ってしまった。

思考が止まってしまっていた。

ドサっ、と、後ろで崩れ落ちた音がする。

はっとして振り返ると、クレアが倒れている。

「クレア――！」

慌てて抱き起こすが、クレアの顔面は蒼白で、呼吸も消えそうなくらい小さい。

「クレアしっかり！」

しっかりして――！」

言いながら、ユリ自身も腰が抜けている事に気付く。

どうしよう、どうしよう……。

気ばかりが焦って、次にどうすべきか解らない。

ふと、複数人が駆け寄ってくる足音が聞こえた。

目をやると、館内で見かけた私服警官が数人、こちらへ走って来ていた。異変に気付き、駆けつけたのだろう。

ユリの元まで来た警官は、クレアの体を抱き上げ、別の警官がユリを支え起こした。

立ち上がりながら屋根を見ると、制服を着た警官が何人か屋根に上がっていた。

菅野の体が滑り落ちないように、体勢を変えている。

「ハシゴ!? ダメだろ――！」

と声がする。

ユリの体を支えていた警官が、肩を叩いて館内へ戻るよう促した。ユリは何も考えられず、ただ黙って従った。

4月30日 8

職員通路や館長室とは反対側の、ショップの隣にある急病人専用の医務室にクレアは運ばれ、ユリは館長室へ戻された。

少し経って、救急車と消防車のサイレンが聞こえた。がたがたと慌しく館内がざわめき、すぐに再びサイレンが鳴った。

恐らく、菅野を搬送するのだろう。

館内のひんやりとした空気で頭が冴えたのか、さつきよりは何かを考えることが出来る状態になった。だが、何を考えていいのか、そこまで思考が巡らない。

ぼんやりと窓を眺める。

中庭を臨む喫茶店と違い、その裏側にある館長室からは、目隠しのために深く植えられた樹木しか見えない。

もう陽も当たらない館長室は、照明を点けないと足元ですら見難いほどに薄暗い。

後ろで、ドアが開いた。

振り向く気力が湧かず、ユリは窓の外を眺めたまま、歩み寄る足音を聞いていた。

「疲れたか？」

声をかけられた。

振り向かなくても判る。

了だ。

そう思った途端、顔が見たくなって声の方を見る。

了は、ソファに座るユリの前で、ソファのサイドに両腕を置いてしゃがみこんで、ユリを見上げた。

暗がりで見ると了の顔は、普段にも増して丹精で、そして少し、やつれているようにも見える。

「…ううん、大丈夫…。」

クレアの様子、どう？」

「大丈夫、気を失ってるだけだ。

心拍数も安定してるらしいし、病院には連れて行かなくても大丈夫そうだ。

彼女さえよければ、今日も芳生さんちに泊まってもらうつもりだと、芳生さんが言ってた。

大使も相変わらず忙しいそうだから。」

了の声は、とても穏やかに柔らかく、まるで内緒話をするように、囁くように発せられた。

「うん…。」

ねえ、菅野館長は…？」

ユリの問いに、了が「ああ」と考え込んだ。

その様子に、ユリが慌てる。

「ま、まさか！？」

「ああ、いや、すまん。考え込むクセが…。」

首を振って苦笑した。

「腹部に鬱血の痕があったから、恐らく殴られて気絶してしまったんだろう。腕のあちこちに擦り傷があったらしいから、気絶したあと、屋根上に運ばれたんだろうって、北代が言ってた。

まだ意識が戻らないんで、救急車を呼んで、病院へ連れて行ってもらった。

隊員の話だと、命に別状はないだろうって。」

「そう…。」

私が拾ったカフス、館長を屋根上に運んだときに、引つかかって落ちたのね…きつと…。」

「だろうな。」

詳細は異なるものの、大凡のユリの見解は間違っていなかった。

ユリも了も、どこか気力が伴わないまま、伏目がちに見つめ合い、小さな声で言葉を交わす。

「近くにタイピンが落ちていた事から推測するに、恐らく運んだのは”男爵”と見ていいだろう。」

「…なぜ…」

ユリが呟いた。

「ん？」

「なぜ、館長がそんな目に？」

ユリの問いに、了が困った顔をした。

「だって、”男爵”のタイピンが落ちていて、その夜に館長がそんな目に遭ったって事は、”男爵”と鉢合わせてる訳でしょ？」

でも、予告日まであと四日あるし、”紅い泪”だってまだ搬入されてないし、おかしいじゃない。

”男爵”じゃないとしたら、タイピンはどうして落ちたの？

誰が持ってきたの…？」

繰り出されるユリの疑問に、了が口を結んだ。

「蕪木…さんは、どう思ってるの…？」

聞くと、了はさらに困った顔をした。

「…あ…」

はっとして、ユリも呼吸を整える。

「私、うっかり、ぼろっと言っちゃうかも…。

やっぱりいいよ。

大事な事だもん…。」

立场上、言えない事は山ほどあるだろう。

了について周っているから、時折捜査の確信に触れる事はある。

だが、それ単体では、その情報は何の価値もない。

ましてや、探偵になり立てのユリに、その情報を効果的に使う術などない。

しかし、そうと解っていても、何人にも教えることの出来ない情報はある。

こういうときも、了が遠くに思えて仕方がない。

俯くユリに、了が微笑んだ。

「まあ、いいさ。」

その笑みに、ユリは息を飲む。

（あ、笑った…）

こんな風に笑うんだ…）

暗がりでも濃淡の濃くなった陰影の所為で、了の笑顔はとても大人っぽく見えた。

否、そもそも六歳以上年上の人だ。大人ではあろう。

だが、今見える大人っぽさは、言うなれば、包容力、と置き換える事が出来そうだった。

了はユリをじっと見上げたまま、ソファのサイドに置いた手を躊躇いがちに浮かせ、暫し彷徨わせた後、再び置いた。

何かに触れようとして、思い留まったようだった。

置かれた手は、ぎゅっと握られて、再び彷徨わないよう自粛しているように見える。

「正直に言つと…。」

了がゆっくり言った。

「オレは、館長は”男爵”の関係者だと思ってる。」

それは先程、北代に詰め寄られて躊躇っていた事ではないのか。

「え？」

「最初の日、飛澤さんに会った時のこと、覚えてるか？」

「うん。」

「あのとき、俺は飛澤さんに、『館長が俺たちの事を何て言っていたか』聞いた。」

「聞いてた。」ユリが頷く。

「飛澤さんは、俺たちを『消防法について調べに来た人』と聞いたと言っていた。」

予告状の事も知らなかった。」

「でも、それって…。」

余計な騒ぎにしたいくないという、菅野の本音もあったのではないのか…。

「俺は気になって、何となく鎌をかけてみた。」

飛澤と話を終え、館長室に戻ったときのことだ。

――スキさえつかねければ、小部屋については充分過ぎる設備です
ね。

――些か神経質すぎるとお思いでしょうね。

――いえ。

むしろ、あれくらいないと、足りないでしょうね。

――あのシステムと小部屋を導入して、やっとあの”男爵”と〇の
地点で並んだ、という気分ですよ…。

あの”男爵”に狙われると思うと、どうしても神経過敏になっ
てしましましてね…。

――なるほどね。

はつきりと覚えている。

「…フツ―の応対に思えたけど…」

「問題は、あそこまで神経を使ってセキュリティに拘っている割
りに、飛澤さんに真実を伝えていないという点だ。

どうしても”男爵”を阻止したいなら、出来うる限り警備関係の
人間には情報を伝えておくべきだ。」

「内通者^{スパイ}が入り込んでたら大変だと思っただんじやないの？」
そついう心配もするかもしれない。

「そんな心配をするなら、そもそも君たちの立ち入りを許可する
ほうが間違ってる。

君たちがどうの、ではなく、内通者を疑うなら、普通に考えれば
まず真つ先に、新しく外部から入ってくる人間を疑うはずだ。」

答える了に、尚もユリは問う。

「その逆を突いたってというのは？」

普段出入りしてる人の中に内通者がいたら判らないかも知れない
から…。」

「外部の人間が、普段一緒にいない人物が内通者かどうか、どう見
分けるんだ？」

「知らない人の方が、怪しい動きを見つけてくれたり、色々細かいところまで見てくれるって思っんじゃない？」

「普段その人がそういう動きをしているか、部外者が見極めるのは難しい。」

何に対しても疑ってかかってくれるという点では、ユリの意見も道理が通るが、内部の者が疑わしいなら、同じくらい外部の者も疑わしいはずだ。」

問えば問うほど、自分の言い分の方が有り得ないと思えてくる。

確かに、普段一緒にいる人間より、外部から入ってくる人間の方が疑わしいだろう。

内通者の可能性を見極めたいなら、館内に入る人間は極力顔見知りに入れておいた方が楽だ。

その逆を突く、と言う事はつまり、それだけスキが生じると言う事に他ならない。

あの”小部屋”を導入するくらい神経質になっているのなら、完全に外部の人間の出入りは避けたいと思うのが、普通の人間の考えではないのか…。

ユリが納得した顔を見ると、了が続けた。

「そして、何より、館長の発言だ。」

——あのシステムと小部屋を導入して、やっとあの”男爵”と〇の地点で並んだ、という気分ですよ…。

「”男爵”は凄いつて、考えてるって事でしょ…？」

「確かにそうだろう。
だが考えてもみる。」

あの”小部屋”を導入したのは、予告が届くずっと以前、今年の初めだ。」

「あ…。」

ユリは小さく驚く。

「オレがああ発言をするなら、前以て予告が来ることが確実に判っていた時だ。」

事の順番を考慮すれば、あの場での発言は精々、『導入しておいてよかった』とか、その程度に留まると思う。」

弱っている思考で考えても、その言い分は確かにそうかもしれない。

「え、でも、だって……。」

例え予め”シリング展示会”を開催すると決まっていたとしても、それで展示するものを盗みに”男爵”が現れると判っていた場合にしか、そのセリフは言えないかも知れない。

なら何故、菅野は”男爵”が現れると考えたのか……。

”男爵”について、了すらも知らない何かを知っているのか。

ユリが戸惑って黙り込んでいると、了がふうと息を吐いた。

「ま、飽く迄も推測に過ぎない。」

”男爵”を捕まえれば、全部判る事だ。」

そう言って、膝に置いたユリの手の上に、了が自分の手を乗せた。その手は冷たく、大きく、優しい。

「今は取り敢えず、捜査は警察に任せて、休んでくれ。」

「……大丈夫、疲れてない……。」

ユリが首を振ると、了がまた微笑んだ。

「そう思ってるだけだ。」

自覚している以上に疲れてるはずだ。

ゆっくり休んでくれ。

芳生さんには了解を取ってる。

クレアの目が覚めたら、家まで一緒に送る。」

そう言って、了がぽん、とユリの手を叩いた。

「……うん……」と、素直に従うと、乗せた了の親指が、ユリの手の手甲を撫でた。

「俺はまだ仕事があるから、もう少し待っていてくれ。」

「……解った。」

ユリが頷くと、了は「じゃあ、またあとで。」と言って立ち上がり、館長室を出て行った。

その後姿を見つめながら、手の甲を摩る。

まだ了の手の感覚が残っていて、立ち去った後も傍にいてくれるような錯覚を覚える。

ユリは小さく溜め息をついて、ソファの背凭れに寄りかかり、手を掲げる。

握られた感覚だけが残る手の甲には、当然何もない。

その甲を額にやると、ふわりと何かの香りがした。

「ん…。この香り…。」

どこかで嗅いだことのある香りだ。

どこで、だろう…。

花とも柑橘果実とも蜂蜜とも似た香り。

記憶を辿るが、解らない。

（あいつ、何かつけてるのかな…。）

ユリは目を閉じ、そのまま暫し浅い眠りに入った。

4月30日 9

手の甲が何かにぶつかった。

重たいまぶたを持ち上げると、額に当てた手が落ちて、ソファの縁に当たっていた。

「…。」

眠ってしまったのか。

ユリは、真正面の壁にかかった時計を見る。

中庭での一件からこの館長室へ戻り、了と話をし終わって、まだ十分程しか経っていない。

なのに体はぐったりと重く、姿勢を正すのだけで一苦勞だった。了が仕事が終わったら、クレアと一緒に家まで送ってくれると言っていた。

ここにいたほうがいいのだろうか。

しかし、じっとしていると、何だか気が滅入る。

「動き回ったほうが気が楽になるかな…？」

言いながら、腰を上げる。

うん、と背伸びをすると、コキコキと背骨が鳴った。

「どこに行こう…。」

動き回ると言っても、館内は菅野の事件や”男爵”の捜査をしている真つ最中だ。

どうしようかと部屋を見回すと、転寝の前よりさらに室内は薄暗くなっていた。

夕焼け色の空が、窓から見える樹木の間から覗いている。寝起きのせいかな、少し肌寒い。

ふと、飛澤の顔が頭を過ぎった。

「飛澤さんに会いに行こう。」

思い立ったら何とやら。

ユリはもう一度背伸びをして、館長室を出た。

館長室の脇にある職員事務所の入り口と並ぶ地下への階段を下る。青白い小さな電球が、階段を弱弱しく照らす。

無意識に階段を下って、地下通路にたどり着いた。

階段と同じように青白い明かりに照らされた通路は、つい数時間前に通ったときは全く違う場所に思えた。

一歩歩くたび、カツンと足音が響く。その音がとても大きくて、自然と歩みが慎重になる。

ゆっくりゆっくり廊下を行き、何度か角を曲がると、見慣れた鉄扉が見えた。

扉は、何故かストッパーが引つかかって、半開きになっていた。飛澤がいる。

不思議とそう確信して、ユリは思いっきり扉を開けた。

「飛澤さんっ！」

しかし予想に反して、セキュリティ・ルームには誰の姿もなかった。

「……………あれ…？」

誰もいないのかな…。

っていうか、ここに誰もいないの、おかしくない？」

「どうされました？」

不意に後ろから声をかけられ、ユリは「うわー！」と大声を上げた。

振り向くと、いつもの警備員がいた。

「あ…、け…警備員さん…」

ビクリした…。」

胸に手を当てるユリに、警備員が済まなそうな顔をする。

「申し訳ありません。」

どうされました？ 迷子ですか？」

「えっ…いえっ、その…」

この主任さんの、飛澤さんに会いに来たんですけど…。」
もじもじと答えるユリに、警備員が微笑んだ。

「飛澤さんなら、本社に呼び出されて、暫く外出すると言っていましたよ。」

「ああ、そうだったんですか。」

中に誰もいなかったから、なんでだろうと思って…。」

ユリはまだ落ち着かなく、よく解らない受け答えをする。

「今、臨時の見回りをしているんですよ。」

地下を周るだけなので、開けっ放しにしまつて…。」

警備員が苦笑した。

「そうですか。ごめんなさい、お仕事中。」

では…。」

ユリも愛想笑いをして、頭を下げ、元来た道を、今度は早足で戻った。行きはあんなに気になった足音も、まったく気にならないほど、焦っていた。

やがて地上階への階段にたどり着き、手摺りに掴まり頂垂れる。

「…あー、ビックリした…。」

飛澤さんいないんじゃない、ここにいてもしょうがないか…。」

ふうと溜め息をついて、階段を昇る。

職員通路へ上がり、エントランスへ向かう。

ロビーにはちらほらと警官の姿が見える。

やはりまだ捜査中のようなだった。

警官を眺めながら、エスカレータに歩み寄る。エスカレータは何故か止まっていた。館内は一階一階天井が高いため、エスカレータも普段見かけるものより長い。

ユリはエスカレータを昇り始めた。

一段昇るたびに、二階の様子がはっきりとしていく。

複数人の話し声と、重いブーツが歩き回るような音がひっきりなしに聞こえる。

あと数段残すところまで昇ったところで、ユリは手摺りから二階を覗いた。

こちらはまだまだ捜査中といったところで、ユリごときがウロウ

口出来る状態ではなさそうだ。

ユリは三階へ向かう事にした。

三階を覗くと、二階とは一転、人の気配が全く感じられなかった。二階のがやつきは聞こえるものの、三階のフロアに入ってしまうと、歩き回るのを躊躇うほど静かだった。

見回すと、昨日までラウンジの入り口にかかっていたブルーシートが外れていることに気付いた。

そういえば、昨日、了が『明日にはシートが取れるらしい』と言っていた。

また響いてしまう足音に気をつけながら、ユリはラウンジへ向かった。

そしてまるで悪戯中の子供のように、そっと中を覗く。と、その瞬間、ドキリと心臓が止まりかけた。

西日が真っ直ぐ差し込む窓辺のカウンター席に、了の姿が見えたのだ。

了は背凭れの低い、脚の長い丸椅子に腰掛け、じっと何かを見ている。

カウンターには何かの資料だろうか、紙が無造作に広げられている。

（あいつ…仕事中かな…。）

ユリは息を潜めて、了の横顔を見つめた。

西日の逆行のせいではつきりとは見えないものの、その表情は何かに想い耽っているように見える。

（謎だなあ…やっぱり…。）

警察の人とかに『さん』付けて呼ばれたり、北代警部補に強く出なかったり、”男爵”の事に詳しかったり…。

でもああやって書類見てる姿、いつものあいつらしくなくて、不思議…。）

憎まれ口と嫌味の塊は、時折、優しい微笑と思いつめたような表情を見せる。

ユリは、了について何も知らない。

知りたいと強く思っているわけではないが、やはりユリの中の了らしさが見えないと、不安になる。

ユリは、了が手元で何かを弄っているのに気付いた。

ちらちらと、西日を受けて光るそれは、ペンダント型のロケットのようだった。

改めて見れば、了の視線は書類ではなく、ロケットに注がれていた。

（意外……。アイツがロケットなんて。）

わざわざロケットを持つのだ。当然、中には写真が入っているのだろう。

ユリがそう考えた刹那、了が突然顔を歪ませ、カウンターに額を当てて蹲った。

肩越しに見える横顔が、哀しみを必死に堪えている。目はまるで涙を抑えるようにきつく閉じられ、ロケットを弄っていた手は、ぎゅっと握り締められ、微かに震えていた。

ユリの鼓動が早くなった。

また知らない顔を見た。

そして、それはひよつとすると、見てはいけない顔だったかも知れない。

あれほどまでに了を哀しませるあのロケットは、一体なんだろう……。

知りたい。が、ユリにその権利はないように思えた。

堪らずユリが目を背けると、携帯の着信音が鳴った。了が素早く反応し、ジーンズの後ろポケットに手をつ込み、携帯を取り出す。「蕪木です。……はい……はい……いえ、大丈夫です……そうですか、すみません。」

……俺としては……そうしたいのは山々なんだけど、という感じです……。」

口ぶりから、相手は了の目上のようなのだ。

声に、普段の生意気さが無い。

「私生活は関係ないでしょう。」

…まあ、はい。

慎重に行きたいです。彼女もいますし…。」

（彼女？ やっぱり、”彼女”…かな？）

恋人を指すのだろうか。

（あ、さっきのロケット、彼女の写真でも入ってた…？）

でも、ならば何故、あんな顔をする…？

ユリが邪推に近い思考をめぐらすと、了が突然慌てた。

「いや、そういう意味じゃなくてっ。」

ちよっ！ 違いますよ！」

電話口の相手も、同じような想像をしたようだ。

（珍しい…あいつが慌ててる。

照れてる…のかな…？）

そう思いつつ、ユリは何故か寂しくなって、覗くのを止めた。

と同時に、こちらも何故か、怒りが込み上げる。

くるりと回って、入り口の壁に寄りかかり、了の声を聞く。

「いえ、今日は登庁予定はないです。このまま帰ります。

………もういいです…はい。」

そろそろ話を終えそうな中、了が「あつ、本部長」と相手を引き

止めた。

ユリは思わずラウンジ内のに視線を戻す。

（”本部長”う…？）

聞きなれない単語に眉を顰める。

”本部長”とは、噂の高遠の事か？

ユリが考えながら、了の話も聞き続ける。

「菅野の過去、その後、何か出ましたか？」

（お…？？ 菅野館長の過去…？）

了は菅野が”男爵”の関係者だと考えていると言っていた。

だから調べているのは当然としても…。

今、何故呼び捨てにしたのだ…？

「はい……はい……ああ……なるほどな。

……いえ、まだ……それとこれとは、まだ繋がらないので……。」
納得したり、否定したり、忙しい。

相手の言葉も聞けないと、まったく会話の内容がつかめない。
盗み聞きするだけ無駄に思えてきた、そのとき。

「いえ、クレア・バークレイの件は、保留でお願いします。

昔の話過ぎますから……。」

（クレアの事も調べてる……？ どういうこと……？？）

ユリの心臓が、再び鼓動を早めた。

（どうしよう……）

聞いちゃいけない事、聞いちゃったのかな……。）

菅野とともに、了がクレアについて調べている。

”昔過ぎる事”について。

まさか、了はクレアまで”男爵”と繋がりと考えているの
ではなかるうか……？

「……ダメだ……」

私じゃ解らない……。」

ユリは首を振った。

解るはずがない。

菅野の事も、クレアの事も、了の事だって、出会ってまだ幾日も
経っていないのだから、知らなくて当然だ。

探偵とは、ここまで情報を得ないものなのか……？

そう思いつつ、ユリはこの事件に関わってから、事件だけでなく
関係者についてすら、自ら動いて情報を得ていない事に気付く。

他人の事など、どう知ればいいと言うのだ。

当人から聞く事以外に、つまり、当人が言わない事にこそ、知ら
なければならぬ情報が隠れているのに、その方法が解らない。

これではダメじゃないか……。

ユリは自責した。

これでは、何のためにここにいるのか解らない。

自分がここにいる理由。

匠はただ人手が足りないという理由だけで、自分を事件に関わらせただのか？

ユリは首を振る。違う。

匠が常に、何か考え、『理由のない事はしない』事を、ユリは知っている。

ならば、この事件にユリが関わる理由があるはずだ。

そしてそれは何となく、匠に聞くのではなく、自分の手で答えを導き出さなければならぬような気もする。

ユリはそこまで考えて、ラウンジに背を向けた。

クレアは大丈夫だろうか。

もう、意識を取り戻しているだろうか。

ユリは、思いつきり鼻から息を吸い、空気を胸に溜めたまま、足音を立てないよう非常階段へと向かった。

解らない事がある状況なら、今得られる事を少しずつでも得ていかなければ。

その手始めに、ユリは『クレアの容態について』を選んだ。

「失礼しまーす。」

ノックをして、医務室のドアを開ける。

が、誰からも返事はなく、白いカーテンで目隠しされたベッドが何床か並んでいる陰にも人影は確認できなかった。

と、不意にそのベッド脇に人影が映り、立ち上がった。

「クレア？」

呼ぶと、カーテンをざっと開け、クレアが顔を出した。

まだ顔色は青く、表情も不安に満ちていた。

「…ユリさん…。」

ユリを呼ぶと、クレアの顔が見る見る歪んでいく。

そして、靴も履かずにベッドから飛び出し、ユリに抱きついた。あまりに勢いよく抱きつかれ、ユリはクレアを抱えたまま尻餅をついた。

「ユリさぁん…！」

「私…私…」と嗚咽で肩を大きく揺らしながら、クレアは泣いた。心細かっただろう。

「うんうん…。」

怖かったね…。

ビックリしたね…。

もう大丈夫だよ。」

（可愛そうに…こんなにおびえて…。）

ユリがクレアの髪を撫でた。

嗚咽に混ざって、肩が震えていた。

菅野はクレアにとって、ユリにとっての匠と同じような存在なのかもしれない。

その菅野が襲われていた。一つ間違えれば命を落としていたかも知れない状況で。

慣れない土地で、よく知る者がその様な目に遭っているのを、あ
るう事か自らの目で発見した。

不安は計り知れない。

そう思うと、ユリは堪らなくなって、クレアをぐっと抱きしめた。
(クレアを守るのは、きつと私じゃなきゃダメなんだわ。

きつと…。)

理由など要らないのだ、この気持ちには。

何の因果か、この”事件”に関わってしまった以上、クレアに一
番近いのは自分だと思っから。

「ねえ、クレア？」

「…はい…。」

ユリが呼ぶと、クレアが消え入りそうな声で答える。

「私がクレアを守るわ。」

クレアが大事なものも、私が守って見せるわ。

いい？」

ユリがクレアの顔を覗き込むと、クレアは涙で晴れた目でユリを
見上げて、頷いた。

「…はい…。」

「よし。」

叔父さんがね、もう帰って休めって。

クレア、今日もうちに泊まらない？」

「いいんですか？」

「もちろん！」

いっぱいおしゃべりしなきゃ！」

ユリが大袈裟にクレアの肩を叩いた。

気が紛れたのか、クレアはまだ濡れたままの頬を上げて、「はい
と再び頷いた。

その表情が健気で、ユリはもう一度クレアを抱き寄せた。

一人っ子に生まれたユリは、お姉さんとか、妹とか、そういった
存在がとても羨ましかった。

それを、昨日、一時的にでも手に入れたのだ。

両腕で抱きしめる”妹”はか細くて繊細で、どうしても守ってやりたかった。

冷たい医務室の床にぺたりと座り込み、ただ抱き合うだけなのに、なんだか全てのものを手に入れたような気がする。

やがてクレアの呼吸が落ち着いた頃、医務室のドアが開いた。振り向くと、了だった。

了は、床に座って抱きしめ合う少女たちを、一瞬眉を顰めて見たあと、小さく苦笑した。

「気がつきましたか。」

とクレアに声をかける。

「蕪木さん。」

「ご迷惑をおかけしました。」

ユリに抱きついたまま、クレアが答えた。

「無理ありません。気にしないで。」

ユリももういいのか？」

了がユリの傍らに膝をついた。

「うん、大丈夫」とユリが答えると、了は一つ頷いて、「そろそろ帰ろう」と言った。

「クレアさんは、今日も芳生さんのうちへ泊まって下さい。」

大使へは、北代警部補から連絡を取ってもらいました。

顔を出せずにいて申し訳ないが、よろしく頼まれたそうですよ。」

了が事伝手を伝えると、クレアが漸くユリから離れた。

「そうですか。」

ありがとうございます。」

そう言って、頭を下げるクレアの表情が一瞬強張ったのを、ユリは間近で見た。角度のせいかと思い、了を見ると、了の表情も少し強張っていた。

が、ユリの視線に気付き、すぐに元に戻してしまう。

「ユリ、正門前で待っていてくれ。」

車を回すから。」

「うん」と言うと、了が立ち上がった、ユリに手を差し出す。ユリが少し躊躇ってその手を握ると、了がぐっと握り返し、力いっぱい引き上げた。ユリが立ち上がった勢いに引つ張られて、ユリのジャケットを掴んでいたクレアも立ち上がった。

そして了はくると周って、さっさと医務室を出て行ってしまった。

「さ、クレア。行こうか。」

声をかけると、クレアが頷き、「はい」と言って笑った。

4月30日 11

菅野の件があったので、二〇時と言う時間になっても、館内は人氣に満ちていた。

エントランスにも、刑事と思しき男が数人と、出入り口を見張るように警官が三人ほど立っていた。

了に、正面玄関の前で待っていると言われたが、車は敷地内の館の正面には乗り入れられないので、フォーラムの正門まで行くことにした。

人がいるために開放されている館の正面玄関を出ると、中庭に照明は少なく、まん前の大きな噴水の水も止まっていた。

敷地を囲う樹木の向こうには、明るく高層ビル群が浮かび上がる。その様子を眺めながら中庭に行く。途中振り向くと、クレアが下を向いて歩いていた。

暗がりでも、その表情が曇っている事は窺い知ることが出来た。

「またそんな顔してる!」

ユリがいうと、クレアが苦笑した。

「ごめんなさい…」

「家ついたら、何しようか!」

「どうしましょう?」

「カナエちゃんがご飯作ってる時間かなあ…」

あ、だったら手伝いしようか!」

「はい!」

正門に着いた頃には、クレアに笑顔が戻っていた。

門付近にも警官が一人いて、ユリとクレアを見るなり、門を少しだけ開けた。

ユリは会釈だけして、門をそそくさと抜けた。クレアも続く。

二人が敷地から出ると、警官は無言のまま門を閉じた。

鉄扉が閉じる音は予想以上に大きく、夜の冷たい空気の中を突き

抜けるように響いた。

やがて敷地をぐるりと回る道の角から、車のヘッドライトがきらりと光ながら現れた。

目を細めて見ると、了の車だった。

ユリの前で車を止め、左ハンドルの運転席から、了が顔を出す。

「すまん、待たせた。」

「おっそいわよ。」

「…。」

ユリが嫌味を言うと、了が不機嫌な顔を造った。

その顔を見て、ユリはほっと胸を撫で下ろす。

（そうそう、この顔…。なんか落ち着くのよね…。）

もうすっかり、どの表情が造り顔で、どの表情が冗談なしなのか、わかるようになっていた。それでも、この不機嫌な顔が、ユリにとつての了であり、“了という現実そのもののように思え、そして、” 今、なんでもない時” であることの目印のような気がするのだ。

暫し無言でユリを見上げていた了が、「ふん」と鼻で笑った。

「お前だけ歩いて帰るか？」

ニヤリと笑う。

「あ、ムカツク。」

本当にむかついて、ユリがむくれると、横でクレアが笑った。

助手席のドアを開けて、座席を倒し、二人で後部座席に座る。

座り、落ち着いたのを見計らって、了が車を走らせた。

ユリは走り去り際に、左手の門の向こうを見た。煌煌と灯りの点く美術館が見えた。

ついさっき起きた事が、もう現実でないような気がした。

夢を見ていたように、あっという間に夜になった。色んな事があったのに、その実感が一つとして湧かない。

「クレアさん。」

ぼうつとしていると、了が口を開いた。

「まだ気分が優れないだろうから、無理せず言ってくださいね。」

「はい。ありがとうございます。」

クレアが答える。

そして、そのまま終わる。だからユリが『私の心配はしないのか』と突っ込む。そして了が『車酔いしないだろう』と素っ気無いう。

”いつも”なら。
でも。

「ユリもな。」

予想に反して、と言うより、期待に副わず、了がユリにも声をかけた。

ユリは、どきりとして、「え？ あ、うん」と、もごもごと答えた。

気を遣ってくれたのか、妙な気分だった。

何となく居心地が悪くて、ユリは背凭れから背中を離れた。

肩を締め、縮こまったように座り直す。

”いつも”の了でいて欲しかったのに…。

ユリが困惑の表情で了の後姿を見つめた。

了は、当然の事ながら真っ直ぐ前を見、時折バックミラーを見る以外は、首も動かさなかった。

軽くハンドルに添えられた手、その小指に、昼間見つけた傷は暗くて確認できなかった。

傷が見えなかった事で、何故かユリは安心した。

”まだここにいてくれる”と、思った。

ふう、と小さく溜め息を吐いて、今度は座席にくつたりと座り込む。

すると、了が、

「ちよつと、途中、うちに寄らせてもらう。」

と言った。

「え!？」

あんたんち、見られるの!？」

ガバつと後ろから詰め寄るユリに、了はバックミラー越しに怪訝な顔を向けた。

「中には上げないぞ…。」

車の中で待つてもらう。

「ちえー。」

つまならさそうにふくれるユリを、クレアが笑った。

「ねえ、一人暮らし？」

ユリの質問に、「ああ」と了が簡単に答える。

「三十超えたオトコの家…。」

ちよつとしよっぱいアパートと見たね。」

勝手な想像を膨らませて、ユリが指を立てた。

「クレアはどう思う？」

指をクレアに向ける。指されたクレアは、「うーん」と首を傾げたあと、前に座る了の後頭部を見つめて微笑んだ。

「蕪木さんは、こんなステキな車を持つてるくらいだから、凄く立派なマンションに住んでると思います。」

「えええ！　そうかなあ？」

ユリがぼすつと音を立てて背凭れに凭れると、了が車のスピードを緩め、ウィンカーを出した。

「着いた。」

そう言われて窓の外を見、ユリは呆氣にとられた。

「え…。」

車は、クレアと出会った昨日、街を案内しているときに通りかかった、あの高級マンションの正面玄関前のロータリーに止まっていた。

レディアッシュタワーマンションと言う名のそのマンションは、企業ビルに負けず高層で、確か三〇階建てだ。

一フロアに四世帯分の部屋があり、どの部屋も東か南を向いている、大変日当たりのよい造りになっている。

広告では、四大家族を対象にした賃貸マンションで、最低でも月

三〇万円の賃貸料がかかるとあった。最上階の部屋ともなると、価格は四倍にもなるらしい。

そんなマメ知識が走馬灯の如く脳裏を過ぎったユリに、了が言った。

「ちょっと待っててくれ。」

「こ…こ…？」

呆けるユリが訊ねると、了がニヤリと笑った。

「ざまみろ。」

これをしよっぱいと言うなら言ってみろという顔だ。

「なにがよ！」

何だか悔しくて、ユリが齒向かった。

そんなユリに、了はもう一度ニヤリと笑い直して、慣れた動作で颯爽と中へ入っていつてしまった。

天井まで貼られた総ガラス張りのエントランスの中はポストエリアになっていて、その奥、住人専用のエントランスは、一転、中が見えないよう銀色の壁と自動ドアに囲まれている。ポストの脇にある自動ドアの横には、カードをスライドさせる溝らしきものがあった、了はそれにカードをスライドさせると、今度は添えつけられた小さなディスプレイを覗き込んだ。

網膜認証だ。広告に書いてあった。

ユリは、妙に細かく覚えていた自分に腹が立った。

しかし、何故この都心にある高級マンションの名前が、『ポルターガイスト』の異名を持つ『グレイレディ』に因んだ名前なのか、よくわからない…。

「信じられない…。」

クレア、当たり前。」

尚も呆けているユリが言うと、クレアがくすくすと笑った。

「あいつ、やっぱりただの刑事じゃないんだわ…。」

「そうですね。」

なんだか、他の刑事さんたちとは、雰囲気が違う感じがします。」

クレアが同意した。

「例えば、どんな職業の人なんだろう…？」

「うーん…。」

二人で悩んでいると、了が出てきた。手には何か、封筒のようなものを幾つか持って、さっさと車に乗り込む。

「行くぞ。」

「あれ、もういいの？」

「郵便物を取りに行ったただだから。」

「そんなの、帰ってから取ればいいのに…。」

ユリが怪訝な顔を見ると、了が振り返ってニヤリと笑った。

「残念なお知らせです。」

「…？」

「俺も今晚は芳生家に泊まる事になっている。」

聞いた瞬間、後頭部を鈍器で殴られたくらいの衝撃が、ユリを襲った。

「芳生さんと話があつてね。」

「さあ行くぞ。」

ユリのショックを尻目に、了はのうのうと言い放って、車を発進させた。

夜、自分の部屋の窓から見えるあの高層ビル群の夜景の光の中に、こいつの家の灯りが含まれていたとは…。

そしてあるう事が、うちに泊まると言っている…。

鬱陶しいと感じる反面、何故かとても嬉しい。

なんなのだ。

傍にいてくれると判れば安心し、どこかに行ってしまうと思えば不安になり、嫌味を言われればむかつきながら安らぎ、そして、時々その全てが感じられなくなって、怖い…。

愛憎の感情、両方を持つ羽目になろうとは、出会った三日前は想像だにしなかった。

ふと見下ろした手には、まだ、握られ、撫でられた感覚が残った

まま。

ユリは複雑な思いのまま、了の横顔を見つめ、溜め息を吐いた。

4月30日 12

再び車を走らせ、匠の事務所へ向かう。

了のマンションを見たせいか、完全に気の抜けてしまったユリは、ぐったりと席に凭れながら了の後姿に訊ねた。

「そつえば、昨日もうちの叔父さんと話があるって言ってたわね。

”男爵”の話？」

同じ現場で働く者同士、情報交換が頻繁に内密に行われる事自体は、然程不思議ではない。が、最近出会ったにしては、匠と了は打ち解けすぎな気がしている。

「ん？ ああ、まあ…。」

疑いを真とするかのように、了が口籠った。

「言えない話？」

「男同士の話。」

ユリの中で、了は、内容を言うかはともかく、仕事の話なら『仕事の話だ』と言う人間だという決め付けがあった。

だから、言い淀むのは至極プライベートな事なのだと勘繰る。

そして、どこからどう連想したのか、先程ラウンジで立ち聞きした電話を思い出す。

プライベートで男同士の話、そしてあの電話の”彼女”。

疲れているのか、脈絡のない要素を繋ぎとめてしまったユリの思考が導き出したのは、

「あ、もしかして、仲人お願いしてるとか？」

というもので、これには了もすっとなきような声を上げて驚いた。

「はああ？ 誰の？」

「え？ あんたと、彼女。」

「…訳が解らん…。」

当然だ。

「あれ？」

困惑しながら、了がバックミラー越しにユリを見た。

ミラーに映ったユリはトロンと眠たそうな目をしながら、首を傾げて考え込んでいた。今の発言に、相当な確信があったようだった。一体どこからそんな情報を得たというのだろうか…。

自分がどこかで口を滑らせたかどうか以前に、そんな私事を何者にも話す事は有り得ない。

「……………俺は彼女いないぞ…。」

これ以上勘繰られるのも面倒くさいので、それだけは釘を刺す。が、返ってきた答えは、想像を遥かに超えて、方向違いなものだった。

「え、いないの？ その歳で？」

「今はそういう話じゃないだろう！」

「うーん？」

どうやら、思考までが迷子のようなだった。

了が小さく溜め息を吐くと、後ろでクレアが笑った。

その笑い声が少しくすぐったくて、了は固まりかけていた首を回した。ふと時計を見ると、二〇時三十分と表示されていた。美術館を出て二〇分程経ったところだった。

色々あったとは言え、ずいぶん帰りが遅くなってしまったものだ。これからさらに、美術館に残っている匠と合流し、再度事務所へ向かわなければならぬ。

それから夕食だ。

ユリもクレアも、もう少し早く返してやればよかったと思う。

その権限はあった筈なのに、何をやっていたのだろうか…。

芳生探偵事務所が見えてきた。

事務所の灯りは落とされて、住居となる三、四階にだけ灯りが窓から洩れている。

昨夜も見て思ったが、ずいぶん古い時代の西洋建築デザインを模倣しているようで、住宅と小さな雑居ビルとが入り乱れるこの区画の中でも、一際目を引くビルだ。

蔦が壁を這い、何種なのか薄ピンクの小さな花を付けている事も、このビルの異種性に拍車をかけているのかもしれない。

「到着。」

了が言いながら、車をゆっくりと停めた。

「ありがとう。」

がさがさと車を降り、ユリが言う。

「ありがとうございます。」

続いて降りたクレアもお辞儀をした。

辺りは暗く、街灯や住宅の玄関の照明だけでは心細い。

すっかり暗闇に溶け込んでしまったユリ達が心配で、了も車から降りた。

「どういたしまして。」

じゃあ、俺はまだ用があるから。」

「戻るの？」

「ああ。芳生さんもまだ残ってるしな。」

「そか。」

てつきり、匠は匠で帰って来るのだと思っていた。

一緒に帰ってくるのだと納得して、ユリが頷く。

ならば戻るのは早いほうがいいだろうと思った。了は、自分たちが家に入るのを確認してから、引き返すに違いない、とも。

だから家への階段を昇るよう、クレアを促した。

クレアが静かに階段を昇り始める。

そしてユリも階段に足をかけたところで、了が「あ」と声をかけた。

「ん？」

ユリが振り向くと、了がマンションから持ってきた封筒類をユリに向けて差し出していた。

「悪い。預かつといってくれ。」

「うん。」

受け取ると、ずしりと重い封筒が一つあった。

サイズも大きく、分厚い。

何を入れればこんなに重くなるのだろうと、裏返しの封筒をひっくり返すと、表には宛名も住所の記載もなく、切手も貼られていなかった。

ただ雑に、『カブラギさん』と、了の苗字が書かれていた。

「開けるなよ？」

ぼけっと封筒を見つめるユリに、了が不機嫌な顔を造って言った。
「開けないわよ！」

ユリが言くと、了は「よし」とニヤリと笑い、車に乗り込んだ。
それを合図に、ユリとクレアは階段を昇り、了は二人が玄関前まで昇り切ったのを見届けてから、車を発進させた。

ユリは、クレアを先に入れ、了の車のテールランプを暫く目で追った。

企業ビルの並ぶ大通りとは違って、一本路地に入ってしまったえば車の通りは少ない。

今は了の車だけが、家の前の路地を走っていた。

その了の車も、やがて角を曲がり、大通りへと消えていってしまった。

ユリは手に持っている封筒を見る。

不思議と、この封筒の中身は、了の仕事に関係する書類なのだと思った。

改めて見ると、『カブラギさん』という文字がとても下手糞だった。

こんな下手な字を書く人間が、了をさん付けで呼び、こんなに重い封筒を寄越す。それはどんな職場で、どんな仕事をしているところなのか。

そしてどんな肩書きを持っていれば、あの車を乗り回し、あの現場を練り歩けるのか。

謎は深まるばかりだ…。

不意に、とても冷たい夜風が吹いた。

初夏に少し足をかけた時期だというのに、鳥肌が立つほど冷たい風だった。

ユリは武者震いをして、体を縮ませた。

と、胸に抱き寄せた封筒から、館長室で了に握られた手から香った、あの甘酸っぱい匂いがした。

蜂蜜のような、花のような、果実のような、この匂い。

「この匂い、なんだっけ…」

思い出せそうで、封筒に鼻を近づけるが、もう封筒の匂いしかなかった。

遠すぎない昔に、あの香りを嗅いでいるはずだ。

思い出せない。

でも何故か、あの香りは自分を守ってくれる香りだと思う。

思い出せない記憶がそう思わせているのか、何せ思い出せないから、何故そう思うのか自分でも解らない。

それでもあの香りは、自分を守ってくれる香りだと、そう思うのだ。

蕪木了。

謎だ。

「ただいまー。」

ほんの少しの夜風ですっかり冷えてしまった体を摩りながら玄関のドアを開けると、クレアがカナエに挨拶をしていた。

「すみません、今日もお世話になります。」

「お客さんはいつだって大歓迎よ。さ、早くあがって。」

言いながらカナエがリビングのドアを開けると、ふわりとシチュの匂いがした。

「おお、今日はシチューなのね！」

「そうよ。」

いっぱい作っておいて正解だったわ。蕪木さんも来るんでしょ？」

「らしいわ。」

いっぱい食べそうに見えないのに、ものすっごい量食べてたわよね…。」

「そうかしら？」

体力勝負の仕事してる働き盛りの男の人だもの。

そりゃ、いっぱい食べるわよ。」

「そう？」

ガリガリじゃないから、フツーくらいは食べそうに見えるけど…。」

「ユリが言っと、カナエがニヤリと笑って指を振った。」

「ふふふ。あんたは男の人をまだ知らないね。」

「何よソレ…。」

眉を顰めたユリに、カナエはもう一度笑って、「さ、二人も手伝ってちょうだいな」とキッチンへ向かった。

クレアとユリが続くと、キッチンカウンターの上に、今洗ったばかりの野菜が所狭しと犇めき合っていた。

「クレアさんは、トマトのヘタ取りお願いね。」

「はい。」

カナエに言われ、暫し黙々と夕飯の支度をする。

「クレア、元気になった？」

ユリが訊ねると、クレアが笑顔で「はい」と頷いた。

「このおうちにいると、とても安心します…。」

照れくさそうに言うクレアに、カナエが大袈裟に喜んだ。「じゃあ、うちの子になっちゃう？」

悪戯っぽく笑うカナエに、クレアもくすくすと笑う。

「でも、カナエさんのご飯とっても美味しいから、なってもいいかな。」

「あらあら！ 嬉しい事言ってくれるわあ！」

ユリなんて、ガツガツ食べるだけで、褒めてくれた事なんて一度もないんだから！」

「あるわよ、何度も！」

「そうだった？」

「ひどいわね！」

言い合う二人を、クレアは笑いながら眺めた。

そういえば、ユリの事をまだ何も聞いていなかったが、匠のことを『叔父さん』と呼ぶ以上、その妻であるカナエはユリの母親ではないのだろう。

しかし、カナエとユリは親子か姉妹にしか見えなかった。

おどけながらユリをいじるカナエと、本気なのか乗っているだけなのか歯向かうユリ。

本当に仲が良さそうで、羨ましかった。

既にないない母親と自分も、こうだったのだろうか…。

忙しい父親と、こんなやり取りをしたことがあっただろうか…。

ユリもカナエも、そして匠も、いつも笑っている。ユリはいじられる事が多いから、笑い顔と不貞腐れ顔が同じくらいの比率ではあるが…。

それでもいつも賑やかで明るい芳生家は、自分の知る『家族』と

異なる空気を持ち、クレアにとって憧れであり、一時的なものでも、安らぎの場所になっていた。

だから少しでも馴染みたい。

手元でヘタ取りをしたトマトですら、そのきっかけの一つなのであれば、大切にしたい。

クレアは、カナエが豪快に盛ったレタスとサラダ菜の上に、丁寧にトマトを並べた。

玄関でチャイムが鳴った。

「あら、来たかしら？」

ユリ、出てくれる？」

カナエが言うと、ユリが濡れた手を拭いて玄関へ向かった。

「おかえり……。あれ？」

出迎えたユリは首を傾げた。

玄関には匠しかない。

「あいつと一緒にじゃないの？」

「ああ、車を仕舞ってるよ。ちょっと待っててやってくれ。」

靴を脱ぎながら匠が言う。

「はい。」

事務所の敷地には駐車場を作るスペースがなかったの、少し離れた月極の駐車場を契約している。

暗い夜道を来ることになるので、玄関の外で待とうと思い、ユリが靴を履こうとすると、ドアが開いた。

「お邪魔します。」

片足を靴に乗せ、前屈みで見上げるユリに、了がまともな挨拶をする。

「いらつしゃい。」

あんたが普通に挨拶すると、なんだかとてもヘンだわ。」

玄関に上がりなおしてユリが言うと、了が不機嫌な顔をする。

そんな了に、ユリはニヤリと笑った。

「上がった。ご飯出来てるよ。」

そういうと、了が即座に困惑の表情を浮かべた。「お前が作ったんじゃないな……？」

「どついう意味よ！」とユリがふくれると、了はニヤリと笑って、まるで来慣れているかのような動作でリビングへ行ってしまった。

独り残されたユリは、リビングのドアが閉まった音でやっと、仕返しされた事に気付いた。

（ム力つくわ……。）

頬を膨らませながら自身も戻ると、クレア、了、匠がダイニングテーブルの昨日と同じ席に座っていた。

すっかり料理も並び終わっていて、あとはカナエとユリを待つのみという状態だ。

ユリも、昨日と同じ、了の隣の席に座ると、程なくしてカナエがエプロンで手を拭きながらやってきた。

「さあさ、食べましょ。」

カナエの声を合図に、食事が始まった。

「蕪木さん、いっぱい作っちゃったのよ。」

「ありがとうございます。遠慮なくいただきます。」

サラダを取り分けながら言うカナエに、了が笑った。

一方でメインのチキンのグリルを切り分けていた匠が、早々に自分の分だけを皿に取り、ユリを指さす。

「ユリ、葉っぱ取ってくれ。」

「葉っぱって言わないでよ。」と言って、サラダボールからサラダ菜を一枚取って渡す。

「葉っぱだろ、これは。」

「サラダ菜よ。」

「名前なんて飾りだよ。」

「ふふっ。」クレアが笑う。

「クレアさんも、食べてる？」

「はい！」

各々発言し、料理を一口、口に運んだところで、匠が切り出した。

「ああ、そうだ、クレアさん。」

「はい。」

「さっき病院に寄ってきたんだが、菅野館長は元気そうだったよ。」
匠の報告に、「まあ！　よかった…」とクレアが泣き笑いをする。
「明日は検査があるから、明後日には退院出来そうだと、先生もおっしゃっていたよ。」

「ありがとうございます。」

匠とクレアのやり取りを聞きながら、ユリは了をちらりと見る。
了は平然とした顔で黙々と食べていた。

「犯人の手がかりはあったわけ？」

ユリが訊ねると、了はユリと視線も合わせず答えた。

「ない。タイピンの捜査と並行して、屋根上の捜査もしたが、結局何も見付からなかった。」

「タイピンも無関係？」

了は関係ありと考えているとは聞いたが、真相はどうだろう…。

「そこまではまだ…」

事件が起こり、“男爵”のタイピンが落ちていたり、監視映像に不自然な記録が残っていたりという状況はあるが、それらがどう結びつくのか。

了はの仮説は兎も角、警察でも結論を出すには早過ぎる。

「やあねえ、食事中にお仕事の話なんか…」

カナエが溜め息を吐いた。

しかし、「そうですね、すみません。」と申し訳なさそうに言う了に、カナエは表情をころっと変え、手をひらひらさせて笑った。

「あらあら、いいのよ！」

ユリが言い出さなければよかったただけだもの。」

「またそういう事言う！」

ユリが怒ると、さらにからかうように匠が指さした。

「ユリ、葉っぱ。」

「サラダ菜よ！」

腹が立ったので、今度はボールごと匠に渡してやった。

4月30日 14

夜遅めの食事は、いつの間にか高遠の”武勇伝”という名の暴露大会と化し、料理が尽きたところでお開きとなった。

「ユリ、片付け手伝って！」

先に食べ終わり、キッチンに戻っていたカナエが、皆が席を立ったのを見計らってユリに声をかける。

「はい。」

「私も手伝います。」

ユリが立つと、クレアも立って言った。

「あら、じゃあ、お願いするわ。」

カナエの返事を待って、クレアもキッチンへと向かう。

一方で、匠が了を呼ぶ。

「蕪木クン、いいかな？」

「ああ、はい」と言っただけで席を立った了が、ユリに振り向いた。

「ユリ、封筒どうした？」

先程預かった封筒の事だろう。

「ん？ ああ。はい。」

手渡すと、「ありがと」と短く言って、了は、匠が座る居間のソファセットへ歩いて行った。

（ありがと、だって……）

今まで、どちらかと言うと計算高く言葉を発していた了の口から出たとは思えないくらい自然な礼に一瞬呆けたユリに、カナエが叫んだ。

「ユリ、手伝って！」

「はい。」

再度呼ばれてキッチンへ向かい、クレアに倣って洗い物を手伝う。残飯処理も、残飯自体が少なかったので手早く終わり、カナエも加わり、後片付けはあっという間に終わった。

食事が遅くなってしまったので、風呂が冷めてしまったらうと、カナエが風呂の支度を始める。

ユリとクレアは一時、ソファで話し込む匠と了の邪魔にならぬよう、ユリの部屋へ向かった。

部屋に入り、部屋の真ん中に置いたテーブルに、二人で向かい合って座る。

ユリがゲツソリとした顔でテーブルに突っ伏すと、クレアが「疲れましたね」と笑った。

すっかり元気になったようだ。

「ねえ？」

ユリが顔だけ起して、クレアを見る。

「はい？」

「クレアの家族の事、聞かせて欲しいな。」

クレアが笑って頷いた。「いいですよ。」

「お兄さんのお話は、この間聞いたから、お父さんとか、お母さんとか……。」

体を起こし、クッションを抱いて座りなおし、ユリが言うと、クレアが哀しそうに笑った。

「母は、亡くなりました。」

「ごめん！」

クレアが言うなり、ユリがバツの悪い顔をして謝った。

しかし、クレアはにこりと笑い、「大丈夫ですよ」と言う。

「母が亡くなったのは、家族で日本に来たその翌年です。」

私が七歳になって間もなく。

大きな事故に巻き込まれたとかで、遺体の損傷が激しいので、葬儀も遺体を表に出さないまま行つて、そのまま墓に埋めました。」

内容と似つかわしくなく、クレアの声は穏やかだった。

「どんなお母さんだった？」

「優しい人でした。いつもニコニコしていて。」

父が多忙だった事もあって、家ではいつも私と兄と母と三人きり。

でも、母のお蔭で、淋しいなんて思ったこと、一度もありませんでした。

メイドというか、ヘルパーの方に、家の手伝いをしてもらっていいんですけど、そういう人がいるのに、母は自分で料理をしたり。私の国では、ヘルパーは家主や家族と一緒に食事をしていない風習だったんですけど、母は進んでそういう人たちを食卓に招いて。

平等と平和を何より愛していました。」

懐かしい記憶を辿るように、クレアが窓を見る。

レースのカーテン越しに見える夜景は、いつもどおり綺麗だった。

「日本には、どうして？」

十年前の旅行。父が多忙で一見離れ離れな家族が、突然の旅行。本来は理由など要らぬものだが、何故か気になった。

「どうしてだったかしら…。」

あの時、家族旅行をしようと言い出したのは、父だったんです。」

「へえ。」

「母も兄も私もとても嬉しくて、すぐに行こうって決まって。

父はすぐに休みを取っていたので、多分、仕事が一段落したとか、そういう理由だったと思うんですけど、とにかく突然の旅行でした。でもとても楽しかった。とりわけ、母はとても喜んでいました。

そして、帰国してすぐに、父が駐日大使に選ばれて…。」

クレアの声が徐々に消えていった。

声につられるように、笑顔も消えた。

「…どうしたの？」

「その頃から、母が凄く淋しそうな顔をするようになったんです…。」

「

なぜ？」

「解らないんです。」

最初は、父が海外赴任になったのが淋しいのかと思っていました。でも、何となく違うのになって。

それから暫くして、事故に…。」

ユリは、発する言葉が思いつかず、黙って聞いた。

「それからは、兄と二人で、国から支払われる父の給与の一部で生活していました。」

生活するには困らない額でしたけど、二人でする食事はとても味気なくて。」

ユリにも、覚えはある。

独りでする食事。

いつもそこにいたはずの両親が、突然いなくなり、空いた穴。誰も座らないダイニングテーブルの椅子は、あるだけ無意味に思えてくるのだ。

「でも、ヘルパーさんたちが、とてもよくしてくれて。

みんな、『あなたのお母様に良くして頂いたご恩があるから』って。

日替わりで来る人たち、みなが、食事を一緒にしてくれて。

母を亡くした悲しさは変わらなかったけど、一緒にいてくれる人がいたから、結構大丈夫でした。」

だから、そんなときにもにいてくれる人がいる事は、この上ない心の支えなのだ。

「うんうん」と、ユリも頷く。ユリにとっては、匠やカナエだ。

「でも…。」

母の三年目の命日が過ぎた頃、今度は突然兄が、いなくなっ…。

「

…いなくなる理由が解らないって、言ってたね。」

行方不明の兄。仲が良かった兄妹は、離れ離れになった。

「はい。」

私も小さかったから、国王が婚約した少しあと、という事しか覚えてないんです。」

「そっか…。」

「それからは、父と私二人だけですけど、父は日本にいて、忙しくて電話もする時間もないし、帰ってくる時間も。」

だから、実質一人ぼっちでしたね」

そこで話が途切れ、同時にユリがクッションに顔を埋めた。

「ごめんね。」

なんだか、悲しい事思い出させちゃったね。」

声がクッションで籠る。

「そんな事ないですよ。」

それに、今はカナエさんっていうお母さんも、ユリさんっていうお姉さんもいるから。」

クレアがにこりと笑うと、ユリが泣きそうな顔をする。

「がんばる、私。」

「はい！」

お互い親を失った者同士、傷の深さは違えど、感じる痛みや抱える哀しみは同じだと思う。

「ユリー！」

突然、下の階でカナエがユリを呼んだ。

「はい！」

ちよつと待っててね。」

ユリが階段まで出ると、カナエが階段下で立っていた。

「なあに？」

「お風呂の支度終わってるから、クレアさんにどうぞって言って。」

「はいはい。」と返事をしながら、先に了が入ればいいんじゃないかと提案すると、カナエが苦笑した。

「言っただけど、話し込んでやってダメなのよ…。」

「何の話？」

「さあ？」カナエが首を傾げる。

「ふうん…。」

まあいいや。わかった。」

ユリは頷いて、部屋へ戻り、クレアに声をかける。

「お風呂どうぞって。」

「あ、はい。」

じゃあ、お先にいただきます。」

そう言って、クレアが立ち上がり、部屋を出た。

ドアが閉まると、クレアの空気がまだ残る部屋に独りになる。

ユリはベッドに寝転んだ。

仰向けで見上げる白い天井に、小さな染みを見つけた。

五年前、ユリがこの家に引き取られたときに張り替えた新しい天井なのに、もう染みが出来ている。

六年前、両親が死んで、一年後、この家に引き取られて以来、思い返してみれば両親の死には触れずに生きてきたような気がする。

哀しいし、今でも恋しいが、泣いてばかりもいられない気がする。

…、とは言え実は、両親が死んだ事に関して、一度も泣いたことがいないのだった。

ただ実感がなく、そして、流すだけの涙が出ないのだ。

何故かはわからなかった。

非情なのかも自分を疑いもしたが、そうでもないのだ。

（現実感がないんだわ…。）

ユリはふと思い立って、そして納得してしまった。

4月30日 15

ユリは今日一日を振り返る。

あんなに大変なことがあったのに、もう落ち着いてしまっている自分に驚く。

菅野が襲撃された事、ユリが拾ったタイピンの謎、監視カメラの不可解な映像。

それらが繋がっているような気がしてならない。

何の根拠もないのに、目にした様々な情報が、一本の糸で繋がっているような気がするのだ。

でも、その糸はあまりに細くて、辿ることが憚られる。

自分ごときが触れてしまえば、すぐに切れて、一切の解決を見ないまま、闇に葬られてしまうような気もするのだ。

北代が言っていた。

菅野は”男爵”の関係者だという可能性が高いと。

了も言っていた。

菅野は”男爵”の関係者だと思っていると。

菅野が、”男爵”と何がしかの繋がりを持っている…。

それは顔見知りと言う程度のもに留まるのか、それとも、これまで数え切れないくらいに事件に関わるほどの深いものなのか。

加えて、”男爵”と知り合ったのなら、その切欠は何だったのか。もしかしたら、菅野が一連の”男爵”による事件の首謀者なのではないのか？

否、もしかして、菅野本人が”男爵”ではないのか…？

取り止めのない思考が深みに嵌って行く。

疑わしいと思えば思うほど、疑いは現実のものへと成りすましてしまう。

架空の現実感を伴って、ユリの思考に居着いてしまう。
ならば、あの”小部屋”は偽装工作フェイクなのか？

”男爵”の予告以前に”小部屋”の導入を菅野に勧めていたと言う、飛澤やその警備会社はどうなのだ。その事実を知っているのか？否、あの”小部屋”を勧めた飛澤たちこそが、”男爵”の関係者なのかも知れないではないか。

そういえば、飛澤には今日は会わなかった。

聞けば、本社に呼ばれていたというが、最新鋭のセキュリティを導入していると言えど、警備員一人に警備を任せることなど、果たして在り得る事なのだろうか。

あの美術館の関係者たちの顔が、頭の中を駆け巡る。

病弱な顔の張り付いた痩せ細った菅野、傲慢を絵に描いたような北代、如何にも体育会系な飛澤、笑い顔の絶えない匠、いつも眠そうな了、顔の見えない”男爵”…。

了…。

そうだ、了…。

了も謎だ。

了の住むマンションを見て、益々正体が判らなくなってしまった。

”本部長”とは何なのだ。高遠の事なのか？

了の、”男爵”に関する知識は、匠が一目置くほどのものだと思える。

了の話の中で、”男爵”を専門に捜査する公的機関があると言っていた。

了はその機関の関係者なのだろうか？

だとしたら、所謂、専任捜査官というものなのだろうか…？

……。

「クレア、遅いな…。」

気付いて時計を見ると、クレアが部屋を出て既に四〇分が経っていた。

ユリはむくつと起き上がると、耳を澄ませた。

シャワーの音が聞こえない。風呂場で何かが動く音も。

居間でみなで話でもしているのだろうか。

ユリが居間へ向かう事にし、ドアを開けた瞬間、下の階でクレアの声が聞こえた。

それは何かに切羽詰り、哀しみと怒りの籠った声だった。急いで階段に向かいながら、その声を聞く。

「教えて下さい！ 何故教えてくれないんですか！？」

私の事でしよう！？」

「クレアさんの聞き違いだよ。」匠の声が聞こえた。

「そんな事ないわ！」

十年前、純公園での出来事、菅野のおじさま、私のお父様、私の話以外ありえない！」

匠の言葉に、クレアの声が一層大きくなった。

ユリは足を速めて居間へ向かった。

三階の居間のドアは開きっぱなしで、クレアの後姿が拳を握り締め、震えている。髪は濡れて、恐らく先程まで本当に風呂に入っていたのだろう。出たところで、居間からただならぬ話が聞こえ、聞き流せずに詰め寄ってしまった、と言ったところだろうか…。

「ちょ…、ちよつと…。」

クレアに歩み寄ると、匠の隣で困惑し切った表情を浮かべた了が、「ユリ…」と呟いた。その言葉に、クレアが勢いよくユリに振り返る。

「ユリさん！ ユリさんも知ってるの！？」

「え！？ な、何を…？」

クレアの様子は、普段からは想像出来ぬほど歪み、強張っていた。目を見開いて、息が上がっている。相当興奮しているようだった。「とりあえず、落ち着くんた、クレアさん。」

了が声をかけるが逆効果だったようで、「落ち着いています！」とクレアの声が叫びに近くなった。

「教えて下さい！」

十年前、あの純公園であった本当のことって、一体何なんですか！？」

「なにそれ？」

十年前、菅野、クレアの父親両名の名が挙がり、純公園であった本当と言われる事とは何だ…？

もしかしてそれは、クレアがなくしている記憶に関係があるのではないのか…？

「どういう事？」

ユリも問うと、匠が弱弱しく「ユリ、頼むよ…」と言った。

「えっ！？ ど、どうすれば…」

突然言われ、ユリが戸惑うと、玄関のドアが開き、閉まる音がした。

そしてゆったりと居間に向かってくる足音が聞こえ、「まったく何の騒ぎ…？」と声がした。

カナエだ。

事務所の点検をしに二階へ降りていたのだろう。クレアの声が聞こえ、何事かと戻ってきたに違いない。

「カナエちゃん！」

ユリが振り向き、「カナエ、頼む…」と匠が遠くで泣きついた。

おろおろとする匠たちを見て、カナエが苦笑した。

「まったくもう…」

そして徐にクレアに近付くと、ぐっとクレアを抱き寄せる。クレアの顔は、カナエの胸にすっぽりと埋められてしまった。

「っ…！」

「クレア。」

「ちょっと落ち着きなさい…」

抱きしめながら、カナエが静かに言う。

「おばさま…」

不意を突かれ、勢いが鈍ったのか、クレアの声も小さかった。

そんなクレアに、カナエは小さく囁く。

「いい？」

慌てなくても、ちゃんと教えてくれるわ。あなたに本当に必要な

事ならね。

でも、大人が内緒話をしているときはね、あなたのためにならない事、あなたが知ってはいけない事を話している、そんなときよ。そういうとき、無理に聞いてはダメ。心が壊れてしまうから。

ね…？」

「でも…。でも…。私知りたいんです。

私が忘れてしまっている事…。思い出さなきゃいけない気がするんです…。」

カナエの胸元に埋まり、籠ったクレアの声は、涙声になっていた。「なら、余計焦ってはダメよ。

知りたくても、知ってはいけない事だってあるんだから。

神様はね、ちゃんど、あなたに必要な事だけを、あなたに伝えてくれるように、みんなを動かしてくれるから。

じつと待ちなさい。今、あなたの話をしていたのだとして、その話をみながしてくれないのは、あなたを守りたいからよ。

その気持ちは、無碍にしてはダメよ。」

「おばさま…。」

だいぶ落ち着いてきたようで、クレアの声からは、すっかり力がなくなっていた。

カナエは畳み込むように、「わかった？」と問い、抱きしめる手にさらに力を込める。

「はい…。」

クレアの返事を聞き、ユリがほう、と溜め息を吐いた。

（さすがカナエちゃん…。）

ユリ自身も経験がある。

カナエは説得するのが、妙に巧かった。

一呼吸置き、カナエが腕の力を緩めると、クレアがふらふらと体勢を直した。瞼が腫れ、頬が紅潮している。その顔で匠を見、俯いた。

「ごめんなさい、みなさん…。」

クレアが謝ると、匠が弱弱しく笑った。

「いやいや…。」

すまなかったね、誤解を与えるような発言があったのかもしれない。

クレアさんがいる事を留意しなかった僕らが悪いよ…。」

「…。」

「今の話はね、直接クレアさんに関する事ではないんだよ。」

僕らも、情報の一環として、『らしい』という程度の話しか知らないんだ。

だから、それを話す事も、少し憚られてね…。」

「そうだったんですね…。」

ごめんなさい、取り乱してしまつて…。」

匠の弁解に、クレアが頭を下げた。憑き物でも堕ちた様に憔悴して、今にも倒れそうだった。

カナエが、ぽんと、クレアの肩に手を乗せた。

「ほらほら、誤解は解けたんだから、今日はもう寝たほうがいいわ。」

ユリ、部屋に連れてつてあげて。」

「うん。」

クレア、いこ?。」

ユリが手を伸ばすと、クレアが「はい…」と握り返した。

クレアの手は、小刻みに震えていた。

血の気が退き、風呂上りと思えないほどに冷え切っている。

みなが見送る中、ユリはゆっくりとクレアの手を曳き、部屋に戻った。

部屋のドアを閉め、二人きりになると、クレアが手を離した。

「ユリさん…。」

「ん?」

「ごめんなさい…。」

謝りながら、じわりとクレアの目に涙が溢れた。

「ごめんなさい…ごめんなさい…。」

居た堪れなくて、ユリはカナエの真似を試みた。
クレアをぐつと抱きしめる。

静かに嗚咽するクレアは、手だけでなく、全身が震えていた。

「…気にしないよ。」

みんなもね。大丈夫。」

ユリが言うと、クレアがユリの胸元で「うう」と呻った。

「本当は知リたかったんだね…、忘れてしまつてゐる事…。」

「うん…知りたい…。」

言いながら、クレアがユリの腰に腕を巻きつけた。着ていたワンピースの背中を、ぎゅつと握り締めるのがわかる。

「うんうん。」

でもさ、きつと、慌てたら余計思ひ出せなくなつて、もつと忘れちゃうよ？

だから、カナエちゃんの言つとおり、待とうね。

神様がいつて言うまで。」

神様なんて、信じていない。

でもこういうとき、神様と言う存在は、とても便利だと思う。

ユリが一つ、クレアの濡れた髪を撫でると、クレアが小さく頷いた。

「…はい。」

そして、ユリの腰から手を離す。

ユリもクレアときちんと間を取り、クレアの顔を覗き込む。

「大丈夫？」

「はい。ごめんなさい。」

言うほど大丈夫ではなさそうだが、落ち着いたようではあった。

ユリはふつと微笑んで、もう一度、今度はくしゃりとクレアの髪を撫でた。

「私、お風呂、ザって入ってきちゃうから、一緒に寝よつか！」

につこりと笑つと、見上げたクレアも、涙でぐちゃぐちゃの顔で笑った。

「はい。」

「よし、じゃあちよつと待っててね！」

ユリはクレアの手をぎゅっと握ったあと、駆け足で部屋を出た。手を握ったのは、了の真似だ。

あのとき、了が手を握ってくれた事が、傍にいますという合図だと思ったから。

クレアの傍には自分がいる。

そんな気持ちを込めて。

部屋を出るなりすっかり疲れ切っている事に気付きながら、ユリは無意識に足音を消して階段を下りていた。

今日は本当に色々な事が続いた…。

脳はいつの間にか考える事をやめてしまっていた。

ぼうつとしながら階段を下りていくと、今度は了の声が、居間から荒く上がった。

「ボクは反対ですよ！」

ユリはどきりとして、歩みを止める。

（ん？）

そのまま足音を立てずに、居間に向かい、何故か少し開いたドアの隙間から中を覗くと、了が匠に詰め寄っていた。

今度は何事だというのだ…。

了の顔は焦りと困惑でいっぱい、必死に匠を責めていた。

「この件に関わることで、刺激が強すぎると思ってるのに、さらに親を殺した犯人の事まで教えるなんて！」

（…え！？）

ユリは、びくつとしてドアから身を離した。

（…ナニ…？ 何の話…？）

親を殺した犯人…ってナニ…？）

「でもね、蕪木くん…。」

言いかけた匠を、了が遮った。

「芳生さんがどう考えていようと、ボクは反対です！」

了の声とは釣り合わない余裕の声で、匠が笑った。

「蕪木くんは相変わらず頑固だなあ。」

「笑い事じゃありませんよ！」

あんな繊細な子が、親殺しの話を聞いて正常でいられる筈がないでしょう！」

続けて聞こえた了の言葉に、ユリはパニックになった。

（『繊細な子』って…、クレアの事…？

クレアの親を殺した犯人って事…？

それって…、お母さんは殺されたって事…？）

腰が抜けそうだ。

とんでもない話を聞いてしまったのではないだろうか。

ユリは、ショックで洩れてしまいそうな声を殺して、階段へと引き返した。

風呂どころではない。

（ど、どうしよう、部屋に戻って…。）

階段下まで行って手摺りに凭れると、あろう事か手摺りの木が軋んで、大きな音を立てた。

（…！）

あたふたと手を離すと、居間のドアが勢いよく開いた。

見ると、了が強張った顔でユリを見ていた。

「…！」

聞いていた事を、知られてしまったか…？

体の向きとしては、都合のよいことに、今階段を下りてきたばかりと言う状態になっていた。シラを切れば、誤魔化せるだろうか。

了はただ強張ったままの顔で、ユリを見つめている。

「…。」

「か…蕪木さん…。」

ど…どしたの？」

平静を装って笑ってみたが、変な笑顔になってしまった。

了の顔が、みるみる困惑していく。

「いや…。」

そう言つて、廊下に出、居間のドアを後ろ手に閉めると、手持ち無沙汰に手を見つめながら、ユリに歩み寄った。

向かい合って立つと、今までの印象以上に背の高いことに気付く。普段は、ユリがヒールの靴を履いているから、その差なのだろう。

改まって見つめ合って、何だか居心地が悪くなる。

「…ああ、クレアの事、心配した？」

ユリが話を逸らすと、立ち聞きに気付いて見に来たのだと思っ
いた了から、意外な返答が返ってきた。

「いや…、オレが心配したのは…。」

もごもごと、了は言いながらユリを見る。

その意味は、明白だった。

「…え、私？」

驚くと同時に、ほっと胸を撫で下ろす。

（よかった…。立ち聞き、バレてない…。）

暫く見つめ合つと、了が不意に目を逸らした。

クレアの事があつたからだろうか、了らしからぬ態度に思えた。

「ねえ…。」

ユリが声をかける。

呼ばれて、了がユリに視線を戻した。

「ん？」

いつもの眠たそうな目の奥に、まだ少し、戸惑いが見えた。

「私に、詳しく教えられる事？」

さっきの、クレアの事。」

ユリが訊ねると、了が口を噤んだ。

「…。」

そしてまたユリから視線を外し、悩んだあと、困った顔をしてユ
リを見た。

「すまんが、状況によつては、絶対に教えられないかも知れない。

お前に教えるかどうか、オレと芳生さんで意見が分かれてる。

「

って事は、やっぱりクレアに関係ある事なのね？」

クレアには関係ないと説明したが、やはりそうなのか。

だが、何故クレアの事を調べているのだ…。

ユリが目で問いかける。了は頷き、ユリの考えている事を察した

かのように答えた。

「ああ。それだけは、伝えておく。

そして、安易に公開出来ない内容だという事も。

ヒントを言っておくと、『男爵』の事件とどう繋がるのか、そもそも繋がらないのか、その見極めも出来てない』。」

つまり、クレアもが、”男爵”の関係者と見ているという事が。

と言う事は、クレアの父親であるバークレイも、そうだという事なのだろう。

真実は未だ謎だが、全ての人物が、関係者として繋がってしまった訳だ。

言い難そうに話す了の顔は、夕暮れ時に見た、あのラウンジでの表情によく似ていた。

多分、辛いのだ。

ユリに話す事がそうなのか、クレアを調べる事がそうなのかは解らないが。

「わかったわ。無理には聞かない。

でも、いつか教えて。『教えられないかもしれない』じゃなくて。

」

ユリが言うと、了が俯いた。

そんなに言い憚られる事が、クレアの過去にあったというのかと思うと、ユリも辛くなる。

しかし、だからと言って、知らないままではいけない気がした。

黙るのに、ユリが一押しした。

「私は、あの子のお姉ちゃんだから。教えてね。」

『お姉ちゃん』という単語に、了が観念した。

「…わかった。約束する。」

苦笑して、答える。

「ありがと。」

ユリが微笑み返すと、了は苦笑いのまま頷いて、居間へと戻っていった。

ユリは廊下に佇み、思う。

彼はきつと、色々な距離や存在を守ろうとしているのだろう、と。実はとても優しく、勘が鋭いのだ。故に、様々な事を見抜いてしまうのだ。

だから見なくていい事も、聞かなくていい事も、知ってしまい、辛い思いを抱かなければならなくなる。

しかしそれだけでは終わらず、その得た全ての事を、守ろうとしているのではないかと。

その中に、ユリ自身も確実に含まれているのだろうと思う。

だが何故、自分をも守ってくれるのだろう。

そう思うと、よく解らない。

何か、忘れている事はないのだろうか。

クレアと同じように。

もしかして、了に関する何かを、忘れていないのだろうか
…。

4月30日 17

眠たさもあって、早々に風呂から上がったユリが部屋に戻ると、クレアは寢息を立てて寝ていた。

きちんとベッドの半分を開けて横になるクレアの寝顔は、まだ目が腫れていて、泣き顔のままだった。

「きつと疲れてたんだなあ…。」

声に出すと、さらに眠気が襲ってきた。

「私も寝よ…。」

髪は濡れたままだが、お構いなしにベッドに横になった。

横になると、体がずんとベッドに沈んでいった。

そしてあつという間に、意識が途切れた。

が、耳鳴りがして目が覚めた。

部屋の電気が点けっ放しになっていた。時計を見ると思いの外眠り込んでいて、三時を少し過ぎたところだった。

夢を見たような気もするが、何も覚えていない。

電気を消そうと体を起すと、喉が渴いていることに気が付いた。

「お水持つてこよう…。」

独り言を言つて、ベッドを降りると、電気だけ消して、部屋を出た。

廊下に出ると、家の中はすっかり静まり返っていて、しかし、階段下からうつすら灯りが洩れていた。

まだ誰か起きているのだろうか…。

足音を忍ばせて階段を下りると、灯りは居間から洩れていた。

ガラス張りの居間のドアの小窓から見る限り、ダイニングスペースのほうは暗闇になっているから、ソファセットの脇にある小さなスタンドが点いているのだろうと思った。

そういえば建て付けの悪かった居間のドアの隙間から中を覗くと、ソファセットに誰かが蹲つて座っていた。

そのシルエツトは、他でもない、了だった。

（あいつ…。寝ないのかな…。）

了は、薄暗闇の中で心許ない灯りを頼りに、分厚い書類をいくつも広げ、読み耽っている。

明日も、というか今日だが、美術館へ行かなければならないというのに、寝なくて大丈夫なのだろうか。

もしかして、普段眠そうな目をしているのは、毎日こんな夜遅い時間まで起きているからではないのか…？

ふと、近くに行つて話したいと思つた。

ユリは静かに、しかし了が気付くように、ドアを開けた。

「っ！」

突然ドアが開き、了が驚いた。

目を見開いて、ユリを見ている。

「…ごめん。びっくりした？」

半ば意図的にやったのだが、ユリは謝つてみせた。
どうも了からはドア付近はすっかり暗闇になっているので、誰がいるのか判断が出来ないらしい。

ユリの声を聞いて、了が被りを振つた。

「いや、すまん。どうした？」

「目が覚めちゃつて。水飲みに来たら、いたから。」

ユリが答えると、了が「そうか」と苦笑した。

「仕事？」

了は、「ん？ ああ。」と書類に目を落とす。

「昼間は書類に目を通す暇がないからな…。」

そついう了はソファに浅く座つて、前に置かれたテーブルに置いた書類をペラペラと捲つた。書類の数枚は、テーブルから落ちている。

ユリは了の目の前の床にぺたりと座り、了を見上げた。

「ふうん。」

相槌を打ち、何故かは解らないが、そのまま暫く、了とユリは微

動だにせず見つめ合った。

やがて、ユリが口を開く。

「邪魔？」

聞かれて、了が答える。

「いいや。何故？」

「手、止まっちゃったから。」

「ああ。」了が苦笑した。

「なんか話があると思ったんだよ。」

ユリの言葉を待っていたのだ。

「ああ、ごめん。」

そっか……」

ユリはユリで、了の言葉を待っていた。

ユリは、了が持っている書類に目をやった。

「何読んでたの？」

「これか？ これは、”男爵”の資料。」

オレが現場にいる間に、部下と後輩がまとめたものとか、海外の特捜部から取り寄せたものとか、色々だな。」

何の淀みもなく説明をする了に、ユリが少し驚いた。

はぐらかされると思っていたのもあるが、それ以上に『部下』という単語が引つかかったのだ。

「部下なんかいるの？」

「名目上、な。」

オレ個人は後輩としか思っていないが、肩書き上は部下だな。」

”後輩と部下”という言い別けはしているが、実質、全員が部下なのだろう。

ユリは再び「ふうん」と言い、背筋を伸ばした。

「あんた、やっぱりナゾだなあ……。」

「そうか？」

ユリの言葉に、了がきよんとする。

「そうよ。どのくらい上の人なのかは知らないけど、警察の人でも

あそこまでおつきなマンションに住んだり出来る人、いないんじゃない？

車だつていいのに乗ってるしさ。

”男爵”の事にもすごく詳しいし。」

そこまで言うつと、了が何故か切ない顔をし、そして哀しそうに笑つた。

「”男爵”は……専門分野みたいなものだからな。」

「じゃあやつぱり、専任捜査官みたいな？」

ユリが了の顔を覗き込むと、「似たようなもんだな」と了が答えた。

「たまに美術館にいる警備員の人とかがさ、あんたの事『蕪木さん』つて、刑事とか付けなくて呼ぶじゃない？」

あれは何でなの？」

美術館で了を探していたとき、『蕪木刑事』と言つたユリに対し、わざわざ『蕪木さん』と言いなおした警備員の事を思い出した。

些細な事なのかもしれないが、気になったのだ。

「……。」

ユリの問いに、了が手を顎に添えて考え込んだ。

そして、ちらりとユリを見て、いつものニヤリ顔をする。

「まだ秘密。」

「ケチ。」

ユリが悪態を吐く。

すると、途端に了が不機嫌な顔をした。

「ケチとは何だ、無礼なヤツめ。」

疲れてるんだから、さっさと寝ろ。」

「疲れてないもん。」

「クマ出来てるぞ。」

「え！！！？」

ユリが、バつと目の下を抑えた。

それを見て、了がまたニヤリとする。

「嘘。」

「な……！！！」

すっかりキレてしまったユリは、一気に立ち上がり頬を膨らませた。

「心配して損した！」

寝るわ、おやすみ！」

ぷいと踵を返し、ドアを開けて廊下に出るユリの背中に、了が小さく囁いた。

「おやすみ……。」

その表情が悪戯心いっぱいのニヤリ顔ではなく、目一杯愛おしい気持ちの溢れた微笑だったことを、ユリは見えていない。

ただ微かにだが、了の声は聞こえていた。

その声だけで、了がどんな表情をしていたか、手に取るように解った。

ドアを閉め、廊下を半分歩いたところで立ち止まる。

急に肌寒くなって、腕を摩る。

不意に、了に手を握られた感覚を思い出す。

そして改めて、守られていると、確信した。

多分、了はユリの事を”知っている”のだ。

調べたのかは解らないが、間違いなく、ユリの事を深く知っているのだ。

だから、守る対象に入っているのだ。

そして、先程思った感覚も、確信しかけている。

きっと、了に関する何かを、忘れていたのだ…。

5月1日 1

独りにして、ごめんよ…。

でも、どうしても許せないんだ。

独りは辛いだろう…。

でも、どうしても、許せないんだ。

あの日、お前が汚れてしまった事も、あの日、母さんが消えてしまった事も、あの日、父さんが”アレ”を見て笑った事も…。

だから、消さなきゃいけないんだ。

全て、なかった事にしなきゃいけないんだ。

お前の心が、壊れないように…。

ピピピ…、と、耳障りな機械音が聞こえる。

「ぐう」とも「うう」とも聞こえる音を喉で鳴らして、まだ目を閉じたまま、手で音源を探す。

ひやりと固い何かの手にあたり、指先でボタンを探し、押すと、音が止んだ。

そこでようやく目を開け、手に持っているものを見る。

「五時一五分…。」

口に出して、また目を閉じる。

何故こんなに早くに目覚ましがなっているんだっけ…。

再び見出した夢の中で、ユリが考える。

「あと五分…」と呟くと、耳元で、
「二度寝をするとは、いい度胸だな。」

ユリは心臓が止まりかけた。

慌てて起き上がると、目の前に了がいた。

「なんでいるのよ!!?!?」

ユリが噛み付くと、「オレも泊まったんだ。そんな事も忘れたのか」と了は平然と言う。

「違うわよ！」

なんで私の部屋にいるのよ!?!?」

「オレは朝早くてな。」

そう言つて、了がニヤリと笑った。答えになっていない。

「年寄りみたいな事言わないでよ。」

まともなやり取りを諦めて、ユリが問うと、了が不機嫌な顔を造る。

「年寄りなんだよ。」

起きろ。

朝食食べたらずぐ出るぞ。」

「わかったから、早く出てってよ。」

ドアを指さし、出て行けと急かすと、

「また寝る気じゃないだろうな?」

と、尚も言つので、ユリは「着替えるのよ!!?!?」と叫びながら枕を投げつけた。

が、了は軽い身のこなしで枕を避け、ニヤリと笑って出て行つた。

「…ったくもう!」

どすつと音を立ててベッドから降り、投げた枕を拾う。

つい二時間前に、暗闇の中で話をしたばかりだというのに。

了はいつ寝ているのだろう…。

考えながら身支度を済ませ、居間へ向かうと、クレアがキッチンから出て来た。手にはサラダが盛ったボールを持っている。

「おはよー…。」

「おはようございます。」

「おはよー、クレア。早いわね…。」

につこりと笑うクレアの後ろから、カナエも出て来た。

「何言ってるのよ、恥ずかしい…。」

クレアちゃん、ずいぶん早く降りてきて、食事の手伝いしてくれたんだから！」

カナエに言われ、ユリが頂垂れた。

「うえ…。」

「おう、ユリ。」

背後から匠の声がした。

振り向くと、匠と、その後ろに了がいる。

事務所にでも行っていたのだろうか。

「おはよー…。」

って、そうよ！

なんで、こいつが私の部屋に来るの、誰も止めなかったわけ！？」

ユリが了を指さし、大声で言うのと、匠がニヤリと笑った。

「僕が頼んだからだよ。」

平然と言う匠に、ユリが眉を顰めた。

「ちよつと、何考えてんのよ！」

年頃の娘の部屋に、男を超越すなんて！」

まったくである。が、何を考えているのか、匠は抗議するユリを見ながら大笑いをしている。

了は了で、何食わぬ顔でさつさと席に着いてしまった。

その状況を把握していただろうカナエですら、気にしていない様子でキッチンから「ユリ、あんたも手伝って！」などと言っている。ユリは突き出した指を所在なさげに下ろし、肩を落として返事をする、キッチンへ向かった。

キッチンでは、クレアがスーパの準備をしていた。

「クレア、よく眠れた？」

「はいっ。」

と笑う。

「よかったよかった。」

昨日あんな事があったのだ。

悪い夢でも見ていないかと、心配だったのだ。

ユリが何度か頷くと、コーヒーの支度をしていたカナエが、ユリの顔を覗き込んだ。

「ユリ、あんたクマ出来てるわよ。」

「えっ！ ウソ！！！！？」

「ちゃんと寝たの？」

カナエが心配そうな顔をする。

昨日は、あまりちゃんとは寝ていない…。

「夜中、ちよつと起きちゃったんだよね…。」

「まったく…。」

この商売、体力が勝負だからね。いつでもちゃんと眠れるようにしなさいよ。」

昨日みたいなことがあれば、体力と気力は常に万全にしておかなければならない気がする。

ユリは「はい。」と返事をして、頷いたが、一方で疑問はある。日中は美術館をただ歩き回るだけなので、仕事をしている感覚がない。

探偵といえば、調べ物をしたり、誰かのあとを追いかけたり、というイメージだが、初めての仕事はそのイメージとは明らかにかけ離れている。

初日、匠が「人手が足りないから」という理由でユリが同行することを許可してくれたが、ユリですらただ歩き回るだけなのに、長年この仕事をしてきた匠が、この状況で人手不足と言うのは不自然な感じがするのだ。

そしてユリが歩き回っている間、匠はどこで何をしているのだろうとも思う。

館長室にいるのか？

匠も、了と同じように菅野を怪しんでいるのなら、菅野の様子でも窺っているのだろうか？

第一、ユリが館内を見回る理由が解らない。
館内を把握するだけが目的なのか？

そもそも、警察が出入りしている状況なのだから、それでいいのではないのか？

菅野が匠に仕事を依頼した理由もよく解らない。

だが、それを聞くのは、何故か憚られた。

それは、時折垣間見える、匠や了の不可解な行動ややり取りの所為だと思う。

了ばかりか、匠もが、”男爵”以外の何かを追っているのだ。

そしてそれは、美術館の関係者である菅野やクレア、クレアの父親についての、『何か』なのだ。そしてその『何か』は、”男爵”と関係しているかもしれないとも考えていると言っていた。

どうということなのだ。

例えばクレアだ。クレアの『何か』が、”男爵”と繋がっていると
思うのだ。

そこが解らないのは、未熟だからなのか…？

ユリが考え込んでいると、すっかり無言になってしまったのを自分の注意が原因と勘違いしたカナエが、ユリの背中をポンと叩いた。
「さ、出来た。いただきましょ。」

言われてダイニングテーブルをみると、クレアが用意していたス
ープすらすっかり並んで、男二人はいつもどおり席に着いていた。
カナエに押され、ユリも席に着くと、匠の声を合図に食事が始ま
った。

「蕪木クン、今日は？」

「みなさんを美術館に送ってから、病院へ行ってきます。

そのあと、ちよつと職場へ…。」

了が答える。

「美術館には来ないの？」とユリが訊ねると、「状況次第だな」と

素っ気無い返事が返ってきた。

が、次いで了がニヤリと笑い、「寂しいだろ」とからかった。

「清々するわよ！」

ユリがムキになると、了は満足気に鼻で笑った。しかしすぐに表情を戻し、「ああ、そうだ」と言う。

「今日は北代警部補もいませんので、よろしくお願いします。」

「そうなのかい？」

匠が、言葉とは裏腹な、清々しい顔をした。

「午後から向かう可能性はありますが、専任ではないので…。すみません。」

他の事件との兼ね合いもあるのだろう。了が申し訳なさそうな顔をする。

「蕪木くんが謝ることじゃないだろう？」

匠は笑って、しやりしやりと音を立ててレタスを噛んだ。

「今日は何もない気がするし、適当に過ごすよ。」

館内では自由に動けるのかな？」

「もう動けるようになってると思います。」

ボクも手が空いたら向かいますので。」

「大丈夫だよ。」

また高遠が無理難題を言ってるんだろう？」

そう言って、匠が苦笑した。了も苦笑を返す。

「あの人はいつもなので…。」

話を聞けば聞くほど謎が深まる高遠。

ユリが思わず「そんなヘンな人なの？」と訊ねると、匠がにやりと笑った。

「例えが難しいくらいのね。」

「へえ…。」

ユリが呆けた相槌を打つと、ああそうだと匠が思い出したようにクレアを見た。

「クレアさんには、今日は家で待っていてもらいたいんだけど、何

か用事はあるかな？」

「え、なんで？」

聞くユリに、了が取り皿の底で散り散りになったサラダの野菜を、つんつんとフォークで刺しながら答えた。

「まだ安全の保証が出来ないからな。」

大使館へ連れて行くことも無理そうだから。」

「ここならカナエがいるし、美術館からもそんなに遠くないからね。」

了を補足するように、匠が続けた。段取りは既に出来ているようだった。

「どうかな、クレアさん？」

再度問うと、クレアはふるふると首を振った。

「今日も、特には。」

おじさまの病院へ行きたいところなのですが、行かないほうがいいんですね…？」

「そうだね。」

行っても、検査であちこち回っていて、会えないと思うし。」

匠が答えると、「でしたら、ここにいます」とクレアが頷いた。

「助かるよ。」

カナエ、頼んだよ。」

「はいはい。」

「ユリは、僕と一緒に来るんだぞ。」

元よりそのつもりだ。ユリが返事をする、タイミングよく全員が食事を終え、席を立った。

5月1日 2

「じゃあ、行ってくるね!」

事務所のビル下まで見送りに出て来たクレアに、ユリが声をかける。

「蕪木クンに、病院を出るときにクレアさんに連絡を入れてもらうように言っているから、おじさんの具合については、その電話で聞くといい。」

匠が言うと、クレアは「はい」と言っただけで、あ、ユリさん!」とユリを呼んだ。

「ん?」

駐車場の方角に顔を向けていたユリが、クレアに振り返る。

「手のひら、貸してください。」

クレアが物をねだるように、手を差し出してきた。

「手のひら?」

「はい。」

おどおどとクレアの手の上に自分の手を、手のひらを上にして乗せると、その手のひらに、クレアが指先で何か描き始めた。

形は把握出来ないが、指の動きや感覚から、同じ形状のものを何度か繰り返し描いているようだった。

「?」

ユリが首を傾げると、クレアは手のひらを見つめたまま笑って、

「エル・シ」のおまじないです。」

と言った。

「エル・シ」?

「はい。」

「エル・シ」は、シリリングの神話に出てくる天使の名前です。

その昔、シリリングに雨が降らず、人々が雨を願ったとき、雨の神様が意地悪をして、シリリングの土地を水浸しにしてしまったんです。

そのとき、水を退かせ、雨の神様を叱り、シリングの人々を守護すると約束してくださったのが、”エル・シ”です。」

国土の多くが砂漠地帯だというシリングで、『雨を止ませる天使』が好意的に語り継がれている事に、ユリは少し疑問を持った。

が、他国の神話に文句を言う筋合いはない。

「ふうん…」と言うと、クレアが続けた。指はまだ、動いている。

「シリングでは、安全や幸せを願うとき、”エル・シ”の印である天使の羽を、手のひらに書くんです。

だからこれは、ユリさんの安全を願う、おまじないです。」

言い終わると同時に、指が止まった。

おまじないは終わったようだ。了の車もやって来た。

「…ありがと。じゃあ、今日は”エル・シ”に護って貰うわ。」

ユリが笑うと、クレアもにこりと笑った。

「はい。」

クレアの声に被るように窓が開き、「お待ちせしました」と了の声がする。

振り返り、匠が前に倒した助手席を跨いで後部座席に座る。

「行つてきまーす。」

車内で手を振ると、クレアも手を振り返した。

「行つてらっしゃい。」

車がゆっくりと静かに、クレアの横を過ぎ、大通りへと発進した。クレアは車が見えなくなるまで、事務所の前で手を振り続けた。た。

大通りに出て暫くして、それまで無言だった匠が口を開いた。

「しかし、いいのかい、蕪木くん？」

今日こそ、美術館にいたいんじゃないのかな？」

真後ろにいるユリには見ることは出来ないが、声の調子から、いつものヘラヘラした匠ではない気がした。

匠の言葉に、了も普段より低い声で答えた。

「いたいですよ。だから可能な限り、合流するつもりでいます。」

「職場の用事は、他に任せられないのかい？」

「そうしたいところなんですけど…。ボク以外にやれる人間がいなくて。」

「そこまで聞いて、ユリが口を挿む。」

「ねえ？ 何で『今日こそ、美術館にいたい』の？」

「秘密。」

了が即答したので、ユリが口を尖らす。

「なによ…。」

「行けば解るさ。美術館にいるんだから。」

「絶対解らないと思うわ。」

了の付け足しにユリがむくれると、ミラー越しに了がニヤリと笑った。

「頭悪いからか？」

「失礼ね！！」

そのやり取りに、匠はいつもどおり大笑いをした。

そして、間もなく美術館の正門に着いた。

「着きました。」

了が車を停めると、素早く匠が降り、座席を倒す。

「ありがとう、今日も助かった。」

ユリが降りるのを待って、匠が席を戻しドアを閉める。

了が運転席から助手席の下ろした窓の向こうの匠を覗いた。

「では、何かあったら、美術館のほうに連絡しますので。」

「うん。」

匠は頷き、左手を軽く上げて、美術館へと歩き始めた。

ユリも匠について歩き出し、少し振り返って「じゃあね」と手を振ると、了が慌てて呼び止めた。

「ユリ。」

「ん？」

立ち止まり、よく見ると、了は困惑した表情を浮かべていた。暫し了の言葉を待つが、何かを躊躇っているのか、何も言わない。

「……………」

「……なによ…?」

痺れを切らしたユリがわざと不機嫌な顔を見ると、了は苦笑し「いや、なんでもない…」と答えて、運転席で座りなおすと、走り去ってしまった。

「…?」

首を傾げつつ振り返ると、匠の姿は既になく、ユリは慌てて美術館へ向かった。

何を言おうとしたのだろう。

昨日から何か変だ…。

何か訊ねても、今まではただ単純に部外者のように扱われただけだと思っていたのに、昨日は明らかに何かを隠していると見え見えで、そして隠し切れずに見えてしまった部分を、了や匠が慌てて隠していた。

了に於いては決して深く知る仲ではないが、了も匠も、隠すべき事を迂闊に隠しそびれる事自体に、無縁の人物のような気がしていた。

だから違和感がある。

自分を包む世界が、急にバランスを崩したような気がする。

今日もその延長なのだろうか。

隠し事の幾つかは、いつか教えてくれる、と約束したが、果たしてそれは守られるのだろうか。

不安に思えてくる。

自分を取り巻く状況にも、交わされた一つ一つの言葉の確実性に對しても…。

加えて、あんな事があった昨日の今日なのに、了が近くにいない。まったくそんなつもりはなかったのに、こんなに心が依存していたのか、と自分でも驚くほど、了がいないという状況に心細さを感じている。

からかわれ、清々するとムキになった事を後悔するほど、手元が

すかすかとし、足元が不安定に揺れている気がする。

しかし一方で、そう思う自分が許せない。

もしが、今日美術館に来たら…。

（泣くほど嫌味言ってやる…）

5月1日 3

職員通路に入ると、突き当りの館長室のドアの前に、警官が二名立っていた。

昨日も一昨日も館長室に見張りは居らず、昨日の菅野の件を期に見張りを立たせたのかと思った。

また止められるのではなからうかとユリがおどおどと近付くと警官が会釈をしたので、ユリはほっと胸を撫で下ろし、館長室のドアを思いつき開けた。

「叔父さん、ごめん。立ち話しちゃった……って。」

いつもいるソファセットに匠の姿はなく、次いでガタリとデスクのほうから物凄い音がして、ユリは驚いた。

「……！」

見ると、見知らぬ中年の男性が一人、ユリと同じように目を見開いて、ユリを見ていた。

が、男性はすぐに気を取り直したようで、すっと冷たい表情をすると、「何者だね……？」と問うて来た。

ユリはまだ驚いていて、「え……あ……」と声を出すので精一杯な状況だった。

（どうしよう、探偵って言うていいのかな……。）

悩んでいると、さらに男性が「こんなところで何をしているのかね？」と、あからさまに嫌悪感を湛えた態度を取ったので、勝気なユリの性格が、つい出てしまった。

「あなたこそ、どちら様ですか？」

「名乗れない者に名乗る必要は認められないな。」

警官を呼ぶぞ。」

この手のやり取りは、初日に了との事で免疫がある。

ユリが鼻で笑って「どうぞ、ご自由に」と言うと、その言葉に被さるように、匠の叫び声が聞こえた。

「あああ！！っと。」

バタバタと足音もして、振り返ると、入り口で匠が物凄く慌てていた。

「叔父さん！」

ユリが泣き付くより早く、匠が男性に深々と頭を下げた。

「申し訳ありません、大使！」

彼女は私のアシスタントです。」

匠が『大使』と呼んだ男性は、匠の言葉を受け、ユリを睨み付けた。

「アシスタント？」

凡そ信用していない口ぶりに、尚も言い返そうとしたユリの頭を、匠ががしつと掴んで無理矢理お辞儀をさせようとする。

「コラ、ユリ、ご挨拶しなさい！」

「え？ あ、えと……、芳生 ユリです。」

言われて、悔しさと唐突さに口箆って挨拶をすると、大使と呼ばれた男はまだ納得していない表情を浮かべたまま、しかし、口の端をきゅつと噤んで、「シリング駐日大使のバークレイだ」と答えた。「クレアがお世話になっているようだね。当日までよろしく頼むよ。」

娘の話だというのに、表情も、傲慢な態度も変わらない。

ユリは言い返す代わりに、きつとバークレイを睨んだ。

「お任せ下さい。」

バークレイは気に入らないものでも見るようにユリを一瞥したあと、匠を見て、

「芳生さん、病院へ向かう前にこの部屋で調べ物があるので来たのだが、ちよつとデリケートな物でね、人には余り見せたくない物なんだが……。」

と言った。

出て行ってくれと遠まわしに言っているのは、ユリにも解って、余計な怒りが沸々と湧き上がる。

そんなユリの様子を十分察している匠は、早口で返事をする。
「解りました。」

では、私たちは暫く部屋を離れますので、何かありましたら、外の警官にお知らせ下さい。」

「わかった。」

バークレイが頷くと、匠はユリの手首をぐっと掴んで引っ張った。

「さあ、ユリ。」

「あ、うん。」

促されるまま、館長室を出、ドアが閉まったのを確認して、ユリが匠に詰め寄る。

「叔父さん、何なのよアレ…。」

一瞬怯んだ後、「いや、参ったね。」と苦笑して、匠はエントランスへと歩き始めた。ユリも追う。

「今朝早くね、蕪木クンに連絡が来たんだ。

急遽、大使が美術館を来訪するって。

で、蕪木クンはその裏の事情を探るべく、職場に戻っている、と。」

「

少しだけ声を潜ませて、匠が説明をした。

「裏の事情？」

「そ。」

館長と大使が友人関係なのは知っているだろ？

でも、館長が今入院している事は、大使の耳にも入っているんだ。現に、さっきもちらりと言っていたけど、このあと大使は病院に向かうらしいしね。」

なのに、わざわざ美術館に来るのは何故か？」

くるつと首だけ回して、匠がユリを見た。「わかる？」と言いたげな表情だが、実際ユリには何故かわからない。と言うより…。

「…それって、そんなに怪しいこと…？」

正直な感想だ。

「うん、一見特に怪しくはないんだけどね。」

まあ、色々と秘密を知っている蕪木くんにとっては、怪しさ溢れるってところみたいだな。」

「考えすぎだと思っけど…。」

ユリがつまらなさそうに言っと、匠がふふと笑った。

「蕪木さん、職場で調べ物してるの？」

食事中の会話では、高遠が了を呼び出していた風だったが。

「みたいだね。」

今朝、連絡が来るまでは、昨日と同じようにこっちに来る予定だったんだけどね。」

「ふうん…。」

生返事をして、ユリが続ける。

「そつえば、昨日夜遅くまで起きてたみたいね。アイツ。」
すると、匠が意味深にニヤリと笑って、ユリに振り返った。

「ほう。ユリもやるなあ…。」

「何考えてるのよ！」

目が覚めちゃったから、お水飲もうと思って下降したら、たまたま起きてたのよ！」

半分照れながら本気で言い返したユリに、匠が悪戯っぽく笑った。

「ま、冗談はともかく、彼はあんまり寝ないらしいからねえ。」

その言葉に、ユリがどういう事か訊ねる。

「やる事が沢山あって、寝る時間がないらしいよ。」

一日三時間くらいの睡眠時間で生きてるらしい。」

言った後、匠はしみじみと「若者は凄いなえ」と感心した。

「そういう問題じゃなくない…？」とユリが突っ込む。

それにしても…。

「一日三時間しか寝てなくて、死なないものなのね。人間って凄いわね…。」

妙な点で感心を見ると、匠もいい加減なもので、「凄いなえ…」と頷いた。

そして間を開けて、ふと思いついた。

朝、言っていた事の意味を漸く理解したのだ。

了は、バークレイがいるから美術館に来たかったのだ。

しかし、館長室で、大使ともあるう人物が探し物とは、一体どう
いう事だろう…？

「ねえ。」

昨日の件で、館長室つて捜査が入ってるんじゃないの？」

何か聞けると思い、ユリが訊ねると、匠が肩を竦めた。

「入ってると言っても、押収物は精々、スケジュール帳とか、日記
とか、そういう類に留まったようだからね。」

特に怪しいものは出なかったらしい。」

「って事は、一見怪しくない物だけど、見られたくない物を探して
るって事ね…。」

ユリの推測に、匠は振り返りもせず「そういうことになるねえ」

と答え、「ま、ああいう人が相手のときは、深く詮索しない方が身
のためだけだね」とさり気なく忠告する。

察していたようだ。

「だって気になるじゃない！

あんな態度取られて！」

ユリが言い返すと、匠が歩きながら振り返り、面白そうに笑った。
「それはお前が、大使の弱みを握りたいだけだろ？」

そっというのは、危険だよ。」

顔は笑っているが、最後の一言は本気のようにだった。

探偵と言う職業柄なのか、元々の素質なのか、匠は妙に勘がよく、
危険を察知する能力に優れていた。

それを思い出すと、匠の忠告は、ユリにとっても怖いものだ。
すっかり意気消沈してしまったユリは、「否定はしないけど…」
と、それ以上突っ込まなかった。

すると、ユリが落ち着くのを待っていたのか、匠がわざとらしく
声を上げる。

「おっと。」

適当に歩いてたら、中展示室に来てしまったな……。」

見ると、いつの間にか二階に上がり、展示室をほぼ一周してしまつたようだった。と言う事は、それなりに時間は経っているのだから。

「そろそろ探し物終わつてるんじゃない？」

ユリが言つと、匠も頷いた。

「そうだな。戻ってみるか。」

5月1日 4

あれだけ低頭していたにも拘らず、匠はノックもせず、館長室のドアを開けた。

「大使……」

突然ドアが開いたので、デスクで探し物をしていたバークレイは大層驚いて、デスクの上にあったペン立てに手をぶつけ、豪快に倒した。

「っ……！」

が、偶然バークレイの手元を見ていたユリは、その瞬間に彼が何かを後ろ手に隠したのを見た。

「……と、まだ終わってませんでしたか。失礼しました。」

もう一度出ますので……」

匠がぼりぼりと頭を掻きながら退室しようとする、匠の背中にバークレイが声をかけた。

「いや、いい。」

ちょうど見つけたところだ。」

そう言って、後ろに隠した手を、するりとポケットに突っ込んだ。

（何隠したのかしら……。）

自慢ではないが、動体視力はよい。

手を後ろに隠す瞬間、遠目にも見えたのは、白い小さな箱のようなものだった。

「そうですか。」

では、病院へ向かわれますか？ お迎えがないようでしたら、刑事が何人かおりますから、送らせますが……」

匠が言っと、バークレイが頷いた。

「ああ、そうだな。頼むよ。」

バークレイの返事に、ユリが小さく首を傾げた。

大使ほどの人物が、迎えもなく移動をするのか……？

そもそもここへはどう来たと言つのだろうか？
歩いてか？

ユリの疑問を他所に、匠が答える。

「わかりました。」

じゃあ、ユリ、留守を頼むよ。」

「はい。」

ユリが返事をする、と、匠とバークレイは館長室を出て行つた。
すれ違い様、バークレイがユリを一瞥した。

バークレイを目で追っていたユリと、視線が合う。ユリは悪戯の
ばれた子供のように肩を竦め、俯き加減でバークレイを見上げ、バ
ークレイは表情一つ動かさず、早々にユリから目を離した。

まるで取るに足らないものを見たかのように。

ドアが閉まると、息を止めていたユリが大きく溜め息を吐いた。

「はあ……。ずいぶん横柄な大使さんです事……。」

首をぐつと下げると、首筋が痛んだ。

相当に緊張していたようだ。すっかり凝つて、今更ながらに攣り
そつになつてゐる。

ぐるりと首を回すと、ぐにゅ、と奇妙な柔らかい音がした。

「しかし、何探してたんだらう。慌てて隠してたのは箱みたいだ
つたけど……。」

首を解しながら、デスクに近付く。

ペン立てが倒れたままなので、元に戻した。

デスクの上はそれ以上散らかつてはいないので、探し物は引き出
しの中にあつたのだらう。

念の為、いくつか引き出しを開けてみるが、漁つた様子は見受け
られなかった。よほど丁寧に探したのだらう。

匠の忠告ではないが、これ以上の詮索は無理な気がして、引き出
しを閉め、ソファに腰を下ろす。

窓の外はやつと”早朝”ではなく”朝”という明るさになった。
何の事情かは知らないが、何故ここまで早く館へ向かわなければ

ならないのか…。

館内は空調と、微かな足音以外、何も音がしなかった。人気を感じない訳ではないが、寝静まった朝方の家によく似ている。

空気は透き通っているのに、重く冷たい。

ぼうつとしてしていると耳鳴りがした。きっと静か過ぎるのだ。

「じっとしてるのも退屈だし、一周りくらいの間なら、ここを空けても大丈夫でしょ。」

伸びをしながら立ち上がると、足早に館長室を出、エントランスへ向かう。

南向きのエントランスは、清々しいほどに朝日が差し込んで、床がキラキラと光っていた。

一昨日、ここでクレアを初めて見た。

長い髪を靡かせて歩くクレアは、とても綺麗な人形のように見えた。

そのクレアを、鋭い視線を向けて追う了の横顔も、思い出した。

あのとき、了の表情から感じた事、今思うと、間違いではなかったと思う。

了はあの時点でクレアの過去も知っていて、クレアがこの美術館を訪れる事を待っていたに違いない。

それは、了が追う”何か”についての情報を得るために必要な事だったのだ。

ユリは、ふう、と息を吐いて、まだ動いていないエスカレータを昇った。

二階は警官や刑事が多かったなので、そのまま三階へ向かった。

三階はまるで人気がなく、灯りも最低限しか点いていないので、少し暗かった。

ラウンジを覗くと、偶然見てしまった了の横顔を思い出す。

あの寂しそうに、苦しそうに歪んだ横顔を。

あの手に握られた口ケットは、了にとって、どんな存在なのだろう。

う…。
了は、いつ来るんだろう…。

5月1日 5

ラウンジを後にし、セレモニー・ホールを覗き込んだ。

すっかりブルーシートは外れていて、豪華な装飾の施された柱や窓が露わになっている。

その窓を眺めていると、斜め上の方、ちょうど庭に真正面に向く壁の天井付近に、カーテンに隠れた小さな窓があることに気付いた。近付き、カーテンを除けると梯子がついていて、窓まで昇れるようになっていた。

ゆっくり梯子を昇り、窓までたどり着くと、窓は思いのほか大きく、窓辺はユリくらいの体型の人間なら座れるくらいの広さがあった。

ユリは窓辺の足場に腰を下し、窓から外を覗くと、六角塔の屋根が真下に見えた。

「屋根上へ出られるようになってるのね!」

梯子がカーテンにすっぽりと隠されていたから、恐らく普段は使用禁止なのだろう。

しかし…。

「いい眺めねえ…。」

ユリは溜め息をついて、窓に凭れた。

柔らかな朝日に照らされて、中庭の芝生に付いた朝露が輝いている。

遠くに見える高層ビル群が、朝靄の所為で空と同化しそうになっている。

「退屈したら、ここに来ようかしら。」

口に出して、いいアイデアだと思った。

ユリは暫しぼつと景色を眺めたあと、もう一度溜め息をついて、中庭を見下ろした。

ガヤガヤと声がして、警官と刑事と思われる人物の数名が、美術

館を出て行くのが見えた。

捜査がひと段落着いたのだろうか。

ユリは注意深く梯子を降り、エスカレータを下って二階へ下りた。案の定見張りの警官数人がいるだけで、二階はすっかり人気がなくなっていた。

今だとばかりに特別展示室に入る。

やはり南向きの特別展示室には眩い朝陽が差し込み、昨日はブルーシートで見えなかったが、部屋のある中心にある円形の舞台が、まるで演劇舞台のようだった。

ベランダに出ようと窓に手をかけるが開かないようで、窓越しにベランダの足場を覗き込む。

昨日はここで、菅野のカフスを見つけたのだ。

そして当の菅野は、このベランダの真上の屋根の上で、気絶していた。

カフスが落ちていたのは、ここで揉み合ったからなのだろうか。しかし、監視カメラの映像には、揉み合った様子は映っていないかった。

だったら、屋根上に運ばれたときに落ちてしまったのだろうか。そして、暗闇の中に映った二つの人影は、館長と犯人のものだったのだろうか。

犯人は菅野の顔見知りか？

それとも、あの人影は二つとも犯人のものなのか…？

だとすると、犯人は複数なのか？ しかし、ほかの時間に人影が映った映像はなかった。

（…難しいわね…。館長の証言ですべてはつきりするんでしょうけど。）

展示会まであと三日。

男爵は来るのか…。本当に”紅い涙”を盗み出す気なのか…？

（私たちはちゃんと守れるのかしら…？）

「不安だな…。」

思わず声を漏らすと、背後から声がした。

「不安になっちゃったか？」

「！」

驚き、振り返ると、了が立っていた。

いつもどおり眠そうに、そして少し、ニヤリと笑って。

「また迷子かと思っただけど、大丈夫そうだな。」

「な…っ、大丈夫よ！ 失礼ね！」

嫌味でも言っただろうかと思っていたのに、いざ目の前にいると、安心して何も言えない。

ユリがぐっと言葉を飲み込み、頬を膨らますと、了がふふんと笑った。

「職場に行ったんじゃないの？」

まだ機嫌が戻らない、というむくれた表情のままユリが問うと、了がすつと真顔になった。

「思いの外、用事が早く済んだ。」

「病院は？」

「行って来た。」

「早いわね…。」

ユリが言うと、了が怪訝な顔をした。

「早いわねって、お前、今、何時だと思ってるんだ？」

「え？ まだ十時になってないんじゃないの？」

答えると、了が額に手を当てた。

「時計くらい持ち歩けよ。もう昼過ぎだぞ。」

「ええええ！！！！？」

そんな長時間ウロウロしていたのだろうか。もしか、セレモニーホールの窓辺で眠ってしまったのでは…。

ユリがショックで絶句していると、了がニヤリと笑った。

「もうちょつと体内時計を鍛えたほうがいいんじゃないか？」

「うっさいわね！」

からかわれ、拳を握り締めて抗議する。

が、やはり嬉しくて、安心してしまつて、それ以上抗議する気にもならない。

いつの間に、こんな風になつてしまつたのだろう…。

抗議が止んだのを確認して、了が館長室に戻ろうと提案した。

ユリは当然素直に従う。

相変わらず早足の了のあとを、ユリが少し小走りで追う。

高い身長と、大きな背中と、すらりとしたバランスのよい肢体と、さらさらと揺れる髪。

見上げて追いながら、ふとまた小指に目をやる。

傷はなくなつていて、その代わり、赤いインクが付いていた。

今日はきつと、もうどこにもいかない。

傍にいてくれる。

そう思い、ユリはそつと胸を撫で下ろす。

このまま、もう何もなければいい…。

何もなければ…。

5月1日 6

いつの間にか稼動していたエスカレータを使って、一階へ降りる。
「そういえば、菅野館長、どうだった？」

ユリが訊ねると、前に乗っている了が、振り向きもせずに答える。
「検査はどれも特に異状なし。」

ちよつと腹部がまだ痛むらしいけど、内臓にも影響はなかったらしいし、打撲の痕が消える頃には、痛みもなくなってるだろうって。

「
どういう経緯で襲われたかはさておき、その程度の怪我で済んだのは幸いと言うべきだろう。」

「そっか。よかった。犯人については？」

「ん？」

了が口籠った。

「うん…。」

「…何？ 見てないの？ 犯人。」

さらに聞くと、了は少しだけ首をこちらに向けて、すぐ戻した。表情までは見えなかったが、戸惑っているようだった。

「いや…。」

「何よ？ 私は聞いちゃいけない事？」

口には出したが、ユリにも解っている。

もしそうなら、即答する筈なのだ。

「そういうんじゃないんだが。判断しかねるところでな…。」

煮え切らない了の答えに、ユリは眉を顰めた。

それから了は、「芳生さんと会ってから、話すよ」と言っただけ、口を閉ざしてしまった。

程なくして到着した館長室は、ユリが出たときのままの状態で、匠の姿も見えなかった。

「あれ？ 叔父さん、まだ帰ってきてないのかな？」

ユリが言つと、了が神妙な顔をする。

「どこかへ行つたのか？」

「うん。」

大使を病院に送るつて、さつき出てつたのよ。」

「病院に？」

そう言つて、了は顎に手を当て、考え込んだ。

「聞いてないの？」

「ああ、予定では、今日は一日美術館にいて、職員と美術品の確認をするつて話だつたんだが……。」

ユリがバークレイから直接聞いた話とは、ずいぶん違う。彼は、病院に行く前に探し物があるので、美術館に来たと言つていた。

「そうなの？」

あ、そつえば、館長室でちよつと怪しげな感じだつたけど、何か関係ある？」

ユリが、今朝大使が探し物をしていたと思われるデスクを見ながら言つと、了が「どんな風に？」と問うた。

「うーん。」

なんかね、探し物があるけど、人に見られたくないものだからつて言つて……。

私たちは一旦部屋を離れたんだけど、途中で戻つたら机で何か探してて、見付けたみたいなんだけど、隠しちゃつたのよね。」

箱のようなものが見えた事は、伏せた。

内緒にしておきたかつた訳ではない。不確実な情報であるので、出さないほうがよいと思つたのだ。

振り返ると、了は無言のまま、ユリの視線に倣つてデスクを見つめていた。何か考え事をするときにする、鋭い目付きだ。

そのままソファに腰を下ろし、睨み続ける。

ユリも了の向かいのソファに座り、暫し黙つて了を見つめていたが、それも耐えられなくなつた。

「……ねえ。」

恐る恐る声をかけると、了の表情があつという間に元に戻った。

「ん？」

「叔父さんが言ってたわ。あんたが大使を疑ってるって。

この事も私には話せない？」

今朝、美術館にバークレイが訪れるという事に対して了が抱えている疑問や疑い。ユリのような素人が首突っ込んでよい訳がない事くらいは承知している。

それでも聞きたいのは、了と何かを共有したいという無意識から来る感情なのかもしれない。

ただそれだけの事で、という後ろめたい気持ちも、ない訳ではない。

訊ねるユリに、了が困惑の表情を浮かべた。

「もしかして、昨日の夜、クレアが怒っていた事とも、関係があるんじゃないの？」

言葉にする事で、確信へと変わる。

どんなに了が知らぬ存ぜぬと隠しても、きっと、そうなのだろう。ユリが堪え切れず顔を強張らせると、了はやれやれと言った表情で苦笑いをし、呟いた。

「あまり、余計な事に関わらせたくないんだよなあ……。」

しかしとても小さな声だったので、聞き取れなかったユリが「ん？」と聞きなおすと、了はさらに苦笑して「いや……」と首を振った。「俺の捜査に差し障りがあったら困るから、詳しくは話せないなあ、と言ったの。」

聞き取れなかった上に、こちらのほうが了らしい理由だったので、

「……まあそうね、当然だわ。」とユリも納得した。

すると、了がニヤリと笑った。

「お、物分かりがいいな。」

馬鹿にされてむつとはしたが、自らも言ったとおり、当然の理由だ。

「当然でしょ。」

今回の私の仕事は、”男爵”から”紅い泪”を護る事だもの。

大使が怪しいとか、そういうのは専門家に任せればいいわ。」

言っと、了が吹き出しそうになるのを必死に堪えて、「いい心が
けだ」と言った。

「無理やり納得してるのよ！

ほんとはすつごく知りたいんだから！」

ユリが膝をトンと叩くと、了がまた苦笑した。

「悪いな。立場が立場だけに、俺から話せる事は結構少ない。」

「いいわよ。」

本当はよくない。

だが、我が侘は、やはり言えない。

野次馬心が完全に退いた訳ではないが、困らせたとこで何がど
うなる訳でもない。

5月1日 7

「おや。お邪魔だったかな？」

話が終わるなり声がして振り向くと、いつからいたのか匠がドアに寄りかかり、ニヤリと笑いながらこちらを見ていた。

「またそういう下らないこと言う。お帰りなさい。」

ユリが呆れた。

了は特に表情も変えず、「お帰りなさい」と出迎える。

匠は、「ただいま」と言っユリの隣のソファに座り、前屈みになった。

「さて、今日は僕ら水入らずってところかな？ 北代警部補は、今日は来るのかい？」

朝、了から来ないとは聞いたが、念を押す。

「どうでしょう。昨日の館長襲撃事件の捜査も兼任するそうなので、今日はこちらには来ないかも知れませんが。」

さつき病院で会いましたし。」

了が答えると、「それはいい感じだな」と匠が満足気に笑った。

「なんで？」

ユリが訊ねる。

「だって、僕らの捜査ごっこに、茶々を入れる人がいないだろ？」

「ここにいるじゃない」とユリが了を指さした。了がとても不機嫌な顔を見ると、匠が大笑いをした。

「そりゃユリに限った事だから。」

匠が言くと、了がしてやったりという顔で笑った。

「な……！！！」

飽く迄もユリは弄られ役のようだった。

気の済むまで笑ったところで、匠がぽんと手を叩く。

「さて。何から始めようか？」

匠の言葉に、了が素早く応えた。

「そうですね…。取り敢えず、今日病院で聞いた、菅野館長襲撃事件に関する情報から行きましようか。」

「そうだね。」

匠が頷く。

「とはいえ、肝心の捜査状況については教えてもらえなかったんで、館長の話だけですけど。」

結論から言ってしまうと、犯人の事は見ていないのだそうです。」

「え!？」

了の言葉は、ユリにとっては意外なもので、匠にとっては予想の範囲内のものだった。

「興味深いね」と匠が含み笑いをすると、了が深く頷く。

「はい。昨日はたまたま忘れ物があって、二三時少し前に美術館に戻ったらしいです。」

職員室の前にある職員通用口から入って館長室へ行き、探し物をした後、〇時前に再び通用口から出ようとした時、二階から物音がしたため向かったそうです。」

「なるほど」匠が頷いた。

「二三時より前に美術館に侵入した」誰か」が、たまたま戻ってきた館長の存在に気付かず、つい物音を立ててしまったのが〇時前。そこへ館長が現れたので、腹部を殴ったか蹴ったかして気絶させ、屋根上へ運んだのか。」

姿を見られないように、器用に。

まあ、方法はともかく、そうなったのならやり方はあるんだろう。タイピンもその前後に落ちたんだろうね。」

夜は警備員の見回りがあれど、灯りは全て落ちている。

暗闇の中、菅野が二階へ向かう姿を想像する。しんと静まり返り、誰もいないと思っていた館内で物音がした。ユリなら二階へはいけない気がする。

ユリが小さく肩を竦めると、匠が膝に頬杖をついた。

「しかし、何で屋根上にいたんだろうね?」

「発見を遅らせるために、犯人が上げたんじゃない？」

当てずっぽうな訳ではないが、人が物を隠すのは、大抵何か『拙い事態』を恐れるときだ。

今回の場合、襲撃をした相手を隠したのだから、やはり事件の発生を隠すか、事件の発見を遅らせたかったかのどちらかなのだろうと思う。

だが、匠が何故かきょとんとして「なんの？」と訊ねてきたので、ユリは言葉に詰まった。

「なんの、って、館長の…。」

答えると、匠がぐにゅりと頬が凹むくらい脱力しながら頬杖をついて、

「僕だったら、屋根上にわざわざ運ぶくらいなら、殺しちゃうけどなあ…。」

と物騒な事を言った。

「怖いこと言わないでよ！」

ユリが身を乗り出して抗議すると、匠が身を退いて降参をするように「すまんすまん」と両手を挙げた。

が、すぐに姿勢を戻して続ける。

「でも、違わないか？」

確かに、人間ってのは無意識に下ばかりを見るらしいから、上に物を隠すのは証拠隠しには有効なんだ。

でも顔を見られた可能性はゼロではないんだ。

気絶した館長を発見されなかったために屋根上に運んだところで、生きていた時点で何の意味もないんじゃないか？」

言われると、そうだ。

菅野が生きている時点で、いつかは目が醒める。目が醒めれば、助けを呼ぶだろう。

事件の発見を遅らせたところで、目撃者である菅野が生きて証言をすれば、いずれは捜査が身辺へ及ぶだろう。

「…うーん…。」

ユリが眉間に皺を寄せる。

困っているユリを見て、「まあ、これは極論だけどね」と匠が笑った。

そこで聞き手に回っていた了が口を開く。

「その不自然さを疑うなら、それ以前に、館長が襲われた瞬間の映像を、どのカメラも映していないという事です。

証拠があるのは館長だって解っていますからね、わざわざ嘘を吐くとは考え難い。という事は、殴られた、あるいは蹴られたか知りませんが、襲われて気絶した事も、証言として出てきた時間も、”事実”と見ていいかと。

しかし映像には残っていない。」

飽く迄も、菅野が”記録が残っていない事を知らない”事が前提ではあるが。

「誰かがカメラに細工した？」

「細工するなら、最初から全てが映らないようにすればいい。今回の場合、『一部だけが映っていない事』が不可解なんだ。」

ユリと了の二人で確認した監視映像。

全てをきちんと確認したわけではないが、確かに決定的な瞬間を映した映像は見当たらなかった。

「そして、もう一つ、三時頃の監視映像に人影が二つ映っている事です。

館長の証言が真実である場合、少なくとも三時の映像に映った人影のどちらも、館長のものではない事になります。」

「謎かけだな。素直に犯人は二人いたと見るべきか、否か……。」

匠が顎を摩った。事態をめいっばい楽しんでいる表情をしている。バタバタしていて、全ての監視映像をチェックした訳ではないので、館内に設置されたすべての監視カメラの、昨夜二三時〜今朝四時までの間の映像を、今警視庁で解析しています。

結果は、明日には出ているかと。

暗視モードは備わっていないようなので、あの暗闇の中を動く人

影やら何やらは、思ったほど詳細には解析出来ないうけど……。ただ、それでもやはり館長の証言の真偽くらいは判断出来ますからね。

それにここは、職員通用口に警備員の配備がない代わりに、通用口の開閉を例のセキュリティ・カードで行う事になっています。これは必ず使用すれば記録に残る。この記録を改竄するには、セキュリティ・ルームと、警備会社のシステム両方に手を加えなければなりません。

ただ、まだこの記録システムの確認が終わっていませんが……。状況を考えると、やはり嘘は吐いていないと見るべきかと。」
了はどうしても、この状況で菅野が虚偽証言をするとは思えないようだ。

「うんうん」と匠も頷く。

「新しい情報はこのくらいです。」

ユリは何か質問あるか？」

一度区切って、了がユリを見た。

「なんでもいいの？」

「なんでもいいぞ。」

了がにこりと笑った。

「結局、館長襲撃事件に”男爵”は関係あるの？」

ユリは、一番知りたい事を真っ先に聞いた。

菅野が襲われた事より、寧ろその現場に”男爵”のタイピンが落ちていた事のほうが、重要度としては高い気がする。

「そのあたりは、まだなんとも言えないな。タイピンも、”男爵”本人がそこにいたという確証にはならない。

監視映像に映り込んでいたマントのような布状の影にしてもそうだし、人影に至っては関連付けるほうが難しい。」

改竄された可能性のある映像は、証拠能力がないと見做される。映るべきものが映っていないのは、何がしかの不具合が起こった場合を除いては、手が加わったものとみるべきなのだろう。

「半々って感じだなあ。」

状況とは裏腹に、了は暢気に言う。

「ねえ、例えば、館長が証言した時間が間違ってるって可能性はないの？」

ユリの問いに、了が首を傾げる。

「？」

「映像による証拠がない以上、館長の証言だって一〇〇%真実とは言えないじゃない？」

もちろん今の時点で、の話だけど。」

本人が嘘を吐いていなくても、勘違いによって、結果証言に信憑性がないと判断されるケースは、決して珍しくない。

「館長の証言した時間が嘘だと……。」

「うん。嘘か、勘違いかは判らないけどね。」

まず、タイピンが落ちた〇時、つまり館長が物音を聞いて、二階へ行って、襲われた時間ね。

実はその時間には、まだ館長は美術館にいなかったとしたら、どういう事が考えられるかしら？」

つまり、美術館に来たのは本場で、二階に行ったのも本当だけど、その時間は〇時前じゃなくて、もっと後、例えば、二つの人影が映った三時頃だったら？」

それこそ、匠は元より、了や警察が想定していない訳ではないだろう。でも、ここにいる誰も、それを疑う仕草を見せなかったのが、ユリには解せない。

「つまり……」と匠が促す。

「そうしたら、二二時に二階を歩いていたのは誰？」

三時の人影のうちの一つが館長なら、犯人の顔は本当に見てないの？

時間について嘘を吐く、あるいは勘違いをする理由って何？」

言いながら、もしかしたら、この推測をユリにさせたかったのではないかと思えてくる。

「もし、ユリの仮説こそが真実だとしたら、昨日の出来事に関係しているのは、二人しかいない可能性も出てくるね。」

つまり、二二時に映った人影と、三時に映った人影のうちの一つが、同一人物である可能性。」

実に楽しそうに言う匠に、了は真顔で「そうですね。」と答える。

「ま、いずれにしても、解析結果待ちかな、この辺りは。」

匠があっけらかんと言うと、ユリも頷く。

「そうね。私も思いつきで言っただけだし。」

そう簡単に真実を推理出来るほど、ユリは自分に才能はないと思っている。

ただ可能性は可能性として認識しておくに越したことはないと思う。

菅野の証言が全て正しい可能性。

菅野の勘違いが含まれる可能性。

菅野が偽証している可能性…。

真実までは、まだまだ辿り着けそうもない。

5月1日 8

次に聞いてみたい事といえば、バークレイ大使のことだ。思い出すたび、あの横柄な態度に苛つとする。

「大使について、聞いてみたいわ。偉そうな人で好きじゃないけど。」

「ユリが言っと、匠が発言権を求めて手を挙げた。」

「じゃあ僕から、大使を送った時の感想でも報告しておこうかな。」

「それなら、まず大使がここへ急に来る事になった経緯から聞いてみたいわ。」

ユリは匠の拳手を却下し、了を見た。

了は、「その辺りは、俺も詳しい事は聞いてないからなあ……」と言いながら、腕を組んでソファの背凭れに深く埋まる。

「今朝四時くらいに大使館から俺の上司に連絡が入ったんだ。」

「美術館を見て回りたいから、入館許可を貰えないか」と。

最初は美術館に連絡したらいいんだが、当然その時間じゃセキュリティ・ルームにしか人はいないし、許可も出せないから断ったらいいんだが、どうしてもという事で、今度は外務省経由で警視庁に連絡が入った。

で、北代警部補からうちの上司に連絡が入って、俺に連絡が回ってきたのが五時過ぎくらいだ。」

話を聞きながら、了はやはり警察の人間ではないような気がした。「その話を聞いた当初は、ただ美術館を見るという話でしかなくて俺も、恐らく外務省ですらも、その予定でここへ来たという認識しかないはずだ。」

病院へ、か……。目的は、菅野館長、だろうな……。」

「友達だし、病院に行くこと自体はフツーよね？」

ユリの言葉に、了が「まあな」と頷いた。

だが、「ただ……」とも続けた。

「色々、怪しい点はあるよね。」

匠が言う。

了も再度頷いて、「そうですね」と答えた。

「大使って、どういう人なの？」

さつき会った限りでは、ずいぶん偉そうに物を言う人って印象だけだ。」

ユリの問いに、了がさらに考え込みながらソファに埋まった。表現に困るような人物なのだろうか…。

「うーん。」

外交員や、大使としては、優秀な人ではあるんだ。

ただ、昔から相手を見下して物を言う人ではあったかな。」

話し方から察するに、了と以前から知り合いではあるのだろう。

「あの人が、菅野館長と仲良しだなんて、想像出来ないわよね。」

「ただ、聞いた話だと、大層な家族思いとも言われているからな。」

それは意外だ、という表情でユリが「ふうん」と頷きながら、「その割には、今日会ってもクレアの事、聞いて来もしなかったけど？」と言うと、了がニヤリと笑った。

「余程お前の心象が悪かったんだろ。」

「な!!!!!!!!!!」

立ち上がりそんな勢いで怒るユリの隣で、匠が大笑いをした。

だが確かに、今朝のユリの態度も、褒められたものではなかったと思う。

「もつと情報はないの?」

気を取り直して訊ねると、了は今度は前屈みになって頬杖をついた。

そのまま窓の外に目をやる。

つられてユリも窓の外を眺めた。

空は薄青色になっていた。そろそろ夕方だ。

「もつと、なあ…。」

了が呟いた。

「あ、ねえ。十年前に、クレアは家族旅行で日本に来てたって言うけど、それって、本当に旅行が目的だったの？」

ユリの問いに、了がうんざりとした顔をした。

「知るかよ、そんなプライベートな事…。」

「ええええ…。」

だって、ドラマとかだと、そういう事が伏線になってたりするじゃない？」

「お前ね…。要人をそんなテキトーな理由で調査出来るわけないだろ…。」

「なによ、頼りにならないわね。」

ユリが不満そうな顔を見ると、了が不機嫌になった。

「言うじゃないか。」

それなら、お前のその発想にこそ、ちゃんとした根拠を持たせることが出来るんだろうな？」

言われて、ユリが「う…」と言葉を詰まらせると、了は一変、満足気にニヤリと笑った。

ユリはそのニヤリ顔にむかつきながらも、冷静に判断する。

了が調査をしていない訳がない。

昨日のクレアが取り乱したときの事だ。

バークレイの名前が出ていたと言っていた。

きつと何らかの理由で、了はバークレイについて調べているはずだ。

だがそれを言わないのは、クレアの事と同様に、とてもデリケートな事だからなのだろうと察しもつく。

ユリは不貞腐れながら、少しだけ寂しい思いを感じた。

やはり自分では、了と共有出来る事は少ないのだろう…。

5月1日 9

菅野やバークレイの事は、これ以上聞いても憶測を募らせるか、はぐらかされるばかりだと思った。

そして何より、ユリの興味は依然、”男爵”にあるのは変わらない。

何でも聞いていいというので、”男爵”についても、もう少し聞いておきたかった。

”男爵”について、まだ聞いてない事が、いっぱいありそうな気がするわ。」

「例えば？」

ユリの口から出た”男爵”という言葉に、了が少しだけ表情を固くした。

「うーん、そうね。

例えば、声を聞いた人はいないの？」

「声？」

「そう。

だって、あんたもハチ合わせになった事があるんでしょ？」

何気なく言った一言に、了が「む…」とバツの悪そうな顔をする。その様子を逸早く察知したユリは、ここぞとばかりにからかう。

「あ、そこ痛いところ？」

言われて、了が「うるさいよ」と不機嫌な顔をした。

「ま、着眼点がいいと思うが、残念ながら声を聞いた事のある人間はゼロだ。

俺の場合、アイツと対峙したときも、逃げたときも、声どころか息遣いすら聞こえなかった。

訓練されているのかどうかは判らないが…。

今まで現場にいて、アイツを目にした人間の中で、はっきり声を聞いた人間はいない。」

声はおるか、息遣いもか…？

そんな事があるのか？

疑問に思うところだが、人の息遣いは案外と聞こえにくいものでもある。

ユリは「ふうん…」と相槌を打ち、「そういえば」とさらに問う。
「何で”男爵”って呼ばれてるの？」

実は常々思っていた事だが、正直”男爵”という名称は、あまり格好いいものではないと思う。

眉を目いっぱい歪めて言うユリの気持ちを了も察したようで、了は少しだけ苦笑して、説明を始めた。

「アイツがそう呼ばれ始めたのは、三〇回目の事件のときからだ。それまでは、”四二二号”と呼ばれていたらしい。」

「”四二二号”？」

「フランス国家警察、総合情報中央局公認、重要犯罪者リスト番号。四二二番目。」

もともと、最初は重要犯罪者だとも思われていなかったから、四二二番目にリストアップされたのも、十回目の犯行以降だな。」

何度聞いても、ずいぶん長い事放置しておいたものだ。

「”男爵”ってのは、真っ赤な予告状、それにプリントされたマーク、そして、何より本人の格好から、マスコミが面白がってつけたニックネームさ。」

「格好？ 自分で名乗ったのかと思ってたけど、違うのね。」
「そ。」

黒いマント、黒いシルクハット、黒いタキシード。

顔には仮面舞踏会に使いそうな仮面を着けて、頭部のほとんどが黒い布で巻かれている。

だから表に出ているのは、口の周り、精々仮面の隙間から見える目だけ。」

「はあ…。マンガの世界ね…。」

ユリが呆れると、了が「まったく」と笑った。

「じゃあさ、目の色は見えるわけね？」

「ああ…。多分な。」

「多分？」

了の答えにしては、ずいぶん曖昧だ。

「アイツの犯行時間は深夜が多い。」

犯行予告のあった装飾品は、大概煌煌と灯りに照らされて警備されていたりするんだが、盗み出す瞬間、アイツは必ず全ての灯りを消してしまう。」

「電気消しちゃうの？」

実に単純な理解だが、そこがユリらしいと思った了が、わざと呆れて見せた。

「…まあ、短絡的に言うそうだが…。」

ブレーカーを落とすだけの初歩的な方法から、電線や自家発電装置を壊す手法まで様々だが、兎に角アイツがものを盗み出す瞬間は、いつも暗闇なんだ。

その中で対峙したところで、見えるものは少ない。」

「たまに刑事ドラマとかであるじゃない？ バッテリーに繋いだライトとか。」

ああいうのは？」

「ああいうのは、じっとしているターゲットに対しては有効な照明になるが、すばやく動いたり、細かな動きをするターゲットに対しては、戦力半減以下。」

役に立った試しがない。」

言われるとそうかも知れない。

そうそうピンポイントで人を照らすような事は出来ないのだろう。

「電気を消されないように出来ないの？」

「情けない事に、その辺の知識はアイツのほうが上手のようだね。」

今まで、過去の犯行を踏まえて、電源やバッテリー、送電線に至るものの警備に人や設備を割いても、結局アイツは全ての光源を断つ。」

そこまで聞いて、ユリが「じゃあ」と言った。

「内部にスパイがいるんだ？」

「は？」

唐突に言われ、了がきよんとする。

「だってそうじゃない？」

いくらなんだって、個人宅ならまだしも、ある程度厳重な警備をして、セキュリティもしっかりしてる施設から、そんな風に軽々とものを盗み続けられる訳ないもの。」

ユリの意見は尤もだ。了が困惑する。が、困惑してはいるものの、了や警察とて無能ではない。可能性として内通者の存在については捜査したに違いない。

「…でもなあ…。」

了がもごもごと呟いた。反応から察するに、都度可能性を疑いにするものの、結局該当者無しという結論になってしまっているのだろう。

ここで、それまで傍観していた匠が、ゆっくりと話し始めた。

「共犯は…。」

何も毎回同じ人物である必要も、スパイ同士に関連がある必要もないよね。」

了が匠を睨んだ。

正確には、匠自身を睨みつけた訳ではない。

匠の言葉の意味に、過敏に反応しての目付きだった。

「？」

ユリは解らないようだったので、匠が補足をする。

「だからさ、例えば、去年は二回しか犯行に及んでいない訳だけど、その二回目の犯行はどこだったっけ…？」

えーっと…。」

「スウェーデンのユングベリ伯爵邸です。」

いつもより数段低い声で、了がフォローする。
言われて、匠が「そうそう」と指を振った。

「スウェーデンの、例えば警備にあたっていた警察機構でも、屋敷の人間でも誰でもいいんだけど、その中にいたスパイと、今回の事件の関係者である我々の中に、関連のある人物がいる必要はないよね？」

もちろん、そうである以上、各人がスパイをするだけの理由や、利益がある訳で、もしかすると、その点については、実は凄く近い関連性があるのかも知れない。」

匠の声は、とても穏やかだった。

「”男爵”のファンって可能性は？」

「うーん…。」

そこまで議論で遊びたくはないが、でも〇%と否定するには、情報がなさ過ぎるよね。」

ユリの問いに匠が答えると、了が口到手を当て、考え込んでしまった。

匠がさらに続ける。声は穏やかに、表情は面白そうに。

「もしかすると、元々はスパイとしてこの美術館に配属された人間ではないかも知れない。」

予告状が届いて、もしくは届く前に何らかの方法で、次に狙う場所がここだと知ったかはわからないけど、”男爵”が『盗む』とアクションを起す前の段階で、既にこの美術館で働いていたり、警視庁にいて、この捜査を担当する部署に配属されている可能性だってあるかもしれない。」

そんな訳が…と突っ込みもうとするが、匠の言葉は微妙な間を空けながら続く。

「事件ありきのスパイではなく、本当に偶然、ここを”男爵”が狙ったためにスパイになってしまった人が、ここの関係者にいるかもしれないね。」

という事で、蕪木クン。」

「はい。」

呼ばれて、了が考えるのをやめた。

姿勢を正し、匠を真つ直ぐに見ている。

「ここまで言えば、大丈夫かな？」

「はい。大丈夫です。」

やり取りの意図が見えない。

ユリが怪訝な顔を見ると、匠がニヤリと笑った。

「よかったな、ユリ。」

蕪木クンが、バークレイ一家の家族旅行について調べてくれるそうだよ。」

「…は？」

どうしてそういう事になったの？」

そもそも、いつなったのだ…。

ユリがもつと怪訝な顔を見ると、了が苦笑した。

「まあ、わからんわな…。」

要人の調査には、それ相応の根拠がなければならぬと言っただる？」

「うん。」

「今の話で、芳生さんは、この美術館の関係者全員に、スパイ容疑をかけたんだ。」

了の説明に、「うん」と頷いては見るが、まだよくわからない。

ユリは暫く呆けた後、いきなり理解した。

「……………あ、そうか。」

美術館の関係者には、バークレイも含まれるのだ。

「え？ でもさ…。」

なんで叔父さんなの？

あんたが提案したって事にすればいいんじゃないの？」

すると匠が、「ま、その話は追々な」と言った。

「なによ、また秘密！？」

ユリがふくれると、匠は大笑いをして誤魔化した。

一方で居ても立ってもいられないと、了が立ち上がった。

「では、ボクは捜査の手配をしてきますので…。」

今日は、戻れないかも知れません。」

「そうか。」

これ以上は情報もなさそうだし、僕らも帰ろつか、ユリ？」

「え？」

そんなテキトーでいいわけ？」

確かにここにいても、出来る事は少なそうだ。

勝手に机を漁るわけにも行かない。

ユリが聞くと、匠が「大丈夫だろ」とニヤリと笑った。

「叔父さんがいいっていうなら、いいけど……。」

そう言いながら頷くと、立ったままやり取りを眺めていた了が「送りましょうか？」と言った。

「あ、お願いしようかなあ。」

匠が調子よく答え、立ち上がった。

ユリはこのまま真っ直ぐ帰るのも勿体無い気がしたので、「まだ
明るいし、私は歩いて帰るわ。」と答えた。

「そうか。」

気をつけて帰るんだよ。」

言いながら早々に館長室を出て行く匠に、「うん」と頷く。

続いて退室しかけていた了も、笑いながら「気をつけるよ」と言った。

笑っているのが気になったのだが、ユリが素直に「うん」と言いかけると、了がすかさず「迷子に」と付け加えた。

「うっさいわよ！」

ユリの反応に、了は満足気にニヤリと笑って出て行った。

やりっぱなしにされたユリは、暫く頬を膨らませて不貞腐れたあと、よいしょとソファから腰を上げた。

5月1日 10

美術館を出、ひとまず病院へ向かう。

もちろん菅野に面会など出来ないだろうが、何となく、行こうと思った。

菅野が入院している都立病院は、美術館からシリング大使館へ向かう途中にある。歩いて二十分もあれば行ける距離だ。

歩き始めると、あつという間に病院に着いた。

普段から健康優良児な上、親類や友人も病気とは無縁なメンツばかりなので、病院には全くとっていいほど縁がない。

来たのは、六年ぶりか。

さて、着いたはいいがどうしようかと正門前で思案していると、病院の正面玄関から、見覚えのある男性が出てきた。

バークレイだ。

思わず、ユリは正門から少し離れた街路樹の陰に隠れた。

大使は徒歩で正門を出、大使館へ向かって歩いて行った。

（館長のお見舞い終わったのかしら？）

しかし、今朝も思ったが、今も改めて思う。

（大使つて偉い人なのに、一人で出歩いたりするのね…。）

偉い人は黒塗りの外車に乗っている、というチープなイメージしか持ち合わせていない。

大使ともなれば、その身に何かあつては大変なので、ボディガードの一人はついていっているものとも思ってもいたが、現実はそうではないらしい。

ユリは少しガツカリしながら、バークレイを大使館まで尾行した。仄かにバークレイがこの後、何か怪しげな行動をするのではと期待したが、特に何もなく、大使館に到着してしまった。

仕方なく、バークレイが大使館に入るのを見届けてから、警視庁方面へと向かう事にした。

途中、帝都ホテルの前を通る。

然して珍しいわけでもないのに、おのぼりさんのように、ホテルを見上げながら歩く。

（は…）。

何度みても…っ！）

思いかけて、何かにぶつかった。

「あ！」

ユリは勢い余ってよろけ、足元の段差を踏み外し、危うく転びそうになった。

すぐに体勢を直し、相手の顔も見ずに頭を下げる。

「ご、ごめんなさい！」

恥ずかしくて頭を下げっぱなしにしていると、相手が目の前に立ち、ユリの顔を覗き込んだ気配がした。

「こちらこそ、前をよく見ていなくて。お怪我はありませんか？」

静かな男性の声だ。

恐る恐る顔を上げると、赤茶の斑の入ったグリーンの瞳の、金髪の青年が穏やかに微笑み、立っていた。

ユリと同じ年くらいだろうか。

少年と見紛うくらいにあどけない、しかしとても顔立ちのよい青年だった。

「ああ、大丈夫です！」

ぼうつと見とれていたユリが慌てて答えると、青年はにこりと笑い、

「よかった。

では、急ぎますので、失礼します。」
と立ち去った。

ユリはその後姿を眺めながら、

（やっぱり落ち着きないのかしら、私…。）
と思った。

頭をポリポリとかき、再びホテルを見上げる。

そしてふと思い出して、青年を振り返った。
が、すでに青年の姿はなかった。

何故かユリは、あの青年に見覚えがある気がした。
が、その感覚すら少し不安定なもので、本当に見覚えがあるかは自信がない。

暫し記憶を探りながら歩いてみるが、結局何も思い出せず、気付けば警視庁まで来ていた。

と、場所を認識した瞬間、少し距離の離れた真正面に了の姿を確認した。

「あ。」

了は何故か、ガツカリしながらユリに向かって歩いて来る。

そして目の前まで来、いきなり「また迷ってんのか…」と言ってきた。

「違うわよ！」

ユリがむくれると、了がニヤリと笑う。

もう何度、このやり取りをしただろう。

そういえば、了がここにいるということは、匠は既に帰宅したという事だろうか。

「叔父さんはもう家？」

「ああ。」

「そ、ありがと。」

ユリは手短に礼を言い、立ち去ろうとした。が、了が「あ…」と呼び止めた。

「ん？」と振り返ったユリは、了の表情を見て、ドキリとした。
了は少しだけ哀しそうな顔をして、ユリを見ていた。

しかしすぐに困ったような顔で笑い、「いや…。なんでもない」と言うなり、踵を返して行ってしまった。

取り残されたユリは、首を傾げる。

「…？ どうしたんだろ…？ ヘンなの。」

思えば、朝もこんな感じだった。

何か、伝えたい事でもあるのだろうか…。

ユリは了の後姿を目で追った。

歩き方はいつもと変わりない。

姿勢がよく、実に堂々と歩いている。

その後姿は、やがて警視庁の近くにある、政府の庁舎へ入って、見えなくなつた。

「あれ？　そういえば、あいつ、どこ行くんだろう？」

ユリは了の入った庁舎に近付き、正門前にある置物のように形の整えられた、黒い光沢のある石に彫られた、その建物の名称を読む。

（検察庁…？）

そうだ、一昨日も了はこの建物へ向かつて歩いていた。

仕事だろうか？

刑事なら検察庁へ入るのも、おかしい事ではない気もするが…。

何かが腑に落ちなかった。

が、それ以前に、自分自身がここをうろつく理由がない。

（こんなところでウロウロして、不審者扱いされたらたまらないわ…。）

そう思い、ユリは足早に事務所へと向かった。

5月1日 11

事務所の近所に辿り着いた頃には、既に陽が沈んでいた。

すっかり薄暗くなつた街並みの中に、事務所の灯りを見付ける。

一階から四階まで煌煌と点いた灯りは、もうすぐ帰ってくるユリを待っているように思える。

歩みを速めると、あっという間に事務所に着いた。

外の階段を昇り、玄関を開けると、カナエとクレアが揃って出迎えてくれた。

「おかえり。」

「おかえりなさい。」

「ただいま」と二人に言い、クレアを向く。

「そうそう、クレアのお父さんに会ったわよ。」

「まあ、父に？」

「うん。」

ユリが返事をする、クレアは何故か困惑の表情を浮かべた。

「ご迷惑かけませんでしたか？」

父は、時々すごく横柄になってしまふので…。」

なるほど、誰に対してもそうなのか。

了の話も本当のようだった。

「ああ、気にしないで！」

誰の所為ではないのに申し訳なさそうにするクレアにそう言いつ

つ、

（かなりむかついたけどね…。）

と、胸の内を呟く。

が、クレアは「よかった」とにこりと笑い、肩を竦めた。

そこへ、事務所を閉めた匠が戻って来たので、昨夜に比べてずいぶん早い夕食を始め、その夕食も当たり障りのない話だけで終わった。

ユリはいつもどおり、クレアを風呂へ案内し、その間部屋で独り、物思いに耽る。

ユリが本来関係している”男爵”による予告については、特に進捗はない。こればかりは、当日を待つ外ないのだろう。了からは新聞や雑誌では絶対に得られない情報を貰えるが、結局、予防や下準備にそれほど役に立つ情報でもなさそうだった。

第一、一介の探偵に何が出来るというのだ。

ただ、日増しに気にはなる。

昼間の話では、今までの事件も、何か目的があって起したのだろうと推測するに至った。

しかし、一体何が目的で、世界各国を回り、盗みを働くのか。

人となりを理解するまで、その目的は知れない気がする。

その”男爵”に襲われた可能性もある菅野とは、今日は会っていない。

了は菅野を”男爵”の関係者と見ている。

それが敵対する関係なのか、味方する関係なのかまでは判らない。もし敵対する関係なのなら、襲撃事件に”男爵”が関係していても不思議ではなく、味方する関係なら、菅野自身がスパイである可能性は高い。そしてそれについては、匠が言うように、今までのそれぞれの事件に、事の成り行き上、内通者となつてしまった可能性もある。

だが内通者説を有力とするなら、”男爵”が菅野を襲ったとは考え難いとも思える。ならば、あのタイピンはどういう経緯で館内に落ちたのだろうか。

仲間割れか。

内通者となつた事実を知らないまま、訳あつて襲ったか。

内通者ではないのか。

監視映像には手が加わっていた。しかし深く調べれば、何か判るかも知れない、と今、警視庁で解析をしているらしい。

菅野自身も、あの夜の事は犯人すら見ていないらしいから、今の

時点では、不安定な推測しか出来ない。

そんな事があった翌朝の今朝、菅野の友人であるバークレイにも会った。

バークレイはクレアの父親だが、今思い出しても、クレアとバークレイはあまり似ていると思えない。

彼は髪も茶で、瞳もやや赤みを帯びた茶だった。クレアは金髪で、瞳も綺麗な緑色をしている。

顔立ちもだいぶ違う印象だったのだが、クレアは母親似なのだろうか？

思いながら、昨夜の取り乱したクレアを思い出す。

『十年前、あの純公園であった本当のこと』…。

何の事なんだろう？

クレア本人が忘れてしまっている、十年前の公園での記憶…。

匠は、直接クレアには関係ない事だと言っていたが、そのあとはクレアの事であると認めていた。

了や匠が、何故それを調べたか、経緯は不明だが、”男爵”と関係があるのか、その関連性までは不明ではあれど、疑っているともしかし、そもそも何故クレアの事を調べたのだろうか。

菅野の襲撃以降の調査なら、かなり手際の良い調査だ。

真新しい情報なら未だしも、十年も前の情報を、そんなに早く手に入れられるものだろうか。

そう思うと、やはり了は最初から、クレアを知っていた事になる。何らかの理由でクレアを調べていた。そのクレアが来日をした。

そして訪れた美術館には、”男爵”からの予告が届いた。それ以前に、調べていたクレアに関する情報には、バークレイも菅野も関わる十年前の出来事の真実が隠されている…。

しかもその事実は、『安易に公表できるものではない』という。

一体、クレアに何があったと言うのだ。

クレアを守るには、クレアの事をもっと知らなければならぬのだろうか…。

そのためには多分、バークレイの事ですら知らなければならぬのだらうと思う。

目先気になるのは、今朝バークレイが菅野の机から探し出し、隠し持ったあの箱の正体だ。

中身は何だらう。

手のひらで包めるくらいの小さな箱に入る、誰にも知られたくないもの。

人の机を漁らなければならぬ程、急いで手に入れなければならぬもの。

見当が付かない。

第一、いくら友人関係とは言え、人の机を探るような事をするだらうか。

菅野が頼んだ事なのか？

ならば、バークレイが訪れる事は、菅野の口から伝えられるはずだ。

恐らくバークレイが館を来訪する事も、その目的が探し物である事も、菅野本人は知らなかったはずだ。

朝は然程怪しいと思わなかった事も、改めて考えてみるとおかしな事ばかりだと気付く。

了が大使を疑っているという理由も、何となしに理解出来た。もしかすると、菅野と友人と言うのも嘘なのではないか？

胡散臭い…。

疑いだすときりが無い。

どこかで割り切る必要がありそうだ。

これらを全て追っているであろう了は、何だか凄いと思う。きつと四六時中こんな事を考えながら、ユリを弄り、遊んでいるのだ。

不意に苛立って、ユリはベッドに寝転んだ。

すると、部屋のドアが開き、風呂上りのクレアが入ってきた。

「戻りました。」

クレアに言われて、がばつと起き上がる。

「あ、おかえり！」

じゃあ、私も入ってきちゃうね。

疲れてたら、先に寝てていいから。」

そう言い、風呂へ向かう。

ドタドタと早足で階段を下り、脱衣所に着くなり雑に服を脱ぎ捨て、髪と体を一気に洗う。

そして早々にバスタブに浸かると、一気に脱力した。

ふう、と小さく息を吐いて、バスタブの縁に凭れる。

体が温まってくると、足が異様に張っている事に気付く。

少し歩き過ぎたのだろうか。

美術館からの帰りの探索の様子を思い出す。

病院でバークレイを見かけ、大使館まで着いていき、ホテルで見知らぬ宿泊客とぶつかり、そして了に会った。

蕪木了。

四日目になって尚、何者なのかは不明なままだ。

探索中は敢えて見ないようにしていたが、否が応にも視界に入ってしまう、あのバカでかい高級マンションと、普段から乗り回すポーツカーが、了を刑事ではないと決め付ける判断材料になっていた。

しかし、昨日今日と、検察庁舎へ入っていったのは、こういった理由からか……。

「まさか、実は『検事』だなんて言わないわよね……。」

独り言を呟き、眉を顰める。

「あいつが検事とか、笑っちゃうわよ。」

言いながら、了の言動を思い返す。

そういえば、何度か何か言いかけていた。

何を言いかけていたのだろう。ああいうのは、すごく気になる。

口の悪い、ただむかつくだけの相手だったのに、いつの間にか色んな顔を見、不思議なくらい篤い信用を置くようになった。そんな

った事でさらに見えてきた、了の素顔。

優しく微笑み、時折心配そうにユリを見、苦笑する。

美術館で迷子になっていれば、必ず目の前に現れ、声をかけてくれる。

昨日、匠に言われた事を思い出す。

・口ではああ言っても、いつもお前の事を心配して、フォローしてくれてるんだよ…。

気付いている。解っている。

本当に心配されている事。

でも今更素直になれない。

そして、今更態度を変えても、返って了の調子を狂わせて仕舞うような気がする。

だから、きつと今のままでいいのだ。

そう思うと、なんだか照れくさくなった。

「ま、ずいぶん男爵オタクだし、今回の事件では頼りになる人のようだから、しばらくは”出来るだけ”仲良くしておこうかな。」

誰に見られた訳でもないのに、本当に照れくさくて、ユリは独り、強がった。

5月1日 12

「ただいま。」

風呂を出、声をかけながら部屋のドアを開けると、床にペタリと座り込んで雑誌を眺めていたクレアが、にこりと笑った。

「おかえりなさい。」

「おや、疲れてないの？ 大丈夫？」

クレアは「はい。」と頷きながら、

「今日は、あんまりユリさんとお話してなかったから。」
と苦笑した。

我が家はカナエと言う優秀な専業主婦が居れど、家の仕事と称される作業はなかなか片付かない。

事務所の掃除や、庶務は全てカナエの役割で、数名いる従業員も手伝ってはくれるが、大抵は来客や調査の外出で手が回らない。

自ずと家の事は後回しになり、カナエが夜遅くまで起きて家事をする事は、日常茶飯事になっていた。

ユリも普段はもちろん手伝うが、美術館の依頼を受けてからは家にいないので、カナエはまた一人で、その作業をこなさなければならない。

なので、客人と言えどクレアはそれなりに扱き使われた筈で、疲れていない筈がなかった。

それなのに、起きて自分を待っていてくれた事に、ユリの涙腺が思わず緩くなる。

「今日は何してた？」

ユリが訊ねると、クレアが満面の笑みで、

「今日は、カナエさんにお料理を教わってました。」

と答えた。

「何教えてもらった？」

「私、お料理出来ないの、凄く簡単に作れて、栄養も摂れるスー

プを教えてもらいました。」

照れくさそうに言うクレアを笑いながら、夕飯に出ていたスープの事だと悟る。

「夕飯に出てたやつね？」

あれは、カナエちゃん特製”ごちゃまぜスープ”よ。」

名の通り、その場その場にある材料のみを、構わず混ぜて作るスープなのだが、出汁の所為なのか、何故かいつ食べても同じ風味がし、旨い。

「とってもおいしいですよ、あのスープ。」

クレアが言うと、ユリも頷いて、「ごちゃまぜなのに、何であるに美味しいのかしら…」と首を捻った。

話しながら、思いの外、クレアが元気そうだったので、ユリはクレアに疲れが見えるまで話そうと思い、ベッドの上で胡坐をかいて座った。

クレアもユリに倣って、ベッドに腰掛ける。

ユリは何度か静かに深呼吸したあと、一番気になっている事を聞く。

「お兄さんのこと、もっと聞いていい？」

探りながら、クレアの目を見据える。

クレアの瞳はとても綺麗なグリーンで、いつ見ても吸い込まれそうになる。

だかよく見ると、赤茶の濁りがあつた。

見つめられて照れくさいのか、クレアがふと視線を外した。

しかしすぐにユリを見ると、小さく頷く。

「はい。」

兄とは、少し歳が離れていた事もあって、あまり喋った記憶がないんです。

日常的な会話はしていましたが、何かを相談したり、一緒に遊んだりすることは、あまりなかったかな…。

でも…。」

「でも？」

「行方不明になる少し前、突然私の手を取って、こう言っただけです。」

『記憶を埋めたままなら、きつと幸せになれる。』

だから、そのまま生きていくんだよ。

許さないのは、僕だけで十分だ』って。」

「え？」

突如、意味深な言葉が発せられ、ユリが怪訝な顔をする。

思い当たる事といえば、やはりクレアが忘れているという、十年前の記憶以外にない。

思いを巡らすユリに気付いていないのか、そして妙に穏やかな顔をして、クレアは構わず続けた。

「そのときは、何の事だかさっぱり解らなくて。だから、頷くだけで終わってしまったんです。でも、今なら、意味が解るんです。」

「十年前の、記憶ね……。」

ユリが言くと、クレアが静かに笑った。

「はい。」

きつと、とても哀しい事があつたんです。

だから、私は忘れてしまったんだわ……。

でも兄は、それは思い出さなくていいって……。」

そうか。だから……。

「だから昨日、あんなに取り乱したのね……？」

「はい。」

私が忘れてしまっている事を思い出したら、兄に繋がるような気がして……。」

初めて会った日、思い出さなくてもいいと言っていたのは、わざわざ言うような事ではなかったからなのだろう。

馴染み、ある程度事情を知った相手だから、改めて本音を語ったに違いない。

「そっか……。」

ユリは俯いて、ただ納得するしかなかった。

どこかで生きているかも知れない兄。

ふとしたときに取り乱してしまうほど、会いたい気持ちは強いものののだ。

会えない人なら、どんなに想い焦がれても、心が大きく揺さぶられる事はない。

だが、会えるかもしれない人なら、それが実の兄なら尚更、我を忘れてしまうほど、焦がれてしまうのだろう。

普段自制をしているなら、余計に。

だから、話はもつともつと聞きたいが、掘り下げれば下げるほど、クレアが落ち着いていられなくなってしまう気がして、ユリは話題を振ったことを後悔しながら、話を変える事にした。

「お母さん、どんな人だった？」

静かに問うと、クレアは、それまで浮かべていた、ずしりと重い翳を携えた笑顔を、ぱっと明るくして、

「母は、とても優しくて、明るい人でしたよ。」

と答えた。声も、若干だが、元気になった。

「綺麗な人？」

「うーん…。」

母より綺麗な人は沢山いるって思いましたけど、でも、双子の伯母が王様と結婚出来るくらいですから、綺麗な人なんだと思います。

「

いいなあ。

カナエちゃんなんか、プクプクしちゃって、もっと痩せればいいのにね！」

今となつてはすっかり母親であるカナエを思い浮かべる。

同じ”母親”なのに、どうしてこうも違うのだろう。

がつくりと肩を落とすと、クレアが笑った。

「ふふふ。

でも、カナエさん、とっても綺麗な人だと思いますよ。」

「本人いないから、お世辞言わなくて大丈夫だよ！」

ユリが手をひらひらさせながら苦笑すると、クレアは思いつきりの笑顔で、「お世辞じゃないですよ。とてもステキな人」と繰り返した。

「あはは。

本人に言つてあげてね。

踊って喜ぶわ。」

「はい。」

一変に空気が変わった。

母親に対しては、悲しい思い出はあれど、それは沈むほどの傷にはなっていないようだった。

ユリはほっと胸を撫で下ろす。

思い出の中の全てが哀しいものになつては、生きている意味がなくなってしまうくらい自分にも価値を見出せなくなる事を、経験上知っているから。

5月1日 13

クレアから母親の話を聞くと、その相手として、バークレイは本当に違和感を感じる。

「クレアのお父さん、結構厳しい感じの人ね。」

ユリが何気なく言うと、クレアがしょんぼりとした。

「ごめんなさい。やっぱり何か言っただんですね？」

「あ、ううん。そうじゃないんだけどね。」

ユリは否定をしましたが、正直よい印象は持っていない。

恐らくそれはお互い様なのだろうが、元々あの性格なのか、何かきっかけがあったのかは、気になるところではあった。

「私の小さかった頃は、家にあまりいなかったと言う事もありますけど、家にいるときでも、声を荒げたり、人を見下したりすること、なかったんですよ。」

それが、暫く会わないうちに、気がついたらあんな風になってしまった……。」

人が変わるとき、大抵は何か哀しい事があったときだ。それも、心では消化しきれないくらい、とてつもなく大きな哀しい事が。

「きっかけとか、解らないんだ？」

「まったく解りません。」

仕事忙しいから、仕方のない事なのかと思う事にしています。」
娘なりの気遣いなのだろうと思う。

「そうね。」

ああいうお仕事だと、ストレスすごそうだもんね……。」
言いながら、そうではない事くらいは解る。

クレアも解っていないながら、深く追求してはいけない事だと思っているのだろう、「はい」と短く返事をしたまま、俯いてしまった。

ユリは空気を変えるつもりで、後ろに倒れこんだ。

「は……」。そういう話聞くと、うちの叔父さんは甘いわよねえ……。」

溜め息混じりに言うと、クレアが微笑む。

「とても優しい方ですね、匠おじさま。」

「そうね、優しいは優しいわね。」

ユリが同意すると、クレアはもう一度「優しいです」と言い、「そして、とても強い方……」と続けた。

「強いいい？ 叔父さんが？」

ユリは今しがた倒したばかりの体を勢いよく起き上がらせた。

「叔父さん、ひよろひよろだし、ケンカ弱そうよ！」

体力もなくて、ちよつと走っただけで、いっつもゼーゼー言ってるわよ！？」

ユリにとつてはそんな感じだ。

大袈裟に否定するユリを、クレアは笑った。

「ふふふ。違いますよ。」

喧嘩とかそういうのではなくて……、なんていうか、とても沢山のものを守っている感じ。」

それは所帯主としてか……？と、ふざけた意見は口に出さず、「そうなのかしら……。そんな大層な人には見えないんだけど」とユリが呟くと、クレアは肩を竦めて、

「きつと、いつも一緒だからわからないですよ。」

と、笑いながら嗜めた。

「そついうもんかなあ……。」

ユリは言いながら、そついうものだろう、と納得もする。

「ねえねえ、家族のこと、もつと知りたいな。」

お祖父ちゃんとか、お祖母ちゃんは？」

「祖父は、十二年前に亡くなりましたけど、シリングの鉱山の二割を持っていた人なんです。」

さらりというクレアに、ユリが感嘆の声を上げる。

「そのうちの半分くらいが、カーネリアン鉱山でしたね。」

今でも、うちの持ち物ではあるらしいのですが、採石事業が国営化されているので、国が全て管理をしているんですけど。

あの”紅い泪”のカーネリアンも、祖父の山で採れたものなんですよ。」

「へえ！　すごいじゃない！」

その石が、今、国宝として保存され、もうすぐ日本にやってくるのだ。

大袈裟ではなくユリが驚くと、クレアも頷いた。

「ええ。」

とても大きな原石が採れたので、せっかくだからと、管理担当の方が、うちに持ってきてくれたんです。

それを父が母にプレゼントとして加工業者に持って行ったときに、たまたま国王がそのお店にいて、譲って欲しいと言う事で。

父は愛国家ですから、喜んで譲ったと聞きました。」

「えゝ、もったいなーい…。」

でも、クレアの伯母さんのものになったんだから、そうでもないか…。」

身を振りながら、一人納得もするユリを、クレアが笑った。

「そうですね。」

それに、母も装飾品にはあまり興味がなかったみたいなので…。

うちには何にもないんですよ。遺品にもなかったし。」

徐々にクレアの表情が哀しげになっていく。

家族の話は聞かなければならないと思う。ただ、聞けば傷であるう部分を穿り返す事になる。

探偵とは、いつもこんな事をしているのだろうか？

なんとも居た堪れない職業だと、思う。

「へえ…。」

慰める事も失礼な気がして、ただ相槌を打つ事しか出来ないユリを、クレアが振り返り、正面で向かい合うようにして座りなおした。

「ユリさん？」

「ん？」

「ユリさんの家族のことも、聞きたいです。」

クレアが顔を覗き込んだ。

「私の家族？」

「うーん、あんまり面白くないよ？」

本当に、面白くないのだ。聞けば、大概の人は「聞いてごめん」と言う。

ユリが申し訳なさそうな顔を見ると、クレアが首を振った。

「いいんです。」

だって、匠おじさまも、カナエさんも、ユリさんの本当のお母さんとお父さんではないんでしょう？」

「うん。」

まあ、言わなくてもわかるわよね、その辺は。」

「はい。でも、どうして……？」

深く頷くクレアに、ユリはふっと笑った後、何故か恥ずかしくな
って、俯いて爪を弄った。

「うちのお父さんとお母さんはね、事故で死んじゃったんだ。」

私が大学入って、もうすぐ二年つてときだから、もう六年になる
かな。」

封印していた訳ではないが、わざわざ話す事でもなく、自然と話
さなくなった。

改めて思い出し、そして声に出してみると、考えていたよりうん
と時間が経ってしまった事に気付く。

「お父さんの海外転勤が決まってね、一年くらいで戻れるし、私も
大学があつたから、着いて行かなかつただけど、出発の日に、空
港へ見送りに行つてね、もうすぐ滑走つてときに……。」

言葉に詰まったユリを、クレアが心配そうに見つめた。

言いよんだ訳ではなく、どう表現したら聞き手にとって一番シ
ョックが小さいか、と考えたのだ。

しかし、結局どんな言葉を使つても、与えるショックは変わらな
いような気がした。

さらに心配そうにしているクレアに、「ああ、ごめん。なんでも

ないよ」といい、ユリは構わず続けた。

「爆発しちゃったの。飛行機。」

クレアが、息を飲んだ。

「原因は、よく解らなかつたんだって。

爆発物らしきものの痕跡もあるけど、それにしてもその爆発は大き過ぎたらしくて、結局ね、飛行機の整備ミスって事で解決して。

暫くは、学校にも行けなくて、ずーっと引きこもってて。

そのときは、まだ実家にいたから。ここの近所だつたんだけど。時々カナエちゃんが食べ物を持ってきてくれたりして、ご飯だけはね、困らなかつたの。

あと、お金もあつたし…。賠償金とか、貯金とか、ね。」

息の続く限り一気に喋って、一呼吸置く。

忘れようとも、忘れまいとも思わなかつた記憶。

ただ、話さなかつただけの記憶を言葉にすると、ついさっきの事のように、記憶は色付き、生々しく、息を吹き返す。

味気ない食事、誰も出ない電話、自分が点けるまで灯る事のない家の灯り…。

ただただ、広い家に独り、部屋に閉じこもってベッドに横たわり、窓から外を眺めていても、特に何も目に止まらない。

何故か涙も出てこなかつた。

日々何も考えず、気付くと時間だけが過ぎていた。

「だから、本当に何にもする気力が湧かなくて、一年くらい学校休んで、窓も開けずに家に閉じこもってて。

裁判とか、そういうのも、ほとんど叔父さんとカナエちゃんが行ってくれたし、何にもしてなかつたなあ…。」

暢気な風を装って、天井を見上げると、クレアが言った。

「どうやって、今みたいにな…?」

「ん?」

何となしに聞き返して、ユリは部屋の明かりを見上げた。

直視する蛍光灯の灯りは、あの日、ふと心に射した光と同じ気が

した。

立ち直るとは、案外簡単なものだ、あの時も思ったものだ。

「うんとね……。」

動いていないのだから汚れないのに、毎日義務のように風呂に入り、決まった時間にカナエが冷蔵庫に置いてくれる食事を温め、時には冷たいまま、口に運ぶ。

夜ベッドに横になれば、一丁前に眠くなる。

何もしていないのに眠くなったりするものなのかというのが、そのときの唯一の発見だった。

しかしある日、いつもどおり冷蔵庫空けると、まだあったはずの食べ物がなくなっていた。

「昨日の晩に食べたときは、まだ残ってたんだよ？」

でも、朝起きたらなかったの。

でもお腹空いてないから、ないなら別にいいやゝって思って、冷蔵庫閉めようとしたら……。」

牛乳を挿す棚に、手紙が貼ってあった。

「手紙？」

「うん。」

手紙って言うか、メモね。」

その手紙には、見慣れたカナエの字が綴られていた。

短く、簡潔に。

「『もう泣き止んだでしょ？』って。」

カナエは、ユリが泣いていない事を知っている。

でもその言葉は、ユリの心に、不思議としっくりと嵌る言葉だった。

「何だかよく解らないけど、それ読んだらね、急にお腹空いて……。」
しかし、食べ物はなにもない。

だから、ユリはこの家に走り、玄関のドアをガサツに開けるなり、一言叫んだ。

『ご飯！』と。

「笑っちゃうでしょ？」

一年ぶりに喋った言葉が、『ご飯！』だったの。カナエちゃん大爆笑よ！

笑われて気付いたんだけど、髪ぼっさばさで、すっごいだらしな
いカツコで、家からここまで走ってきたのね。

もう恥ずかしくて恥ずかしくて…。

カナエちゃんに着替え取りに行ってもらって、その間にご飯食べ
て。

そのときにね、この家に住みたいなって思ってた…。

叔父さんに相談したら、大学続けるならいてもいいって言つから、
学校戻って…、どしたの？」

喋るだけ喋って、急に目の前のクレアの目に、とてつもない量の
涙がたまり、溢れそうになっている事に気付いた。

聞かれて、クレアが嗚咽を始める。

「だ…だって…。」

「やだ！

これ、泣く話じゃないから！」

ユリが慌ててクレアの肩を揺さぶると、クレアが激しく首を横に
振り、序でに堪え切れず泣き出した。

「十分泣く話ですう！」

「あはは。

参ったな…。」

気落ちされた経験は幾らでもあったが、この話で泣かれたのは、
これが初めてだった。

泣く事は同情に近いという意識があるからなのかも知れないが、
正直落ち込まれるよりは、泣かれるほうが気が楽だった。

が、かと言ってどうしていいか解らないのは変わりなく、ユリは
絶るように時計を見た。

既に〇時を回っていた。

「あ、もうこんな時間。」

もう寝ようか。眠れる？」

言うと、クレアは泣き笑いをしながら、「はい」と頷いた。

ユリも「よし」と頷き、「じゃあ、おやすみ」と、そそくさと電気を消し、ベッドに飛び乗り横になった。

一瞬暗闇に包まれた部屋の中で、徐々に、窓の外から入り込む月明かりに照らされたクレアの顔が浮かび上がる。

クレアはにつこりと笑っていて、しかし流れた涙の筋が、頬に出ていた。

クレアは「おやすみなさい」と涙声で言った後、ユリの隣に寝転び、ユリにシーツをかけ直した。

薄目を開けたまま、その様子を見ていたユリは、ほんの少しだけ、あの時何故泣けなかったのか、解った気がした。

5月2日 1

その青年は、とても哀しそうに顔を歪めながら、追い詰められたように、深夜のオフィスで明かりを点けるのも儘ならない程に、書類を読み漁っていた。

どう入手したのかしらないが、聞いた話によると、手にしただけで法的に危うい類の、かなり際どい内容のものまであるらしい。

僕は足音を忍ばせて入り口に近付き、暫くその青年を眺めていた。

しかし、あまりに僕に気付かないので、段々退屈になって名前を呼ぶと、その青年は目を見開いてこちらを見た。が、僕を一目見るなり、その青年はすぐに鋭い目付きで僕を睨み、静かに立ち上がった。

「どちら様？」

威嚇をするように僕に問いかけるので、僕は楽しくなった。

そして、”彼”を調べているんだって、と問いかけると、その青年は一層僕を睨み付けた。

でも、僕には解る。

睨む瞳の奥で、その青年が必死に、折れそうな心を隠している事を。

かなり追い詰められているようだから、僕はきつと、大丈夫だと思った。

「キミが望むなら、キミが手にしたいと願う全ての情報を得られる

力をあげるよ。」

青年にとって、それは悪魔の囁きだったかも知れないと、思うときもある。

力を求め、実際にした青年の瞳は、力を得ても揺らぐ事はなく、今でもその瞳は、真っ直ぐ彼女を見つめている。

これからも、きっと彼女を見つめ続けるのだろう。
彼女を守る事だけが、彼の償いなのだろうから…。

ピピピ…、と、耳障りな機械音が聞こえる。

「ぐう」とも「うう」とも聞こえる音を喉で鳴らして、まだ目を閉じたまま、手で音源を探す。

ひやりと固い何かが手にあたり、指先でボタンを探し、押すと、音が止んだ。

そこでようやく目を開け、手に持っているものを見る。

「五時十五分…。」

口に出して、また目を閉じる。

何故こんなに早くに目覚ましがなっているんだっけ…。

再び見出した夢の中で、ユリが考える。

すると、耳元で、

「ダメですよ、ユリさん。起きないとまた蕪木さんに見抜かれますよ。」

と声がした。

「それは嫌だ…。」

腫れぼったい目を開けると、目の前でクレアが笑った。

「おはようございます。」

「おはよ…。毎度毎度進歩のない目覚めよね…。」

枕に顔を埋めて言うと、既にドアの前に移動していたクレアが、苦笑しながら振り向いた。

「ふふ。」

朝ごはん出来てますよ。」

「着替えたらいくわ…。」

ユリが片手を上げて返事をする、クレアはそそくさと部屋を出て行った。

すっかり家に慣れたようだ。

きつと今朝も、カナエの手伝いをしていたに違いない。

「そういえば、クレアはお客様なのに、うちの手伝いとか偉いわ…。」とか言つてるとカナエちゃんに叱られそう…。

早く起きよう…。」

駄々っ子のようにのろのろと起き上がり、ふうと溜め息を吐いてから、ユリは素早く着替えた。

顔を洗い、髪を整えて、居間のドアを開ける。

しかし、

「おはよー…。」

と言い終えないうちに、目の前に広がる光景に絶句する。

「……。」

「げ。デジャヴ…。」

眉を顰めて言うユリの目の前には、我が家にもいるように堂々と食卓に居座っている了がいた。その向かいでは、匠がにやにやと笑っていた。

了は、ユリを振り返り一目見るなり、

「お前、睡眠障害なんじゃないか？」

と、表情も変えずに言った。

「大きなお世話よ！」

ユリがむくれると、「いいクリニックあったかな…」などと、さるにからかうので、「若いからよ！ あんたみたいに年寄りじゃないの！」と言い返すと、タイミング悪くカナエがキッチンから出て

きた。

「また、ユリ！ お客様に失礼でしょ？」

「ごめんなさいね、毎度粗忽な娘で…。」

叱りながら、カナエが了に苦笑する。

「いえいえ、奥さんがお気になさる事では…。」

了は調子に乗って、からかい続ける。

ウンザリして、「あああ！ もう！」と床をダンと踏み鳴らすと、

クレアが堪らず吹き出した。

「さあさ、いただきましょ。」

もうすっかり朝食の準備は出来ているようで、カナエの声を合図に食事が始まった。

「蕪木クン、今日は？」

了を見ることもなく、物を口に運びながら匠が尋ねると、手早くサラダを片付けた了が、コーヒーを一口啜り、

「みなさんを美術館に送ってから、一度職場に向かいます。」と答えた。

「何か手間取ってるのかな？」

パンにかぶりつき、少し籠った声で匠が続けると、了は「いえ…」と言った後、カナエをチラリと見た。

カナエはにこにこしながら了と匠を見ている。

「ああ、食事中に仕事の話はやめましょ。」

了が微笑んで言うと、カナエは満足気に頷いた。

「そうよ？」

同じ口を動かすなら、いっぱい食べてってくださいな。」

「はい。」

素直に食事に戻るのに、隣で了の食べっぷりに呆れていたユリが呟いた。

「あんたの胃袋のどこに、それだけの量が入るのよ…。」

「体中、胃袋なんじゃないの？」と続けるユリに、「君も似たようなもんだろ」と了が即言い返す。

「美味しい料理は遠慮なしに食べるのがマナーってもんだ。」
「…。」

前半はムカツクけど、後半には賛成だわ…。」

言われて、確かに一理あると素直に認めたユリに、了が留めの如く言い放った。

「君が口で俺に勝とうとするのは十年早い。」
「むっ！」

ユリが頬を膨らますと、眺めていた匠が大笑いをした。

みな、もうそれなりに馴染んでしまったのか、それ以降、食事中は静かなもので、早々に食べ終えた面々は、クレアとカナエを家に残し、美術館へ出発する事にした。

了が一足早く事務所を出、駐車場へ向かう。

やがて了の車が戻ってきて、事務所前で止まると、了が一言「お待ちせしました。」と言った。

いつもどおりに「ほんっと待ったわ。」とユリが言くと、了は空かさず反論する。

「その怒りっぽさは、若天性更年期障害だな。」

「むっ！」

何故かユリは、それ以上口答え出来なくなってしまう。

（くっそう…。）

いつか口で言い負かしてやりたい…！

昨日少しでも優しいとか思っちゃったのが悔しいわ！

ユリは唇を尖らせ、了を睨んだ。

了は今日も満足気に、ニヤリと笑う。

「お気をつけて行ってらっしゃい。」

車に乗り込んだ三人を、クレアが見送った。

ユリが窓越しに手を振ると、車はすうっと走り出す。

そして路地を少し走ったところで、匠が何の前触れもなく「それで？」と切り出した。

食事中の会話の続きだろうか。

聞かれた了も、すんなりと答える。

「言い訳は、昨日のままを使うとして、それでも外務省が首を縦に振るとは思えませんので、捜査を外務省を経由せずに出来るよう、部下が手配しています。」

早ければ今日の午前中には、その準備が出来るかと…。」
「なるほどね。」

何度が頷く匠の後ろの席で、ユリは、昨日のバークレイの調査の事だろうと推測した。

ユリは考える。

あまり深く聞いても答えてはくれないだろう。そして、言い負かされたままでも悔しい、と、止せばいいのにユリが突っ込む。

「あんたの部下が働いてる中、あんたはうちでのうのうとご飯食べてたわけ…?」

ユリの言葉に、了が不機嫌な顔を造った。

「何か文句でも?」

さて、どう返そうかと悩み始めた矢先、匠が珍しくフォローする。
「その代わり、蕪木クンは寝ないで仕事してるからなあ…。」

部下の彼らは夜、少なくとも蕪木クンの倍の睡眠時間は保障されてるからね。」

匠に言われてしまうと、何の文句も言えなくなってしまう。

ユリは、「ふうん。」と素っ気無く言った後、

「よく眠くならないわね。」

と続けた。

了も匠のフォローの手前、あまりふざけて出られなくなってしまうのか、表情を元に戻し、静かに答えた。

「随時寝不足だが?」

「いつ寝てるわけ?」

ユリが訊ねると、信号が赤に変わったので、了は車を停めて、わざと溜め息混じりに答えてみせた。

「信号待ちのときとか。」

「ちょ!!!!!!!!!!」

了の答えがふざけたと判っていても、突っ込まずにはいられない。ユリが身を乗り出して、後ろから了の顔を覗き込むと、了は疲れたような顔で、横目でユリを見た後、面白そうに鼻で笑い、右手をユリの頭に添え、後ろへ押して戻した。

5月2日 2

程なくして美術館に到着した。

「正午までには、ここへ戻りますので」と言って走り去る了的車を見送り、匠とユリは館長室へ向かう。

昨日とは違い、いつもどおり見張りのいない館長室のドアを開けると、菅野の姿が見えた。

「おはようございます。」

匠が声をかけると、菅野は申し訳なさそうに苦笑した。

「ああ、芳生さん、おはようございます。」

ユリさんも、おはようございます。」

まだ幾分青いように見える菅野の顔色が気になった。

「館長、もう大丈夫なんですか？」

ユリが訊ねると、菅野は一層申し訳なさそうに眉を歪めた。

「はい。」

お騒がせして、申し訳ありませんでした。」

「いえいえ、大した怪我もなく、よかったですよ」と匠が笑う。

「ありがとうございます。」

「クレアさんも心配していたんですけど、色々考えて、セレモニー当日までは私の家にいてもらう事にしました。」

匠が言くと、菅野が深々と頭を下げた。

「お気遣いありがとうございます。」

私もそのほうがいいと思います。」

ユリは、菅野と、昨日のバークレイを重ねる。

クレアに関する対応は、明らかに、菅野のほうが家族らしい。ユリが押し黙って菅野を見ていると、匠が気にしたのか

「しかし、明朗な子で、感心しきりですよ。」

ユリより早く起きて、家内の手伝いをしてくれますからねえ。助かってます。」

とからかった。ユリもすかさず反応はしたものの、「う…」と言葉に詰まった。

「それはそれは…」

きつと心配事もあるんでしょうけど、元気そうでよかった。」

ユリの心を知ってか知らずか、菅野の表情が和らいだ。

暫し談笑をしていると、ユリの後ろから声がした。

「みなさん、お集まりですな。」

ふてぶてしく、横柄な言い回しは、昨日、その声を聞かずに清々していた北代のものに他ならない。

一同は振り向き、匠とユリは愛想笑いをする。

「ああ、おはようございます。」

匠が挨拶をすると、北代は、「おはようございます。」と笑いもせずに答えた。

内心何を考えているのか、にやにやと笑う匠の隣で、菅野が神妙な顔で頭を下げた。

「おはようございます。」

先日はご迷惑をおかけしまして。」

外見の印象もあってか、恐縮しきりな菅野に、北代は尚も表情を変えず、

「事故ですからな、仕方ありますまい。」
などと答える。

（うわぁ、感じワル。）

ユリが思わず眉を顰めた。

「ところで、蕪木君の姿が見えませんか。」

北代がきよろきよろと見回した。動作がいちいち、わざとらしい。
「蕪木くんなら、今日は職場へ向かってから来るそうですよ。」

色々ちよつとした進展があつたようで。」

匠がにやにやしたまま答えると、

「ほう、進展ですか。」

是非伺いたいものですな。」

と、北代が興味深げに片眉を上げる。

「僕は詳しいことは解らないので…。」

蕪木クン、お昼には来るそうですから、聞いてみるといいでしょう。」

そう言つて、もったいぶつて焦らすように、匠は大袈裟に肩をくいつと上げて笑った。

その態度が気に入らなかつたのか、北代は眉間に皺を寄せ、「そうしますよ。では、失礼」と、足早に館長室を出て行つてしまった。ドアが閉まらないうちに、堪らずユリが声を上げる。

「なんなの、相変わらず感じ悪い…。」

頬を膨らませ、北代の消えたドアを睨むユリに、匠が笑った。

「聞こえるぞ、ユリ。」

その匠に、菅野がおどおどと声をかける。

「今、進展とおっしゃいましたね…?」

「ええ、言いましたよ。」

匠が菅野を振り返り、にやりと笑った。

「どんな進展があつたのですか?」

訊ねる菅野の表情は、何故かとても不安げだった。

「ああ、こちらの件ではないのですよ。」

別件の捜査で、ちよつとね…。」

匠が答えると、菅野は「そうですか…。」と言いながら、肩を小さく下げた。

ユリには、その様子が、ほつとしたように見えた。

自分の襲撃事件が進展していない事に対する反応として、それはとても不自然なものだ。

ユリは菅野の態度の真相が知りたくて、わざとらしくポンと手槌を打った。

「そういえば、監視映像の解析結果、どうだったのかしらね?」

「ああ、そういえばそうだね。」

北代さんからは教えてもらえそうにないけど…。」

にやりとしたままの匠は、ユリの思惑を当然悟っていて、ソファに腰を下ろしながら遠まわしに北代を批判し、「菅野館長は当事者なんだから、少しくらい情報くれてもよさそうなもんなのになあ」と菅野を見上げた。

菅野は「そうですね…」と苦笑するだけだった。

(…なんか様子おかしくないかしら…?)

ユリは、怪訝な顔をして、匠を見た。

匠は表情を少しも変えないで、菅野を見上げている。

その態度が、思い過ごしと言うより、まだ突っ込んではいけないという態度のようにも思えたので、ユリはこれ以上話を引き伸ばすのを諦めた。

「さて、叔父さん。

口うるさいアイツがいないうちに、何かやっておくべき事はない？」

この場にいない了に毒吐き、ユリが腰に手を当ててふんぞり返ると、匠が大笑いした。

「もう迷子にならずに回れるのか？」

「うーん…」

それはまだ自信がないわね…」

様子見ついでに、周ってこようかしら。」

「そうだね。」

ついでにさらに落とし物が見付かったら面白いけど。」

匠がにやりと笑う。

「さすがにもうないでしょ…」

じゃあ、いってきます。」

ユリは匠に溜め息を吐いて見せて、館長室を後にした。

一階を軽くぐりと周る。

この階はあまり事件と関わっていないのか、施錠されたエントランスの扉の前に警官が一人立っているだけで、それ以外の人気はなかった。

そのまま動いていないエスカレータを歩いて昇り、二階へ向かう。エスカレータやエレベーターのあるロビーの真正面にある特別展示ルームを覗く。

昨日よりさらにブルーシートの取れた室内は、とても広い。

この広い展示室に、二日後、”紅い泪”だけが展示されるらしい。ユリは室内を見回したあと、天井を見上げた。

菅野が発見されたのは、この展示室の真上の屋根上だ。

カツンと足音を鳴らして、室内へ入る。

中庭を臨むベランダを真正面に、左手には中展示ルームへの入り口が見える。

そのままゆつくり中展示ルームへ移る。

特別展示ルームと同様、徐々にブルーシートが外されている中展示ルームも、改めて見るととても広く感じる。

そして雰囲気も、徐々に変わっていく。

ユリは、以前、匠が言っていた事を思い出した。

「ブルーシートがあるのとないのとじゃ全然印象が違うって言うってたけど、本当ね。」

独り言を呟いて、くるりと体を回しながら室内を眺める。

”男爵”のものと言われるタイピンは、ここで拾った。

”男爵”のものなら、もっとよく見ておけばよかった。

了に言えば、見せてもらえるのだろうか…。

それは不謹慎と言うものなのだろうか、と思いながら隣の小展示ルームへと移ると、数名の警官がいた。

まだ捜査中なのか、警官の何人かは、小さなブラシや透明の袋を持って、黄色いテープに囲まれた床にしゃがんでいた。

（ここはあんまり歩かないほうが良さそうね。）

そう思い、なるべく足音を立てないように歩きながら、2階から3階へと上がった。

まず、ラウンジを覗く。

よく見ると、ラウンジの窓と屋根は近かった。

うまく動けば、屋根の上に昇れるのではないだろうか、と窓を押してみるが、嵌め殺しのようで、開かなかった。

少し残念に思いながら、ユリは窓の外を眺める。

高層ビル群を臨むラウンジの窓辺は、開放感に溢れ、最高に気持ち良かった。夜はまた、きつと夜景が綺麗に違いない。

景色に見とれつつ、しかしふと、先日のでの横顔も思い出す。

ユリは頭を振った。記憶の中でまだばやけたまま思い出しかけていた了の横顔が、すっと消える。

また思い出さないうちに、ユリはラウンジを後にし、セレモニーホールへと向かった。

こっそり見つけた、屋根上への梯子を昇る。

こちらにも改めて見ると、とてもいい眺めだ。南向きなので日当たりも良い。広い足場に座り、窓に寄りかかると、ポカポカと気持ち良くて、思わず眠くなる。

サボるにはここに来るに限る。

思いながら、すぐそこにある屋根を見つめる。

深い緑色の屋根は、新調してから間もないので、まだ真新しく、艶やかだ。乗ればつると滑ってしまいそうで、よくも菅野が滑り落ちなかったものだと思う。

ユリは菅野が滑り落ちてしまっていたら……と妄想し、急に怖くなり、武者震いをして梯子を降りた。

逃げるようにセレモニーホールを出ると、階段で二階まで一気に降りる。

一息吐いてエスカレータを下りながら、走った所為で少し上がった息を整える。

一階に着き、館長室へ戻ろうか思案する。

が、何故か今は戻りたくなかったので、ユリはそのまま地下へ向かう事にした。

職員通路に入り、地下への階段を下る。

徐々に照明の灯りが弱くなり薄暗くなる風景は、何度見ても不安

を誘う。

段を降りるにつれ、空気が重く冷たくなり、足音が響くようになる。

しん、と静まり返っているの、自然と息を殺してしまう。

ゴウン、ゴウンと、大きなものが這いずり回るような、不思議な音が聞こえる。

怖いわけではないが、つい身を縮め、セキュリティ・ルームを指す。

角を何度か曲がると、セキュリティ・ルームのドアが見えた。

ドアはまた少し、開いていた。

ユリは思い切って、ドアを開ける。

「飛澤さん？」

声をかけながら中を覗くが、誰もいなかった。

廊下より一層暗い室内は、モニタの青白い光に照らされて、不思議な雰囲気だ。

「あれ？ いない…。」

っていうか、誰もいないじゃない…。

なんで…？」

以前は確か、独りで待機中だった警備員が、近くに見回りに出たので開けっ放しになっていた。

だが、近くとは言え、開けっ放しにするだろうか？

それが良しなら、何のためのキーカードなのだろう？

そう思いつつも、今日もそういう事情なら近くに誰がいるだろうと思い、ユリは倉庫へ向かう事にした。

5月2日 3

地下倉庫に辿り付いたユリは、またも首を傾げた。

地下倉庫の扉も開いていたのだ。

ドアを開けて中を覗くが、誰かがいる気配はない。

警備員くらい置いておけばいいのじゃないながら、ユリはそっと、忍足で倉庫に足を踏み入れた。

倉庫内は、廊下の比ではないくらいに、薄気味が悪い。

ざっと見回すが、飛澤に案内されたときと、様子は何も変わっていないようだ。

そつえば、”シリング展”の展示物の搬入は、いつ行われるのだろうか。

館内が未だ改装中なので、展示自体は改装終了待ちでも、搬入はそろそろ行われてもよいはずだ。が、既に搬入されたとも聞かない。展示物の納入は、駐車場と直結している扉を開いて行われる。

普段は当然、何重もの錠がかけられ、分厚く重い鉄扉によって、その口は閉ざされている。

ユリはさらに一步踏み入れ、倉庫内へ入った。

まさに、コンクリの匣の中、という閉鎖空間。しかし空気は空調によって循環し、廊下とは一変して、重苦しい空気感はない。

きよろきよろと見回したあと、序でにと奥の”小部屋”に歩み寄る。

その”小部屋”の扉も、人が一人通れるくらい、開いていた。

「あら？ 開いてる…。」

ムクムクと好奇心が湧き上がる。

「覗いちゃお。」

隙間から顔を入れ、覗き込む。

扉の隙間から差し込む一筋の光に照らされ、金属製の床と、”紅い泪”が鎮座する台座が見える。が、あとは見事な暗闇で、空気は

淀み、少しだけ生暖かった。

ユリがさらに首を突っ込み、片足を床に乗せたそのとき、突然声をかけられた。

「おい。」

「うわ!!!」

不意に背中にかけられた声に、ユリは大層驚き、足を滑らせた。そのまま前のめりで倒れこみ、扉を掴んでいた手もが汗で滑って、ユリの体は支えを失った。

「あ！ バカ！」

さらに後ろで声がして、次いでぐい、と腕を力いっぱい掴まれたが、その掴んだ手と声の主ですらバランスを崩し、ユリともども”小部屋”の床に倒れ込んだ。

それは一瞬の出来事でどうしようもなく、正面から倒れたユリは、痣でも出来ているのではないかと思うほどに痛む腕を摩りながら、よろよろと起き上がった。

床にぺたりと座り込んだまま、体に傷がついていないか手のひらで調べる。

「つつ…。」

誰よいきなり…。」

不機嫌にユリが呟くと、聞き慣れた声がすぐ傍で聞こえた。

「お前ね…。」

「む！」

その声は、蕪木 了！」

「フルネームで呼ぶな。」

間違いなく、了の声だった。

「まったく、アンタが脅かすから、びっくりしたわよ！」

ユリが言つと、了が冷たく言い放った。

「ビックリしただけで済めばよかったな。」

「え？」

言われて、ユリはやっと気付いた。

周りが、真っ暗なのだ。

傍で声の聞こえる了の姿も確認出来ない。

「……………あ、何で暗いの？」

状況が把握出来ないらしいユリの言葉に、暗闇の中ですが呆れた。
「お前ってやつは…。」

さっきセキュリティ・ルームでこのセンサーの確認をしてて、扉を開放してたんだ。

それをお前が入ったから、センサーが作動して閉まっちゃったんだぞ…。」

了の呆れる様は、悔しいほどに想像出来た。

きつと深く項垂れているのだ。

言われて、ユリは肩をすぼめる。

「う…。」

あ、でも館長いるし、セキュリティ・ルームにも人いるんでしょ？」

さきほどはいなかったが、了がいる今なら、いるような気がした。
「そりゃいるにはいるが、アラームが付いてない時点で、閉じ込められた事に気付いてない可能性だってあるだろ…。」

センサーが正常であるかの確認中故、何者かが侵入した際に鳴る筈のアラームは、一時的に切っているのだと、了が補足した。

了の息遣いや、空気によって感じる身動きから、それなりに緊張せねばならない状況だという事だけは判ったユリは、一瞬身動き、そして叫んだ。

「ど…、どおすんのよおおー!!」

ユリに責められ、了思わず怒鳴り返す。

「うるさいな！ お前のせいなんだぞ！」

「急に脅かしたアンタのせいでしょ!？」

「なっ…。」

了が言葉を詰まらせた。そのまま黙り込んでしまう。

暗闇で、はあと小さな溜め息を吐いた。

どうしたらいいか、そもそもこの中に閉じ込められたが最後、外から開けてもらう以外、出る方法はない。

だから考えても無駄なのに、了は考え込んでいた。

こんな状況に陥った原因だとか、これからまず何をすべきなのかを考え始めて、一瞬でどうしようもない状況に気付き、苛立った。

そこで、ユリに責められた。

だから、思わず声を荒げた。

大人気ない。

細心の注意を払わなかったのは、確かに指摘されたとおり、自分なのかも知れないと、自責の念が込み上げる。

「言い合ってもしょうがない…」

取り敢えず、中にいる以上、待つ以外何も出来ないからな。

大人しくしてろよ。」

了が静かに言くと、ユリも了に怒鳴られたショックが今更来たのか、素直に「わかったわよ…」と従った。

目を開けていても、閉じていても、見えるのは暗闇ばかり。

外部の音すらも入り込まない、完全な密閉空間の中で、二人はお互いの、微かに聞こえる息遣いだけを頼りに、存在を確かめ合っていた。

近付きすぎないよう、しかし離れないよう、距離を取り、並んで座る。

そうやって、どのくらい時間が経っただろう。

不意にユリの目の前に、光が映った。

「！」

「…？」

どうした…？」

ユリが突然息を飲んだのを気にした了に声をかけられ、その光が、今日の前に広がるものではなく、記憶のフラッシュバックだと気付く。

「な…なんでもない…。」

答えながら、ユリはぎゅっと自分の体を抱いた。

今見えたのは、昔見た、あの記憶だと、すぐにわかった。

深く広がる青空に立ち昇る、真っ黒の煙。

紅々と燃える炎。

溶けて行く真っ白い鉄の翼…。

ユリは体を抱いた腕に顔を埋め、体を小さく丸めた。

手に力を入れると、腕に爪が食い込んで、痛む。

記憶とともにどつと押し寄せた絶望に、喉が締め付けられ、息が苦しい。普段は意識などしない、思い出しても何も感じなかった記憶なのに、何故今突如思い出し、激しく心揺さぶられたのか解らず、ユリは少し動転していた。

「ユリ？」

暗闇で様子が判らない了が、ユリを心配していた。

声はか細く、少しだけ体を近付けて来ているのが解った。

「ご…ごめん…。

なんで…今…こんなもの思い出しちゃったんだろ…。」

見えないのに、ユリが強がって笑顔を浮かべた。

だが、それを察した了が、呟く。

「…お前…。」

「ま、待つて…。忘れるから…。」

そう言って、ユリは丸めていた背中を伸ばし、深呼吸を何度も繰り返した。

了は、闇の向こうで必死に取り繕うユリを見つめていた。

やがて、落ち着いたのであろうユリが、笑った。

「あはは…、ごめん…。

昔の事、思い出しちゃって…。」

「…。」

了は返事をしなかった。

だが、まだ若干取り乱しているのだろう、ユリの言葉は続いた。

「私、昔、両親が目の前で死んじゃったのね…。」

六年前、空港で突然飛行機が爆発しちゃったって事故があったの、知ってる？」

問うたが、聞いていなくても続けるつもりだったユリの耳に、了の声が聞こえた。

「ああ…。」

事故原因も判らなくて、結局航空会社の整備不良って事になったな…。」

了の声は、静かに、ゆっくりと発せられた。

言葉を選んでいようだった。

「うん。」

さすがね、よく知ってるわ…。

あの飛行機に、両親が乗ってたんだ。

私はその日、見送りで、一緒に空港に行ってて…。」

「…。」

了はユリの言葉を待つように黙っていた。

ユリはユリで、了が聞いていても聞いていなくても、どうしてもよかった。

ただ溢れ出してしまった記憶に、言葉と声を当て、吐き出してしまいたかった。

つい昨晚、クレアに語ったときは、こんな感情など湧かなかったのに。

相手が了だからなのか…。

「あの日、あれからどうなったのか、私よく覚えてないの。」

叔父さんから聞いた話だと、ただ呆然と前を見ているだけで、どんな言葉にも反応しなかったし、涙も流さなかったって。

数ヶ月、そんな調子で…。」

他人に語るような事ではない。

でも語るにつれ、解ってきた。

了に、聞いてもらいたいのだ。

何故かは解らない。

でも、聞いて欲しかった。しかし同時に、聞いていなくても構わないとも思う。

「気が付いたら、お葬式も終わってて、骨壺の前で正座してた。だから、今でもね、あの事故が現実か、よくわからないんだ…。」
ユリの言葉が途切れたのを確認するように、間を空けて、了が一言呟いた。

「今でも…?」

「そう、今でも。」

両親の遺体は、ほとんど原形を留めてなかったらしいから、見てないし。

お葬式もして、毎年法事もやってるし、毎日位牌にも挨拶してるのに、あの事故だけが、現実じゃないの…。

何か、別の事故で死んだんじゃないか、って思う事も、たまにあるんだ。」

それとわかるほど、きちんと形の残った遺品すらなかった、らしい。

というのも、警察からの報告や対応は全て匠やカナエがやっていて、ユリはそのとき、ただ茫然自失の状態で毎日を過ごしていたから、何も知らないも同然だった。

落ち着いてきた頃に、匠が少しずつ教えてくれた話によると、どうやら、そういう事らしかった。

言葉にして、漸く確信を得た。

今まで両親が死んでも涙が流れなかった理由…。

現実味がない、その通りだったのだ。

何も残っていないから、死んだ事になっていないのだ。

ユリは不思議と満足していた。

話が出来たからか、泣かなかった理由が判ったからか、自分でもわからなかった。

もう一度背筋を伸ばし、ふ、と息を小さく吐くと、隣で了の声が出た。

「…そんな話したら、また思い出すだろ…。」

了の声は、小さく、囁くように発せれ、同情でも、哀れみでもない、別の感情が込められているように聞こえた。

「うん…。ごめんね、つまらない話して…。」

言い終えたら今度は申し訳なくなつて、ユリが謝った。

すると、了の息遣いが一瞬戸惑い、しかし、とても優しい声で呟いた。

「…いいよ…。わかつてるから…。」

その言葉に、ユリが「…え？」と聞き返す。

『わかつてる』…？

それは、ユリの事を調べて、知っている、という意味か…？

問おうとして、また目の前が光った。

が、今度は記憶ではなかった。

「無事かい？ お嬢ちゃんたち。」

声がかして、光の筋を辿ると、開け放たれた扉の向こうで、飛澤がにかつと笑っていた。

「飛澤さん！」

叫びながらユリが飛び出すと、飛澤がユリの肩をぽんぽん叩いた。続いて出てきた了に「助かりました…」と声をかけられると、飛澤は豪快に笑いながら謝った。

「すまんすまん。」

館長が席外してて、なかなか連れてこられなくてな！」

「いえいえ、そもそも悪いのはコイツですから。」

了が恨めしそうな顔でユリを見、顎でしゃくった。

「なっ！」

ユリが頬を膨らませた。

（なに…？ さっきと全然態度が違う…！）

わざとである事は明確なのだが、相変わらざる態度の急変に驚く。恐らくそのユリの内心すら察している了は、ユリに睨まれながら、飛澤を見上げた。

背の高い了がさらに見上げるほど、飛澤は大きい。

飛澤が了の視線に気付いて、胸を張った。

「それはそうと、蕪木さんよ。」

監視映像の再生準備出来たぞ。」

視線は合図だったのだろうか、了が頷いた。

「ありがとうございます。」

取り敢えず、セキュリティ・ルームに戻りましょうか。」

了が言うと、飛澤が「おう」と言ってセキュリティ・ルームへと向かって歩き出す。了も飛澤に続いて歩き出したので、ユリは慌てて了の袖を掴んだ。

「何するの？」

「館長が襲われたと証言している時間帯の監視映像を、再確認してみようと思ったんだ。」

解析結果が周って来なくてな。

観るか？」

了がニヤリと笑った。訊ねてはいるが、恐らく観るだろうと予想しての問いだった。

「観る！」

ユリは掴んでいた了のジャケットの袖を、さらにぐしゃりと掴んだ。

暫く無言で歩き、セキュリティ・ルームに到着すると、薄暗い室内に菅野が佇んでいた。

モニタを背中に立っているの、顔が逆光になってよく見えなかったが、臍気に困惑している様子が窺えた。

「ああ、蕪木さん、ユリさん、大丈夫でしたか？」

了とユリを見るなり、声をかけてくる。

「お手数おかけしました。」

「ごめんなさい、館長。」

各々頭を下げると、菅野が苦笑した。

「いえいえ、すぐに来られなくて、申し訳ありませんでした。」

急な来客がありまして、すみません、そろそろ館長室に戻らなければ……。」

丁寧にとユリに頭を下げた後、菅野がそわそわとし始めた。了がその様子を見て、にこりと微笑む。

「どうぞ、お気になさらず行ってください。」

わざわざありがとうございました。」

その笑顔は、ユリからすると胡散臭い事この上ない。

菅野はもう一度頭を下げ、「では」と言って出て行った。

ユリと了は、菅野を、扉が閉まるまで見送っていたが、菅野が行き扉が閉まった瞬間、了が浮かべていた微笑をふっ、としまい、一転して扉を睨み付けた。

「客、ね……。」

口も然程開きもせず、ボソボソと呟く了の声を、辛うじて聞き取ったユリは、小さく首を傾げる。

すると、少し離れたところにいた飛澤が、「おう、兄ちゃん」と了を呼んだ。

「始めていいかい？」

「お願いします。」

答えた了の表情は、いつの間にか普段と変わらないものに戻っていた。

5月2日 4

「取り敢えず、警察に提出したのと同じ部分を再生するぞ。」

飛澤が言い、セキユリテイ・ルームのモニタ群の中心にある、一回り大きなモニタの映像を切り替えた。

一昨日、ここで観た映像と同じものだ。

了の話では、北代経由で専門機関に解析を依頼したらしいのだが、北代から解析結果は教えて貰えなかったらしい。

だからと言って、肉眼で観て、一体何が判るというのだろうか。

映し出された映像には、以前観たときと同様に、右上に白い文字で、『中展示』『4/29』『18:00』と表示されている。

「一昨日、私たちが観せてもらった時間帯ね？」

ユリが言つと、了が「そうだ」と頷いた。

少し小さな声だった。

恐らく、飛澤や他の警備員に、会話を聞かれたくないのだろう。

ユリも小声で喋るよう、気をつける事にした。

「一昨日、工事関係者を含む、全ての人間がこの美術館から出たのが、二〇時一三分だと確認された。」

そこまでの映像には、タイピンは映っていない。」

確かに、一昨日観た限りでは、二二時頃の映像に何かの物影が映っていた以外、特に変わった様子は見受けられなかった。

タイピンそのものは小さく細いもので、天井近くから見下ろして撮られた映像に、それと判るように映るかというところは疑問ではあるものの、タイピンが映りこんだ映像の前後で見比べてみると、やはり『映っていない』と判断して問題なさそうだった。

「うんうん。」

「二〇時一三分、最後の工事関係者が退館した。」

ここから、一昨日タイピンが映り込んでいたのを確認した〇時までは、誰も映ってはならないはずだが……。」

了が、何倍速かで再生される映像を眺めながら言う。

そして、最初に、映像に『怪しいもの』として物影が映り込んだ瞬間で、映像が止まった。

「二二時〇五分から〇六分。

マントらしきものが映り込んだ。

このカメラには死角はほぼない。

なのに、突如としてこのカメラにものが映り込んだ。」

了が言うように、映像内の様子と、実際の部屋を思い出し、比べるが、見えない部分といえばカメラ周辺の壁や天井くらいで、そのほかはほぼ映っているようだった。

「死角…か…。

天井は、ちょっと離れたところしか映ってないわよね。

こういうところを伝って、あの部屋まで行けないかしら…。」

言ってみるが、無理な事くらいはユリでも解る。

「ムリだな。」

了が即答した。

「カメラの真上は死角でも、それ以外はほぼ必ず映る。

そのごく限られた死角の中だけを往来出来るようなサイズの人間は存在しない。」

「小人さんなら行けるわね…。」

すかさず冗談を言ったユリに、了が「バカ」と吐き捨てた。

だが視線はモニタを観たままで、表情も何一つ変わっていない。いつになく真剣な表情だ。

言葉でだけでも相手にしてくれた事に、やや嬉しさも感じつつ、

だがその言葉にむっとする。

「でもこのマント、あのカメラにしか映ってないのよね…。」

「そうだな。」

そう答える了の視線の先では、まだ一瞬だけ映り込んだマントのコマで、映像が止まっている。

画面の端でチリチリとノイズが走って、画面全体が少し揺れてい

るような錯覚を覚える。

「ねえ？」

「ん？」

「やっぱり、映像に手を加えてあるって見たほうが、自然よね？」

「だな。」

「で、監視映像は、このセキュリティ・ルームの中でしか記録してないんでしょ？」

「うん。」

「なら、手を加えたのは、ここに入る事が出来る人よね？」

この部屋に出入りした人を調べて、そこから何かつかめないの？映像に手を加えるには、ここに入って、操作しなきゃいけないわけでしょ？」

了がきよとした顔で、ユリの顔を見た。

暫く見つめあった後、了が思い出したように言った。

「そうか、お前には話してなかったんだな……。」

そう言いながら、了は足元に置かれた革製の書類鞆を漁った。

了の私物だろうか、暗がりのセキュリティ・ルームの中でも、質の良い革で出来ていると判るほど、鞆は滑らかなツヤを放っている。「なにが？」

とユリが覗き込むと、了はしゃがんだまま、鞆から取り出した物をユリに手渡す。

透明のビニール袋に入っているのは、小さな機械のような物だった。

「ナニコレ？」

ユリが指の先で袋を摘んで持った。がっしりと受け取るのが躊躇われるほど、その機械は小さく薄い。

袋を指で摘んだまま、目の前に持ってくると、金属製の外見の隙間から、何本もの細い銅線のようなものが見えた。

「これは、改良された小型送受信機。」

距離は限られるが、ある程度離れたところから発信された電子情

報を受け取ったり、そこへ送信したり出来る。

このセキュリティ・ルームは、館内のカメラからの映像を有線で受信して、リアルタイム録画している訳だが、その線がこの室内で集中して束になって、この機械に繋がっている。」

そう言つて、了は、モニタの下にある操作パネルをトントンと指で叩いた。

「簡単に説明すると、その線の束を伝つて来た情報が、この機械に記録される寸前の場所に、この送受信機が設置されていた。」

てんで機械には疎いユリが、首を傾げる。

「そうすると……？」

了も承知の事と、「うん」と短く言つてから、続ける。

「例えば、ユリの目の前に、外の景色が一望出来る大きな窓があるとする。」

「うん。」

「でも、近付いてみると、実は、その窓はただの壁で、実に写実的な絵画が貼つてあつただけだった。

この送受信機はその絵画の描かれたキャンバス、と言つたところだ。

カメラの映像を、この送受信機で受け取り、同時に換わりとなる別の映像も受け取つておき、差し替えながら録画させる。

これが一昨日の夜に行われていたわけだ。」

リアルタイムで上書き録画されていたという事か、とユリが言つと、了が頷いた。

「このセキュリティ・ルームは、外部電波の遮断処理は施されて入るものの、警備用の無線を一旦館内に設置された専用の受信機で受け取つて、有線でこの部屋の機械に送られ、それぞれの処理がなされるようになっていいる。どうやらそれを利用して、館内の受信機を経由して、映像を加工したようだ。

きちんと説明をすると、別の小型機械が無線を送受信する館内の無線受信機に設置されていて、そこで映像に『加工する』と命令を

埋め込んで、この部屋に有線で送られた情報をこの小型受信機が命令どおり『加工』して、この部屋の機械が録画した、という流れだ。

「へえ……」

でもさ、ならなんで、マントがちらつと映っちゃったりしたの？」

「一見、不思議だろ？」

「うん。」

「でも、その謎は比較的簡単に解けるかも知れない。

さつきも言ったように、これは非常に小型で、受信精度も大して高くはない。カメラに取り付けられた機械もそうだが。しかも無線だ。

一瞬でも電波が途切れれば、その瞬間は正常な情報が流れる。電波であるが故に、証拠を伴った説明は難しいが、恐らくは、あの夜、何らかの理由で電波が途切れる時間帯があった。

そのときに、カメラがリアルで映していたものが記録された。この原理であの人影も説明はつけられる。

意図的に残したのではなく、残ってしまったんだ。

と言う事は、その場でハッキングなりなんりをしなかった事はやや不審ではあるが、この機械を仕掛け、映像に手を加えた犯人は恐らく、マントの主だ。」

と言う事は、だ。

「タイピンも、本当なら映ってなかったかも知れないってこと？」

ユリが了を指さした。指された了は、「そう言う事だろうな」と、にやりと笑う。

「タイピンが映ったのは、〇時だったな。」

飛澤に聞こえるように言いながら、了が飛澤を振り返った。飛澤は了の言葉を汲み、〇時頃まで映像を早送りし、止めた。

「と言う事は、マントが映った時間から約二時間、誰かが確実にこの美術館にいた。

そしてその人物がタイピンを落とした。

タイプンは、ほぼ一〇〇%”男爵”のものだと思うから…。」

「一昨日の夜、”男爵”がこの美術館に現れた…?」

だが、今まで完璧なまでに盗難を繰り返してきた”男爵”が、自ら証拠が残ってしまうような状況を作るだろうか。

怪訝な顔をするユリに、それでも了が深く頷いた。

瞳は真剣そのもので、ユリを力強く射抜いている。

「俺はそう思ってる。」

もう一つ、実は黙っていた事があるんだが…。

この送受信機、一昨年の”男爵”の事件で関係した施設の監視設備にも、同じものが仕掛けられていた。

内部構造とか調べる必要があったんで、この辺の確認が遅くなつて、今までは同一と断定出来なかった上に、俺の手元にこの遺留品があると情報が入ったのも、今朝の事だったんだが…。」

「でもどうして?」

だって、予告までまだ日もあつたし…。」

前例はあるのか?

予告日以外の日に、”男爵”が現場に現れるという事が…。

なかったのなら、何故今回、”男爵”は現れたのだ?

「どう考える?」

了が、ユリの手元から、送受信機の入った袋をゆつくりと取った。聞かれて、ユリは「うーん」と唸る。

どうして現れたか、そんな事は判る筈がない。

どれだけ想像したところで、その答えは常人以外知り得ない事だからだ。

「あのマントは、さっきの話を事実だとするなら、”男爵”のマントって事になるのよね。」

マントの主がこの送受信機を仕掛けた犯人なんだから、この送受信機をつける事が出来た人物、イコール”男爵”は、当然この美術館に普通に入り込める人物である可能性が高いわけよね。

予告状は”男爵”が自分で出している訳だし、そもそも男爵がこ

こに出入りしている人間なら、”紅い涙”がまだ搬入されてない事も、知ってた可能性が高…。」

言いかけて、搬入が終わっているのか確認すると、了は「明日のセレモニ―直前だと聞いている」と答えた。

それでも、タイピンが落ちていた事が、”男爵”がここへ来た事を証明しているというのなら、考えられる理由は、そう多くはない。「男爵”は”紅い涙”のほかにも、何か狙っているものがあるんじゃないのかしら？」

ユリがモニタを見上げた。

○時で止まった映像の端のほうで、タイピンと思しき物が光っている。

ユリは、思い馳せる。

「きつと、こうね。」

”男爵”は、その『他に狙っている何か』のために、あの夜、この美術館に入り込む計画を立てた。

スパイがいるのか自分で調べたのかはわからないけど、どういう監視カメラが設置されているかとかは当然知っていた。

だから、小型の送受信機を予め設置して、自分が忍び込んでいる間、監視映像に手を加えた。」

予告日を待たずに、忍び込み、手に入れたかった『何か』。

不安定な機器を使用する事から考えて、その『何か』を手に入れるのに、そう時間がかかるとは思っていなかったのかも知れない。

しかし、何らかの事情で長時間の滞在を余儀なくされた。

その理由は、菅野の襲撃事件と関係があるのか？

「はつきりと改竄されていると判っているのは、今のところ中庭側の中展示室と、小展示室。」

あと、館長が出入りしたって言うてる職員通用口と、非常階段付近…？

と言う事は、用事はその近辺にあった訳ね。

タイピンが落ちた理由は判らないけど、落ちていた場所が、この

機械によつて映像が改竄された展示室と重なっていると言う事も含めて、あの夜この美術館に”男爵”がいたという状況証拠くらいにはなるんじゃない？」

言い終え、ふと、不安にかられる。

「でもさ……」

「ん？」

「実際に送受信機を仕掛けたのが”男爵”でも、カメラに映ったのは別人つて可能性もあるじゃない？」

それに、あの夜、マントの他にもあの時間に誰かいて、その人が”男爵”でタイピンを落としたとか、そういう可能性だつて……」
そう。

ユリと了、匠が話し合つてきた事は、全て想像の域を出ない。
なのに、了は何故か、自信満々に自論を確信しているように見える。

可能性などと言うものは、広げれば広げただけ広がってしまう。
捜査をする上では、無限の可能性ほど足を引っ張るものはないの
だろうから、可能性の中から、高いものを優先して追って行くのは
理解は出来る。

だが、それでも了の確信はどこから来る物なのだろうか。

数日ともに過ごして思う事は、”男爵”について、了はとても『
感情的になる』、と言う事だ。

”男爵”が関わっている可能性が少しでもある事は、真つ直ぐに
関連付けてしまっているような気にもなる。

ユリの心配を察しているのか、了が表情を和らげた。

『俺はそれほど馬鹿じゃない』、とても思つていそうだ。

”男爵”のタイピンをどこかで拾った誰かが、それを美術館に落
としたつて可能性もあるしな。」

「アンタのほかに、”男爵”のタイピン、見たことある人いるか
もしれないじゃない？」

そしたら、レプリカ作る事だつて、出来なくはないと思うの。」

「受信機つけた人物も、カメラに映っていた人物も、”男爵”に全く関係ない人物である可能性だってあるしな。」

「…。」

「うん…。」

今までの了の意見を、全て否定するようで、ユリの声は段々小さくなって行つた。

そして言い終わる頃には、傍にいる了ですら、聞き取り難いほどになってしまっていた。

了は、やはりユリの懸念を察していたようで、ユリの意見に否定はしなかった。

「でも…、蕪木さんは、”男爵”だって信じてるんだ？」

ユリが問うと、了は深く頷いた。

「間違いないと思ってる。」

「それって、カン？」

「それでは困る。」

「そういうと身もフタもないが…。」

了は苦笑しながら言い、しかしふと、哀しい表情を浮かべた。

「ただ、何となくな。」

”男爵”が本当は誰だか、判ってきたような気がしてるんだ。」

「え？」

判ってきたというのに、何故そんな顔をするのだ…。

「誰かはまだ言えない。」

根拠もまだない。

「ただ…。」

了の言葉は、そこで途切れた。

その様子は、最近よく目にする、ユリを呼んで、「なんでもない」と言い、去って行くときの様子と重なる。

「ただ？」

「教えて欲しい。」

了が考えている事を。

自分に、何を言いかけ、止めてしまうのかを…。

ユリが急かすと、了がまた苦笑した。

「…いや、やめておこう。」

「……………だからな……………」

最後は聞き取れなかった。

（え？　今なんて…………？）

問いかけて、それを察した了に防がれた。

「取り敢えず、続きを観よう。」

了はそう言っ、ユリから視線を外してしまった。

表情は元の真剣なものに戻り、これ以上その話はしてはいけない、という空気を作ってしまった。

ユリは仕方なく、「ああ、そうね」と言い、モニタを見上げた。

やはり、了とは共有出来るものが限られているのだ。

ユリは哀しくて仕方がなかった。

5月2日 5

さらに続きを、倍速で再生して眺める。

やがて映し出されたのは、人影が二体映った、〇三時〇二分の映像だ。

「人影。二体…。」

了が呟いた。

「どちらも館長の影じゃないとすると、美術館にはあの夜、マント、館長、人影の二人の、最大四人いたって事ね。」

気を取り直したユリが言うが、了は無言のままだった。

「どしたの？」

ユリが了の顔を覗き込むと、了は「…いや…」と煮え切らない返事をした。

「何よ？」

きっと頭の中を、色々な情報や仮説がとてつもない速さで巡っているのだろう。

了の頭は、いつもそんな感じなのだろうと思う。

落ち込んで、立ち直って、また教えてもらえず落ち込んで…では、さすがに苛立ちも覚える。

ユリが強く言うと、了が観念したように、しかし面倒臭そうに言った。

「…館長の証言は一〇〇%偽証で、この人影の片方こそが館長と見るべきなのかもしれないな、と想着て。」

「え？」

ユリが眉を顰めた。

「だって、蕪木さん、昨日は館長は嘔吐いてないと思っつて、言っただじゃない。」

館長は、この人影が映る前の時間帯に襲われたって言ってるんでしょ？

じゃあ、どうして嘔吐く必要があるのよ？」

自論を曲げてきたのには、それなりに理由があるだろう。

それは、自論を聞いている以上、問い質さなければ。

「どうにもな…、あの人は何か隠しているように見えるんだ。

襲われた原因が、誰にもいえない事だったりする場合、襲われた事自体を隠せないときは、時間帯を偽証する事が、一番有力な隠蔽方法になる、と俺は思う。

もし、あの夜襲われた理由について知られたくないなら、一番手っ取り早いのは、『誰かに会った』という事実を隠す事だ。

暗闇で顔は映らなくとも、人影が映ってしまう可能性を考慮した上で、さらに監視映像に手が加えられているという状況を把握していたら、映ってしまう可能性のある時間帯の早い時間に、自分にはアリバイがあると主張するのが有効だろう。

なら、その隠したい事とは何か？」

ユリは了の言葉に首を傾げた。

『監視映像に手が加えられているという状況を把握していたら』

…？

菅野が、あの送受信機について把握していたという事か？

それはつまり、侵入者がいるという事を把握していたという事ではないか。

「男爵”が来るって知ってたって事？ あの夜、館長は”男爵”と会ったってこと？」

延いては”男爵”と菅野の間には、確固たる関わりがある、と言う事になるではないか。

「…どうだろう…」。

或いは、あの夜、美術館には館長、”男爵”とあと一人の三人がいた…。」

「三人？」

「つまりさ。

まずあの夜、二階に”男爵”がいて、マントが映り込み、タイピ

ンが落ちた。

そのあと、館長と誰かが二人で二階へ向かい、誰かは何事もなく帰り、残った館長は襲われた。

もしくは、一緒にいた誰かが館長を襲い、屋根上に乗せた。

さらに考え得る可能性としては、その誰かと”男爵”は、共犯である可能性。」

「……。」

菅野自身は”男爵”と関わりはないが、何らかの理由で”男爵”と繋がりのある者に襲われた可能性……。

それにしても、菅野は”男爵”の関係者だと言ったり、関わる者に襲われた可能性を示唆してみたり、と、了の話を聞いている限り、菅野と”男爵”との関連性を否定するつもりはなさそうだ。

それはそれで、きつと理由があるのだと思うが、ユリにとっては、それを疑うだけの前提がないのだから、了の推測はゴリ押しするに近い印象を持つ。

「蕪木さんて、館長に過去何があったか、もう調べてあるんでしょ？」

唐突に言われて、了が思わず驚いた顔をした。

ユリは、やはり、と思う。

了は、ずっと、菅野の周りで何が起きてても、そこには必ず”男爵”の影を置きたがっていたように思う。現に、菅野は”男爵”の関係者だと考えているとも言っていたし、先のラウンジで盗み聞きした電話だってそうだ。

そこにどんな理由や情報があるのかは判らないが、『関係者』だと思っっている、というレベルの話ではない。

調査を踏まえて、『関係者』と断定される、という疑いをはっきりかけた状況ではないか。

やはり。やはり、何も教えてはくれていない。

教えられる事は少ないと言われたし、実際、素人のユリに教えられる事など、限られているだろうという事くらいは百も承知だ。

一度は、自分の役割も理解し、首を突っ込まないと決めた。

だが、この事件に関わってしまった以上、そして”男爵”に関わる情報である以上、聞く権利もあるのではないかと、思ってしまう。野次馬根性を否定するつもりはない。

だが、話すだけ話しておいて、これ以上は秘密ですと生殺しされては、最初から話してくれないほうがずっといい。

了の口から、ユリに語られる事がある以上、ユリも最早『関係者のつもりでいるのだから、生殺しされたのでは堪らない。

一体、了は自分に何を求めているのだ。

ぐつと言葉を堪えて、了を睨みつける。

苛立ちの理由が、哀しくなる理由が、漸く解った。

どうしていいか解らない、もどかさだったのだ…。

そしてこの気持ちすら、了は解っているに違いない。だから余計、悔しい。

どうしたらいいのだ。飲み込んだ言葉が、意図せず喉元で涙に変わる。

必死に堪えると、もつと了を睨む形になった。

しかし堪え切れず、涙腺から少しずつ涙が溢れる。

了に気付かれないように、必死に堪えるのに、堪えれば堪えるほど、溢れてくる。

もう堪えきれない。そこまで涙腺が緩んだとき、

「……………また立ち聞きしたな…。」

了が苦笑した。

「館長と”男爵”とは、関係者だと思ってる。」

「ああ。そう話したな。」

「思ってるだけじゃない。断定してる。」

「そうだな。」

素直に認める了に、何故か怒りは和らいでいく。

「…この間も少しは話してくれたけど、どうしてそこまで、館長を疑うの?」

問うと、了が笑顔を仕舞って、ユリから視線を外し、俯いた。

了の顔は、困惑でもない、寂しげにも見えない、強いて言うなら、何の感情もない表情を浮かべていた。

俯いて向けた視線は、床を見つつも、床の向こうにある何かを、揺らぐ事もなく見据えている。

「疑ってる事を責めてる訳じゃないの。」

ただ、知りたい。

蕪木さんが何を考えてるのか、理解したいの。

じゃなきゃ、一緒にいても、足引っ張っちゃうかもしれないもん。

┐

何かを望んでいるから、ある程度までは話してくれるのだろう。

だが、ユリは自分が器用でない事を自覚している。その先を知らなければ、望まれた通りには動けない。

ユリが言つと、了が驚いた顔をして、視線をユリに戻した。

そして、少しの間驚いたままユリを見つめた後、また、苦笑した。

「ユリはそんな事、心配しないでいいぞ。」

そう言つて、了はまた俯いた。あつという間に苦笑もなくなり、

苦しみに歪む。

「そうだな…。少し気を揉み過ぎかもな…。」

苦悶の表情で俯く了に、ユリが突っかった。

「答えになってないわよ…。」

言われて、了がもう一度苦笑する。

「答えたくないんだよ。」

「…だけにはね…。」

溜め息混じりに、しかし意図的に了は声を小さくしたが、了の声に集中していたユリの耳には、微かにだが届いた。

だが、聞こえた言葉は、耳を疑うものでもあった。

『キミだけにはね』…？

自分だけには、言いたくない事とは、何だ…？

ユリが尚問おうとしたのを見計らったように、了が飛澤を呼んだ。

「飛澤さん。」

「おう、終わったかい？」

少し離れた場所にいた飛澤には、小声で話していた二人の会話は聞こえていないようだった。

「はい。お手数おかけしました。」

そう言つて、了が頭を下げると、

「しっかし、兄ちゃんも大変だなあ。」

ケーサツの人なのに、消防点検で、しかも監視映像まで調べなきゃならんとは……。

過労死に気をつけなよ！」

と、飛澤が腰に手を当てて笑った。

「ありがとうございます。」と、了も苦笑する。

（あ、そうか……。飛澤さん、知らないんだっけ）

ユリは、ふと思う。

欺かれていたような気持ちにならないのか、と。

目の前で内緒話をされ、よく解らないまま協力をせがまれる。

何故と問う事は許されず、それでも問えば、はぐらかされたり、

意味深な事を言われる。

好奇心は留まる事無く、やがて、知らぬ間に、禁忌の領域に足を踏み入れてしまう。

匠が言っていた。いずれ了に頭が上がりなくなる、と。

解っている。了はずっと、自分を守ろうとしてくれている、と。

感じている。ユリのずっと深いところまで、了は知っているのだ、と。

だが、その合間に垣間見える了の行動には、やや一貫性に欠けるところもある。

もしかして、了は何か迷っているのではないのか。

一体、何を迷っているのだ。

飛澤と軽い世間話を終えた了は、ユリを一度振り返り、セキユリティ・ルームを出て行った。

ユリは、一呼吸置いて、飛澤に会釈をし、後を追う。
見失わないように、と、焦った事もあった。

今は…。

やはり、見失わないように、と、自然に早足になっていた。
すらりと伸びた背中を見つめて思う。

今何を考えているのだろうか。

他人だから、何も教えてくれないのだろうか。

了にとつて、自分はどんな存在なのだろう…。

知りたい事は、日に日に増して行くばかりだった。

5月2日 6

館長室までの道のりを、無言で歩く。

セキユリティ・ルームを出てから、了には話しかけ辛い雰囲気が漂っていたから、ユリは話しかけるのに戸惑っていた。

だが、菅野の事で気になる事もまだある。

館長室に戻る前に、少し話がしたかった。

というより、話の内容はどうでもいいのだ。

ただ、言葉を交わしたかった。

「今朝ね……」

思い切って切り出すと、了が意外にすんなり、何気ない声で「ん？」と答え、振り向いた。

歩みの速度も、少し遅くなる。

ユリは拍子抜けして、続けた。

「館長が変だった。」

「ヘン？」

了が怪訝な顔をする。

「うん。」

北代さんが蕪木さんの事探してて、叔父さんが調査に進展があったから職場に行ってるって答えたの。

そしたら、館長、急に顔色変えて、その事気に出して。

こっちの事件じゃないって叔父さんが説明したら、なんだかほつとしたみたいに……」

そこまで言うと、急に了が止まった。

勢い余って追い越してしまったユリが、慌てて止まって振り向くと、了は顎に手を当て、壁を睨みつけていた。

「どしたの？」

ユリが了の顔を覗き込んで訊ねるが、了は黙ったままだ。

「……」

「ねえ？」

さつきより少し強めに訊ねると、了は「…いや…」とだけ言って、ユリを置いて歩いていってしまった。

「あ、ちよつと…」

何よ…、ヘンなの…。」

唖然としていると、了との距離はあつという間に離れてしまい、気付いた時には了は曲がり角を曲がってしまっていて、見失っていた。

走って追いかける事も躊躇われ、行き先は同じだから、と、ユリは歩いて館長室へ向かった。

暫くして、人気のない職員通路に出、すぐに館長室に着く。

「ただいまー。」

部屋に着くと、匠と菅野が出迎えた。

「おかえり。」

「おかえりなさい。」

しかし、了の姿がない。

「あれ？」

あいつ、戻ってないの？」

ユリがキョロキョロと室内を見回した。

「蕪木クンなら、用があるからって職場に戻ったよ。

なんだか慌ててたなあ…。」

匠が答えた。

「ふうん…。」

さつき考え事をしていた事と、何か関係があるのだろうか。

ユリはそう思いながら、室内の時計を見上げた。

いつの間にか、昼を越し、そろそろ一五時半になるところだった。

「ユリ、僕はちよつと用が出来たので美術館を出るけど、ユリはどうする？」

匠に問われ、ユリが少し考える。

帰ってもいいのだが、何故が残っていたい気分だった。

予感、という程ではないが、もう少し館内を見て回りたい衝動に駆られたのだ。

「もうちょっとここにいるわ。」

答えると、匠が頷いた。

「そうか。」

遅くならないようにするんだよ。」

「はい。」

ユリの返事を聞いてから、匠が菅野を見た。

「館長さんは、今日これからどうされるんですか？」

菅野は、匠とユリの会話の最中、机の上の書類をまとめて、鞆に入れていた。

「私も、これから会議があるので、もうすぐここを離れます。と言つても、隣のフォーラムにいるので、用が済んだら戻ってくるかも知れませんが。」

そう言つて、笑つた。

「あ、じゃあ、私ここに残ってるの、まずいですか？」

ユリが慌てると、菅野はさらににこりと笑つた。

「いえいえ。」

工事の人もいますし、警察の方もまだいますから、大丈夫でしょう。

私は構いませんよ。」

「よかった。」

ユリも笑い返す。

話している間に準備も出来たようで、察した匠が立ち上がった。

菅野も鞆を手に、机を離れる。

「では、また明日もよろしく願いしますよ。」

「はい。お疲れ様でした。」

また明日。」

ユリは、出て行く匠と菅野を見送り、一先ずソファに腰を下ろした。

飛び乗るように座ったので、ぼす、と大きな音がした。そのままソファに沈み込むと、どっと疲れが出てきた。はぁ、と溜め息を吐くと、眠気まで襲ってくる。

了から、菅野が疑わしいとすり込まれているにしては、普通に接する事が出来た。

まずは、それが大事だ、とユリは独りで頷いた。

ここで挙動不審になつては、それこそ了の邪魔になってしまいうだらうから。

ほっとしながらも、菅野の事を考える。

菅野は”男爵”の関係者。

了の態度から察するに、過去に関わりを持った事による、直接の関係者であるらしい。

過去…。

過去と聞いて真つ先に思いつくのは、クレアの記憶の事だ。

あの記憶の前後にも、菅野の名が出てくる。

そして、了は、その記憶も、”男爵”に関係があると見ているようだった。わからないとは言っていたが、きっとそう思っているに決まっている。

クレアの失くした記憶と、”男爵”。

どう繋がるのだろうか…。

クレアが思い出せば、”男爵”と繋がるのだろうか。

でも、その記憶が蘇る事を、恐れている人物もいる。

クレアの兄だ。

何の前触れもなく、突然消えたクレアの兄。

彼は何を知っているのだろうか…。

彼が何か知っているなら、クレアと”男爵”が繋がっているのかどうか、知っているというのだろうか…。

失くした記憶の中で、もしクレアと”男爵”が繋がっているのなら、そこに関わる菅野や、同じく名の出てきたバークレイも、繋がっている可能性がある。

了の確信は、ここから見出したものなのだろうか…。

だとしたら、こんなに都合のよい話はない。

何せ、”男爵”に関わる者と、”男爵”自身が、もうすぐ、この美術館で一堂に会すからだ。

そればかりではない。菅野などは、既に高い可能性で”男爵”と接触し、襲撃されて被害者となっている。

出来すぎてはいないだろうか。

誰かが、何かを計っているのだろうか。

たまたま都合のよい事だけを拾って、結び付けているだけではないのだろうか…。

考え事していると、寝てしまいそうだった。

ユリは、パンと両頬を叩いて気合を入れ、立ち上がると、館内を一通り見回って帰ることにした。

5月2日 7

眠気のせい、少しぐらつく頭を軽く振り、ユリは館長室を出た。職員通路を通り、エントランスへ出る。

足が重い。

頭は相変わらずふらふらとする。

やや朦朧とする意識は、何故か二階へ向かうよう、足を動かす。

ユリは無意識に二階へ向かい、まだ数名の警官や、工事関係者らしき人物が歩き回る中、特別展示室へ入った。

明後日には、この部屋の中央に、“紅い涙”が展示される。

その“紅い涙”が鎮座する台座よりしい展示台は、数段盛り上がった円形の舞台の上に、静かに佇む。

床には、ポールを立てるための穴が空けられ、当日はロープによって作られた『回廊』を、人が行列になって進みながら、一瞬の『謁見』を賜るそう。

立ち止まる事は赦されず、通り過ぎる事のみが、唯一の方法だという。

台座を横目に、ユリはベランダに出る窓の前に立つ。

鍵がかかっているようで、開かなかった。

窓ガラスからベランダの足元を覗き込み、天井へと視線を上げる。住宅とは違い、天井は非常に高い。

思えば、この高さの天井の上にある屋根へなど、どう菅野を持ち上げたというのだろうか。

ぼうつと考え、ユリはまた無意識に誘導されるように、特別展示室から中展示室へ移動する。

三種類の展示室には、展示台が運び込まれ、美術品が並ぶのを待ち構えている。

ブルーシートは綺麗に取り除かれ、やっと、美術館本来の趣を醸し出す。

雰囲気とは大事だと、思った。

そのまま、楕円状に並ぶ展示室を周る。

そして小展示室に差し掛かったとき、周りが妙に静かな事に気付く。

見回してみると、先程までうろつくと歩いていた人人は、いつの間にかいなくなっていた。

フロアはしん、と静まり返り、物音は一切しない。

その人のいなさ加減に、ユリは眉を顰める。

人の気配の一切が消えてしまうのは、些か疑問だ。

（警備員さんとか、巡回してもいいのに…。

監視カメラがあるから、大丈夫なのかしら？

ってことは、周ってる私も、見られてるって事か。）

ユリは一人納得をして、三階へ向かった。

ラウンジは通り越して、セレモニーホールに入る。

元々人の出入りが少ないのか、空気が淀んでいるように感じる。

一歩足を踏み出すたび、カッンと足音が響き渡る。

（人気のない広い場所って、昼間でも薄気味悪いわよね…。）

思いながら、ユリは天井近くにある窓を見上げる。

空はすっかり橙色に染まり、時折流れる雲の陰が、紫色に輝く。

「あら、もう夕方…。」

あ、そうだ。」

夕日を屋根上から見たら、綺麗だろう。

ユリは思い立って、見つけた『秘密の梯子』を登り、窓に登る。

「おお！ 綺麗…。」

窓から臨む夕焼けは、溜め息を吐くほどに絵画的で美しかった。

遠くのビル群が翳り、擬似的に作られた夜の中で、チラチラと灯りが点る。

夜と夕の境目。

ユリは窓辺に座り、ガラスに凭れかかる。

どっと疲れが出る。

瞼が重くて、自然と目を閉じる。

あと二日…。

あと二日経ったら、クレアや了とはお別れなのだろうか…。

クレアとは、きつとメールをしたり、手紙を交換したりして、これからも仲良しでいられそうだ。

でも、了はどうだろうか…。

事件が終わったら、「ハイ、もう赤の他人」と、言いそうだ。

(…ちよつと…残念、かな…。)

胸が、少しだけ苦しくなった。

が、視界だけでなく、意識までが暗闇に引き擦り込まれていく。

(あれ、どうしよう…。)

眠くなって来ちゃった…。

……いっか…少し眠っちゃっても…。(

いいよね…。)

ユリはぼつりと呟いて、襲い来る眠気に全てを委ねた。

5月2日 8

暗闇。

暗闇だ。

足元を見下ろすが、何も見えない。

自分の姿すら見えない暗闇なのに、闇自体は白んで、少し明るく感じる。

ここはどこだろうと思いつながら、ユリは探し人をしている。

「…あさん…？」

お…うさ…？」

意識が朦朧とする。

声がきちんと出ない。

闇を見回すと、遠くで白い人影がぼんやりと浮かんた。

「…あ！

おかあさん！

おとうさん！」

呼ぶと、手招きをされているような気がして、ユリは駆け寄ろうとした。

すると、突然、呼ばれた。

「ユリ！」

「！ 誰…？」

誰とも知らぬ『声』に問いかける。

誰だか判らないのに、知っているような気がした。

見回しても、誰もいない。

両親だと信じた人影すら消えて、『声』だけが、闇中に響き渡る。

『ダメだよ。』

『声』が言った。

「なんで…？」

おかあさんとおとうさんがいるのよ！ 邪魔しないでよ！」

ユリは何故か苛立った。

やっと両親を見つけたのだ。

…やっと…？

苛立ちながら、妙な感覚に戸惑っていると、尚『声』がユリを呼び止める。

『駄目だ！』

戻って来てくれ！

生きて、笑うんだ…。』

言われ、目の前に、否、頭の中かも知れないが、何かが一瞬映り込んだ。

一瞬なのに、目に焼きつく。

崩れ落ちて膝間付き、両手で体を支えて頂垂れ、懇願するあの人。

あの人は…、

『君の手足になる。』

この声は…、

『頭にも、口にも、目にもなる。』

いつも眠そうで…、

『君のために何でもする。』

時々不機嫌に睨み…、

『君がもう一度笑ってくれるなら…。』

時折優しく笑う…、

『なんでも…。』

あの…。

闇の中で、響き渡る『声』が徐々に大きくなり、そして急に、目の前が真っ白に光った。

「…！！！」

驚いて目を瞑る。

ぐっ、と全身に力を入れ、緊張する。

肩を竦ませ、拳を握り締め、どのくらい経っただろう。

ユリはゆっくりと目を開けようとする。

瞼が開くのと同時に、意識も戻ってくる。

すうっと風が流れたような気がして、思い切って目を開けると、見慣れた夜景が見えた。

寝てしまったのか…。

窓の外をよくよく見てみるが、空はすっかり暗闇に包まれ、ビルは灯りも数個が輝くだけで、黒い影として聳え立っているだけだった。

窓と梯子を隠すカーテンを除けると、館内もすっかり照明が落とされ、非常灯の小さな灯りと、非常口の緑色の灯りがぼんやりと辺りを照らしている。

一体何時だというのだ…。

そう思いながら、手の違和感に気付く。

ぎゅっと拳を握り、開いてみると、べっとりと汗を掻いていた。そういえば、なにやらとても緊張した気がする。

「夢…。

何だろう、ものすつごく知ってる人が出てきた気が…。」

思い出そうとするが、思い出せない。

とても大事な事のような気がするのに。

ユリは急に不安に駆られ、もう一度窓の外を見た。

「どうしよう、帰らなきゃ…。」

取り敢えず、梯子を降りる。

暗闇の中で降りる梯子は、昼間とは一変して、妙に不安定に思えた。

不意に足場が消えてしまうような気がして、膝が震える。

やっと床に辿り付き、フロアロビーに出るが、やはり真っ暗だった。

「明かり落ちちゃってるわ。」

どうしよう、警備員さんに怒られないかな…。」

言いながら、飛澤に聞いたセキュリティの事を思い出す。

「床上三〇センチの警報装置とか、鳴らないけどどうしたのかしら

…。

あ、もしかして、まだ誰がいるのかも！」

警報装置を解除するセキュリティ・カードを持っている事をすっかり忘れていたユリは、そう思い、取り敢えず一階に向かう事にした。

5月2日 9

館内は、全ての照明が落ちてしまっているようだった。

暗闇の中で、非常灯だけが緑色の不気味な光を放っている。

然して遠くまで届かないその光を頼りに歩き、漸くエントランスに辿り付いた。

静かだ。

静か過ぎて、恐怖すら覚える。

夜の美術館がこんなに怖いところだったとは…。

ユリはエントランスのドアへ近付いた。

中庭に備え付けられた街路灯の灯りが、弱弱しく館内へ入り込む。曇っているのか、空は真っ黒だった。

自動ドアは開かないだろうと思ったので、手動で開くドアの取っ手を握り、押してみる。

が、ガタガタと音が鳴るだけで、開かなかった。

「やっぱり開かないか。」

職員通用口なら開いてるかしら…。」

踵を返し、降りてきたエスカレータの右脇にある植木の陰を見る。樹の隙間から、鉄扉が見える。

普段行き来をしている、館長室へも通じる職員通路の入り口だ。

扉に歩み寄り、ぐっと押すと、ギイと鈍い音を上げ、扉は開いた。通路は真っ暗だった。他の館内と同様、非常灯の緑色の灯りが見えるだけで、灯りはおろか、人の気配すらしない。

一步、通路に足を踏み入れると、カッンと足音が響き渡った。

夜になり、空気が日中よりうんと澄んでいるのだらう。いつもより大きく響く足音に、ユリは一瞬、ドキリとする。

数歩進んで、漸くアラームの鳴らない理由を思いついた。

（カード持ってるからか…。）

恐らく、警備室には誰かしらいる筈だ。

ユリの姿は丸見えなのだろうが、言い訳くらいは聞いてもらえるだろう。今日のところは、そのまま帰ろうと思い、さらに通路を進むと、地下へ降りる階段の斜向かいに職員通用口が見えた。

「あ、あった。」

呟いて、ドアに近付く。

外からも中からも、とにかく出入りする以上専用のカードが必要になるドアだ。

もちろん、今ユリが持っているカードで開くようになっていた。

ドアの脇にある、セキユリティ・ルームと同型の装置にカードを差し込む。一瞬読み込みの間が空き、次いで、小さく、ピ、と電子音が鳴った。

その刹那、ゴトツ、という、やや鈍い物音が聞こえた。

「！」

ユリは驚いて、音のしたほうを見やる。

音は通路の奥から聞こえた。

奥には館長室がある。

誰の気配も感じない中で、不意に聞こえた物音。

何かが自然に倒れたか、落ちたかしたただけならよいと思いつつ、

ユリは足音に気を配りながら館長室へ近付いた。

両開きの扉は少しだけ開いていて、何故か冷たい空気が流れ出していた。

扉の目の前で、音を立てずに深呼吸をし、中を覗き込む。

そのユリの目の前を、黒い何かがはためきながら横切った。

それが何かと理解をする前に、無意識に上げた視線の先で、紅い模様の入った真っ白い仮面が、ユリを見ていた。

ユリは声も出せず、ただ目を見開いた。

仮面は、その鼻下から覗く口許でユリに微笑をし、さつと風を切つて窓へ駆け寄ると、猫のように窓から外へ飛び出して行ってしまった。

ただ呆然とその様子を眺めていたユリは、仮面が消えて暫くして

も、一言「な…」と発するので精一杯だった。

声を出してさらに数秒し、漸く頭が回りだした。

今のは、まさか…。

「男爵」…?!」

口に出して、ふと、異様な臭いに気づいた。

仄かにしか漂っては来ないが、鉄が錆びたような、吸い込むと咽るような臭いだ。

室内を見回す。

仮面が逃げて行った開けっ放しの窓の方からではない。

館長の机の方から漂って来るようだ。

鉤型になった館長室の中で、机は一番奥、入り口からはやや見え難い場所に置いてある。

扉の目の前のソファセットに一旦近付き、カウンター式の背の低いキャビネットの向こうの机を見る。キャビネットは鉤字の角に密着して、左側を通路として空けている配置なので、机の下の方が見えない。

だが、やはり臭いは、机からしているようだ。

余り嗅ぎ慣れない、そして決して心地よいと感しない臭いに、ユリは鼻の頭に皺を寄せ、呼吸を最小限に抑えた。

一步一步近付き、キャビネットを回ると、臭いは一層強くなった。ユリはキャビネットに背をびったりと付けたまま、横歩きしながら、机の右脇へ視線を落とした。

指が見えた。

まさか…。

誰か倒れているのか？

さらに横へ歩く。

徐々に机の物影が露わになり、指の正体が明らかになっていく。

そして最後の一步を踏み込んで、即座にユリは息を飲んだ。

「っ！……！」

そこには、バークレイが黒い水溜りの中で、うつ伏せになって倒

れていた。

咽返る臭いはバークレイから発せられ、体が浸る水溜りはどす黒く、そして白いシャツに染み込んだそれは、仄かな月明かりだけが頼りの暗闇にあって尚、紅紅と輝いている。

突然の光景に、ユリの呼吸が徐々に早くなっていく。

何も考えられず、ただただ、目の前に人形のように無造作に倒れるバークレイを、凝視していた。

が、不意に、ひゅっと音を出して、ユリが思い切り息を吸った。

「いやあああああああああああああああああああああああ
ああああっ」

5月3日、と4日 1

あの日、彼が”アレ”を届けてくれなければ、僕はあの事件を有耶無耶のままにしまったかも知れない。

あの日、我が家の呼び鈴を鳴らした彼は、悲痛に顔を歪ませて、
”アレ”を僕に差し出した。
「唯一、これだけが残っていました。」

受け取ろうと手を伸ばした僕に、一転して懇願してきた彼を、僕は今でも忘れない。

「もし…、もしよろしければ、これを僕に預けてくれませんか。」

泣きそうになって言う彼が、何故そこまで苦しむのかを知るには、もう少し時間がかかったが、不思議と何の理由も解らないまま、彼に”アレ”を託したあの時の僕は、本当は彼に、八つ当たりをしたかったのではないかと、時折思っては、怖くなる。

妙な夢を見た気がして、了は、ぱつと目を開けた。

辺りを見回すと、セキュリティ・ルームの中だった。

人影はなく、青白いモニタの灯りが、相変わらず不気味だった。
寝てしまったのか…。

何の嫌がらせか、北代から監視映像の鑑識結果が下りて来ない状況に痺れを切らし、再生機材を使わせて貰っていたのだ。

何度も何度も、繰り返し、菅野が襲われたあの晩の映像を観た。

気が付くと、寝ていた。

了は頭を振って、ふう、と溜め息を吐き、深々と座っていた椅子から腰を上げた。

伸びをすると、腰の骨が鳴った。

もう一度溜め息を吐いて、脱いでいたジャケットを羽織り、ジッパ―を上げる。

ジャケットのポケットに、車のキーがあるかを確認し、セキュリティ・ルームを出す。

何故セキュリティ・ルームに誰もいないのか、深く疑問に思わなかったのは、疲れの所為もあつただろうか。

普段なら、移動する毎に携帯電話で時間を確認するのに、今夜に限っては、何も見ずに地下の廊下を進んだ。

階段を登る。

いつもと同じペースで。

だが、頭の中はどうもスッキリしない。

少しだが、頭痛もしているようだ。

おかしい。頭痛など、子供の頃から患った経験がない。そこまで疲れている自覚もない。

何度か踊場を経て、漸く、職員通路が見えた。

その時。

「いやあああああああああああああああああああああああ
ああああ」

凄まじい叫び声が聞こえた。

その声は極限の恐怖と絶望に振るえていたが、何より、聞き覚えのある声であつた。

「……ユリ……!？」

了は、瞬時に頭の中がクリアになったのを感じながら、叫び声のほうへ走った。

誰もいないはずの館長室の扉は開き、少し冷たい風が吹いている。半開きの扉を手で思い切り開けると、勢いの余った扉が壁に跳ね

返って、ドン、と大きな音を立てた。

暗がりの中で、何故か開いている窓からは風が吹き込み、カーテンを小さく揺らしていた。

が、すぐに奇妙な臭いに気付く。

嗅ぎ慣れた、しかし、特殊な状況下でしか嗅がない臭い。

この臭いは…。

「ユリ！ ナリ！」

最悪の事態が頭を過ぎり、室内を見回すと、キャビネットの向こうから、小刻みに震える息遣いが聞こえた。

ユリの名を呼び、駆け寄ると、そこには、へたと座り込み、目の前にあるのであろう異物を凝視するユリがいた。

駆け寄り、ユリの視線に合わせると、机の脇にはバークレイが倒れていた。

「…っ」

了は息を飲み、次いで、バークレイに歩み寄る。

床のカーペットはぐっしりと血で濡れ、その量から察するに、既に死亡していると安易に想像がついた。

念の為、シャツの襟元から少し覗いている首筋に手を当てるが、鼓動は感じられなかった。

体温も既に下がり始めており、息を引き取って、それなりの時間が経っていると思われた。

了は唇を噛み、ユリを振り返る。

ユリの目は見開き、バークレイではない別の次元のものを見つめていた。

相当ショックだったのだろう。

力の抜けた腕は、ダラリと足の横に垂れ、体が倒れていないのが不思議なくらいに、全身が弛緩していた。

了はユリの目の前にしゃがみ、頬に手をやる。

バークレイとは違い、温かい。そのまま首筋へ手を当てると、鼓動も感じる。

何故、こんな事になってしまったのだ…。

了は悔しくて、震える手でユリを抱き寄せた。

「ごめんな…。」

こうなる事を恐れていたのではないのか。

自分は、こうならない為にいたのではないのか。

何のために、傍にいたのだ…。

秘めていた思いが、溢れ出した。

守ろうと心に誓ったもの。

取り戻そうとしたもの。

あの日、失ってしまったもの。

決意して六年、何も苦ではなかった。ただ自分の力が足りない事だけが、何よりも悔しかった。

取り戻すために、走り、やっとここまで来たのに…。

「すまなかった…。すまなかった…。…」

茫然と、いずこかを凝視するユリを、了はただ抱きしめ、詫びた。
すまなかった…。

そんな事を言うために、走ってきたのではないのに…。

了は目をぎゅっと瞑り、唇を噛んだ。

それは、いつかユリがラウンジで見た、あの横顔だった。

5月3日、と4日 2

暗闇の中で、自分に詫びる声が聞こえる。

ふわふわと落ち着かない足元ののに気を取られ、その声が誰の声か、よく判らない。

繰り返し繰り返し詫びる声は、とても寂しそうで、悔しそうで、時折、誰に対してかの、怒りをも含んでいるように聞こえる。

その声に耳を傾けるうち、ふと、肩に温もりを感じた。

その温もりは肩だけに留まらず、体全体に感じるようになった。抱きしめられている…。

誰だろう…

知っている人だろうか…？

どこで感じた事のあるその温もりは、体だけでなく、心の中までも入り込んで、満ちていくような気がする。

（この人、私、知ってる…。

すぐ昔から知ってる…）

間違いない。

（誰だっけ…。）

温かくて、一生懸命で、強くて、頭が良くて、優しくて…。身に覚えのある温もりの主の記憶を辿る。

そうだ、あの時だ。

あの時、感じた温もりだ。

（あの時も、こんな風に…。）

思いついた途端、暗闇が白んだ。

ももぞと瞼を動かし、ゆっくりと目を開ける。

視線だけを動かす。

目の前に、誰かの頸があった。

頸の向こうからは、光が溢れている。

（朝…？ 私…、どうしたんだっけ…。）

眠ってしまったのだろうか。

確か、館長室でバークレイの遺体を見て…。

そのあとの記憶が何もない。

頭の中はまだぼうつとしていて、体中が痺れているみたいに動かない。

暫し、頸を眺める。

その頸には、ケロイドのまま遺った傷が見えた。

（傷が…。誰の…、傷…？）

傷を見ると、何故か体の感覚がはつきりとしてきた。

座っている。誰かと、何かに。

ぴったりと体をつけ、自分の体は誰かに凭れかかっている。

肩には誰かの腕が力強く添えられていて、座っている両脚が、狭い故なのか、誰かの脚に引っ掛けられている。

傷を直視していた視線を、上に動かす。

喉元、顎、唇、鼻、頬…。

徐々に上がっていく視線が、その誰かの目に辿り付いた。

（蕪木…さん…？）

了だ。

了は目を閉じ、眠っているように見えた。

頬がややこけ、目の下にはうつすらと暈くまが見えた。

ずいぶん疲れている顔だ。

寝ていないのだろうか…。

そういえば…。

（私…、どうして…。）

どうして、了に寄りかかっているのだろう…。

ユリがもそもそと動くと、「…大丈夫か？」と声がした。

見上げると、いつもよりも少し眠そうな目をして、了がユリを見下ろしていた。

眠っていたように見えたが、そうではなかったらしい。

「…うん…」。

「ごめんなさい、私…。」

言って漸く、気絶したのだろうという考えに及んだ。

この状況からすれば、恐らくそれは当たり前なのだろう。

上体を起こして言いながら、しかし、いつからか握り締めていた了の手が離せないでいた。

了の腕も、ユリの肩を抱いたままだ。

「俺が見つけた後、すぐに気を失ったんだ。

無理もない。

突然あんなものを見たんだから。」

了の声は、若干しゃがれていた。

目の奥の鋭さはいつもと変わらないが、頬が若干こけ、髭も少しばかり伸びて、そこに量も相俟って、とても憔悴しているように見えた。

それでも、了は真っ直ぐユリを見、未だ力強くユリの肩を抱いて離さない。

「ごめんな。

もう少し、早く気付いていたら、あんなものを見なくても済んだのにな…。」

そう言って、了が眉を少しだけ歪めた。

その言葉に、やっと暗闇で聞こえた声が了のものだと知る。

ユリはゆっくり被りを振った。

「うっん…。」

蕪木さんが謝る事じゃないわ…。

ずっと謝ってくれて。

「ごめんなさい…。」

俯くと、肩を抱いているのは逆の手、ユリの手を握っている了の手が見えた。

大きく、少しだけ冷たい手だ。

すらりと長く、程よく肉の付いた細めの指の先は、ささくれている。

「芳生さんに連絡を入れておいた。」

多分、もうそろそろ迎えに来ると思う。」

ユリの視線を感じたのか、了が手の力を緩めた。それを合図にするように、ユリも手を離す。

「うん、ありがとう。」

そう言っ、了の脚に引っ掛けられていた両脚を降ろすと、了が不意に立ち上がった。

了の腕が体から離れて初めて、了の上着が肩にかけられていた事に気付く。

立ち上がった了は、首もとの広い、白いＴシャツ姿だった。

いつぞやに見た、ロケットの鎖も見える。

ユリは肩のジャケットを外し、丁寧に一度畳んで了に返した。

了は黙ってそれを受け取ると、素早く腕を通す。

「…ねえ…。」

「ん？」

「私が昨日見たのは…。」
「やっぱり…」

ユリが言いかけると、ジャケットを着終えた了が、ユリの座る椅子の肘掛に腰掛けた。

見れば椅子はやや広めの一人掛けソファだった。

了を見上げる序でに辺りを見ると、一階にある喫茶店だった。

ユリの言葉に、了がふうと小さく溜め息を吐く。

「ああ。大使だ。」

今、検死をしてる…。」

俯き加減に、ユリとっ少しだけ視線を外し、了が答えた。

複雑な横顔だった。

憂いやら怒りやら悲しみやら、複数の感情が織り交ざり、尚冷静を無理に装った、表情。

「クレアには…？」

「…まだ…。」

了が首を振った。

「クレアのお父さん、どうしてあんな事に？」

ユリの問いに、了が黙った。

解らない、というより、何か思い当たる事でもある、と言わんばかりの表情に見えた。

噤んだ唇を見れば、答えてはくれない事は安易に判った。

しかし、ユリは真っ直ぐ、了の唇を見つめた。

突如、「蕪木」と、不機嫌な声が場の沈黙を破った。

呼ばれた了は驚き、振り向く。

ユリも振り向くと、北代が、これ以上ないほどの深い皺を眉間に寄せ、喫茶店の入り口に仁王立ちしていた。

「北代警部補……」

了がのそのそと立ち上がり、北代に歩み寄る。

了が近付けば近付くほど、北代の表情は怒りへと変わっていた。

今にも噴出しそうな感情を堪え、北代は了を睨みつけている。

「どういう事だ？」

今、大凡の死亡推定時刻を割り出してもらったが、君が現場に到着したとき、大使はまだ生きていたかも知れないそうじゃないか。」

「え……！？」

北代の言葉に、ユリが思わず声を上げた。

それが確かなら、ユリが発見した時点でも、バークレイはまだ生きていた事になる。

了を見上げると、了は黙ったまま、北代を真っ直ぐ見つめるだけだった。が、表情には、あからさまな悔しさが滲み出ている。

確かなのか……？

「どういう事なんだ！」

黙りこくる了を、北代が一喝した。

言い訳の一つも出来ない子供を叱り付ける、大人のようなだ。

怒鳴られ、了は口で小さく溜め息を吐き、

「……現場に到着して、一目見て、救命処置は不要と判断しました。」

ゆつくり、言葉を選んで言い訳をした。

「出血量の多さから、処置は施すだけ無意味だと……。」

「それで小娘の介抱か？」

了の言葉を、北代が苛つきながら遮った。

声には、存分に嫌味が籠められている。

「小娘が発見者だそうだな。」

第一発見者のフリして、犯人ということはあるまいな！」

「ちよつと……！」

「ユリ。」

疑惑をかけられ一步踏み出たユリを、了が制した。

「でもつ。」

「黙って……。」

低く、ゆつくりとした口調だ。

ユリを一目も見ず、未だ真つ直ぐに北代を見つめる了の表情は、先程と打って変わって、攻撃的に見えた。

「この子が犯人ではない事は、私が保証します。」

証言が必要ななら、然るべき場所で証言する事も吝かではありませ
ん。」

きつぱりと言い放つ。

「蕪木さん……。」

依然として北代を見射る了に、当の北代も一瞬たじろいだ。

そして、鼻で笑う。

「ふんっ！」

大人しく検死の報告を待つんだな！

場合によっては、国際問題にもなり兼ねないんだからな！」

声でさらに威嚇をするも、了は、まるで北代を挑発するかのよう
に、冷静に「はい」と返すのみだった。

案の定挑発に乗ってしまった北代は、

「取り敢えず、君の無能な上司には報告させてもらった。

合同捜査なぞ、だから反対したんだ！」

と、敗北寸前の強者のような棄て台詞を吐きつけ、肩で怒りを露わにしながら喫茶店を出て行った。

残されたユリと了は、暫し言葉を失い、北代の消えた入り口を見ながら、無言のまま立ち尽くした。

「……蕪木さん……」

暴言を吐かれたに等しい了が突然心配になり、ユリが見上げると、了は俄かにユリに向き、苦笑した。

「ま、嫌味を言われるのが、ここでの俺の仕事なんでね。」

堪えていない。そんな様子だった。

ころころと変わる表情に、ユリが訝しげな顔をする。

「……ねえ、北代さんが今言ってた事が本当なら、私が見つけたとき、クレアのお父さんはまだ生きてたってこと……？」

犯人ではない事は、勿論自身が一番よく知っている。

しかし、助かったかも知れない状況で助けられなかったというのは、犯人と同等のような気がする。

ユリが訊ねると、了が少し困った顔をした。

「いや。」

恐らく、それはない。

今、司法解剖による検死調査の技術は相当進歩しているけど、さすがに寸分の誤差もなく特定できるわけじゃない。

飽く迄も、生きていたかも知れない、と推測する材料になるだけだからな……。

俺が到着して、ユリに一度声をかけて、それから大使の脈は確認したが、脈が止まってから長からず時間は経っていたようだった。

体温が……、だいぶ低かったからな。」

尤もな説明をしたあと、「多分、ユリが発見した時点で、大使は死んでたよ」と、念押しのように、了が呟いた。

了の言葉を聞いても、ほっとなど出来なかった。

そうか。と思うだけで、結局亡くなっている事には変わらない。

ただ、助けられなかったのだという、状況が確認できたに過ぎな

かった。

「私…。」

「ユリ。」

困惑して、どうしたらいいのだろう、と言いかけるユリの言葉を、了が遮った。

「うん？」

俯き気味だった顔を見上げて、了の顔を見る。

苦笑や困惑の表情はいつの間にか消え、了はユリを睨みつけていた。

「何故、館長室にいた？」

その問いに、ユリの全身が泡立った。

了も疑っているのか？

さつき、無実だと言ってくれたではないか…。

足元が崩れていくような感覚の中、全身に冷や汗を掻いて、ユリはもぐもぐと説明をする。

頭の中で言い訳が回る。

「…昨日、蕪木さんと美術館で別れたあと、菅野館長も叔父さんも用事があるって言っていなくなって、独りで館内をうろろしてたの。」

特に用があつた訳ではないのだ。ただ…。

「特に用があつたわけじゃないんだけど、見回っておきたくて。」
そして、セレモニーホールへ行ったのだ。

「で、セレモニーホールにね、知ってる？」

屋根に出られる窓に登るための梯子があるの。」

その梯子を昇って…。

「そこで休んでたら、いつの間にか寝ちゃって…。」

暗い館内を、エントランスへ向かったのだ。

しかし案の定、施錠されていて、出られなかった。

「エントランス、鍵がかかって出られなかったから、通用口なら開いてると思って職員通路に入ったら、館長室から物音がしたの。」

どんな音だっただろうか…。

たった数時間前の事なのに、既に思い出せないでいる。

「誰かいるのかと思って、覗いたら…。」

「覗いたら…?」

「扉の隙間から…。」

そう、扉の隙間から…。

にやりと滑稽に笑う、顔。

「仮面を付けたヒトが…。」

「仮面!？」

ユリの言葉に、了が過剰な反応をした。

ぎゅっと肩を掴まれ、痛かった。

「うん…。」

仮面と…、あと、何か黒っぽい、ひらひらしたマントみたいなものをかぶって…。」

「鉢合わせたのか!？」

興奮気味に攻め寄るのに、ユリは冷や汗の上に違う種類の汗を掻き始めた。

どうしたというのだ。

「うん…。目が合った、のかな…よくわからないけど、でも、私のほうを見て、すぐに窓から…。」

「窓…。」

窓から逃げた”それ”は、その瞬間に姿が見えなくなってしまった。

黒い衣服のせいだったのか、完全に闇に溶け込み、正しく、消えてしまったのだ。

「そのあと、変な、鉄みたいな臭いがして気になって、臭いのするほうに行ってみたら…。」

言ううち、バークレイの遺体を思い出してしまった。

ユリの声のトーンが下がり、了の興奮も、バークレイの話に及んだところで一気に冷めたようだった。

「そうか…。」

ユリの肩を掴んでいた、了の手の力が抜けた。
中庭を臨む窓を、虚ろな目で見つめる。

「……信じる？」

ユリが上目遣いで、了を見た。

ユリの問いに、了がきよんとする。

「ん？」

「今の話、信じてくれる？」

北代のせいで気弱になったのか、ユリが不安げに見上げてくるので、了は思わず苦笑した。

「何故疑う必要がある？」

問い返されて、ユリは言葉に詰まる。

「北代警部補の見解は、彼個人の見解であって、俺には関係ない。

俺は、芳生ユリは無実だと信じて疑わないし、嘘を吐いているとも思わない。」

「でも…。」

では、何故さっき…？

ユリが言つと、了は解っているという表情で、肩を竦めた。

「ユリが現場にいた理由も知らないままじゃ、この人は無実ですつて言えないだろ？」

第一発見者つてのは、難儀な立場だね。

ほぼ半々の確率で、犯人だったりする。

北代が言っているのはその確率の事であつて、芳生ユリ個人の素行ではない、とフォローだけはしておくよ。

あの時間、あの場所にいた事、その事は、色々なことを踏まえて考えれば問題のあることだが、芳生ユリ個人において、そのことは問題のあることじゃない。

それは北代だつて弁えている。」

そうなのだろうか…。

「大事なのは、ユリが何故あの時間、あの場所にいたか、それだけ

だよ。

ユリはただ大使の遺体を発見しただけなんだろう？」
それだけは間違いない。

ユリは深く、「うん」と頷いた。
了も満足気に頷く。

「なら、それ以上はない。わかったな？」
「…うん。」

解ったような、解らないような。

ただ言い包められただけのようない気がないでもない。

ユリは俯き、指を意味なくもぞもぞと動かした。
すると、突然、名を呼ばれた。

「ユリ！！」

呼ばれた方を向くと、大層慌てた様子の匠が立っていた。

「叔父さん！」

「まったく、お前って子は…。」

ユリと了に歩み寄りながら、匠が溜め息を吐いた。

眉はこれ以上ないというほど下がって、若干、目の下に暈が出来ていた。

「蕪木クン、すまなかったね…。」

匠が言うと、了が俯いて、拳を握り締めた。

「いえ。ボクのほうこそ、申し訳ありませんでした…。」

存分に悔いている様子の了に、匠がさらに申し訳なさそうな顔で
呟いた。

「…君は一層、気にしてしまうな…。」

僕も反省したよ…。本当にすまなかった…。」

匠が頭を下げると、了が慌てた。

お互いに低頭を繰り返しながら謝った後、了が苦笑して言った。

「御相子にしましょう…。芳生さん。」

そう言われ、やり取りの裏にある事情を知らず、もどかしそうに
見るユリを、匠が見て笑った。

「ああ。」

二人の中で、何か解決したようだ。

5月3日、と4日 3

「さあ、ユリ。 いったん家に帰ろう。

カナエもクレアさんも、とても心配してるからね。」

匠がユリに振り向き、言った。

それに、少し休まないと、言いながら、眉をハの字にして笑う。
しかしユリは、「え…、あ…」と歯切れの悪い返事をする。

「どうした？」

首を傾げて問う匠から、ユリはゆっくり視線を外す。

そしてやり場なさげに、了の胸元を見た。

何故か急に、顔を見るのが照れくさくなった。

いつまでもここにいる訳にはいかないのは解るが、ここを、了の
傍を離れるのが、とても心細かった。

しかし、駄々を捏ねる訳にもいかず、ユリは首を振った。

「……………うつん、なんでもない。」

ユリの様子を心配した了が、「送りましょうか？」と言ったが、
匠が大袈裟に手を振って断った。

「いやいや、歩いて帰るよ。そんなに遠くないからね。

それより、職場に戻らなきゃいけないんだろ？」

聞かれて、了が「ええ」と頷く。

「北代警部補の仕返しを受けに行かないといけませんからね。」

言いながら、うつんざり、という表情で苦笑した。

「それなら急いだ方がいいんじゃないか？」

遅くなると、さらに仕返し積み重ねられるかもしれないからね。」

匠が面白そうに言う、了もニヤリと笑った。

「そうですね。」

では、ボク、先に失礼します。」

軽く頭を下げ、ユリをちらりと見て、了は足早に喫茶店を出て行
った。

了の後姿を見送り、匠が改めてユリを見る。

「さ、ユリ。僕らも帰ろう。」

「うん。」

了が立ち去った事で、ここにいる用事も必然性も、居たいという我が儘も通す意味がなくなった。

ユリは素直に頷くと、匠についてエントランスへ向かった。

いつの間にか、と言うより、恐らく警察関係者が出入りするために、エントランスは開錠されていた。

陽はすっかり昇り、朝日が中庭を照らす。

少し風は冷たいが、心地よい気温だった。

前を歩く匠を見る。

後頭部に、若干寝癖が付いていた。

寝相の良い匠は、さらさらと細く柔らかい髪質の所為もあるが、寝癖が付く事など滅多になかった。

付いているときは、大抵ベッド以外で仮眠を取った程度るときだ。聞くまでもなく、昨夜は、帰らないユリを心配して、遅くまで起きていたに違いない。

時間は見ていないが、大使の遺体を発見して、了に保護され、その了から匠に連絡が入ったのは、そんなに深い深夜でもないような気がした。

それから、あれこれとユリの身を案じては、短く浅い仮眠を繰り返して、朝を迎えたのだろう。

ごめんなさいと謝るのも、少し違う気がして、ユリはずっと、匠に話しかけられずにいた。

辺りを見回す。

早朝のせいかな、人通りはおろか、車さえあまり通らない大通りには、そこはかとなく不気味さを感じる。

風の音や鳥のさえずりが、違和感と相俟って、その不気味さを助長している。

それでいても尚、射るような静けさを保つ街に、匠とユリの足音

が響く。

夜の美術館内とは違う、軽やかな静けさ。

澄んだ空気の中、無言のまま歩く。

一度視線を足元に落とし、そして再び辺りを見回すと、いつの間にか、事務所の近所までたどり着いていた。

もうすぐ、家だ。

そう思った途端、なんだかたまらず駆け出したくなった。

心細さ。

昨夜から今朝にかけて、不安と心細さと、恐怖に震えて過ごした。その現実を、家という空間が、一時、非現実にしてくれるのだと思った。

カナエとクレアの待つ家。

そうだ、クレア…。

何と話せばいいのだろう。

その役割を担うのは、自分ではなく匠だという事くらいは解っているが、それでも戸惑う。

この間のように、抱きしめるだけでは、きっと足りないだろう。

そう思うと、駆け出したい衝動が、突如逃げ出したいものへと変わる。

一歩一歩踏み出す足に、重大な責任を感じる。

ふと、前を歩く匠の背中を見る。

いつもどおりの猫背。あまりに痩せ細った躰。

寒くてジーンズのポケットに突っ込んだ手が、時折もぞもぞと動いた。

匠も緊張しているのかも知れない。

そう思うと、昨夜の自分の行動を悔やんだ。

あのまま帰っていれば、このような気持ちを抱く必要はなかった。鬱陶しいほど重い戸惑いと悩みを振り切るように、ユリは首を振った。

空を仰ぎ、了の顔を思い浮かべる。

が、何故か頸筋の傷を思い出した。

あれは、果たして何の傷なのだろうか…。

また知らない了がいた。

それだけで、ユリはまた、心細くなった。

5月3日、と4日 4

「ただいまー。」

いつもどおりを装って、ほぼ丸一日ぶりの我が家の玄関へ入る。嗅ぎ慣れている筈の、玄関に染み付いた匂いが、新鮮に感じる。ユリの声がしてすぐ、ガタガタと忙しく椅子が引かれる音と、カランと何か陶器のようなものが転がる音がし、次いで勢いよく居間のドアが開いたと思えば、クレアが飛び出してきた。

「ユリさん！」

クレアの顔はすでに涙でぐちゃぐちゃになっていた。

余程心配をしたらしく、足音も気にせず廊下を走り、ユリに抱きついた。

「ユリさぁん…。」

クレアを抱き止めながら、ユリは「ごめんね…」と言い、頭を撫でる。

クレアの、少しだけ乳臭い匂いに安堵する一方で、父親が亡くなった事に関する罪悪感のようなものも感じる。

（クレア、まだ知らないんだ…。どうしよう、いつ言えば…）

実際、事実を告げるのは匠の役割であろうが、ユリも必ず立ち会う。

どういう心持でその場にいたらよいのか、そう思い、とてつもない不安に襲われたユリの耳に、「ユリ…」とカナエの声が聞こえた。見上げると、カナエが苦笑して立っていた。

その姿に、ユリの涙腺が一気に緩んだ。

今しがたクレアが浮かべていた表情と同じように顔を歪め、「カナエちゃん…」と情けない声を上げて涙を零す。

そして、靴を脱ぐのもままならないほどドタバタと玄関を上がり、カナエに抱きついた。

「おかえり、ユリ。お腹空いたでしょう？」

「空いたあ……」

呆れたように笑うカナエの腕の中で、ユリが涙で喉を詰まらせながら答える。

その様子に、カナエはさらに呆れて笑った。事情は恐らく匠から聞いているのだろうが、そんな様子を微塵も見せないカナエが、とても有り難かった。

「まったく、あんたって子は……」

取り敢えず、ユリ、お風呂に入っちゃいなさい。」

カナエが、仕方なしとため息を吐きながら、ユリの肩を掴んでゆつくりと体から離れた。

「うん……」とユリは頷き、匠を振り返る。

「叔父さん……？」

クレアへの話をどうするのか表情で訴えると、匠は浮かべていた苦笑を少しだけ消して、肩を竦めた。

「わかってるよ。まずは、落ち着こう。」

匠の中でも、まとまっていけないのかも知れない。

ユリはそう思い、頷いて、風呂に入る事にした。

カナエが準備してくれた、炊き上がったばかりの風呂の湯気が立ち込める風呂場で、服を脱ぐ。思いの他、汗を掻いていたようで、服を脱ぐと途端に体が軽くなった。

まだシヨックが抜けきらないのか、覚束ない手元で体を洗い、バスタブに一気に浸かる。

豪快に湯が溢れ、排水溝に向かってザーと流れていく。

その様子を眺めながら、ユリは暫し放心した。

そして、体が温まったところで、やっと「……………ふう……」と溜め息が漏れ、体の緊張が解れたのを感じた。

頭もだいぶスッキリして来た。

ユリは、さらさらと体に纏わりつく湯を意味もなく掻き回しながら、既にいくらか忘れかけている今朝方の騒ぎを思い出す。

沢山考えなければならぬ事がある気がするのに、億劫で何も考

えたくなかった。

ただ、了の事だけは、とても心配だった。

「蕪木さん、大丈夫かな…。」

沢山叱られちゃうのかな…？

叱られるのは、私のせい？」

呟きながら、あの疲れきった横顔を思い浮かべる。

「普段、全然寝てないって言うし、さっきも凄く疲れた顔してたな…。」

大丈夫かな…。」

あの横顔。

ユリを庇い、北代を睨み付ける目。

喫茶店を立ち去る、後姿。

記憶の中で、音もなく、了の姿が再生される。

何故か、そのとき交わした言葉が思い出せない。

そればかりか、毎日聞いていた声すら思い出せない。

どんな声をしていたっけ。どんな話し方をしていたっけ…。

そして、とても気になるものを見たような気がするのに、思い出せない。

思い出したくて、何度も何度も了の姿を再生するが、思い出せない。

五回、六回…と繰り返したところで、ユリは小さく溜め息をついて、諦めた。

了の事が刺激になったのか、だいぶ考える気力がわいてきた。

「……………クレアには、何て話そう…。」

突然、あなたのお父さんは死んだと告げるには、違和感がありすぎる。

しかし、それ以外に、彼女に語るべき事はない。

「お父さんも、お母さんも、お兄ちゃんも、いなくなっちゃって…。」

私は叔父さんとカナエちゃんがいるけど、クレアは？

シリングには、仲良しの親戚、いるのかな…？

独りぼつちにならないよね…？」

匠は今頃、クレアへどう切り出すかを思案しているだろう。

冷静に、話を聞けるか。クレアではなく、自分が、だ。

取り乱してしまいそうで、それが怖かった。

どうにか、クレアを支えるだけの冷静さは保ちたい。

独りは、辛いものだから。

「…早く出よう。」

大事な話しなきゃいけないもん…。」

そう思い、ユリは勢いよく立ち上がった。

反動で、湯が大きく揺れた。

バスルームを出、ふわふわのバスタオルに顔を埋める。

水分がタオルに吸い込まれる感覚を感じながら、少しひんやりと
している風呂場の空気に、武者震いをする。

急いで体の水気をふき取ると、震えはすぐに治まった。

ユリは手早く、用意していた着替えを着、何かを払うようにバス
タオルを洗濯機へ思いっきり投げ入れ、居間へ向かった。

5月3日、と4日 5

濡れた髪にタオルを当てながらリビングに戻ると、ダイニングテーブルを挟んで、クレアと匠が向かい合った席に座っていた。

部屋の静けさが、それまで然程会話がなかった事を物語っていた。その静寂も、ユリの加入で幾らか和らいだようだった。

クレアがユリを見上げて「おかえりなさい」と言った。

「うん、ただいま。」

ユリの声を聞いて、カナエがキッチンから現れた。手には、ユリの専用カップの乗った盆がある。

「紅茶入ったよ、ユリ。」

「ありがと、カナエちゃん。」

ユリはそう言って、テーブルに置かれたカップを席に着く前に持ち上げると、立ったまま一口、紅茶を口に含んだ。そして沈むように、静かに席に着く。

「落ち着いたかな？」

匠に問われて「…うん…」と応えると、匠も「うん」と頷いて、ぐつと背筋を伸ばした。

勢いをつけている様に見えた。ぴんと伸びた背筋と対照的に、顔はどんより曇っていた。

「クレアさん。」

少しの間後、匠がクレアを見据えて言った。

「はい。」

「今から、とても悲しいお話をしなければなりません。」

「…はい。」

匠の言葉と表情に、クレアの声が小さくなった。

何の話が…、と戸惑うクレアから、ほんの一瞬だけ視線を外した匠は、自分に言い聞かせるように溜め息を吐くと、再びクレアを射抜くように見つめた。

「ユリは、昨日、訳あって夜中、美術館にいた。」

何から話したのか、匠も悩んだに違いなかった。

ユリの事を心配していた事を汲んで、結局事のあらましを最初から話すのが好いと判断したのだろう。

「その詳細は、この話とは直接は関係ないのではしよるけれど、夜中、エントランスに鍵がかかっていたので出られなかったユリは、美術館の通用口から出ようと、館長室に繋がる廊下を歩いていた。

そこで、物音が聞こえた。

館内はすでに明かりが落ちていて、人がいる気配がなかったのに。

物音は館長室から聞こえた。そして、見に行った。」

物語を読み上げるような、抑揚のない話し方だった。

「そうしたら、館長室で、君のお父さんの、バークレイ大使が…亡くなっていた。」

予想していたより淡々と、簡潔に結末を話した匠の言葉に、クレアも一瞬理解が及ばなかったようだった。

一呼吸置いた後、少しだけ目を大きく開けた。その反応は、ユリにしてみれば、小さ過ぎるくらいだった。

クレアから言葉がないので、匠が続けた。

「本来なら、ご家族である君の同意を得なければならいんだが、大使館とシリング王国の許可を得て、ご遺体の検死は既に終えている。」

「…。」

「死因は、出血多量による、ショック死だそうだ。」

ユリの入浴中にも結果の報せがあったのだろう。

ユリにとっても死因は初耳だった。

そこまで聞いても尚、クレアは余り動揺した様子を見せなかった。ただ少しだけ俯いて、

「……そうですか…。」

その様子を、ユリさんは、見てしまったんですね…。」

と言った。

「ええ。」

ユリの悲鳴を、たまたまセキュリティルームで調べ物を終えて帰ろうとしていた蕪木クンが聞き、駆けつけたとき、既に大使は亡くなっていたそうだよ。

検死による死亡推定時刻も確定した。

二三時に〇〇三〇分の間。

その頃、蕪木クンはセキュリティルームにいて、ユリは三階のセレモニーホール付近にいたことが、監視カメラの記録から証明された。」

「死亡推定時刻、出たんだ？」

ユリが言くと、匠がユリを横目で見て頷いた。

「ああ。ユリが疑われていたからね。」

蕪木クンが美術館を出るときに、急ぎ、発見時間前後の監視カメラの記録を手配して、職場で確認したらしい。」

「あいつが……。」

言いながら、ユリはやっと、風呂場で思い出せなかった今朝の様子を、少し思い出した。

——この子が犯人ではない事は、私が保証します。

そう言って北代を睨み付ける了の横顔を、思い出す。

（あいつ……。）

言葉にした以上、証明しなければならぬのが、了の仕事なのだ。

「クレアさん。」

匠が呼ぶと、クレアがぱっと顔を上げる。

「はい。」

「蕪木クンやユリのアリバイは一応立証されたが、実は肝心の犯人の姿は、カメラには映っていないそうなんだ。」

「え？」

匠の言葉に、ユリが驚く。

そんな筈はない。あのとき、この目で館長室にいる何者かを見た

のに…。

思いながらも、すぐに了に見せて貰った警備室に仕掛けられた装置の事を思い出す。

そうか、カメラのデータを細工してしまったのか…。

「逃走経路は、ユリが目撃しているが、進入経路、殺害に使った凶器、もちろん犯人自身。」

今のところ、何一つ判っていない。

確かに事件が起きて、まだ数時間で、発見も何もない時間ではあるけれど、色々な事を想定して、あなたに害が及ばないとも限らない。

どうだろう、明日の〇時に予定されているセレモニーへの出席、見合わせたほうがいいんじゃないかな？」

「セレモニーは行われるんですね？」と尋ねるクレアに、匠が「ああ」と頷くと、ユリが身を乗り出した。

「ど、どうして!？」

殺人事件があつたのよ!？」

『普通なら』、中止や延期ではないのか…。

困惑するユリに、匠は静かに首を横に振った。

「事情を全て説明する事は僕には出来ないけど、とにかく、展示会と、それに付随するセレモニーは、大使が強く希望していた事らしいんだ。」

自分に何があっても、美術館があり、無事に展示品が搬入される限り、開催して欲しい、と。」

「で、でもっ。」

「とはいえ、捜査があるからね。」

犯人の遺留物が、三階にないとも限らない。

だから、調査は徹底してやる。

現場の状況を少しでもキープしておくため、床には特殊なシートを敷くらしい。

参加者のボディチェックは徹底する。

予定参加者以外の館内への入館は禁じる。

美術品の搬入は、今夜。それからセレモニーで初披露となる。

正直、捜査なんてできっこないスケジュールなんだが……。」

それでもやるらしいんだよ、と言いたげな表情の匠の代わりに、クレアが口を開いた。

「本国から、要請が来ているんですね。」

「シリングから？」

些か落ち着いたユリが、クレアを見る。落ち着いたと言っても、それほど気が鎮まった訳ではない。

が、ユリの興奮に反比例するように、クレアは静かに続ける。

「はい。」

本国では、最近、観光客を積極的に受け入れようとする企業や政治家たちが、独自の方法や人脈を使って誘致活動をしているんです。

今回の展示会もそのうちの一つで、担当をたまたま、大使に着任していた父がやっていたのです。

こんな事になっても、本国にはあまり影響ありませんから……。

むしろ、展示会が潰れたり、延期したりするほうが、影響あると考えるでしょうね。」

「そんな……！」

ユリが眉をハの字にすると、クレアが少し困ったように笑った。

「いいんですよ、ユリさん。」

私の国は、そういう国でもあるんです。

この間もお話しましたが、教育も企業も政治も、今が一番勢いがあるのは私にも解ります。

この勢いがあるうちに、少しでも前に進んでおきたいんです。

技術の進歩とかではなく、国の立場を大きなものにしておきたいんですよ。

父の事と、その事は、どうやっても一緒に考えてはいけないんです……。」

ユリの心は気が気ではない。

自分より十も近く下の少女が、こんな事を『仕方がない』と語る事に、戸惑わない訳がない。

「だってクレアは……？」

ユリが問うと、クレアは先程より少しだけ柔らかに笑って、

「私は心配要りません。

冷たいと思われるかも知れませんが、私と父は、それほど仲が良かった訳ではないんです。

愛情がないのとは違いますけど、ここ数年は本当に他人のようで正直言って、今もそれほど悲しくないんです。

だから、大丈夫です。

今はユリさんも、カナエおばさまも匠おじさまもいるから。」

この言葉には、流石に匠も何か思わざるを得なかったようで、小さく息を飲んで目を細めた。

ユリ共々何も言えない二人を見兼ねてか、遠巻きに三人を見守っていたカナエが、ゆっくりと言った。

「ユリ、クレアさんがそういうなら、今はそれでいいと思うわ。

辛くなったら、クレアさんからちゃんと、辛いと言ってくれるわよ。」

カナエの言葉に、ユリはじつとクレアを見る。

「……ちゃんとやってくれる？」

不安な表情のユリに、クレアはにこりと笑った。

「ハイ！　ちゃんと言います！」

「……わかったわ」ユリも納得しない訳にいなかった。
無理に哀しめとは言えない。

「そうしたら、男爵の予告状も、まだ”イキ”って事ね。」

ユリが言つと、匠が「そうだね」と頷いた。

「本来なら、館長の襲撃事件や、大使の事件は切り離して考えていくべきなんだろうが、蕪木クンたち捜査班の見解では、これらも一様に”男爵、あるいは男爵に関係する者の犯行”という線で調べて

いくそうだから、そうなってくると、僕らに対して『無関係』とは言ってられない。

捜査は出来ないが、調査は出来る。

まずは出来る事から、やっていこう。

取り敢えず……。」

滑らかな言葉が、急に途切れた。

ユリがきょとんとすると、匠はニヤリと笑って、

「今ある情報を整理したいと思わないか？」

「そうね。」

私の知らない事とか忘れてる事も、沢山ありそう。」

匠の提案に、ユリばかりではなく、クレアも頷いた。

予告まで、今日一日しかない。

やるべき事は、限られている。

5月3日、と4日 6

まとめるに当たっては、一番真新しい情報が最優先になりがちだ。『大使殺害事件』については、今し方クレアに経緯を述べたばかりで、話の蒸し返しにもなってしまうが、まとめという形で別の距離感で、情報を整理する必要があるそうだった。

被害者は、アレン・バークレイ駐日大使。

死亡推定時刻は、二三時二〇〜三〇分の間。

昨夜の閉館からそれ以前までの間に侵入した人物の記録は、監視映像からは認められなかった。

今のところは、ユリが目撃した”男爵”らしき人物が、最有力容疑者のようだ。

死因は、刃物で刺された事による出血死。

さらに詳しい事は、現在司法解剖中…。

「私と蕪木さんのアリバイは立証されたとみていいのね？」

「現時点で、法的にどの程度の効力があるかは解らないけど、少なくとも北代警部補は、それで納得したと言っていたよ。」

不思議な事に、まるでユリと蕪木くん以外あの館内にいなかったかのように、映像には二人しか映っていなかったらしい。」

「どういうこと…？」

「例えば、昨夜は蕪木くんとユリのほかに、セキュリティ・ルームに当直の警備員が二人いてね、その両名は定時の見回りに出ているらしい。」

しかし、どの映像記録を調べても、二人は映っていないそうなんだ。

なのに、蕪木くんとユリの映像だけは確認出来た。」

「ねえ、それって…」とユリが、昨日、了に教えてもらった、監視カメラの映像にリアルタイムで細工をする機械の話をする。

「それを使って、本当は全部の映像に、何も映らなかった状態にし

たかったんじゃないかしら…。

でも、一昨日と同様に、止むを得ないトラブルで、私とあいつの記録だけが、たまたま残ってしまった…。」

ユリが人差し指を立てて言うと、匠が満足でもしたようにニヤリと笑った。

「その可能性は無木クンや北代警部補も考えたらしくてね、セキュリティ・ルームの記録システムと監視カメラを徹底的に調べたんだそうだ。

だが、この間のような小型受信機は見付からなかったらしいんだ。

」

「え…？

じゃあ、見回りをした警備員さんたちが映ってないのは…？」

「そこが、わからないところでね…」と、匠が腕組をする。

受信機は見当たらないが、映像には細工された可能性がある。

ならば、捜査が及ぶ前に取り外したか、別の細工方法があるかになる。

「まさか、警備員さん、スパイなんて事は…。」

有り得ないとは言いきれない。

しかし、匠の反応はいまいちだ。

「うーん…。それはどうだろう…。」

まあ、映像の解析もまだ完全に終わってはいないようだから、続報待ちつてところかな。」

真新しい事件だけに、集まっている情報も、確定的ではない。

言い切れないのが、歯痒さを助長させているようだ。

「大使が殺された事と、一昨日、館長室で大使が探し物をしていたこととは、関係はないのかしら？」

ユリが言うと、クレアがきょとんとした。

「父が探し物を？」

「うん、一昨日ね」とユリが頷くと、クレアは珍しく眉を顰めて悩み込んだ。

「ちょうど探し終わったくらいの頃に、私と叔父さんで館長室に入ったときに、箱のようなものをポケットに隠したの。」

「多分、探し物って、その箱みたいなものの事だったんだと思うんだけど。」

「箱……」

「何か、心当たりある？」

「いえ……何も……。ごめんなさい。」

「悩んではみたものの、心当たりはないらしく、クレアが小さく首を振った。」

「まあ、関係あるかないかはともかく、タイミング的には気になることではあるね。」

「匠も気にはなっていたようで、軽くフォローをする。」

「そういえば、どうして大使は、あんな時間に美術館にいたのかしら……」

結局、昨日の朝の訪問でさえ、『大使が美術館にいる』という情報だけ与えられ、それ以上は何も聞かされなかった。

「了や匠も理由が解らないままだった事もあるが、突如の訪問は、きな臭さを漂わせる。深夜ともなれば、余計に、である。」

ユリの疑問に、「ああ、それなんだけどね」と、匠が思い出したように答える。

「大使が昨夜、何時ごろにどこから美術館に入ったかも、まったく解らないそうなんだよ。」

「それはどういう事だろうか。」

「え？ 監視映像にも？」

「うん。」

あの美術館、職員通用口に警備員は配備されていないんだけど、ドアにカードキーを差し込まないとドアが開かないようになってるだろ？

あれ、どのカードキーでロックを解除したか、記録しているそうなんだが、その記録そのものがないらしいんだ。

その他、昨夜の記録として残っている監視映像、閉館直後から、ユリと蕪木くん以外は誰も映っていないし、誰かが使用した形跡もないらしい。

警備員の証言が真実なら、閉館後の見回りをしている姿が映っているはずなんだけどね。」

「私、昨日大使を見つける前に、カードキーでロック解除してるけど、どの記録もないのね…？」

「って事は、閉館前後から、既に映像には細工されてたって事？」

「今のところは、その可能性が高いね」匠が頷く。

「そっか…。」

そういえば、ユリ自身もそうであるように、了も何故あんな時間に美術館にいたのか。

「あいつは、なに調べてたの？」

「蕪木くんか？」

彼は、菅野館長の事件のあった前夜の映像を観に行ってたんだそうだよ。

「気になることがあるから、って言ってたかな。」

「気になること？」

「うん。詳しくは聞いてないけどね。」

まあ彼のモットーは、現場百篇、情報収集の二つだからね。

僕がいうのもなんだけど、彼の捜査能力の高さと行動力には、感心するばかりだよ。」

そう言って我が事のように匠が威張るので、ユリは少し怪訝な顔で「ふうん…」と答えた。

次にまとめるべき事と言えば当然、『菅野館長襲撃事件』である。こちらは、大使の事件と違う理由で情報が少ない。

事件が発覚したのは、四月三〇日の一六時前後。

その日、朝から行方不明だった菅野は、美術館の屋根上で気絶した状態で発見される。

発見者は、クレアだ。

菅野は、腹部に鬱血痕があつた事から、殴られて気絶したところを屋根上へ運ばれたと断定された。実際に本人の証言からも、夜中、所用で美術館に戻った際、二階の展示室から物音がしたので向かったところ、いきなり襲われて気絶してしまったという事だった。

しかし、セキュリティ・ルームの映像からは、二九日の夜中、マント状の何かが映りこんだ映像と、”男爵”のものとされるタイプピンが落ちていた事、二人の怪しい人の影が映っていた事以外は、何も確認できなかった。

後の調査で、”男爵”が過去の事件で使用したものと同じ小型機械が、セキュリティ・ルームに仕掛けられていた事が判明し、監視映像が、その日リアルタイムで、細工されていたと断定された。その発見を期に捜査は進むものと思われたが、実際は一步も進んだ様子はない。

「館長襲撃事件については、その後何の進展もないの？」

「僕が聞いている限りはね。」

「菅野館長は気にしてるみたいね。事件が進展したかどうか。」

ユリがぼそりと言うと、わざとらしく匠が反応した。

「ん？ ああ、昨日の朝の事だね。」

気にしてたね。様子も少しおかしかった。」

匠の言い方があからさまに菅野を疑う様子だったので、「おじさまが？」とクレアがたまらず問う。

「うん。」

まあ、でも、自分が襲われた事件の進展は気になるのも当然だけだね。」

ユリがさり気無くフォローを入れるが、クレアは納得していない様子で「そうですね。」とだけ答えた。

そこで、話す事は尽きてしまった。

了が悪態を吐いた様に、北代が情報制限をかけているようで、了ですら捜査状況を把握していないようだった。

了から匠へ、さらに匠から菅野ないし部外者、最悪、襲撃犯へと

捜査状況が漏れる事を恐れてかは解らないが、北代は頑なに、情報開示を拒んでいるらしい。

情報が少ないから、余計に小さな事が気にかかる。

菅野の態度一つとっても、それは当て嵌まる。

気にしなくてよい事なのかも知れないのに、在らぬ疑いを生み出してしまう。

それは、事の発端とも言うべき『“紅い泪”の事件』についても同じで、“男爵”についての情報収集に限りがある事と、了の専門分野でもあるから彼に任せるとして、今のところは、ただ予告日時に備えて、万全を期する、と言う状況ではある以外に、大した情報も親展もないまま、予告を明日に控える。

「万全ねえ…」と、ユリが溜め息混じりに言う。
「そぞ。」

何をやっておけば万全かは僕にも解らないけどね…。」

匠も覇気なく答えた。

「それにしても、変な話よね…。」

元はこの事件こそが中心だったはずなのに、いつの間にか違う事件ばかりが発生している。

“男爵”については予告状が来たきり、菅野の事件と関連性はない。りそうではあるが、それも確定するほどの証拠はない。

「奇妙な状況ではあるね…。」

「関連性…か…。」

“男爵”のものと思われるタイピンが、菅野館長が襲われた日に落ちていたこと、ね…。」

でも、本当にあの夜、“男爵”がああ美術館にいたのかしら…。」
ユリが頬杖を突いた。

「巧妙に映像に細工し、しかし証拠のようなものは残っている…。」

「なんだか、あべこべね。」

匠の呟きに、ユリが言うつと、匠はケラケラと笑った。

「ユリもそう思うかい？」

「うん。だつて変よ。」

映像だつて、完全に細工してたわけじゃないし、タイプンも落とすし…。

「今までの”男爵”からは考えられないんじゃない？」

「そうなんだよね。」

今まで何もかもを完璧に行つてきて、唯一使い捨てらしい小型の送受信機以外は何も現場に残さず消え去つた”男爵”の仕業にしては、ずいぶんと杜撰なんだよな。」

匠が深々と頷く。

「あいつ…。蕪木さんはどう思つてるのかな？」

”専門家”としての了の意見を聞きたい。

了は当然、自分たちよりももっと早く、この『あべこべさ』に氣付いている筈だ。

匠も同感のようだが、「どうかな…」と溜め息をついただけだった。

セレモニー開演を半日後に控え、手元にある情報は余りに少なく心細かつたが、それを嘆いても仕方のない事だった。

美術館へ向かうのは、夜の7時頃と言われ、それまでの間、ユリは少し眠る事にした。

今夜は、今まで以上に大変な事があるかも知れない。今出来る事は、寝ることくらいだった。

「ユリさん、寝るのですしたら、私がお部屋にいるのは邪魔になりますね。」

クレアの気遣いも、この状況では色々としんどいだけだった。顔に出す訳にはいけないので、なるべく平静を装う。

「そんな事ないけど、独りでいてもつまらないかもね。」

クレアも寝る？」

クレアは、「そうですね、出かけるまでに少しは寝ないといけなんでしょうけど…」と考え込んで、結局、「私、カナエおばさまのお手伝いをしている事にしますね」という事になった。

正直、クレアが部屋にいないのは有り難かった。

何か大きな事を前に、せめてベッドを占有してぐっすり眠りたかった。

しかし、それが果たされたのに、いざベッドに横になると、妙に頭が冴えて寝付けなかった。

「まだ興奮してるのかな……」

眠気はあるのに、頭が落ち着かない。

ここ数日の出来事が、ユリの眠りを妨げているようだった。

仕方がないので、暫し頭に付き合って、順を追って思い出して見る。

初めての探偵としての仕事。了との出会い。

クレアを見かけた日からだったか、不穏な空気が漂っていたのを、今ならはつきりと思い出せる。

菅野が襲われ、了の横顔で自分の過去の穴に気付き、やがて大使が殺された。

そこで見た、“男爵”の『顔』。不気味に笑うあの仮面は、暗闇の中で、蒼白く光っているように見えた。

そこまでを思い出して、急に眠くなった。

ユリは睡魔に身を任せて瞼を閉じると、全身を弛緩した。

体がベッドに沈んで行く。

手に力が入らなくなり、瞼も開かなくなった。

よし、このまま寝てしまおう。

そんな決意すら途中で途切れてしまうほど、ユリは呆気なく、眠りに落ちた。

5月3日、と4日 7

暗闇の中なのに、妙に視界が白んでいる。

人ごみの中にいるかのようなざわめきの中で、ユリは不意に肩を叩かれた。

振り返っても誰もいないが、声は耳元ではっきり聞こえた。

「大丈夫？」

困った事があつたら、叔父さんと叔母さんに言うのよ。」

その声が聞こえ終わるのと同時に、周りがぱつと明るくなり、再び闇に戻った。

一瞬だけ、懐かしい光景が見えた。

心配そうにユリを見る、両親の姿だ。

「大丈夫よ！」

ちやんとご飯も作れるから！」

そう、確かにそう答えた。

あれは、両親の海外赴任の出発の日の光景だ。

その日、心配をする両親に、ユリは胸を張ってそう答えた。

うん…、大丈夫だよ…。

暗闇の中で、ユリはもう一度、そう思う。

「お腹でも壊したら大変だから、カナエさんに作ってもらいなさい！」

母の声だ。そういえば、母もカナエには絶大の信用を寄せていた。

「ちよつと、ヒドイ！ たった一年じゃない！

大丈夫だよ」

そうよ…、たった一年…。

たった一年の筈だったのだ…。

「落ち着いたら、帰るから。」

電話もするからね。」

「うん！ いつてらっしゃい！」

笑顔で見送った。

ゲートを潜る両親に、いつまでも手を振った。

両親も、いつまでも振り返って手を振ってくれた。

帰って来てね…、必ず…。

今でも、願えば帰って来そうな気がする程に、その光景は鮮明に、記憶に焼き付いて消えない。

そして、夢の中でユリは思う。

そういえばあの時、離陸時間になっても飛行機は一向に動く気配がなかった。

エンジンは点火していた気がする。

何の事情かは解らないが、出航がわずかに遅れていたのだ。

だが、それに気付きながらも、然程の心配はしていなかったのも事実だ。

よくある事、程度にしか捕らえていなかった。

そんな事を思い出した刹那、目の前が一気に光った。

「！」

思わず目を瞑るが、これが何の光か、解っていた。

両親を巻き込んだ、ジャンボジェット機の爆破事故の光景だ。

あの日の空は奇妙な程に青くて、その空に立ち上る真っ黒な煙と、白い機体を包む真っ赤な炎が、不謹慎にも美しく見えた。

目の前の光景を美しいと思いつつ、ユリの脚から力が抜けた。

へなへなと座り込み、「お…父さん…？ お…母…さん…？」と

呟いてやっと、あの機体に両親が乗り込んでいた事を思い出した。

周りは各々悲鳴を上げ、中には倒れる者もいた。

避難誘導をする係員の声や、泣き叫ぶ声、野次馬の様な声が入り混じる雑音の中、腰を抜かしたままのユリの腕を、誰かが掴んだ。

「キミ…っ」

それは聞き覚えのある声だ。

しかし、聞こえていても反応が出来ない。

呆然としたままのユリの肩を、その声の主が強く揺り動かした。

「しつかりするんだ！」

この言葉を最後に、あの日の記憶は途切れている。

夢の中でも、起きていてもそれは変わらない事から、ユリは冷静に、やはりあの時を境に、暫く、自意識を失っていたのだと思った。そして次の瞬間、全く別の日の記憶に切り替わってしまった。

恐らく、自分の脳が記憶しているままを、夢で再生しているのだろうと思った。

空港で腕を掴んだ声の主は、別の日にもユリに声をかけて来ていた。

「…ごめんな…。」

何故、あなたが謝るのだ。

ユリは思った。

——謝らないですよ…。

「俺がもつと早く気付いていたら、何も失わなかったかも知れないのに…。」

あなたが悪いんじゃないから…。

「すまなかった…。」

——誰も、憎んでないから…。

そう、誰も憎んでいない。憎みようがないのだ。何が起ったか、解らないのだから…。

ユリは確認した。本当に憎んでいない。

しかし次に聞こえた声で、ユリははっとした。

「笑ってくれ…あの時みたいに。生きる事をやめないでくれ…。」

ああ…。

ああ…。

「キミが望むなら、俺がキミの手になるから…。」

そうか…。

薄ぼんやりと蘇って来る記憶に、ユリの体が震えた。

「キミが望むなら、キミの何にでもなるから…。」

——そうだったんだ…。

こんな大事な事を忘れていたのか…。

「キミが望むなら…。」

あのときの、あの人は…。

そう、あの人は…。

「すまなかった…。」

すまなかった…。」

すまなかった…。」

その言葉が木霊する中で、一瞬だけ見えた光景。
それは…。

5月3日、と4日 8

自然と目が開いた。

体が鉛のように重い。

ユリは腕をやつと動かし、額の上に置いた。

「あれ…、いつの間に寝ちゃったんだろ…。」

言いながら、傍らの時計を見ると、針は六を指していた。カーテンの隙間から見える空はオレンジ色に染まって、端から闇が迫って来ている。

「ああ、もう一八時…。」

仕度して、すぐ出発ね…。起きなきゃ。」

言葉にすると、勝手に体が動いた。

目覚めの瞬間と違い、立ち上げた体は羽のように軽い。

部屋着を脱ぎ捨て、パーティ用のワンピースを取り出す。

黒いティアドロップスと、紫色のジャケットのツーピースだ。ワンピースに体を通しながら、夢を見たという感覚だけが残っている頭で、それが何の夢だったかを思い返すが、何故か思い出せない。

「結構重要な夢をみた気がするんだけど…。」

どんな夢だったか、思い出せない…。

着替えはあつという間に終わり、部屋の電気を消して居間へ向かう。

ドアを開けると、クレアがこちらを見て笑った。

クレアは普段と変わらぬ服装だったが、足元に大きな衣装カバンが置いてあった。

そう言えば、我が家に来た時から、その大きなカバンはあった気がする。

「おはよー。」

「おはようございます。」

挨拶をしていると、匠が珍しくキッチンから出てきた。

「なんだ、寝てたのか。」

まあ、徹夜になるから、寝てくれた方がいいか。」

匠は一人納得して、急いで食事を摂るよう、ユリを急かした。

寝起きの上、微かにまだ疲れの残っている体で急いで食事を摂るのは思った以上に難しかったが、ユリは何とか、カナエが用意した軽食を平らげた。

「さて、そろそろ向かおう。今日は徒歩だからね。」

ぱんと手を叩いて、玄関へ向かう匠に、クレアもユリもぞろぞろと着いて行った。

家を出て、改めて、徒歩で美術館へ向かうという事が、この事件に巻き込まれてからなかったと気付く。

徒歩での帰宅はあるが、何だか新鮮な気分でユリは先頭を歩いた。後ろでは匠とクレアが、ささやかな世間話で盛り上がっている。ユリもたまに口を挟むが、大抵は聞くだけで、ただひたすら歩いた。ぼんやりと考え事をしていたのか、はたまた話に夢中だったのか、気付くと目の前に警視庁が見えた。美術館への道とは、ほぼ反対方向になってしまう。

道を間違えた事に匠も気付かなかったのだろうか、とユリが思っている、「なんだ、蕪木クンの事が気になるのか？」と匠にからかわれた。

「ちがつ……！」

「ふふふ。」クレアが笑った。

「んもう！ 違うつてば！」

ムキになって怒るユリに、匠が穏やかに言った。

「蕪木クンはもう美術館に着いてるんじゃないかな。」

「だからなんなのよ。」

「そう怒るなよ。一応大事な事なんだから。」

何が大事なもののか。

「どうでもいいわよ、あんなの！」

ユリは一つ地団駄を踏んで、ぷいと踵を返した。

ここからなら、元来た道を戻るより、病院と公園を経由して向かった方が近そうだった。

方向転換すると、少し向こうに帝都ホテルが見える。

（そういえば、ここでぶつかったあの外人さん、今日はいないのかしら。）

一瞬見ただけの顔なのに、妙に記憶に残っていた。

ただの通行人なので特に話題にするつもりはなかったが、何故かとても気になった。

右手に帝都ホテル、左手に了のマンションを見ながら少し歩くと、大きな交差点に出た。

右に曲がれば病院や純・公園がある。左へ曲がるとシリング大使館だ。

「クレアは、セレモニーみたいなイベントには、よく出るの？」

警視庁までの道すがらとは一転、不思議と無口になってしまった後ろのクレアに問いかける。

「たまに、と呼ばれます。年々減りますけど」と、クレアは至極日常の事を語る普通の口調で答える。

「いいなあ、楽しそうね。」

ユリが羨ましがると、クレアが苦笑した。

「疲れますよ。」

特に今回みたいなのは、基本的に立ちっぱなしだったりしますし。

「

確かに、テレビなどで報道されるセレモニーで、席に着いているものを余り見かけないと思う。

勿論放送されている内容が全てではないだろうが、それでも座っている事よりは、立ち話をしながら、参加者同士で挨拶し合う事のほうが多いのだろう。

「ああ、そうか。それもそうね。」

ユリは適当に頷きながら、クレアの様子がいつもどおりである事

が気になった。

（お父さんの事、悲しいはずなのに、そんな様子見せないわ。

強いわね…クレア…。）

こういった事を強弱でしか表せないユリにとって、クレアは間違
いなく強い人であった。

匠やカナエに同じような事が起こったら、自分はきっと狂ってし
まうに違いない。

感心すべき事なのか難しい事は解らないが、ユリは感心した。
そしてもしかすると、クレアとユリでは住む世界が違うのかとも
思った。

ユリにとって匠とともに探偵業を行う今でこそ非日常なのに、親
が何者かに殺されるなど、想像し難い事だ。

そう思って、ユリは自分の両親を思い浮かべる。

ユリの両親は飛行機の爆発に巻き込まれた焼死であるのだから、
誰か特定の犯人がいる訳ではない。

益々、クレアを取り巻く状況と、自身の周りがかげ離れている事
に気付く。

平穏な日々が愛おしい。

探偵業とは、その平穏から外れる仕事なのだろう。

そう思うと、この仕事は自分には向いていないのではないかと不
安にもなるが、この仕事を辞める事も、有り得ない事だった。

慌しい非日常に巻き込まれるからこそ解る、日常の有り難さ。

ユリはそれを、ビルの隙間を吹き抜けるそよ風に感じて、浅い深
呼吸をした。

見上げると空は夕焼けの深紅と夜の濃紺に輝き、月が公園の木々
の隙間からユリを見ていた。

何があってもこの慌しさも今夜で終わりだ。

ユリは月に向かって、一つ小さく頷いた。

5月3日、と4日 9

日が暮れてからの美術館とは、おぞましさを醸し出すものとユリは思った。

街頭とビルの灯りに照らされ、樹木の向こうに浮かび上がる純・美術館は、正門から毎朝見るそれとは、全く別物のように思える。敷地内に大勢の警官が見える。

正門には両脇に一人ずつ、中庭に点々と数名が見回りをし、そのうちの何名かは大型の警察犬を連れている。ここからでは見えないが、恐らく館内にも警官は溢れているのだろう。

いつもと違う雰囲気であるのは、その所為なのかも知れないとも思った。

「ユリ。」

気圧された訳ではないが呆つと突っ立っていたユリに、匠が声をかけた。

「クレアさんを連れて、一階の喫茶店で待っていてくれ。」

当然だが、館長室は出入り禁止だからね。

クレアさんは、着いたらすぐに着替えてくれて構わないから。」

「はい。」とクレアが頷くと、匠は途中でクレアに向けていた視線をユリに戻して、

「ああ、でも、館内は自由にうろつろ出来ないだろうから、静かにしていてくれよ。」

とにやりと笑って付け足した。

「うん。」

叔父さんはどこに行くの？」

「ああ。」

ちよつとだけ用事があるんだ。

この近所だから、すぐ合流するよ。」

それなら来るついでに寄れば良かったものとも思ったが、ユリ

は口には出さず、「わかつたわ」と頷いた。

匠も頷き返して、足早に公園の方へと歩いていった。

「さ、いこうか。」

「はい。」

クレアを促し、正門前の警官に声をかける。警官には話を通っているようで、すんなりと入る事が出来た。

中庭を抜け、美術館へと向かう。

セレモニーがあるのでエントランスは開いており、館内も煌々と灯りが点いている。

弱弱しく足元を照らす街灯だけの暗闇の中で、美術館の窓やエントランスから漏れる灯りは、とても強烈に思えた。

そのエントランスにも警官が両脇に立っており、ガラスの回転扉の向こうには、制服姿の警官に混ざって地味な色のスーツを着た男性の姿もちらほらと見えた。

私服の刑事だろうか。

ユリは肩を竦めながら正門の警官に言った事と同じセリフを言い、やはり同じ対応を受けて館内へ入る許可を得た。

クレアに目配せして、回転扉を押す。

心なしか重い扉を押して入ると、外で見た印象より館内は薄暗かった。

バタバタと忙しく走り回る警官や、二、三人で円陣を組んで小声で話す刑事など、思った以上に賑やかな館内は、ついさっきパークレイが殺された現場だという雰囲気など微塵も感じられず、どちらかというと賑わっているように、ユリには見えた。

「流石に、警察の人がたくさんいるわね……。」

明らかに場違いなユリとクレアは、エントランス脇の喫茶店へ入った。

数段の階段を下り、エントランスより更に薄暗いオレンジ色の照明の灯る店内で、適当に席を決めて座る。

「とりあえず、ここで暫くお休みね。」

「はい。」

「着替えはどうする？」

「すぐ着替えるなら、着替えられる場所、聞いてきてあげよっか？」

「もう少ししたらにします。」

「白い服なので、汚れてしまつといけないし。」

「そうか、白い服なら直前で着替えた方が良さそうだ、とユリは納得し、「そうね」と返して窓の外を見た。

ガラスにユリとクレアが映り、その向こうに暗い中庭が見える。先程すれ違った警官たちは、暗闇に紛れてよく見えなかった。

それが何となく監視が外れたように思え、柔らかく大きなソファに深く座りなおした。

肘掛に凭れながら、暫く無言で、二人は窓の外の闇を眺めた。しかしふと視界に入ったテーブルに、心が踊る。

「こんなテーブルが私の部屋にも欲しいな。」

言いながら、ユリはつるりとしたテーブルを、キュキュと音を立てて撫でた。

「未だ傷一つない、木目の綺麗なテーブルだ。」

「ステキなテーブルですね。」

「クレアもにこりと笑う。」

「ね、ステキよね。」

でも私の部屋狭すぎて、このテーブル置いたら私の居場所がなくなつちゃうわね……」

「ソファ四つに囲まれたテーブルは、円形で大きい。」

喫茶だけでなく食事も兼ねる、というよりは寧ろ、来場客は食事をメインに訪れるであろう事を考慮して、テーブルも大きなものを選んだのだろう。

そのテーブルが八つに、横三人がけの長椅子二脚に挟まれた四角いテーブルが六つ並ぶ店内は、改めて見回すと結構な広さだった。さらに八人がけのカウンターの向こうにあるキッチンも、相当な広さに見える。

この喫茶店自体が小展示室だった二つ分なのだから、美術館自体の大きさに驚く。

間抜けに口を半開きにして、ユリは天井までを見回した。そして壁に、小さいがキラキラと照明に輝く金色の時計がかかっている事に気付いた。

アールヌーボーの装飾を施された、店内の雰囲気と照明の色に相応しい、しかし存在を過度にアピールしない上品な時計だった。

振り子などの付属品はなく、縦長の四角形で上下中央に白く丸い盤が詰め込まれ、黒くて華奢な長短針が時を刻む。

今は、短針が八、長針が一二を少し回ったところだった。

「二〇時か。」

セレモニーは二三時開場だから、あと三時間ね。」

ユリが言くと、クレアも時計を見上げた。

「着替えは、二三時頃にしようと思います。」

「そうね、そのくらいが良さそうね。」

男爵の予告は、セレモニー開始の〇時。

四時間なんて、あつという間ね、きつと…。」

緊張感もなくユリが言くと、クレアの表情が少し曇った。

「そうですね…。」

「何もないといいのですけど…。」

「何もない。」

それがどれだけ正常な状況であるのか、ユリには想像が出来ない。何かあつて当たり前だと思っている今の自分が、ユリは腹立たしかった。

本来は何事もなく終わるはずのものなのだろう。

だが、今回は違う。

館内について、何故か思考から消えてしまっていた”男爵”の事を思い出す。

昨晚、この喫茶店の壁を挟んで隣にある館長室で見かけた、あの不気味な白い仮面。

思い出すと、背中が寒くなった。

目が合った。そう思う。

だから、本当はあの時、自分も殺されていても不思議ではなかったのだろう、と今更に思った。

顔が隠れていたから。急いでこの場から離れたかったから。何の理由で自分は今、無事でいるのだろうか。

あの咽るような鉄の臭いの中で、ただ気絶するだけで済んだ事は、運が良かっただけなのか、それとも見逃されたのか。

窓の外に視線を戻すと、夜の闇が心の中にまで入り込んで来るように重いものを感じた。

何事もなく終わればいい。

ユリは唇を噛んだ。

「私そろそろ着替えてきます。」

クレアが席を立った。少し屈んで、ソファの脇に置いたバッグから、ピンク色をした薄手の布の包みを取り出した。

「大丈夫？ 着替えられる場所、わかる？」

「大丈夫ですよ。入り口にいた警備員さんに聞きます。」

クレアがにこりと笑った。

ユリが頷いて、「いつてらっしゃい」と言うと、「いつてきます」と喫茶店を出て行った。

クレアの姿が見えなくなった後、ユリは軽く伸びをして窓の外に目をやった。

「さて、どうしようかしら……。移動する訳にもいかないし。」

居心地悪そうに足をぶらつかせると、「ユリ。」と名前を呼ばれた。振り向くと、匠がいた。

「あ、叔父さん。もう用事は済んだの？」

「ああ。」と言いながら、匠がクレアの座っていたソファに腰を下ろす。

「そう。何の用事？」

「それはナイショ。」

興味津々の瞳を向けるユリに、匠が苦笑した。

ユリがいじけた。

「なによ……。」

あ、今クレアはお着替え中よ。」

「そうか。」

さつきそこの警官さんに聞いたら、そろそろ『紅い泪』の搬入がされるそうだよ。」

匠が今夜の『主役』の話を持ち出したが、ユリは然程も興味なさげに、「ふうん」とだけ答えた。

「随分ギリギリに搬入するのね…。」

「まあ、こういう展示会ではそれほど珍しい事じゃないよ。」

搬送に船を使う美術品なんかは、船が遅れて、展示会に間に合わないなんて事だってあるしね。」

「ふうん…。」

でも、まだ見られないんでしょう？」

「そうだね。」

ボクらなんかは、最悪セレモニーが終わったあと、一般展示中の状態でしか見られないかも知れないなあ。」

匠が答えると、案の定といった表情で、ユリがソファに凭れた。

「つまらないわ。」

見せてくれたっていいのに。」

と口を尖らすユリに、匠がいたずらっぽく笑った。

「まあ、仕方がないよ。」

それより、地下と三階以外だったら、歩き回っても問題ないそうだよ。」

「館長室も？」

「うん。」

鑑識捜査も一通り済んだそうだから、覗くくらいだったら大丈夫らしい。

ただ、デスクの周りには近付かないで欲しいとは言われたよ。」

匠が肩を竦めた。反応から察するに、恐らく言っただのは北代だろう。

「近付かないわよ…。」

ユリが不貞腐れた。

「ま、そうだろうけどな。」

でも、大丈夫なのか？ 無理はしなくていいんだぞ。」

「大丈夫よ。」

あんな事でへこたれる私じゃないわよ。」

「そうか。ならいいが。」

そう言いながら、匠はユリの目元に薄っすらと浮いたクマを見つめて笑った。

視線に気付かないのか、ユリは立ち上がった。

「じゃあ、言ってくるわ。」

クレアが戻って来たら、ウロウロしてるって伝えておいて。

なるべくすぐ戻るわ。」

「ああ、行っておいで。」

匠が答えるや否や、ユリはエントランスへと向かった。

喫茶店やショップ、職員専用区画のある一階は、然程回るところがない。

昨夜の手前、館長室にはやはり近付きたくなかったので、余計に一階で見るものがなくなった。

仕方なく二階へ向かうと、一階に負けず劣らず、警官でこった返していた。

残っていたブルーシートも全て外れて、いつの間にか展示ケースも展示品も並べられていた。

展示品の一部は、既に搬入が始まっているようだ。

ロビーから見える限り、展示室内を歩き回る事も不可能に思えた。だが特別展示室だけは、何が理由か誰もいなかった。

（あら、こっちは誰もいないのかしら？）

誰もいないなら……と覗き込んだユリの耳元で、いつもの声がする。「来たな、キャバ嬢め。」

瞬時に誰かを理解したが、開口一番何を言うかと思えばそんな事かと、ユリはむっとした。

声のほうを見やると、了がいた。

ユリのパーティドレスは”キャバ嬢”と言われるほど派手ではない、と思っているが、地味目のスーツ姿の刑事や制服警官の中では、確かに派手ではある。

が、そんな事を言う了の格好も、些か派手すぎやしないかと思っ

了は黒の細身のスラックスを穿き、白いシャツの上に黒いシング
ルボタンのベストを着、ラメ入りなのか艶やかなシルバーのタイを
締めている。そこまではいいのだが、問題はベルトだ。

真っ赤だ。

それで腕を組んで仁王立ちするその姿は、まるで…。

「出たわね、チンピラ。」

やや古い言い回しながら、”チンピラ”という表現がぴったりだ
と思った。

「失礼な。」

言われて、了が不機嫌な顔をする。

「お互い様よつ。」

蕪木さんのその口の悪さ、なんとかならないの?」

ユリが言つと、「ならないが…」と言いつつ、表情がゆっくりと
困惑気味になつて言つた。

「ううん…」

「なによ?」

「君に”蕪木さん”と呼ばれるのが、妙に気持ちが悪い。」

「な…!!」

”気持ちが悪い”とはどういう事か。

「失礼ね！」

呼び捨てにするわよ!」

言つてやったが、ユリの思惑に反して、了は満更でもない表情を
した。

「そうだな、いつそ、名前で呼び棄ててくれたほうが、まだしく
り来る。」

啓き直られると、返つてやりにくい。

「…呼び捨てし難いわよ…」

もじもじとするユリを一瞬だけニヤリと笑つて、了は話題を切り
替えた。

「匠さんとクレアさんは?」

「多分、喫茶店にいると思うけど。」

「会ってないの？」

「そうか」と言いながら、了が頷いた。そして、少し真剣な顔をする。

「ユリは心の準備は出来てるか？」

「一応は…。不安はあるけどね。」

来ると思う、「男爵」？」

「必ずな。もしかすると…。」

言いながら、了が窓の外に目をやる。

「もう館内にいるかも知れない？」

「館内にいる人間で、ユリや匠さん、クレアさん以外の人間は全て身体検査をしたが、不審者は見付からなかった。」

だがもしかすると、セレモニーの参列者に混じって入り込む事も考えられる。」

「来賓の検査は出来るの？」

「難しいな。」

企業の重役やら、海外からの重要な来賓が多いから…。

”男爵”の予告状の事も公にしていなから、余計にな。」

「どうして公表しないの？」

「余計な騒ぎを起こして、捜査に支障を来してはまずいからな。」

公表すればマスコミも入り込んで来るし、ギャラリーを増やすよりは、監視対象を抑える方が、効率がいい。」

昨今のマスコミは、やや物事に立ち入りすぎだと、匠が以前呟いていたのをふと思い出した。

マスコミが知れば、ここぞとばかりにある事ない事書き立て、あつという間に見物客でこった返すだろう。

「それより、見回るのもいいが、時間まで休んでいた方がいいんじゃないのか？」

いざつて時に使い物にならないのは、困るぞ。」
了がニヤリと笑った。

いつものユリならここで、頬を膨らませて何か一言言い返すのだが、今日のユリは不安でいっぱいだ。

「う…、そうなんだけど、落ち着かなくて…。」

と弱気な答えを返す。

予想外の答えが返って来て、了もさすがに苦笑した。

「なら、一度喫茶店に戻るか。」

そろそろ北代が来る頃だから、配置確認の話もあるだろうし。」

了なりの配慮だろう。喫茶店なら椅子もあるし、馴染みの顔ばかりだから緊張も和らぐだろう。

「うん。」

ユリが素直に頷くと、了も小さく頷いて、一階へと歩き始めた。

5月3日、と4日 11

大した寄り道もせず喫茶店に戻ると、匠が独り、ソファの肘掛に
頬杖を突いて、にやにや笑いながら中庭を見つめていた。

「ただいま。」

「こんばんは。」

各々声をかけると、匠は姿勢を変えないままこちらを向いて、

「やあ、蕪木クン。」

と言った。が、その直後に、匠の背後からぞもぞとこちらを覗く
もう一つの顔が現れた。

「こんばんは。」

今夜は何卒よろしくお願いしますよ。」

菅野だった。どうやら、匠は独りでにやけていた訳ではなかった
らしい。

「心得ています、館長。」

了が小さく頷きながら答えた。

まだ戻っていないのか、クレアの姿だけ見えなかったので、ユリ
が「クレアは？」と訊ねると、今度は自分の背後で「今戻りました」
と声がした。

振り向くと、眩いばかりに真っ白な衣装を身に纏ったクレアが、
照れくさそうに立っていた。

クレアの衣装は、滑らかに輝くシルクで、短いタイトスカートの
ようなスカートと、長い裾と大きな襟のコートを組み合わせたツー
ピースのデザインで、コートの裾は、クレアが少しでも動かたびに
優雅に揺れた。

よく見ると、真っ白い糸で繊細な刺繍まで施されている。植物が
モチーフだろうか、流線型の構図がとても美しかった。

「すてき！」

ユリが思わず声を上げた。

「シリングの伝統衣装なんです。いかがでしょう？」

クレアが照れながら少しお披露目のポーズをとると、「物凄くステキよ!」「うん、すばらしいね」「よく似合っているよ、クレア」と各々褒め称えた。

「直接見るのは初めてですが、噂どおり、清楚な衣装ですね。」

と、最後に了が褒めると、クレアは「有難うございます」と頭を下げた。

「本当に真っ白ね。」

汚さないようにしないとね。」

ユリがおどおどというと、

「はい。」

気をつけないと。」

と、クレアが苦笑した。

「蕪木クン。北代警部補は？」

クレアのお披露目会が終わったところで、匠が尋ねた。

「それが、今夜はまだ見かけていないんです。」

ここへ立ち寄るんじゃないかと思って、来たんですけど…。」

了が困惑した表情を見せた。

「そうなのか…。」

そろそろ、色々打ち合わせをしないと、時間がないと思うんだけどなあ。」

「そうなんです…。」

言いながら、二人揃って腕組をした。

そこへ、北代が現れた。噂をすれば、である。

「お待たせしましたな。」

いつも通りの横柄な態度で、店内に入ってきた。

「北代警部補。」

菅野のほつとした声に、「遅かったですね」という了の不機嫌な声が続いた。

見れば表情まで不機嫌だ。

「色々ごたつきましてな。」

北代は悪びれる様子もなく言い、さつさと話を進めてしまう。

「警備については、以前お話したとおり行つつもりであります。」

既に配置は済んでいます。が、館内の警備については、ほぼ死角はないと思います。

問題は…、セレモニールームですな。」

「そうですね…。」

お客様に快適に過ごしていただくようにするには、警備の方の入室は、なるべく少ないほうが…。」

菅野が困惑した。

「そうですね。」

北代が頷く。しかし、この一言に何を思ったのか、了が怪訝な顔をし、顎に手を当てて考える仕草をした。

北代の説明では、確かセレモニールームに配備する人員は、入り口と室内で合計四人ほどだったか。決して多いとは言いがたい。

「でも、そうは言っても…。」

警備を手薄にする訳にも行かないではないか。ユリが言うと、

「無論、解ってはあります。」

と菅野も頷いた。

「みなさんの安全第一ですし、逮捕も、盗難を防いでいただく事も重要です。」

最終的には、北代警部補や蕪木さんのおっしゃる通りにしなければならぬ事も、承知しておりますよ。」

そう言って、小さく笑う。

「でも、無用な騒ぎも出来れば防ぎたい。」

室内の警備が厳しすぎると、敏感に気付く人もいるかも知れないからね。」

匠が言った。菅野の本音はこちらだろう。

展示会を成功させるのも、菅野の役割の一つだ。

「そうですね。」

了は相変わらず顎に手を当てたまま、同意だけはする。

「では、とりあえずこのまま進めますが、よろしいですか？」

セレモニー開始時間には、入り口の警備強化だけ行つ、という予定で参りますが。」

若干、予定より人数は増やす予定のようだ。

室内に入らなければ良いらしく、菅野はゆっくり頷いた。

「解りました。」

お手数をおかけします。」

菅野の返答を待つて、北代は「それでは」と吐き棄て、喫茶店を後にした。

「何、あの態度……。」

北代の姿が見えなくなるまで十分待つて、ユリが膨れた。

その横で、了が無言で一瞬だけ北代を睨み付けたのを、匠だけが見ていた。が、匠の視線に気付いて、了は素早く表情を戻す。

「ま、とりあえず、開始までまた手持ち無沙汰だな。」

了が言うと、

「見回つても、もう警官の人が沢山立つてるんだから、意味なささうね。」

ユリも機嫌を直して答えた。

「男爵”について、追加情報とかないのかな？」

匠が聞くと、「特に目新しいものは……」と、今度は一転とても申し訳なさそうな表情をして、了が答えた。

「やっぱりなあ。」

匠も苦笑する。

「そつえば、セキュリティ・ルームはどうなってるの？
地下倉庫とか。」

”紅い泪”の搬入も、そろそろなんですよ？」

新しい情報が見込めないのなら、ひたすら行動あるのみと言いたげなユリに、「行ってみるか」と了も頷いた。

5月3日、と4日 12

夜のせいかな、気分のせいかな、いつもより重い空気を感じる地下通路を通ってセキユリティ・ルームへ向かうと、扉が少し開いていた。「こんばんは。」

声をかけて中を覗くが、いつぞやと同じように、誰もいなかった。「あら……？」

首を傾げるユリの後ろで、了が眉間に皺を寄せて考え込んだ。すると、今し方聞いたばかりの北代の横柄な声が背後から聞こえた。

「見回りかね？ ご苦労。」

「お疲れ様です。」

振り向いて了がぶつきら棒に答えると、北代はそれ以上何も言わず、無言で立ち去った。

通路の奥なので、恐らく地下倉庫へ向かうのだろう。

「北代さん、熱心ね……。」

ユリが何気なく言うが、了の表情は相変わらずだ。

「よう、嬢ちゃん。」

続いて、背後から陽気な声がユリを呼んだ。

振り向くと笑顔の飛澤がいた。

「こんばんは。」

ユリもにこりと笑って挨拶する。が、すぐに笑顔を引っ込めた。

「北代さんがここに来るなんて、珍しくない？」

ユリの問いに、飛澤は満面の笑みを浮かべた。

「ん？ ああ、そんな事もないさ。」

あの人は大抵、美術館に来ればここに寄るんだよ、うん。」

「へえ、そうなんだ……。」

案外と仕事熱心なのね。」

当たり前と言えば当たり前であろうが、普段どこにいるかと思え

ば、地下にも来ていたのか、という思いはあった。

「ところで…」

と飛澤が話を切り替えた。

「何か用かい？」

了が何か答えるかと思ったが、何も答えなかったので、ユリは適当に、

「迷子になったときのために、道を確認しに来ました。」

と誤魔化した。

十分納得の行く答えだったのか、飛澤が大笑いした。

「どうだい、道順は覚えたかい？」

「ばっちり！」

そんなやり取りに、さすがに了も考え込むのをやめたようだ。

呆れた顔をして、腰に手を当ててユリを見た。

「階段下りて道一本なのに威張るな…。」

「うるさいわね！」

ユリの反応を見て満足したのか、了は瞬時に真顔に戻り、飛澤を見上げた。

「飛澤さん、何か変わった事がありました？」

了につられてか、飛澤の表情からも笑顔が消えた。

「特にないなあ。」

今日はいつもより気を遣う客が多いってくらいで、あとは普段どおりだと思っぜ。」

が、そこまで言っつて、にやりと笑う。

「あつと。そういうば、” 紅い泪 ” がついさっき、やっと搬入されたぜ。」

それを聞いて、ユリが「おっ」という顔をする。匠から聞いてはいたが、飛澤から聞くと少し赴きも違って聞こえる。

「そうですか。」

随分直前の搬入なんですね。」

了は然程興奮する様子もない。

「だなあ。」

俺もギリギリだったんで驚いたんだがな。

館長からは、セレモニーで披露するから、準備だけしておいてくれって、連絡があつたところだよ。」

「セレモニーホールへは、何時に、どういう経路で運ぶんですか？」

「セレモニー開始十分前に小部屋から出して運ぶ予定と言われているよ。」

地下からは階段を使って、一階からセレモニーホールまではエスカレータを使うと指示されたぜ。

俺と、もう一人うちの社員が運搬役。」

地下倉庫には、地上階へ移動出来る搬入用のエレベータがあるが、使わないようだ。

「付き添いには、北代警部補の部下が二名付くって言ってたな。」

「北代さん、付き添わないんだ？」

ユリが言う。

「ああ、なんかボソボソ言ってたなあ。」

『○時前だから、大丈夫だろう』とか何とか……。」

その一言で、大体考えは解った。

○時まではチャンスがあるうが”紅い涙”には手を出さないつもりでいると踏んでおり、セレモニーホールの警備さえ抜かりなければ、”男爵”は捕まえられると考えているのだろつ。

そして、相変わらず、飛澤は知らないままのようだ。

”紅い涙”の移動スケジュールが解ったところで、了が頷いた。

「そうですか。」

何かあつたら、報せて下さい。」

「おう、了解したよ。」

飛澤は笑って了解し、セキュリティ・ルームへ入って行った。

飛澤の姿が消え、セキュリティ・ルームの扉がしまったところで、了が携帯電話を見た。

地下のせいか圏外になっていた。時間は既に二三時三〇分を過ぎ

ていた。

「さて、そろそろセレモニーが始まるぞ。」

「うん。ドキドキしてきた…。」

ユリが胸に手を当てて言うと、了がニヤリとした。

「帰ってもいいぞ。」

「帰んないわよ！」

何としても男爵を捕まえてやるわ！」

拳を握って言うユリを見て、了は笑った。

5月3日、と4日 13

階段で一階まで上がり、職員通路からエントランスに出ると、先程より人気が増えていた。

稼動しているエスカレータを使って三階まで上がると、これでもかと着飾った来賓でこった返していた。

「すごい人……」

人混みならではの賑やかさに、ユリは暫し呆然とする。

この一週間というもの、美術館にここまで人がいたことなど、なかったからだ。

自分もそれなりに衣装に気を遣ったつもりだったが、来賓の衣装の中では、格段に地味だった。

少し、悔しい。

「あ、いた！ ユリさん！」

ざわざわという雑音にも似た雑踏の中、誰かがユリを呼んだ。

きらきら光る装飾品を身に付けた婦人と婦人の間から、クレアが手を振ってユリを呼んでいた。

その様子は、衣装の異質も相俟ってか、若干場違いにも見える。

だが、それでもクレアの衣装が一番、美しかった。

「クレアのドレスがお客さんの中でも一番綺麗ね。」

駆け寄るクレアに、ユリが笑った。周りの賑やかさに、声をいつもより張らないと聞こえないので、大きくなる。

「ふふ。ありがとうございます」とクレアも笑う。

「あれ、蕪木くんは一緒じゃないのか？」

どこにいたのか、いつの間にかいた匠が言った。

言われて、ユリが辺りを見回す。

「ん？ あれ？」

さっきまで一緒だったんだけど……」

と言いつつも、三階についてから、あまりの人混みに気を奪われ、

了を意識していなかった。

「そうか、先に配置に着いたのかな。」

さて、ボクらはどこにしようか？」

ジャケットのポケットに入れた携帯電話で時間を確認すると、二三時四八分だった。

「あと十分でしょ？」

ウロウロしてる時間ないし、そろそろ”紅い泪”がここに運ばれて来る頃だし……」

ユリが言くと、「ほう、やっぱり披露するのか」と匠がニヤついた。

「みたい。」

セレモニー開始十分前に地下倉庫から出すって言ってたから、そろそろ出る頃でしょ。」

「ふうむ。」

じゃあ、蕪木くんは、それに付き添ってるのかな？」

「今、地下から戻ったばかりなのに？」

匠の言葉に、ユリが訊ねる。

そうなら、わざわざ三階まで来なくて良いではないか。

「ま、よく解らないけど、彼は彼で動くのは予定通りだから。」

ボクらはここで、”紅い泪”の到着を待とう。すぐにセレモニーも始まるしね。

クレアさんは、ここにいればいいのかな？」

聞かれたクレアはセレモニーホールを見やり、匠に視線を戻して

「私は、菅野のおじさまの近くにいます。」

もうセレモニーホールの中にいるので、行ってきます。」

と言った。

「ああ、解った。」

何かあったら、ボクらはここにいるからね。」

「はい、ではまたあとで。」

クレアはそう言って、にこりと笑うと、セレモニーホールへ駆け

て行った。

そしてクレアがセレモニーホールへと入った瞬間、ふ…と照明が弱まった。

「なに!？」

ユリがどきりとする。来賓も少々驚いたらしく、ざわつきが一瞬大きくなった。

匠も何事かと辺りを見回したが、特に異常を感じなかったようで、「…大丈夫だ、多分、灯りを少し暗くする演出だろう。」

と言った。その直後、匠の言うとおり、セレモニーホールの中にいると思われる司会役のアナウンスが流れた。

「ただいま、照明を一時的に弱くしております。」

設備のトラブルではございませんので、ご安心下さい。

もう間もなくセレモニー開始となります。

来賓のみなさま、セレモニーホール内へお集まり下さい。」

アナウンスに誘導され、来賓の波がゆっくりとセレモニーホールへと流れていく。

「演出…。びっくりしたわよ…。」

来賓の波に飲まれないよう、少し壁際に移動しながら、ユリがぶんすかとした。その様子に、匠が笑った。

「まだ〇時じゃないからね。」

「本当にきっちり予告どおり来るのね?」

「だろうと、蕪木クンは言ってたよ。」

了が言うなら、そうなのだろう…。

「あいつが言うなら、そうなんでしょ…ね…。」

ユリが納得すると、その声に被さる様に、突如「数秒の差はあるかな」と了の声がした。

突然の声に、ユリがまた驚く。

「!

やめてよ、またびっくりしちやったじゃない…。」

ユリが頬を膨らませるが、ユリの言葉に了は反応しなかった。

了はユリなど見ておらず、エスカレータを登って来る警備員たちの姿をじつと見つめていた。

警備員の一人が仰々しい金色の脚の付いた台を大事そうに持っている。上には艶やかな艶を放つ白い生地で出来たふんわりとした小さなクッションが置かれ、その中心で赤い光がキラリと輝く。

”紅い涙”だ。

だが、その姿は生身のままで、余りにも無防備に人の目に曝されている。一部の者しか”男爵”による盗難予告を知らないとはいえ、そして幾ら傍に監視の目があるとはいえ、これでは、『盗んでください』と言っているようなものだ。

そんな”紅い涙”を運ぶ警備員の脇には、もう一人の警備員と、飛澤がいる。後ろから何人が警官がついているようだ。

いつの間にか辺りはしんとして、来賓の多くも了と同じものを見ていた。

「”紅い涙”が来たようだね。」

匠が言った。

「…セレモニー開始ね…。」

二三時五九分。

「”男爵”の登場も、ね…。」

「大変長らくお待たせ致しました。

本日は、純・美術館主催『シリング王国・王家の財宝展』のオープニングセレモニーにお集まり頂きまして、誠に有難うございます。これより、セレモニーを開催致します。

どうぞみなさま、セレモニーホール中央へお集まり下さい。」

アナウンスが流れると、再び、だが今度はやや抑え気味に、来賓ががやつきながらセレモニーホール中央へ集まって行く。

「始まった…。」

ユリがそう言った刹那…。

○時。

暗闇になった。

何も見えない。館外や中庭の照明すら落ちている。

さらに今夜は雲があるのか、月明かりがとても弱い。

殆ど何も見えない暗闇の中、了が呟いた。

「来たな。」

「え、演出じゃないの、これ…？」

ユリが慌てると、「みたいだね」と悠長に匠が言った。

そして、暫しの沈黙の後、突然物音がした。

次いで、誰かが何か思い切り吐き出したような「かはっ…」という声。

それでも何事が理解出来ず静まり返る人混みの中で、静かに、ゆっくり、声がした。

「返して頂きますよ…。」

5月3日、と4日 14

「返して頂きますよ……。」

男の声とも女の声とも判別のつかない、その声はとても透き通って聞こえた。

その声を合図に、了が息を飲み、異常を察した来賓ががやついた。がやつきに紛れて、鉄パイプを軽く叩くような音が、リズムカルに聞こえる。

「今のは!？」

徐々に大きくなるがやつきの中で、匠も緊張している。

「蕪木!」

どこからか、北代が叫んだ。

「北代さん!

灯りは!?!?」

了が怒鳴り返す。

「駄目だ!

セレモニーホールに添え付けておいた非常灯も壊されているようだ。

セキュリティ・ルーム、緊急用発電室、その他全ての設備の警備人員もやられている。

中がどうなっているか解らんが、恐らく壊されているだろう。

予備の灯りを持って来た部下が、美術館外の電線が断絶しているのを見付けたしな。

館内の復旧は無理だ。」

館外も警察犬を連れた警官がそれなりの数いた筈だ。

仮に警備の穴があったところで、その穴を潜り抜けて破壊を行い、さらにこの会場まで移動するなど、為し得るのか……?

「警部補!」

警官と思しき声が叫んだ。

「灯りか！ 点ける！」

「はい！」

恐らく携帯非常灯であろう。北代の指示で非常灯が灯されると、顔の判別こそ難しいながらも、障害物の位置を把握できるくらいには、館内が明るくなった。

「クレアは！？」

漸く暗闇から開放されたユリは、闇の中で聞こえたあの妙な声がクレアのものではないかと不安になった。

「ユリさん！」

ユリの声に反応したのか、クレアが叫んだ。薄暗闇の中で、非常灯を頼りに、クレアがユリに駆け寄る。

「ああ！ よかったクレア！」

館長さんは！？

「さつき近くで物音と声が聞こえて、そのあと解らなくて…。

ああ、どうしましょう、ユリさん…。」

「大丈夫よ、クレア。ここにいてね。」

取り乱し気味のクレアの肩に手をやって、宥める。

「叔父さん。私たちはどうしたら？」

「こう周りが暗くては、動けないよ。」

訊ねられた匠も、この闇に戸惑っていた。

「そんな…！」

「きゃああつ…！」

ユリの声に、来賓の悲鳴が被った。

「今度はなに！？」

悲鳴はセレモニーホールから聞こえた。ユリが声の主を探そうときよろきよろしていると、傍らで匠が何かを大きく指で指した。

「いたっ！」

匠の指の先。

ユリが視線を向ける。

その先には、菅野を担いであの梯子を登る”男爵”の姿があった。

「男爵」！

それに、館長！！？」

「おじさまっ……！」

ユリとクレアが声を上げる。

その横で、了が「くそ……」と小さく吐き棄てて走り出した。

「か、蕪木さん！」

了は何故かエスカレータで二階へ向かおうとしている。

ゆるりと下るエスカレータの段を、勢いよく下っていく。

「叔父さん！」

追いかけるから、クレアをお願い！」

「ユリ！ 待ちなさい！」

ユリはクレアを匠に押し付けると、匠の制止も聞かずセレモニーホールの梯子へ駆け寄り、登り始めた。

ドレスとパンプスのせいで、動き辛い。

少しは登りなれている筈の梯子に手惑い、思うように登れない。

時折視界の隅に入り込む様子を見る限り、指示塔である北代に取り残されたらしい警官や警備員は、来賓に詰め寄られていたり突然の事に対応出来ず、おろおろしているだけだった。

そんな中で、突発的にでも行動を起こしている自分に驚きつつ、慎重に梯子を登る。

いつもの三倍も四倍もかけて梯子を登り切ると、目の前の窓をあける。

「窓から外に……。」

窓から屋根に足を乗せると、背後でクレアの声がした。

振り向くと、クレアがすぐ後ろにいた。付いて来てしまったのか。「クレア！」

ここまで来てしまつては、梯子を降りて混乱の中へ戻すより、このほうが安全な気がした。

そして、ユリが再び屋根上に視線を戻すと、今度はそちらの光景に焦る。

「…あっ！」

屋根の上には、”男爵”と、いつの間に登ったのか了がいた。二人は対峙し、時折”男爵”が何かを繰り返出し、了がそれをかわしていた。

不意に、月を覆っていた雲が晴れた。

月明かりに照らされ、”男爵”の手元がキラリと光った。ナイフだ。

「あぶな…。」

そういつて屋根に踏み出した瞬間。

「わ…!!！」

「ユリさん…!!」

足が滑ってバランスを失い、そのまま屋根をずり落ちた。

5月3日、と4日 15

「……いたた……。」

屋根は予想以上につるつるとしていて、ユリは尻餅を突きながらも、何とか屋根から転落寸前のところで踏み止まった。

館外の照明は復旧しておらず、非常灯の灯りも届かない屋根上は暗く、寒い。

その暗がりの中、着いた手の脇に、見慣れない靴先が見えた。

ゆっくり見上げると、つい先日、館長室で見たあの仮面が、ユリを見下ろしていた。

「……あ……。」

どうやら、“男爵”の目の前に滑り落ちてしまったようだ。

流石に身の危険を感じた。

「こんにちは、お嬢さん。」

不意に声をかけられた。仮面のせいで表情は窺い知れない。だが、声は明らかに穏やかで、優しい。

そして何より、綺麗な日本語のイントネーションで言葉を発した“男爵”は、この状況でそんな細かい事まで気になり嫌気の差しているユリから目を離し、少し離れた場所で自分を睨みつける了を見た。

「蕪木さん。」

そう言いながら、“男爵”は座り込んでいるユリの腕を掴み、強引に立ち上がらせると、ユリの体を了を正面に見る体勢に変え、両腕を後ろに引いた。左片手だけでユリの両手首を掴み、後ろにぐいと引っ張る。ユリが少しよろけて後ろに倒れると、すぐに“男爵”に当たった。そしてユリの顔の真横から、“男爵”は顔を出した。

密着する形となり、気付けば喉元には、ナイフが添えられている。「……ごめんなさい……。」

完全に了の邪魔になった自分に心底泣きそうになり、ユリが謝っ

た。

向かい合う了は、右手を腰の後ろに回し、やや前屈みの姿勢で”男爵”をじっと睨みつけている。

「とりあえず、その背中の銃を棄ててもらいましょうか。」

”男爵”が言つと、了の眉間の皺が一瞬深くなった。その後ろには、いつの間にかクレアが立っていた。クレアは祈るように手を組みながら、ユリを見つめている。

「…。」

暫し黙り込んだ後、了が小さく溜め息をついて、”男爵”を睨んだまま、体の後ろで何かを掴んでいた右手を戻した。

そしてがちゃがちゃと右手だけで何かを弄る。すぐに何かからバ―のようなものが落ち、次いで了は、その何かを中庭の方向へ投げ捨てた。

了の足元に落ちたバ―を見ると、銃の弾倉^{マガジン}だった。

銃を棄てて尚、”男爵”を睨む了の視線は動かない。

じっと睨みつけたまま、了は口を開き、吐き棄てるように言った。「お前んちの親子喧嘩に、それ以上その子を巻き込むな…。」

その言葉に、ユリだけが驚いた。クレアは理解出来なかったのか、ずっと祈るようにユリを見つめている。

訳が解らず呆然とするユリの後ろで、”男爵”が囁いた。

「…そう…でしたか。あなたはあの時の…。」

「え？ え？」

”男爵”の応答でさらに訳が解らなくなったユリを、”男爵”は梯子の窓の方へ突き飛ばした。

「わっ！」

『解放』されたユリは、今度は前のめりに屋根に倒れ込んだ。そして、駆け寄ったクレアの手を借りながらヨロヨロと起き上がると、今度は滑らないように手と膝を突き、妙な格好で”男爵”と了を振り返る。

「さて、蕪木さん。」

「っ！」

言うが早いか、突然”男爵”が了にナイフを突き出した。了も寸出のところで避ける。

一瞬詰まった間合いが、了の回避で再度空く。

「相変わらず、身軽でいらっしゃる。」

「うるせえよ。」

何か癢に障ったのか、この上ない不機嫌な声で、了が答えた。

「”紅い泪”、私にいただけませんか。あれはとても大切なものなので……。」

「嘘つけよ、わがまま息子が……っ！」

”男爵”が言い終わる前に、了が言った。まるで、駄々っ子を叱り付けるような口調だった。が、今度はその言葉が、”男爵”が三度突き出したナイフによって途切れる。

「感心しませんね。」

平然と、冷静に言いながら、”男爵”はナイフを突き出し、時に振り下ろし、横に流し、了を牽制している。

了は、暗闇のせいでナイフを交わすので精一杯で、反撃出来ずにいた。尤も、唯一の武器であった拳銃は、ユリの失敗によって既了的の手にないが故に、反撃出来ずにいるのかも知れない。

「どうして、ここまで……っ！」

避けながら、了が言った。今までとは一転、心なしか哀しげに、ユリには聞こえた。

「……ぼくにもわかりません。」

そして、ナイフを繰り出す手は止まらないが、”男爵”の声も、少し弱まった。次の瞬間、了は真正面に突き出された”男爵”の右腕を捉え、自分の左脇腹と腕に挟んだ。

了と”男爵”は、額が触れるほどに顔を近付け、見合う。暗闇の中、白く浮かび上がる仮面を着けた”男爵”の横顔は、仮面に覆われぬ口元が笑っているように見える。汗を滲ませ”男爵”を睨む了とは対照的だ。だが、

「何故、誰にも頼らなかった！ 他にも方法はあっただろう！」

了が言つと、”男爵”の口元から、笑みが消えた。そしてそのまま、沈黙してしまった。

少し離れたところでは、ユリとクレアが言葉の意味も理解出来ず、ただじつと二人を見つめていた。何を背景に語られている言葉なのだろうか。わからなかった。

相変わらず顔を近付け見合う二人は、長い長い沈黙を続けた。了の額に浮かぶ汗が、暗闇でも判るほどに多くなっていく。

そして、やがて”男爵”が静かに言つた。

「…もう、遅いですよ…。」

その言葉に、了の表情が一変した。ユリにはその横顔に見覚えがある。

ユリに声をかけ、次の言葉を言い淀む時のあの表情に似ている。ラウンジで見た、西日に照らされた、あの哀しそうな表情にも似ている。

思い詰め、今にも泣き出しそうな、悲痛な胸の内を秘めたようなその表情で、了が弱弱しく言つた。

「悪かったよ…。気付くのが遅れてさ…。」

…俺がもっと、早く気付ければ…、よかったな…。」

詫びる了の声が、どんどん弱まって行く。そこでユリは初めて気付いた。

了の膝が震え、”男爵”に掴みかかって漸く立っている事に。

「…？」

ユリが了の様子が可笑しい事に気づいたと同時に、”男爵”が優しく笑つた。

「…そうですね…。あなたが、もう少し早く、現れていたら…。」

”男爵”はそう言つて、僅かばかり体を離した。

その隙間から見えたのは…。

黒く染まった、シャツだった。

あの”黒”は、見覚えがある。

間違いない。あの”黒”は。

「とおるう！！！！」

わかつた瞬間、ユリが叫び、了が崩れ落ちた。叫び声に、”男爵”が一瞬、ユリを見やる。その僅かな隙に、クレアが了に駆け寄った。

「か、蕪木さん……」

倒れた了の体に手を添え、クレアが”男爵”を見上げる。

”男爵”は、少し西の空にいる月を背に、クレアを見下ろしていた。

「……美しいお嬢さん。」

「！！」

クレアが怯えた。

弱い月明かりの中で、クレアの真つ白なドレスと、”男爵”の黒い衣装は、一段と際立って対照的だ。

時折風が吹いて、双方が揺れはためくその光景は、お伽噺のワンシーンのように幻想的で、滑稽だ。

「お嬢さんが今、胸につけているその”紅い泪”。お渡し下さいませんか。」

ユリがクレアの胸元に目をやると、握り締め、胸に当てたクレアの指の隙間から、紅い光が漏れた。

”紅い泪”……。何故、クレアが……？

クレアの横で、了が苦悶の表情で必死に起き上がりとしている。クレアはそんな了に添えた手にも力を入れ、”紅い泪”を持つ手を一層ぐつと握り締め、”男爵”を睨み付けた。

「……渡しません。大切なものですから……！」

クレアが言うと、一瞬、ほんの一瞬だけ、”男爵”がたじろいだ。そして暫し黙り込んだ後、”男爵”は、今度は自嘲気味に笑った。

「……そうですか。」

その言葉が聞こえた瞬間、”男爵”の姿が全員の視界から消えた。
「！！？」

消え…。」

見失い、キョロキョロするユリが、館長室のある方角へ屋根上を走り去る”男爵”を見付けた。

「あ！」

ユリが見付けた瞬間、了が叫んだ。

「追え！！」

痛みを堪え、力の入らない腹から搾り出した声で、了が叫んだ。黒く染まる脇腹を、力いっぱい握り締めている。

「でも…っ！」

再び思い出した”黒”に、ユリが恐怖した。嫌だ、ここですから離れたら…。

躊躇するユリに、了がまた叫ぶ。

「いいから追え！！！」

泣くように叫ぶ了の声に、ユリは渋々立ち上がった。

「わ…わかった…！」

ここですから離れたら…。

再度湧き上がった思いを振り払う。

”男爵”が去った方向は、セレモニーホールの反対側、館長室の方だ。

飛び降りる以外に、下に降りる方法はない。

屋根の上を追いかけても駄目だ。

そう思ったユリは、窓の梯子へ駆け出した。

5月3日、と4日 16

先程よりさらに混乱状態にあるセレモニーホールを、ユリは来賓の隙間を縫って走り、脱出した。

ロビーに出、匠を探すか、”男爵”を探しに回っているのか見当たらなかった。

仕方なく、エスカレータを下る。

屋根上を館長室方面へ走り去った”男爵”が、その次に採る行動は如何なるものか。

ヒールでもたつく足でエスカレータを駆け下りながら、思考を廻らす。

屋根から飛び降りたとして、美術館の周りは警官が大勢いる。

どうやっても、堂々と逃げられるような状況ではないような気がする。

ならば、混乱を避け、場が鎮まるまで、どこかに身を隠すか？

考えているうち、エントランスに着いた。

息が切れている。呼吸を整える序でに、足を止め、辺りを見回す。

大勢の警官が、様々なものを手に、探索を行っている。

屋根上の”男爵”は、見失われたようだった。

どこかに隠れたのだろうか。

(どこに隠れるかな…？)

そう思い、職員通路に入る。外とは一転、しんと静まり返り、空気も冷たく重い。

不思議と人の気配が全くなかった。その上、照明は落ちたままで、真っ暗だ。

この状況なら、館内に入っても解らないのではないか…。

それならそれで、どこに隠れる？

昨夜出遭った、館長室か…？

違う気がする。自分が発想するような事なら、誰かが先に回って

いるはずだ。

足取りを追うにはユリには場の知識も”男爵”に関する情報も少ない気がする。

では、今自分に出来る事は何か？

（セキユリティ・ルームのカメラで、”男爵”を追えないかな…？）
カメラは今も細工されているだろうか。

一か八か、ユリは地下への階段を下りた。

地下もまた、暗闇だった。が、ところどころに、小さく灯る明かりがある。どうやら自動充電の照明のようで、館内の照明が落ちる前に、充電された分を発光しているようだ。

だが、その光も心許無く、闇の中で響く足音に、緊張が増す。

呼吸がまだ上がったままだ。じんわりと、汗も掻いて来た。

心臓の音が、足音より大きく聞こえる。

階段を降り切り、廊下を進む。相変わらず、足音はかつんと大きな音で響き渡る。だが、足音を忍ばせようという考えに至らなかった。

（…いる…。）

何故か確信した。

この奥に、”男爵”がいる。そして彼は、自分を待っている、と…。

歩き慣れていると思っていた廊下は、いつもと違い、生暖かく、ぬめつとした風が吹いている様に感じられた。

何の音も聞こえない。ただ自分の足音だけが響く廊下を、歩く。

こんなに長い廊下だっただろうか…。

ユリは妙に落ち着いた気持ちで、廊下を進み、やがて、セキユリティ・ルームの扉が見えた。

扉を見て瞬時に、先程来た時と雰囲気が違う事を察する。

「さつきと様子が違う…？」

近付くにつれ、扉が少し開いているのが見えた。

息を殺して呟き、今度は足音も消して、扉に歩み寄る。

体が硬直しているせいか、前傾姿勢になった。

そして、扉の前に辿り着き、隙間から中を覗いたユリは、思わず絶句する。

「！！！！」

目の前には、扉の隙間から、同じようにユリを覗く、“男爵”の顔があった。

白く浮かび上がる“男爵”の仮面は、ユリを見て小さくにやりと笑った。

その微笑に、ユリは思わず後ずさる。

予期していた事なのに、今、頭の中は真っ白だ。

無意識に後ずさりし続けるユリに、歩調を合わせるように、“男爵”がセキユリティ・ルームから出てくる。

一歩一歩、ゆっくりと歩み寄り、しかし間合いが狭まる事がない目の前の“男爵”は、暗闇の中に空いた穴のように黒い。時折横幅が妙に広くなるのは、マントのせいだろうか…。

（ど、どうしよう…）

武器なんて何もないし…。）

何とか頭を回らせ、対抗手段を探すが、何もない。

了のように拳銃など持っていないければ、元より武術も体術の心得もない。

若干のパニックを起こし、後ずさりし続けるユリの背中に、冷たい壁が当たった。

「…っ。」

ユリの様子に、“男爵”は再度笑い、そして、静かに言った。

「また会いましょう。迷子のお嬢さん。」

「！」

言いながら、“男爵”は物凄い勢いでユリの顔に顔面を近付た。ふわりと何かの香りがした。

そして“男爵”は、不気味ににやりと笑うと、ユリが驚き瞬きをした次の瞬間、消えた。

「…き…消えた…？」

が、微かに左手から音がする。

視線だけをやると、闇の中、小さな足音を立てて遠ざかる、黒い影が見えた。

ユリが追おうと、足を踏ん張ると、扉の奥から呻き声が聞こえた。

「う…。」

「！？ この声は…。」

急いでセキユリティ・ルームの扉を開けると、そこには大きな体の飛澤が倒れていた。

「飛澤さん！」

駆け寄り、飛澤の体を起こすと、腹部に黒い影が見えた。

この”黒”も…。

「飛澤さん、血が…！」

「ユリ…！」

叫ぶユリの後ろで、自分を呼ぶ声が聞こえた。

振り返ると、匠がいた。薄暗闇の中でも解るほど細長い体型は、一発で匠と判別できた。

「叔父さん！」

叔父さん、”男爵”逃げちゃう！

それに、了も飛澤さんも…！

どうしたらいいの！？

どうしたら…っ。」

匠に飛びつき、必死に叫ぶ。

声を出す事しか、出来なかった。

そんなユリの肩を、匠ががしりと掴んだ。

「ユリ、落ち着きなさい！」

救急車は呼んであるから、もうすぐ来るはずだ。

ユリは地上に戻って、ここに怪我人がいる事を警察に伝えなさい。深い傷を負っている事も説明するんだよ、いいね？

場所も必ず伝えるんだよ。

伝えたら、まだ屋根上でクレアさんが蕪木クンを見ててくれるから、ユリはここへ戻って、飛澤さんの傍にいるんだ。」

ああ、了…。

了は無事なのか…。

安堵と落ち着かない心の狭間で、ユリはまだ混乱していた。

匠が、そんなユリの肩を軽く揺さぶる。揺れに併せて、ユリの瞳に光が戻っていく。

今、出来る事は、数少ない。

やがてユリが落ち着いたのを見計らい、匠が言った。

「わかったね？」

”男爵”は僕が追う。」

「…うん！」

ユリが頷くと、匠はにつこりと笑い、あっという間に走り去った。その様子に、ユリは少しだけ驚いた。

運動神経が悪いという印象は、どうやら匠の自演だったようだ。

あるとき、とそれから 1

普段から混み合っている首都高は、やっぱり混んでいて、ゆったりゆったり流れていた。

弾む会話をする相手ではない男を乗せて、一般道並の速度で空港へ向かう。

無言も辛く、一言声をかけてから、ラジオを付けた。

F M ラジオという雰囲気ではなく、国营放送を流す。

正午頃という時間故、流れてきたのはニュースだった。

「日本時間昨日未明、アメリカ・ワシントン州克蘭シー・トイ財団が所有する克蘭シー記念会館に盗賊が押し入り、時価数千億ドルと言われる宝飾品が盗まれました。

克蘭シー・トイ財団広報部によりますと……」

克蘭シー・トイ財団は難民孤児や戦争孤児救済を中心に活動しているボランティア団体で、十年前に亡くなった克蘭シー・トイという一六歳の天才画家の同ボランティア活動を受け継ぐ形で創立した新興財団だ。

規模は大きくないが、WFPやユニセフとも親密な交流を行い、国際的なボランティア活動を積極的に行っている。

だが日本では余り知られておらず、このニュースも、一体何人の日本人が耳を傾けるのかと思ってしまうほどだ。

つまらないニュースだと思い、クラシックチャンネルに切り替えようと手を伸ばした瞬間、後部座席の男が面白くなさそうに笑った。気になってルームミラーで後ろを覗くと、男は運転席の後ろで窓

に寄りかかり、頼杖を突いて流れる風景を見つめ、一言、

「下らない事をする……。」

と呟いた。

東の空が白む頃をあっという間に過ぎ、太陽が真上に昇っても、事態は何も進展しなかった。

少しの光だけでは、暗闇は拭い去れないのを証明するかのように、闇に消えた”男爵”を、誰も捕らえる事が出来なかった。

非常灯だけの搜索は不可能であると立証するように、すぐそこを警官や警察犬がうろついていた美術館裏手にある茂みの中で、菅野が発見された。

菅野は気を失ったまま屋根上から放り棄てられたような体勢で倒れており、発見当初、死亡していると思われるでいた。

が、簡易検査の結果、奇跡的に全身打撲のみで済んだようだった。飛澤は腹部を刺されていたが、刺し傷が浅かった事が幸いして、すぐに退院出来そうだという結果が出た。

了も、傷は深かったものの、命に別状はないようだった。

飛澤を保護していたユリも、了に付き添っていたクレアも、駆けつけた救急隊員に従って病院へ向かい、検査を受けたが、どちらも怪我はなく、無事だった。

クレアが胸に着けていた”紅い泪”は、クレアも気付かないうちになくなっていった。が、午後になって、菅野が発見された場所で、警官によって発見された。

そして、その直後、警視庁による捜査は完全に、暗礁に乗り上げてしまった。

”男爵”が何者だったのか、どこへ逃げたのか、何故クレアが持っていたはずの”紅い泪”が菅野の倒れていた現場で発見されたのか…。

色々な謎を残したまま、そして、事件後に大使館に召喚され、職員に引き取られたクレアを始め、誰とも再会出来ぬまま、ユリが悶々と過ごしていた数日後、クレアの帰国が決まった。

せめて見送りだけでも、と匠には断っておいたのだが、帰国当日の朝、匠がユリの部屋を訪れ、言った。

「ユリ。」

「ん？」

「ちよつと病院へ行くから、支度しなさい。」

「病院？」

「十分後に出発だよ。」

それを聞いて、ユリの声が思わず大きくなった。

「ちよつと…！」

今日、クレアが帰る日だから、空港に行こうって言うてたのに…。

「

抗議をするが、匠は聞こえない振りをして、行ってしまった。

致し方なく、ユリは服を着替え、出かけの準備をする。

持ち物は何もない。

羽織るジャケットのポケットに、携帯電話と財布だけを入れて、

ユリはリビングへ向かった。

匠もユリもいつも通りの格好をしていた。

「行こうか。」

そう言うて立ち上がり、そそくさと行ってしまう匠に、ユリは、本当に病院に行くのか、と再度問いたかったが、やめた。

黙って、匠に続いて玄関を出、病院へ向かう。

その道はあの一週間、あれだけウロウロと歩き回った道だというのに、数日、家に引き籠もっていたためか、全く歩き慣れない道に思えた。

ぼうつと街の雑踏に耳を委ね、匠の背だけを追って歩き、やがて病院に着いた。

エントランスを抜け、四階へ上がる。

入院患者が少ないのか、微かに聞こえる館内アナウンス以外、物音が聞こえなかった。ユリが雰囲気に躊躇していると、匠が、鎮まりかえった廊下に、ぽつんと置かれたベンチ脇の壁に凭れ掛かった座らないのかと思ったが、聞く事もなく、ユリはユリで、ベンチに座る。

消毒液と、洗い立てのシーツの匂いと、黴臭い風が、廊下を渡る。鼻から入る臭いに、一々異世界の空気を感ずる。

廊下には、窓とドアが向かい合って並び、合計七つあるドアは、それぞれ色が異なっていて塗られていた。七つだからか、色合いは虹色だった。

ドアの脇には、プレートが添えつけてあるが、ベンチからでは、何も読めなかった。

北向きなのか、今日は晴れているのに、廊下は暗い。

「時間、早すぎたんじゃないの？」

誰もいないけど……」

座って、黙りこくって、どのくらい経っただろうか。

人が往来する事もなく、相変わらず物音もしないので、ユリが匠に尋ねた。

早く帰ろうよ、そんな気持ちだった。

「ん？」

いいんだよ、この時間で。」

ユリの内心を悟ってか、いつもの口調の中に素っ気無さを滲ませ、匠が答えた。

「今日、クレアの見送りに行かなきゃいけないのに。」

ユリが溜まらず言つと、「ああ、見送りはこのあと、僕が行くから大丈夫」と、匠はまた素っ気無く答えた。

「ユリには、きちんと聞いて来て欲しい話があつてね。」

「？」

匠の言葉に、ユリが首を傾げると、「ユリ」と呼びながら、匠がぐうに握った手をユリに差し出した。そして、指の力をほんの少し抜く。

出来た指の隙間から、ロケットペンダントが零れ落ちた。

ロケットは勢い余って何度か上下に揺れた後、捻れたチェーンのせいでくるくると回った。

「ロケット…？」

「これを、もう少ししたら、蕪木クンの病室に届けに行ってほしい。」

「えっ!？」

ユリが驚く。会えるのか、了に。

だが、それよりも…。

この光景に、見覚えがあった。

「…このロケット…。」

口にした瞬間に、記憶がフラッシュバックした。

心配そうに振り返る、両親の姿。

「この…ロケット…。」

見覚えが…。」

ユリの呟きに、匠は何も答えなかった。

だが、その表情は『当たり前』とでも言いたげに、ユリを優しく見つめている。

「これ…。」

これ……。」

そう、これは…。

心の中で、思い出すことのなかった記憶が、じわじわと蘇る。

「ふふん。」

自慢げに父が鼻で笑った。

あれは、出国前夜の事だったか…。

「なに？」

どうしたの？」

問う愛娘の目の前に、父はぐうに握った手を出し、そして指の力を抜いた。

出来た指の隙間から、ロケットペンダントが零れ落ちた。

ロケットは勢い余って何度か上下に揺れた後、捻れたチェーンのせいでくるくると回った。

つるりとした金属の肌に、リビングの照明がてらてらと反射する。

「いいロケットだろう？」

「いいじゃない、これ。」

どうしたの？」

明らかに作りたて、新品であるロケットを、父は丁寧に持ち直した。

「転勤の間、ユリの代わりに、写真を入れて肌身離さず持ってることにしたんだよ。」

ロケットは特注品だ。

凄いだろっ！」

「なによ、テレビ電話だってあるし、顔なんかいつでも見られるわよ？」

野暮な事を言う娘に、父は苦笑した。

「バカだなあ。」

そっとうのじゃ有り難味が薄れるだろう？」

父の気持ちは、娘にはよく解らなかった。年のせいか、と思ったりもした。その双方の想いが解るのか、父の後ろで、夕飯の片付けをしていた母が、仕方なしと苦笑していた。

「なによそれ…」

で、何の写真入れるの？」

「うん？」

それはね…。」

そう言っつて、もったいぶつて父が開けたロケットの中には…。

「中は…。」

大学の入学式の時に撮った…。」

小さく、そして記憶している形状と大分変わって、ぐにやりと変形したロケットの蓋を、ユリは微かに震える指先で恐る恐る開ける。そこには、記憶と寸分違わない、父と母と娘と、三人で撮った写真が納まっていた。

「写真…。」

思い出のまま歳を取らない両親と、六年という月日を経て、どことなく変わってしまった娘の、幼い時の写真。

畏まったはにかみ笑いが嫌いで、記念写真と言われても、ついになまりと笑ってしまう娘を、仕方なさそうに、しかし、本当に愛らしそうに微笑む両親の姿が、そこにあった。

「蕪木くんが、あの爆発事故のあと、届けてくれたんだよ。」

「了…が…?」

言われて、あの日、ラウンジで見た了の姿を思い出す。

弄る指先で、西日を受けて輝いていた、あのロケット…。

あの時、見覚えがあると思ったあの想いは、間違いではなかったのだ。

「詳しい話は、病室で聞くといい。」

でもとりあえず、まずそれは今、蕪木くんの持ち物だから、還してやってくれ。」

匠は、ユリの気持ちを慮ってか、ゆっくり静かに言った。

そして、ユリの返事を待たず、壁から背を離す。

「さて、ボクはそろそろ空港に行かないと。」

蕪木くんの病室は、水色のドアだからね。」

匠が、未だ放心状態のユリに、屈み込んで言った。

「…うん…。」

クレアによろしく伝えて。

見送り出来なくて、ごめんねって。」

そういうユリは、ロケットから目を離せず、心もどこかに行ったままだ。

「ああ。」

匠は短く答えると、ユリが見ていないのににつこり笑って、行ってしまった。

匠の足音が聞こえなくなつて、漸く、ユリの意識が戻つた。

これを、了に還す。そして、きちんと聞いて来て欲しい話というのを聞く。

目的は解つた。

あとは、話を聞けばすべて解決すると思えた。

そう思つて顔を上げた刹那、遠くの方でドアが開閉する音が聞こえた。

見れば、水色のドアの前に、誰かが俯いて佇んでいる。よく見ると、いくらか中年の男性で、口髭を生やし、ほっそりとして背の高い体型が、匠に似ていた。ただし、匠が滅多に着ないグレーのスリ―ピースを身に付け、ジャケットは脇に抱えていた。

ほのかに薄ピンクのシャツと、コーディネートされた紅色のネクタイが、チャーミングだった。

「誰だろう…？」

了の部屋から出てきた…。」

様子を見ていると、その誰かが不意に目頭を拭つた。

「泣いてる…？」

明らかに泣いている様子の男性は、その後ドアを俯き気味に少し振り返ると、ユリのいる方とは逆にあるエレベータホールへ、肩を落としてゆっくりと去っていった。

病室から、見舞い客が泣いて出てくる。

この光景の異様に、ユリが勢いよく立ち上がった。

「え…まさか…了に何か…。」

まさか…っ。」

了の傷は深いと聞いた。

まさか…。

いても立つてもいられず、ユリは水色のドアへ駆け寄ると、ドアを思いつきり開けた。

「了!!」

あるとき、とそれから 2

「了!!」

ここが病室だという事も忘れたユリによって思いっきり開け放たれたドアは、勢いよく壁に当たって大きな音を立てた。

我を忘れて飛び込んだ病室のベッドの上には、目を見開いて驚き、ユリを見る了がいた。

「!？」

了は膝の上に広げた資料の山が崩れるのにも気を回せないほどに、驚いていた。

そんな了を見て、ユリはふと我に還った。

「アレ……？」

あまりに唐突にころころと変わるユリに、了が不機嫌な顔をした。

「なんだいきなり！」

怒鳴られ、ユリはやっと、自分が起こした事態を理解した。

途端に恥ずかしくなり、申し訳なくなり、後ろ手に静かにドアを閉めながら、肩を竦めた。

「え……、だつてさっき……、病室から出てきた人が、泣いてたから……。もしかして、了に何かあったんじゃないかと思って……。」

「は……？」

ユリの言い訳に、了が顎に手を当てて考え込み、やがて噴出した。

「ぶ……、ははははははは！」

腹に怪我をしている患者とは思えぬほどに、了が大笑いをした。

余程可笑しかったらしい。

「ちよつと！」

なにがおかしいのよ!」

思わずユリが反論すると、了が必死に笑いを抑えながら、苦笑した。

「スマン、スマン。」

お前、からかわれたんだよ、高遠さんに。」

言われて、ユリがきよんとする。

「え？」

「高遠さん……？」

「そ、さつき出てったヒゲのおじさん。」

ユリが来ているのを見て、ちよつと思いついちゃったんだろう。」
そう言つて、了が口に手を当ててくすくすと笑った。

「……な……っ。……もう……。」

あれが噂の高遠か。

しかし、遠目にユリを認め、芝居をしてまでからかうとは、何と
いう大人だ。

口々に噂が立つのも理解出来た。

まんまと騙され、恥ずかしさで怒りも鎮まる。

気が落ち着いたところで病室を見回すと、ユリの個室の倍はある
広さの部屋だった。南向きの大きな窓があり、ベッドは頭を壁に向
けて付けられ、部屋の中央に置かれていた。

脇には小さなキャビネットがあり、見舞い客用のテーブルと椅子
が二脚置かれている。

テーブルの上には、既に何人か見舞いに來たのであろう、プリザ
ーブドフラワーの大きな花束や、雑誌の山が出来上がっていた。

「そんな事より、大丈夫なの？」

ユリが問うと、漸く了も笑いを止めた。

「ん？」

ああ、大した事ない。

明日から、リハビリ出来るらしい。」

「そう、よかった。」

ユリがほつとすると、「心配したろ」と了がにやりと笑った。

「当たり前でしょ！」

否定もせず、ムキになって起こると、了が素直に笑った。

「すまんな。」

「……いいわよ。」

ユリが溜め息を吐くと、了の膝の上で散らばっていた紙が、ベッドから滑り落ちた。

「あ。」

ユリが歩み寄り、拾い上げる。

「すまん。」

そう言つて差し出された了の手に紙を渡すとき、ユリがちらりと紙の内容を見る。

”男爵”の予告状がプリントされ、外国語によって何かが記述されている、レポートのようなものだった。

「捜査はまだ続くのね。」

ユリが言つと、了が真剣な顔をした。

「……ああ。」

「あれから、それなりに経つたけど、何かわかった？」

改めて数えてみると、そろそろ一週間が経とうとしていた。進展があつたかなど含め、匠からも何も聞けていなかった。

ユリが訊ねると、何やら考え込むように、了が俯いた。

「もう、関係者じゃない私には言えない？」

ユリが静かに言つと、了が苦笑した。

「……いや、すまん。」

どこから、話そうか。」

そう言いながら、ほんの少し黙つた後、了は右手に広がる病室の大きな窓を見た。

「きっとキミには、最初から話した方がいいんだろうな。」

あ の とき、 と それ から 3

あれは、六年前の、二月を少し過ぎた頃だったと記憶している…。

当時、警視庁の国際課に配属したばかりの了は、ある日、シリング大使館のバークレイ大使を空港へ送るよう、指示を受けた。

何故警備部ではなく国際課に依頼が来たのかは、今考えてもよく解らないが、了は朝八時半にシリング大使館へ行き、車でバークレイを空港まで送った。

「国際課の蕪木です。」

本日、空港までお送りするよう、任を受けて参りました。」

「ご苦労。よろしく頼む。」

社交辞令か手を出され、軽く握手をすると、ふわりと甘い匂いがした。

蜂蜜のような、柑橘系のような、甘い、甘い匂いは、感じたと同じ時に消えてしまった。

空港までの道すがら、ラジオでは”男爵”のニュースが流れていた。

尤も、当時はまだ”男爵”などという存在は影も形もない頃で、ただの窃盗事件みたいに報道されていたが。

それを聞いたバークレイは、不機嫌そうに「下らない」と吐き捨てた。

平日だというのに首都高は混んでいて、空港に着いたのは、搭乗予定の飛行機の離陸時間直前だった。

しかし出国カウンター手前まで来たとき、バークレイが足を止めた。

「ちょっと、ここで待ちたまえ。」

「…は？ あ、でも時間が…」

引き止める了に振り向きもせず、バークレイは手洗いに行くとい

って、行ってしまった。

仕方なく、了は荷物番をしながら待った。

空港は珍しい訳ではないが、頻繁に来る場所でもない。何となしにキヨロキヨロと辺りを見物していると、ある三人の親子を見付けた。

「大丈夫？

困った事があつたら、叔父さんと叔母さんに言つてよ。」

「大丈夫よ！

ちゃんとご飯も作れるから！」

「お腹でも壊したら大変だから、カナエさんに作ってもらいなさい！」

「ちよつと！ ヒドイ！

たった一年じゃない！ 大丈夫だよ」

「落ち着いたら、帰るから。」

「電話もするからね。」

「うん！ いってらっしゃい！」

何気ないやり取りだったのに、何故か気になった。

物心ついた頃から既に母親の記憶がない了には、そのやり取りが羨ましかったのかもしれない。

にこにこと笑うその子が、とても健気に見えた。

その親子は名残惜しそうにいつまでも手を振って、両親が搭乗したあとは、その子は窓辺で飛行機をじっと見つめていた。

気付くと離陸時間が過ぎていた。なのに、一向に飛行機は飛び立たない。

不信に思つてカウンターへ向うと、バークレイがゆっくり手を拭きながら戻ってきた。

あまりにゆっくりと歩くので、了は、バークレイを急かそうと、彼に向かって一歩踏み出した。

その時の事は、今でもスローモーションでしか思い出す事が出来ない。否、その時が既に、あらゆるものがスローモーションで動い

ていた気がする。

了が一步踏み出したとき、バークレイは横目でちらりと飛行機を見、そして、微かに口の端を上げて、笑った。

次の瞬間、すさまじい音が響いた。

振り向くと、飛行機が燃えていた。それはバークレイが乗る筈だったジャンボジェット機だった。

燃料を満載した機体は、空気を飲み込んで大きな炎を灯し、真っ青な空に向かって、真っ黒な煙を吐き出していた。

一瞬、空港にいる誰もが状況を飲み込めず、啞然とその光景を眺めていたが、やがて誰かが息を飲んだのを期に、場はパニックと化した。

泣き叫び、職員に怒号を浴びせる人々の中で、了は何故か、必死にあの子を探した。あの子は窓の傍で、ただ立ち尽くしていた。

そんな中、バークレイは一人、冷静だった。

「そのとき、俺は確信した。

こいつが犯人だ、と……」

バークレイの様子も気になったが、それよりずっと、あの子が心配だった。

混乱する客の中、あの子は呆然と、飛行機を見つめていた……。

「キミ！

しっかりするんだ！

キミ……っ。」

駆け寄り、肩を揺さぶっても、その子の瞳は炎に釘付けで、動かなかった。

了の中で、今まで感じた事のない感情が、沸々と沸きあがった。説明は出来なかった。

ただ、この事態の真実を、自分が見付けなければならぬと思った。

だが、空港は了の所属する警視庁ではなく、隣県の県警の管轄にあり、了がその場で捜査に加わる事は許されなかった。

仕方なく、了はその子の保護を警官に頼み、バークレイを大使館に送り戻し、職場で上司に申し出た。

捜査に加えて欲しい、と。

あらゆるこじ付けをし、なんとか隣県の県警の捜査に加えてもらう事が出来た。

捜査は空港に駐車していた車のナンバーを元にした所有者を始め、空港で使用されたクレジットカード情報から辿ったカード所有者のアリバイ確認、可能な限りの、防犯カメラから採取された映像に映り込んだ来場者の特定と、そのアリバイ確認と続き、さらにアリバイについては、当日だけでなく、爆破当日前後一週間に遡って行われた。

だが結局、空港内に不審者はいないとなった。

そしてその捜査と並行して行われていた犠牲者の遺体搜索と、身元確認も終わった。

了は、遺品の仕分けに携わった。

大体が炎に包まれ、焼け崩れてしまいか、原型を留めていなかった。

中には、遺体がぎゅっと握り締めていた故に、皮膚が付着してしまっているものすらあった。

それらを丁寧にクリーニングしながらの作業。

一つ一つ、誰のものと特定して行く作業は、自分が死神になったような気分だった。

そして、作業をする中、一つ、ペンダントのロケットを見付けた。

「中を見たら、キミがいた。」

遺品返却が可能になった頃に、唯一の遺品だったロケットを持って少女の家を訪れた。

そこで、少女の叔父に出会った。

先日、やっと県警から遺骨が届き、葬儀を済ませたばかりだという話をされながら、遺骨を置く和室へ通された了は、そこで少女と再会し、生まれて初めて絶望感を味わった。

少女は両親の骨壺を前に、あの時のまま、呆然と空を見つめていた。目は虚ろで、瞳からは光が消えて、体が倒れないのが不思議な程に弛緩していた。

あの笑顔がなくなった。

その絶望感と喪失感は、耐えられないくらいのものだった。
何故か解らない。

「でもそのとき、俺はこの子のために生きようと思った…。」

了は少女に歩み寄り、土下座をするように崩れ落ちた。その時舞った風に、ふわりと甘い匂いが紛れていたのを、少女は無意識ながらも感じた。

「…ごめんな…。」

俺がもつと早く気付いていたら…。

何も失わなかったかも知れないのに…。」

これが、偽善とか、自惚れとか、そんな風に批難されても、どうとも思わなかった。

あの日、犯人と確信したバークレイをあの場に連れて行かなかったら、飛行機は爆破されなかったかも知れない。

可能性など、在って無いに等しかった。だが、そんな事すら、どうでもよかった。

ただ自己嫌悪に陥った。自分が、あの爆破に加担してしまったのではないかという思いで、全身がいつぱいになった。

「すまなかった…。」

笑ってくれ…あの日みたいに…。

生きる事をやめないでくれ…。

キミが望むなら、俺がキミの手になるから…。

キミが望むなら、キミの何にでもなるから…。」

姪である少女の傍らで、不思議にひたすら詫びる青年の背中を、叔父はじつと見つめていた。

その視線に絡ませる感情など持ち合わせておらず、しかし、その姿から目を逸らせる理由もなく、ただじつと、彼を見つめた。

何と名乗ったかな…。

カブラギ トオルだったかな…。

カブラギ。どこかで聞いたな…。

ぼんやりと思いながら、叔父はいつまでも詫びる青年の背中を見つめた。

あ の とき、 と それ から 4

どのくらい詫び続けただろう。

不意に肩を叩かれて、振り返ると、少し小太りの女性が、了の肩に手を添えて心配そうに覗き込んでいた。

女性は了の顔を見るなり苦笑して、小さく一つ頷いた。

了にはそれが合図に思え、のそのそと立ち上がり、少女をちらりと見、和室を出た。

廊下では、少女の叔父が了を迎え、女性と同じように小さく頷いた。

夫婦だろうか、細身で長身の叔父と、小太りで背の低い女性は、あまりにアンバランスに見えた。

叔父に促され、玄関を出ると、了は叔父を振り返り、頭を下げた。

「このロケット、暫く預からせていただだけませんか…。」

事件が、解決するまで…。」

了が事件と言った事で、すべてを理解した叔父は、少し困惑した後、微笑んだ。

「…わかった。

預けよう。

でもそれは僕のものではないから、全て終わったら、あの子に返してやってくれないか。」

閉めた玄関の扉の向こうを見るように、叔父は微笑んだまま扉を見つめた。

「又璃^{ユリ}」だよ。何度でも輝く宝玉。その名前の通り、明るさだけが取り得というくらいの子だったんだ…。」

キミが、「戻して」やってくれ。」

このロケットを返す時。

少女に笑顔も還す。

この日から、それが了の生きる使命となった。

了は爆破事故に絡めたバークレイの単独捜査を始めた。

あの日の記憶を頼りに、バークレイの手から香ったフレグランスまで、職人に発注し作ったりもした。

なにが何でも、どんな情報でも、欲しかった。

だが、当たり前な話、バークレイに関する情報に限らず、どうやっても県警の捜査結果以上の情報も証拠も見付からなかった。

調べるにも、了の立場では限界があった。

それでも可能な限りの情報を集めた。

単独行動だったし、一歩間違えば国際問題になり兼ねない。

周囲には何度も止められたが、確信した事を棄てる訳に行かなかった…。

並行して、了のいた部署で、既にフランス警察によって”四二二号”と命名された、後の”男爵”の捜査を行う事になった。爆破事故から、一年が経過していた。

爆破事故の単独捜査と、”四二二号”の公式捜査。

権限の行使の力加減に戸惑いながらも、捜査を続けていたある時、不意に、あの日のラジオのニュースを思い出した。

正確には、そのときのバークレイの態度だ。

妙に気になった…。

もしかしたら、何か知っているのかも知れない。

日付も、ニュースの流れた時間帯も、チャンネルもはっきり記憶している。その記憶を頼りに、ラジオ局へ問い合わせ、当時の情報を入手した。バークレイに繋がるなら、どんな情報でも良かった。

調べてみて初めて、あのニュースが”四二二号”による犯行だと知った。

改めて、手元にある”四二二号”の資料とニュース内容を見比べ、そして当時のバークレイの態度を思い出す。

そんな事を繰り返し、さらに二年。徹底的に調べた。

”四二二号”、あのニュースの被害者、バークレイとの接点の有無…。

だが、いくら調べてもバークレイと被害者の接点はなく、”四二二号”については山程の容疑者が浮かんでは消えて行き、何の進展もなく時間だけが過ぎて行った。

そして、限界が来た。

単独捜査の事実を知った大使館から、これ以上の、バークレイの捜査を禁止する通告があった。

情報は規制され、新しい情報を手に入れることが出来なくなった。それでも、古い情報を洗い直した。

そして、道しるべは偶然に、突如として現れた。

何度も読み返した資料の中に、”四二二号”が一番最初に盗んだとされる”黒い薔薇”の製造経路が書かれていた。

そこに、”バークレイ”の名前を見付けた。

「シリシ・バークレイ。

バークレイの妻、クレア・バークレイの母親の名前だ。」

”黒い薔薇”の元々の所有者は、シリシ・バークレイだった。

シリシの死後、バークレイは”黒い薔薇”を何故か手放した。

実際には、手放されたシリシの遺品はこれだけではなく、宝飾品の殆どが一度解体されただの宝石として売り払われ、そしてどれもこれもが、再加工して別物に姿を変えて、また手放され、贈与されていた。

”四二二号”の捜査では、盗難品についてはその殆どが、加工業者や宝石店、贈与元の特定のみに留まり、宝石の仕入れ元などまでの調査をおこなっていなかったのが、結果として各機関がこの事実にとどり着いていない理由だった。そもそも、それ以前に、現物となる前に宝石をどこで入手したかという証言を取った形跡がなかった。意図的と言うより、捜査側は聞かなかった、捜査対象は言わなかった、という単純な構図の結果だった。後に解った事だが、その裏には、宝飾品に使われた宝石のどれもが、国際法に抵触する寸

前の活動をする宝石商から買い取られたもので、それを転売、加工された姿が、盗難にあった宝飾品だった事実もあった。

シリシの名とて、たまたま加工業者が証言した話の一行だっただけで、資料も他にはなく、然して重要視されていなかった事を物語っていた。

糸口は一つ見付かった。

だが、もう新しい情報は手に入らない…。

悶々としながらも、シリシの名前を見付けた日の深夜、了は、同僚がみな帰り、誰もいない警視庁の自部署で、照明を消し、机上灯だけを灯して資料を読み耽っていた。

この辺りは夜になると車通りは一気に減り静まり返る。官庁の多い周辺の建物には灯りも灯っておらず、都心にしては随分と濃い暗闇に包まれる。

煌々と照明が灯る建物は、了のいる警視庁と、隣の警察庁くらいで、あとは少し離れた場所にある企業ビルくらいだった。

そんな闇の中、独り文字を追う了に、突然誰かが声をかけた。

「カブラギ トオル」ちゃんって、キミ？」

聞き覚えのない、少しおかま染みた口調だった。

声の方を見ると、主は暗闇の中、廊下の切れかけた弱い照明を背負い、了の部署のドアに寄りかかっていた。

逆光だが、その表情がにこにこ楽しそうにしているのは、はっきりと見えた。

「…どちら様？」

突然、面識のない人間に”ちゃん”付けで気安く呼ばれ、連日の徹夜で気が立っていた事もあり、ありったけの不機嫌を声に乗せて問うと、声の主は一層楽しそうににやけた。

「キミが望むなら、キミが手にしたいと願う全ての情報を得られる力をあげるよ。」

その言葉は、まるで悪魔の囁きのようだった。

この一言には、了の存在を掌握し、了の心の底を完全に覗き見、

思考を読了しているという意味合いが籠められていると思った。

了は声の主を闇の中で睨み付けながら、それでも心は、この言葉の甘い香りにぐら付いていた。

三年、猪突猛進してきたが、そろそろ心も軋み始めていたのだった。

「……」

「決意が固まったら、連絡をしなさいな。」

無言の了に声の主はそう言い、ドアの脇にある背の低い書類棚の上に一枚の名刺を乗せると、かつんという高い足音を響かせながら、闇の中に消えた。

足音が聞こえなくなるまで、身じろぎ一つしなかったのだが、やがて足音の余韻までも完全に聞こえなくなると、ゆっくりと棚に近づき、名刺を手にとった。

僅かな照明の中、名刺を読む。

法務省 特別調査室 室長

第一級検事 高遠 春彦

名刺にはそれしか書いておらず、眉を顰めて裏返すと、小奇麗な字で電話番号が書いてあった。

一目見て、この字が名刺の主である”高遠”の文字だと悟る。今からちょうど、三年前の事だった。

「特別調査室。」

法務省下にはあるが、任務においては如何なる組織の制約も受けない、主に国際犯罪に関する捜査に特化した、完全な独立組織。

国内において銃の通常所持が許され、国際捜査組織と連携しての捜査は組織制約を受けない分、他機関よりもやり易い。

一級検事と二級検事で構成され、通常は一般的な検事と変わらないが、一度特命捜査に入れば、その立場や権限は警察組織は元より、

場合によっては内閣総理大臣を上回る。

限界を知った俺には、そこへ行くしか道はなかった。」

了は躊躇わず、高遠を訪ねた。

法科大学での受講実績はあった。警察試験に合格した年、同時に司法試験にも合格していた。

警察機構での実務経験はある。

検事採用はあつという間に決まった。

特別調査室の異種性と、採用までの了の履歴の異例性を鑑み、了には、一級と二級の間の”準一級検事”という、了のためだけに作られた特殊な位の階級が与えられた。

そして、特別調査室へ出向いた初日、既にそれまでの過程で何度か顔を合わせて顔馴染みになっていた高遠は、自分の机に両手で頬杖を突いて、満面の笑みで了を迎えた。鼻の下の髭がダンディさを醸し出している割に、スーツのカラーコーディネートがピンクを基調として、やはりおかまチックだった。

「とーるちゃん、やつぱり見込んだとおり優秀じゃない。」

「その」とーるちゃん”ってやめませんか？」

「なんで？ かわいいじゃない。」

「いいね、」とーるちゃん”。」

「…。」

もう何年も知り合いであるかのように、了と高遠の息は合っていた。

「でね、早速なんだけど、とーるちゃん。」

「…はい…。」

「うち、しばらく”男爵”の捜査をする事になってるの。」

”男爵”については、この頃既に、各国の調査機関内で”男爵”^{バロン}というコードネームが付けられていた。

「もちろん、通常業務はやってもらうよ。」

裁判にも出てもらうし、検事調べも行ってもらうし。

でも、最優先事項は”男爵”の捜査ね。」

そう言って、高遠は了に三名の部下を紹介した。

秘書役の女性、情報収集やデジタル情報解析のスペシャリストである男性、五ヶ国語に精通し海外との情報交換を行う男性。

何れも二級検事だった。

「高遠さんは、”男爵”の事件とあの爆破事故には関連があると、最初から考えていたみたいだった。」

だから、予め爆破事件の調査をしていた了は、都合が良かったのだろうと思われた。

高遠の下で海外の捜査組織との連携をしながら、”男爵”の捜査を進めていくうち、非公式見解ながらもシリリング王国にたどり着いた。

しかし、物事は繋がるのに、何一つ決定的な繋がりを示す証拠は挙がらない。

「相手が巧かったのか、俺たちがへぼだったのかはわからないが、”男爵”とシリリングの蜃気楼を見ながら、結局ここまで捜査が延び切ってしまった。」

”男爵”の事件からシリリングへたどり着き、その後ろに見え隠れする”爆破事故”を追いながら、関係者の一人としてバークレイの情報収集も行ったが、そちらでも決定的な証拠は出てこない。

権力はあれど、所詮は証拠なくして解決は見られないのは変わらなかった。

そんな中で手に入れた情報に、バークレイの友人の一人として、菅野の名前があった。

バークレイと繋がりがある。

その当時はそれだけの情報だったが、詳しく調べてみると、バー

クレイと菅野の間に金の流れがある事が解った。
菅野はバークレイに、約八年強、金を払っていた。
情報を掴んだのは、一昨年の年末の事だった。

あるとき、とそれから 5

「蕪木さん、ちょっと。」

罰が悪そうな、眉に皺を寄せて非常に困惑している様子で、ある日部下が了を呼んだ。

その日は妙に薄い雲が空全体に広がっていて、凍てつくような冷たくて強い風が吹いていた。

その空を眺めるように、背後にある大きな窓に向かって、了は自分のデスクで、その日予定として組まれていた裁判の資料を読んでいた。

特別調査室は検察庁の十三階にあつて、眺めはいいが数字が良くないと他部署がこぞって使用を拒否したため、フロアの半分ほどの面積が特別調査室に宛がわれていた。十四階の構造の関係で一部がロフト状になっており、下には膨大な資料を保管する資料棚が並び、その上を合計四台のパソコンを使用する部下二人が使っていた。

その部下は短髪で少し色の黒い、凡そデジタルには無縁な雰囲気のある若者で、歳は了より五つほど下だった。二十台もそろそろ半ばだと言つのに、字が下手糞だった。

その部下が、了を呼んだ。

「ん？」

「気になる口座情報が手に入っちゃったんですけど……。」

非合法な手段でも使ったか、或いは言葉通り、偶然その情報が手に入ったのか解らなかったが、とにかくこの情報を手にしている事に困惑している様子の部下に、了が真正面で向き合った。

敢えて何も言わず、了が手を差し出すと、部下が資料を乗せた。

そのまま黙って資料に目を通す。

資料はドイツ語で書かれており、資料作成者の癖なのか、所々スィスドイツ語と見られる方言表記が確認出来た。しかし、大元は七桁の数字列で、横に幅広い表に並ぶ数字は、毎行同じものだった。

「スイス銀行の口座だな。」

この間のマネーロンダリングの情報開示対象顧客に、無関係者を混ぜたんだろ？」

資料から目を離さず、了が言うと、部下が肩を竦めた。

「はい。すいません、何かないかと思って…。」

言い回しから、試しに特定の顧客について問い合わせたものらしかった。

「おんなじ額が入ってるな。」

「はい。」

それ、スイス銀行の二つの異なる口座間で流れてる金なんですけど、金を送っている方の名義…。」

後は見れば解ると言いたげに、部下が言葉を切った。

了が二ページ目にある送金者口座の資料を見ると、そこにはローマ字で、”AKIKUNI SUGANO”とあった。受金側は、アレン・バークレイだった。

「スガノ…。」

「バークレイの友人に、日本人がいるって、蕪木さん気になってたじゃないですか？」

そう。確かに、バークレイの交友関係に関する資料に、スガノという名前の日本人がおり、気になって、秘書の女性に友人全員について調査をさせていた。

「蕪木さんのカン、よく当たるんで、スガノについて調べてたんです、俺。」

少しだけ誇らしげに言った後、部下がデスクに両手を突いた。

菅野 すがの あきくに 章匡。五十五歳。

財団法人 大鳥純忠会の役員で、現在”純・美術館”の館長をしている人物です。

元、歴史研究員。主に、中東の小国の歴史について研究をしていたそうです。」

部下が特に『中東の小国』という言葉に力を入れたので、了が不

機嫌に言った。

「ちゃんと言え。」

叱られて、部下が再度肩を竦めた。

「すいません。」

まあ、大まかには本当に中東の小国専門なんですけど、研究員時代後半は”リング王国”専門みたいな感じでやってたそうで……。
了の眉がぴくりと動いた。

「じゃあ、バークレイと友人関係になったのはいつか、と調べてみたら、凡そ八年前。

バークレイ一家が日本へ家族旅行に来た折に、出会ったそうなんですよ。

それまでは、バークレイに日本人の知り合いがいたという証言は、今のところありません。」

自慢げに報告する部下に、了が上目遣いに見上げて言った。

「そこまでか？」

「はい。」

当たり前と頷く部下に、了が資料を裏返して部下に見えるようにし、

「金。

その頃から流れてるんじゃないのか？」

と言った。

部下が「え？」と言いながら資料を見る。

「送金記録は、一部抜粋なのか？」

「違います。全件です。」

「なら一行目が”始め”だよな。」

そう言われて、部下が送金記録の一行目の日付を見る。

「あつ……。」

本当に気付かなかったのか、日付は八年と半年近く前の日付になっていた。

「菅野の刑事記録を調べろ。」

任意聴取から、告訴記録まで、全部だ。

その金の流れは、おかしい。」

そう言つて、了が立ち上がった。

椅子の背に掛けていたスーツのジャケットを羽織る。特別調査室に来てから頻繁に着るようになったスーツには、必ず胸元に検事バツヂが付いている。

「寄付つて事は…?」

「なんの?」

「いや…、寄付つてのはおかしいか。」

美術館へ美術品を優遇提供してもらつたための金とか…。」

「それならそれで、そういう結果が出るだろ。」

いいからやれ。」

了のカンか、一度決めたら、了の決断は揺るがない。

部下は「はい」と言つて、自席に戻つた。

「何か理由があるにせよ、送金されている額は途方もない金額だつた。」

金 flowed 経緯、これが次の情報に繋がるかも知れない。

調べていくうち、菅野に、”児童猥褻罪”に関して取調べを受けた過去がある事がわかつた。

もしかしたらと思つた。」

その情報に並行して、別の部下が発見した情報に、八年前のパークレイ一家の旅行の際、末娘のクレア・パークレイが家族と一時逸れ、菅野が保護したという、何気ないものが含まれていた。

了はそれを見逃さなかつた。

記録こそないが、その情報はすぐに、菅野の猥褻関連の取調べと関連付けられ、程なくして、クレアに対する猥褻行為と、それによる金の流れという仮説が、特別調査室内で立つた。

あ の とき、 と それ から 6

そこまで、大した息継ぎも間もなく話し続けていた了が、話を止めた。

窓にやっていた視線を、ユリに向ける。

ユリは、ベッドの縁に腰を下ろし、じっと了を見つめていた。

だが、その表情は戸惑い、口元をぎゅっと嚙み、緊張している。

「まさか、クレアが思い出せない記憶って……」

ユリの問いに、了は俯きもせず無言のままユリを見つめた。それが返事だと言わんばかりに視線を合わせ、そして、また窓を見る。

「恐らく、あの日、クレアが家族と逸れたその後、何事もなく一家の元へ菅野が連れて行ったのか、と言ったら、疑問の残るところだ。」

了が答えると、ユリは俯いて、小さく溜め息を吐いた。

教えてと懇願した真実がこれなら、聞かなければ良かったと思う。今まで接してきた人々の裏に、こんなに黒いものが蠢いている様など、知りたくない。

これもまた、この稼業の宿命と言えばそうかも知れないが、それでも、こんな事を知りたかった訳ではないというわがままにも似た思いで、ユリの心はいっぱいだった。

そんなユリの内心に恐らく感づいている了は、構わないと言った素振りで窓に目を向けたままだ。

了は了で、あの夜から、既にユリに話す事は覚悟していたのだらうと思う。

「だが……」

暫く無言のままだった空間を、了の声が響いた。

「菅野が金を払い続けるには、余りにも大きな額過ぎる。菅野も当然、一生金を払い続けるつもりなどなかっただろう。」

そこで、菅野はある情報を手する。

それは、シリシ・バークレイの秘密…。」

「クレアのお母さんの、秘密…?」

ユリが顔を上げる。「ここからは、時系列を追って説明する事にする。」と、了が前置きをして、話し始めた。

「遡って九年前、シリシ・バークレイは交通事故で亡くなった。」

クレアから聞いたところによると、遺体の損傷が激しいので、家族もその最後の姿を見てはいない、という話だった。

「だから子供たちは疑わなかった。」

シリシ・バークレイの、本当の死因を。」

ユリが一瞬、目を見開いた。

了は相変わらず窓を見、しかしその表情は話す毎に段々と陰しくなり、眉間の皺も深くなっていた。

声も幾らか低くなり、先程までの淡々とした語り口調から、少しだけ言葉が重々しくなった。

ユリが、了の言葉一つ一つを受け止めるだけの準備をした頃合を見て、了がまたゆっくりと話し始めた。

「シリシ・バークレイは、亡くなったとされた当時、まだ生きていた。」

”双子の姉妹”。

少し調べればわかる事だったのに、誰も調べなかったから、誰も知らなかった…。

双子の姉妹なんて、存在しなかった。」

「じ、じゃあ、クレアのお母さんと、王妃は同一人物って事?」

「ああ。」

親族の全員が知っていた事だ。

知らなかったのは、子供たちだけ…。」

落ち着いて話す了の声を、ユリが遮った。

「そんな…。」

死んだと見せかけて、別の人と結婚したの!?

しかも、国王と…!?!?」

その言葉に、了がユリを見た。

表情は、話の内容にそぐわず穏やかで、優しかった。

「俺らのモラルでは、非常識な事だ。」

だけど、文化がそうである以上、俺たちはそれを責められないよ、

ユリ……」

「でも……」

言われて、そこでユリが言葉を飲んだ。そして、そのまま深く俯いてしまった。

拳は強く握り締められ、膝の上で微かに震えていた。

自宅で、クレアにバークレイが殺された事を話した時もそうだった。

ユリが持ち合わせる言葉の種類では語り尽くし難い感情を、何故
そつも簡単に受け流す事が出来るのか、疑問だった。

「……そんなのないよ……」

そう言うのが精一杯だった。

ユリがぼつりと呟いた一言に、了が俯いた。

「でも、そんな嘘は、当然隠し通せるわけないんだ……」

やがて、子供の一人が真相に気付いた。

「……否、気付いたというより、気付いていた事が確信に変わった、
と言つべきなんだろうな。」

エルシ・バークレイ。

クレアの兄だ。」

「エル……シ……？」

名を聞いて、一瞬思考が止まった。

顔を上げたユリに、了が優しく微笑んだ。

思い描いている記憶は、お互い同じだった。

「おまじないをしてもらつてたな、エル・シの。」

エル・シはシリリングに伝わる天使の名。

シリリングを護り、雨を司る。

伝説によれば、柔らかな金髪の美少年だそうだ。」

何故かふと、ユリの頭の中を、一瞬だけ誰かの顔が過ぎった。

それは何度も会っているのに、誰と認識せずにいた、見覚えのある顔だった。

「その姿と、伝説に基づいて命名された彼は、突然、真実を手に入れた。

七年前の国王と叔母の婚約のとき、王妃を前に、それが母親だと確信したんだ。

でも、恐らくそのときはまだ、彼の中では、何事も隠し通して無言を貫くつもりだったんだろう。

誰にも話さず、彼はずっと隠し続けた。

そして、王妃が死んだ。

婚約から一年に満たなかった。

悲しみから、国王はすべての王妃の遺品を手放した。

それらは解体され、再築され、加工され、方々へ散らばった。

それを見た彼はすぐに行動を起こす。

元々兵役に着く事を望んでいた彼は、華奢な見た目とは正反対の身体能力を持っていた。

そして頭脳明晰。

その賢さが仇になったのかも知れない。

闇ルートと繋がりのある古物商を何十件も経由して偽造パスポートを数十冊入手した彼は、世界を巧みに飛び回り、母親の遺品を集め始めた。

これが…、”男爵”誕生の瞬間だ。」

いつの間にか微笑みの消えた了の表情には、険しさと、鋭さが入り混じっていた。

「…”男爵”は、クレアのお兄さん…。」

「”男爵”の調査を開始した当初は、俺らの中では単なる希少品集めだと思われていた。

だが、どうにも、異様な執念を感じる。

いつかも、ユリが言ってたな。

何かを恨んでいる気がする、って。」

「うん。」

「後に解る事だが、その希少品は、”男爵”にすれば遺品という言葉に置き換えるべきところだ。

王妃としての母親と対面して、真実を知った後も、彼は無言を貫いた。

そんな彼が、わざわざ犯罪を犯して母の遺品を集める理由。ただ手元に置いておきたいだけで、犯罪を犯すだろうか。彼の性格を鑑みるに、それはないんじゃないかと思った。なら理由は何だ？」

「…その遺品の中で、何かを探してた…？」

ユリが言つと、了が真剣な眼差しで頷いた。

「鋭いな。」

そう、恐らく彼は、特定の遺品のみ手に入れたかつたんだ。

だが、彼がそれを手に入れるには、色々な障害がありすぎたんだと思う。

”男爵”になると決めたきっかけは、その遺品を手に入れるためだった。

一刻も早く、確実に、そして何より”自分”が手に入れたとわからない形で手に入れる方法。

彼にとっては、それが”男爵”だったんだろう。」

「…でも、なにを…。」

そう言い掛けて、「あつ！」とユリが小さく叫んだ。

『”紅い泪”、私にいただけませんか。

それはとても大切なものなので…。』

「”紅い泪”。

もつとも、予告状がこの美術館に届くまで、誰も”紅い泪”を注目してもいなかったがな。

だが、何か一つの遺品を目的にしているだろうという仮説を元に
して、”男爵”になったところで、これを真つ先に狙っては身元が
バレてしまいかねない。

何より、これはよりによって、当時まだシリング国内にあった。
そして、幸か不幸か、既に母の他の遺品は別物に姿を変えている。
これらを全て盗んだとしても、一見するとただ”高価なものを盗
んだ”だけで、真意は明るみに出ない。

隠密に入手したかった彼は、これを手に入れるために、数年かけ
て世界中を飛び回った。」

「たった一つの遺品のために……？」

「ああ。」

「しかも予告状まで出したら、自分の身元が解っちゃうんじゃない
の？」

「狙いはそこなんだ。」

予告状を出したところで、盗まれているものの関連性に気付かな
い限り、エルシにはたどり着かない。現に、誰もそれがわからな
かった。

だが、関係者なら解る。それはそのまま、牽制に繋がった筈だ。
真実を追う者がいる。その意思表示が、予告状だったと思う。
話を戻して、特別調査室での捜査でも、”男爵”を調べるに壁が
見えた。まだ、俺たちは”男爵”の正体に気付いていなかったから
な。

捜査も、方向転換を一時余儀なくされた。」

了が、大きく息を吸って、そしてゆっくり吐いた。

次々出て来る記憶を、本来丁寧に紡がれた時間の糸に従って、順
々に言葉にし、整理する作業。

溢れ出る感情を、ぐっと抑えながら語る仕草は、あの一週間でユ
リが見た了と、全く同じだった。

「俺は、あの”爆破事故”が何故起きたのかを考えた。

恐らくは、犯人はアレン・バークレイだろう。」

そのアレン・バークレイについて、もう一度情報整理をする必要があった。

アレン・バークレイと、あの”爆破事故”に、まだ何の接点も浮かばない”男爵”に関するヒントがあるかもしれない。

あのときでは解らなかった事が、”男爵”を絡める事で違う事件になるかもしれない。

乗客名簿、その乗客の身元調査、バークレイの入出国記録、国内外の買い物記録…。

ありとあらゆる情報を洗い直した結果、ある複数の乗客が、あの日シリリングへ向かうために、あの飛行機に搭乗していた事がわかった。

あの日、シリリングへ向かう乗客は三人いた。

ひとりとは著名な遺伝子工学の研究者。もうひとは毒物研究で、特に毒物死については海外で、当時も今ですらも高い評価を得ている研究者だった。

そしてもうひとり…。

菅野だった。」

あるとき、とそれから 7

何度も何度も読み返せば、またシリシ・バークレイの名を見つけた時の様に、何か、何か見つけられるかも知れない。そんな思いから、了は何度も資料を読み返した。

そして、搭乗者名簿の中で菅野を見付けた。何故見落としたか、というより、当時この資料を入手した頃は、菅野の存在など知らなかったから、気にしなかっただけだった。

菅野はあの飛行機の搭乗者名簿に名前があつた。それだけでなく、あの日、三枚のチケットを予約したのは、菅野だった。だが、あの日、菅野は乗っていなかった。

だから、事故を免れた。

だが、その事實は、爆破後、早いタイミングでバークレイの耳にも入った筈だ。しかし、バークレイがその後、菅野に対し何がしかの行動を起こした気配はない。

そして同時期に、シリシ・バークレイの調査を終えた部下の情報に基いて、王妃とシリシ・バークレイは同一人物だという結論を導き出していた了は、即座に仮説を立て直した。

「あの爆破で殺したかったのは、菅野ではなかった。」

標的の一人として菅野は拳がっていただろう。もしかすると、当初の目的は菅野ただ一人だったかもしれない。

バークレイの目論見は外れたのか、菅野は乗っていなかった。

しかし、菅野よりもっと優先順位の高い標的が現れた事で、そのどちらかが消えれば、取り急ぎ目標は達成出来たのではないだろうか。

ならば、その対象は誰だ。

当然考え得る人物は、菅野がチケットを取った研究者二人だった。

研究者が消えれば、パークレイの目的の多くは達成されたのだらう。

管野の搭乗は、重要度としては高くなかった。

「遺伝子工学研究者に、毒物死に詳しい毒物研究者。遺伝子工学研究者は…、名を”芳生 貢”と言う。」

了の言葉に、ユリが息を飲んだ。

「お…お父さん…!？」

じ、じゃあ…もう一人の研究者って、まさか…。」

ユリを直視出来ないのか、了は俯いたまま、続けた。

「毒物研究者。」

名は”芳生 奈津子”と言う。」

「…そんな…。」

父と母。

ユリは、両親の職業を聞かされていなかった。

何かの研究をしているとは聞いていたが、何かまでは、両親は頑なにそれを語る事を拒んでいた。

ユリにすれば、両親の職業がなんであれ、彼らは両親以外の何者でもなかったから、知らないままでもよかった。

「匠さんから、キミは両親の職業を知らないと聞いていた。

だから、ずっと匠さんと、この事について告げるかで揉めていた。あのクレアが取り乱した夜も…。」

言われて、思い出す。

”親殺しの犯人”。今わかった。

あれは、自分の事だったのだ…。

「匠さんは告げるべきだと言ったが、俺は告げたくなかった。

これ以上、キミを傷付けたくなかった…。」

その言葉に、ユリははっとした。今なら、あの一週間の、匠の色々な言動が理解出来た。

「…ごめん…ね…。」

気を遣ってくれてたのね、ずっと…。」

「いや、謝るのは俺の方だと思う。」

こんな事になるなら、始めから…、キミが美術館に来たあのときに、全てを話して、キミが拘るのを阻止した方がよかったんじゃないかと、ずっと思っていた。

匠さんには、この捜査経過を伝えていたから。”男爵”の予告が来た段階で、匠さんも事の裏事情は知っていたんだ。

知らなかったのは、キミとクレアくらいだ。」

どんどん、疑問に思っていた事が繋がって行った。

「だから、妙なところで話を通じてたりしたのね…。」

「すまなかった。」

了が謝ると、「ううん」とユリが首を小さく振った。了がやっとユリを見ると、表情には仄かに微笑が浮かんでいた。

「…謝ることじゃないわ、きつと。」

なぜか解らないけど、全然堪えないの。

まだ実感がないからかもしれないけど、でも、お母さんとお父さんが死んだ事の真実が、少しでも解るのは、有り難い事なのよ。

本当よ。

どんどん、現実になって、改めて哀しみになってくれれば、そのあときつと、本当に立ち直れるわ。」

ユリが了を見た。直視されると、怖い。

何度も思った視線。射抜かれ、心を見透かされている感覚を覚える、真っ直ぐな瞳。

困惑した表情でユリを見る了に、ユリはもう一度笑った。

「ね。」

そう、そして？

続きを聞かなきゃ。」

ユリが強く言つと、了が額に手を当てた。

「…ああ…。」

俺の調子が狂うな、お前のペースは。」

そういつて、苦笑すると、ユリが頬を膨らませた。

「……なによ。」

毒物研究者と遺伝子研究者。

この二人がシリリングに呼ばれた理由を考えればいいのね。」

早々に思考を切り替える。

遺伝子工学研究者と、毒物研究者。

不思議な組み合わせだ。

菅野は、一体なにを調べさせるつもりだったのか。

「あ……。もしかして……」

ひらめいたユリに、こちらも早々に気持ちを切り替えた了が頷いた。

「多分、アタリだ。」

彼らは、「誰か」の死因を調べるために、シリリングへ向かっていった。

「……王妃……」

「もしくは、シリシだが。」

遺伝子研究員がいる事から、恐らく王妃とシリシが同一人物か調べる事も、その一環としてあっただろう。

「爆破事故」当時、既にその情報入手していた菅野は、それを証明する事で、金の支払いを終わりにしたかったのかもしれないと思った。

一方で、バークレイは菅野の計画を阻止したかった。

何故だ？」

不思議な事に、バークレイが、菅野から送金された金を引き出した形跡はなく、もちろん、それ以外で入金も見当たらず、金はただ、放置された口座に、定期的に送金され、放置されている状態だった。バークレイの口座については、各国の金融機関の協力を仰ぎ、情報収集をしたが、別の口座でも、不審と思われる金の動きはなかった。

この事から、バークレイが金を要求したのではなく、菅野自らが金を支払っていたのではないかと推測を変えた。

考え難い事はあるが、バークレイの立場上、要求した覚えはないと言いう言い訳は通用しないと思われる事から、この推測の方が、より現実に近いと考えられた。

「王妃とシリシが同一人物だと、バレてはいけなかったのね。」
「そう。」

だが、それだけのために人まで殺すだろうか。

何の関係もない人間を大勢巻き込んで、あんな大事にまでして、爆破してでも、阻止したい事。

恐らく、ほかにあつたはずだ。」

どうしても、何かピースが足りない。

そう思えてならなかったのは、シリングに向かった。

向かう先は、王妃の死亡時、彼女の死亡確認をした医師の自宅だった。

彼はバークレイ一家とも交流の深い医師で、シリングの首都郊外に、小さな診療所を設けていた。

最初、医師は頑なに口を閉ざしていたが、バークレイが日本で起きた”飛行機爆破事件”の容疑者である事、その飛行機に、ある日本人と二人の研究員が乗っており、犠牲になったと告げると、案外とすんなり話してくれた。

「アレンは脅されていたんだよ、スガノにね……。」

訪れた夕方という時間帯では、もう診療所を訪れる患者もいないようで、ひっそりと鎮まりかえった診療室の席に座って、医師は溜め息混じりに言った。

「この辺りの国には、昔から、女が男からの婚姻や交際の申し出を断ると、親族や本人によって、恥をかかされた仕返しと称して酸を浴びせる者がいる。」

男の権利の方が、まだ強いんだな…。

シリシもそうだった。

美しい女性だったが故、国王がその権力と脅しを振り翳して、シリシを奪ってしまったんだ。

シリシもアレンも、国を出る自由はなかった。

だから、従わざるを得なかったんだよ…。

一方では、国も大事だが、家族の方が大事だ。

だから何もかもを隠し通したかったんだよ。

誰にも、家族を傷付けられなくなかったんだ…。」

菅野は何をきっかけにしてか、シリシと王妃が同一人物だと知っていた。

それをネタに、バークレイを脅迫していた。

だが、菅野がネタにしていたのは、シリシの事だけではなかった。保険として、金を払いながらも、バークレイにはクレアに対する

猥褻行為自体を堂々と告げていた。

「猥褻の事実、バークレイだけが気づいた事だったが、クレアに知られるのが嫌で、シリシの事とともにずっと黙っていた。

金銭の要求もなかったが、ただ自分以外には、この事を隠し通して欲しいと要望したらしい。」

だが、菅野は菅野で、企みがあった。

医師の話では、菅野は、自身が勝手に行っていた送金をバークレイに要求されて支払った金と誤った公表しない事と、シリシの正体を公表しない代わりに、シリングの美術品や宝飾品類の貸し出し優遇の条件を出したり、時には金銭要求を行った。

「そして、要求はついに、クレア自身に及んだんだ…。

スガノはクレアを養女にしたいと言った。

目的は、言わずもがなだ。アレンは断っていたが、状況的に限界があった。

それがある日、エルシが知ったんだよ。」

さらにエルシの口から出たのは、知っているとは思ってもよらぬ、母に関する真実だった。

「死亡確認を行った私に、エルシはある日言っただよ。

『母さんは、毒を飲んで死んだんだね?』とね。

王妃の死が服毒死である事は、その時アレンとエルシを呼んで話したんだよ。

エルシは取り乱しもせずに、クレアには言わないとアレンに言っただそう。

そして後日、エルシはある侍女の証言で、宝飾品の中に赤いボトル状のものがあり、シリシがその中に毒を入れて持ち歩いていた事を知ったんだ。心配した侍女がアレンと私に教えてくれてね。彼はそのボトルにとても強く興味を示したと言っていたよ。

アレンは酷く悩んでいた。段々と、内に籠るようになり、他人にも家族にも心を開かなくなった。

そして、エルシがいなくなった。

きっと、アレンの状況を見兼ねての事だったんだと思うよ…。

エルシは、アレンを酷く恨んでいたからね…。国に居られなくなるが、母を売った父という認識しか、あの子にはなかったんだろう…。

あの子をあんなにしてしまったのは、この国の大人たちなんだよ…。」

家族は父が望まない方向へ、駆け出してしまった。

あ の とき、 と それ から 8

「エルシは、この状況は、真実を手に入れる事でしか解決出来ない
と思っただろう。」

母の死因である遺品を手に入れ、母と王妃が同一人物である事を
公にしてしまえば、菅野から逃れられると思っただ。

菅野を殺す事を先に決意しなかったのは、きっとアイツの良心だ
っただと思っただ。

「だけど、一つ誤算があつた事に気付いた…。」

了の言葉が終わつた直後、ドアの外をパタパタと小刻みな足音が
した。

「やっと、人が動き出したようだった。」

「誤算？」

「ああ。」

了が頷いた。

「菅野はどこからか、シリシの血液が付着したスカーフを手に入れ
ていた。」

それと王妃の持ち物の何かから採取した遺伝子情報を元に、同一
人物の特定が出来ると、さらに脅しにかかった。

これでは、遺品を回収する前に菅野によって先を越されてしまう。
シリシを出たエルシは名を変え、普段は髪の色を変える事でエ
ルシではない外国人労働者を装って数年に渡り各国を回り、遺品を
集め続け、ついに日本へ入国した。

「目的は、スカーフの入手、ただそれだけだった。」

三年前の事だった。

エルシは日本を拠点にし、活動を再開した。

ただし、活動には資金がいるし、滞在するための工作もある。そ
のために身を潜めた企業に、たまたまシリシグ大使館勤務経験のあ
る人物がいた。

飛澤 康平だ。

「そして、気付かれてしまった。

エルシだ、と。

飛澤はシリング大使館勤務当時、エルシの顔を見た事があったそう
うだ。

だが、すぐにエルシと判ったが、暫くそれを伏せていた。それにより飛澤は信頼出来ると思ったエルシは、飛澤に自分の正体と目的を告げた。

その後すぐに美術館出向が決まった飛澤は、部下の一人としてエルシを指定し、美術館への立ち入りが出来よう手配した。

この出向自体は、偶然だった事がわかった。」

「じゃあ、飛澤さんは知ってたのね…。」

「ああ。」

予告の事もな。

ただ、隠していたと言っても、あくまでも、エルシである事やエルシが”男爵”だと公にしないという約束をしたただだったがな…。

「

だが、菅野はエルシが日本に入国している事に、早い段階で気付いていた。

自分に接近してきた理由も理解していた。

「そして、その頃既にシリング展は立案され、”紅い泪”を展示する事も決まっていた。」

エルシは日本にいる。その上”紅い泪”が手元になれば、確実に自分の目の前に現れるだろう。

恐怖した菅野はまず、企画の存在を隠したまま、以前から営業のあった警備会社の”小部屋”の導入を決定した。当時はセレモニの予定もなく、開催までは”紅い泪”はこの”小部屋”の中で保管し、”小部屋”から出すのは、一日のうちの限られた時間だけだった。

その間だけでも襲撃を免れ、且つ自分の身の安全が保てれば。菅

野はそれだけを考えていた。エルシが日本のどこに潜伏し、どう生きているのかまでは、知らなかった。

だから、”小部屋”の導入が決まったのも、警備会社が変更になったのも、すべて偶然だったという。

その直後、展示会が決まった。エルシは飛澤に協力を仰ぎ、カメラに小型機械を設置させ、次に記録システムを改竄させ、展示会が開催されるのを待った。エルシにとっては幸いな事に、記録システムの改竄はエルシの知識内で行う事が出来、しかも変更自体は本社に通知されない仕様になっていた。

「それと同時に、可能ならスカーフも手に入れたと考えていたんだろうと思う。」

しかし、スカーフを手に入れる機会は、なかなかやって来なかった。

日が経つにつれ、エルシは苛立った。

そして、展示会一週間前、いつも通りだが、しかし最期の予告状を送った。

「その頃のエルシは、とにかく神経質になっていたらしい。

いつそ菅野を殺してしまおうとさえ思っていたんだろうと、飛澤は言っていた。

そして菅野もそんな気配を感じたんだろう。」

菅野はある夜、黒いマントを身に付けて、館内を歩き回ったと言う。

目的は、エルシの牽制の筈だった。

カメラに細工がしてあるだろうという予測をしていたが、菅野はほんの一瞬だけ自分の姿を映す方法を持っていた。

「美術館の来場客向けに提供しているサービスの一つに、無線イヤホンを装着して、場所によってその無線で展示品についてのガイドを流すというものがある。

菅野は、それを干渉電波として、一瞬だけカメラの仕掛けを妨害するという方法を思いついた。」

そしてマントを被り、実行した。

写り込む場所はどこでもいい。”男爵”と思しき人物が館内に侵入したと騒ぎになれば、エルシの足止めになる。

だが、エルシの我慢も限界に近かった。

偶然その日、エルシ自身は菅野を殺そうと決意していた。

「そこで、”偽男爵”を終えた菅野と出くわした。

これは本当に、偶然だったんだと思う。

エルシは一瞬動揺したんだろう、鉢合わせた菅野と争い、そのとき、普段から持ち歩いていたタイピンを落としてしまった。」

これが、菅野襲撃事件だ。

時間は、菅野が証言を覆し、午前〇時と断定された。カメラ映像にピンが移り込んだ、あの時間だった。

菅野を気絶させたエルシは、タイピンを落とした事に気付かないまま、菅野を移動させようとした。だがその直後、様子を見に来た飛澤に、菅野襲撃がばれてしまう。

エルシは、このままエルシが菅野を殺してしまうのではないかと焦る飛澤を宥め、セキュリティ・ルームへ帰らせた後、三階のセレモニーホールから菅野を屋根上に運んだ。この宥める様子もが、偶然カメラ映像に移り込んでいた、という事だった。

「この梯子は関係者でもごく一部しか知らない梯子だったらしい。飛澤すら知らなかったそうだ。

そして、屋根の傾斜によってそのまま菅野が落ちれば、確実に落下死する、死なくとも暫く入院を余儀なくされる。

エルシにとってはどちらにしても、その間にスカーフを探し出せればそれでよかったんだろう。」

しかし、結局菅野は落下せず、エルシはスカーフを探し出せなかった。

そして、菅野が襲われた事で、今度はバークレイがエルシの存在に気付いた。

バークレイはバークレイで、事実が明るみになる事を恐れていた。

「クレアの身も守りたかったが、そのためにはシリシの事も伏せておきたかったんだろう。」

全てはクレアを想つての事。

しかし、クレアは菅野になついてしまっていた。これは大きな誤算だった。自身が友人として菅野と接触している以上、クレアを止める事は出来なかった。

だが、その状況で菅野が殺されでもすれば、クレアに避けていた情報が伝わり兼ねない。

バークレイはエルシを止めようとした。

「まず、スカーフを自分の手中に納めてしまえば、エルシのターゲットは自分に代わると思っただろう。」

あの朝、美術館で何とかスカーフを手に入れたバークレイは、最後の手段として、そのスカーフを手に菅野の下を訪れ、交渉をする。「菅野も脅迫材料がなくなつては、今後自分の立場が危うくなると踏んだんだろう。」

バークレイの要求を受け入れた。

あ の とき、 と それ から 9

了が暫し無言になった。

長い語り故、多少なりとも息が切れていた。

「…あの日、大使が病院に行ったのは、その話をするためだったのね…。」

ユリが言うつと、ゆっくりと深呼吸を一度して、了が頷いた。

「ああ…。」

これは菅野からの調書が取れた。

だが、バークレイとエルシで、目的としているところは同じなのに、エルシはバークレイを誤解していた。

家族を省みない父親としてしか、もう見られなかったのかも知れない。」

一方、バークレイは事の最後の仕上げとして、エルシとの対面を望んだ。

「順を追って話そう。」

ただ、これについては証言者がいないから、推測になるが…。」
そう言つて、了がもう一度深呼吸をした。

エルシがどこにいるのかも知らず、呼び出す方法も持っていないかったバークレイは、あの夜、予め入手していた菅野のセキュリティカードを使って美術館へ入り、館長質へ向かった。

菅野なら、エルシの居場所を知っていると思ったのかも知れない。しかし、館長質で菅野のデスクを漁っていたとき、思いもよらず、エルシが現れた。

「恐らくその場で少しは話し合いが行われたんだろうと思う。」

だが、長い年月を経て、お互いに歩み寄るなんて出来なかったんだろう。」

エルシはバークレイを刺し、そして…。

「たまたま私に見付かって、逃げた…。」

「ああ。

ただ、バークレイの遺体には、抵抗したときに出来る細かな傷が一切なかったそうだ。

凶器は、俺を刺した時に使ったナイフと同じもの。傷口がほぼ一致した。

恐らく、抵抗する気なんてなかったんだろう。

ここまで来たら、最後まで息子の好きにさせようと思ったのかも
しれないな。」

了がそう言うと、ユリがはっと顔を上げ、了に詰め寄った。

「そ、そんな…！」

息子を殺人犯にしたいなんて、考えるの！？

普通じゃないわよ！」

言われた了は困惑し、勝手な推測を告げた事を少しだけ後悔した。

「…どうだろうな…。」

俺には、わからない。

でも、少なくとも、バークレイは抵抗はしなかった。

それは事実のようだ。」

そして、父を手に掛け、探し物も見つからないまま、最終日を迎える事となる。

「飛澤から”紅い泪”の運搬役として指名されたエルシである”男爵”は、セレモニー開始とともにまず菅野を襲い、しかし…。」

了が意味ありげに言葉を切った。

ユリが首を傾げると、了が真っ直ぐにユリを見た。

「…”紅い泪”は奪わなかった。」

「え？」

「正確に言うと、『奪えなかった』、だ。

”男爵”が菅野を襲った瞬間、”紅い泪”は消えた。」

ユリは呆然とした。

”男爵”が狙っていた”紅い泪”が、”男爵”が手にする事なく消えた。

一体なぜ…。

思い耽って、あの夜の事を瞬時に思い出す。
あの闇の中、紅い光を確かに見た。

「…あつ！」

クレア…。」

そうだ。クレアが持っていた。

あの時も、何故と思ったのだった。

了が頷いた。

「そう。」

クレアが持っていた。だから奪えなかった。

一方で屋上まで運んだ菅野は、投げ捨てて死なせるつもりだった
んだろう。」

だが、その最中で、特別展示室のベランダをよじ登って来た了に
焦ったため、中途半端に菅野を投げ出す羽目になった。結果、菅野
は、屋根の出っ張りに服が引っかけ、茂みにも助けられ、打撲
だけで事なきを得た。

「男爵”に至っては結局、目的は果たされなかった。

”男爵”にとって初めての、予告失敗。

”紅い泪”は奪われず、”男爵^{エルシ}”は消えた。」

御伽話の結末を語るように、了が静かに言った。

そのまま、また無言になる。

ユリも、発する言葉が思い浮かばず、黙っていた。

窓から、少し生暖かい風が吹き込んだ。

もう五月も半ばだ。そろそろ夏になる。

つい先日、月夜の晩の冷たい風が、記憶から溢れて背筋をなぞ
った気がした。

「…男爵”…、エルシは、これからどうするのかしら…。」

了が首を横に振った。

「わからん…。」

俺らが手に入れた情報は、まだ各国の情報機関と共有をしていな

い。男爵がエルシであると断定する証拠がないからな。だから、今の時点でも、エルシは手配されないし、容疑者にもならない。

この状況で、もう一度”紅い涙”を盗むか…。

それとも…。」

それとも。

「諦める…か…?」

「ああ。

俺は、諦めないと思ってるけどな…。」

そういう了の表情は、険しいままだった。

ユリは了の視線から目を逸らし、拳を握り直した。

ふと、手の中がざらついた。

匠から預かったロケットだ。持っていた事を忘れていた。

そしてその瞬間、あの夜の事を思い出した。

バークレイの遺体を見付けた、あの日の事だ。

朝、目を醒ました時に見た、あの…。

「了…。」

ユリが徐に、了の名を呼んだ。

「ん?」

険しい表情を宥め、普段の眠そうな顔に戻った了が、短く返事をした。

「私、クレアのお父さんが亡くなったあの日、了の頸に傷を見付けたの。」

その傷の事、聞いてもいい?」

ユリが言い終わると、了が眉間に皺を寄せ、苦悶の表情を見せた。やはりあの一週間の間に見た、何か苦しい記憶に思い耽る時の顔だった。

言い難いのか暫し黙り込んだ後、了は渋々という感じで、話し始めた。

「…シリングで、医者話を聞いて、俺は”男爵”がエルシだと知った。」

まだ確信を得たわけではなかった。

だが、自分の知る誰でないにしても、野放しは出来ない。それがエルシなら、感情は少し、変わった。

「エルシを止めてやりたかった。

エルシを止める事で、”爆破事故”の真相もわかるだろうと、そう思ってた。

ちょうどそこへ、スウェーデンのユングベリ伯爵邸に”男爵”の予告状が届いたと報せがあった。

俺は、その捜査に混ざる事が許された。」

ユングベリ伯爵邸に”男爵”から予告が届いた直後、この邸を保有するユングベリ伯爵の後継者である管理人は、ただちにスウェーデン警察を通してあらゆる捜査機関に捜査と保護を依頼した。

そして施設設備を新調し、セキュリティ面に於いては最新鋭のシステムを導入するなど、金に物を言わせるやり方で当日に備えた。

しかし、元々古い自家発電やオイルランプに頼っていた施設に手を加えた事が逆に仇になり、当日は例の如く照明は全て”男爵”によって落とされ、敷地の広大さによって警備自体に穴が空いた。

不測の事態に対応するには限界のある中、館内を警備していた了は、真つ先に予告された品が保管される部屋に走った。配備されてから数日。目を瞑つても歩けるほどにこの館内くまなく歩き回った事が功を奏し、通常の警備に当たる人間では絶対知らない裏道や、館内を短時間で移動出来る道順を得ていた了が保管部屋のあるフロアまで階段で上がったその時、”男爵”が向かいにある保管部屋から出て来たのだった。

この館は一階が中央付近が吹き抜けになった構造をしており、二階以降はコ型になって、横に長い廊下が並行に二本走って、その先で繋がっている。”男爵”から見て右、了の左側がその方向になる廊下には外側に部屋が並び、途中に階段は一切ない。そして、廊下が繋がる側は崖に面していることもあり、警備は手薄。逃げるには最高だった。

”男爵”は了を見るなり右手へ走り出した。了も即座に追う。

二人は、お互いをじつと睨み付けながら、ほぼ同速で全力疾走で廊下を走り抜けた。

廊下の全長は、二〇〇メートル弱。

月明かりだけが頼りの暗闇の中、不思議と誰一人昇って来ないこのフロアを、”男爵”と了は走った。動きがスムーズである事から、

”男爵”も了と同様にこの館内を熟知していたに違いない。

それが出来るのは、了と同様に警備に当たっていた人間だけだ。つまり、予告状があつて捜査員が召集された時から、”男爵”はその中に紛れ込んでいた事になる。

そんな事を考えながら、目を離せば見失うという恐怖から、了は真つ直ぐに、闇の中に溶けながら走る”男爵”を睨み続けた。

了にとってはこの時、目の前にいるのはただの窃盗犯などではなく、エルシ・バークレイだった。

エルシを止めたかった。

”男爵^{エルシ}”を収める視界の端に、やっと端が見えた。次いで、自身のいる廊下の端に立つ柱も見えた。了は柱に手をかけ、一気に”男爵”の方へ曲がった。”男爵”も同じように了の方へ曲がってきたが、若干”男爵”の方が速かった。

直角に曲がり、体にかかるGを手で支え、それ以外の動作が困難な了に向かつて、”男爵”が飛び掛った。

そのジャンプ力はすさまじく高く、最高点は了の頭上を越えた。

その高さによつて、下に避ける空間を見出した了が、即座に体を仰け反り飛びかかる”男爵”を避けると、そのまま柱を掴む手に力を入れ、一気に体の向きを変えた。しかし、その直前に着地していた”男爵”は、同じように反転し、ナイフを手にしたに襲い掛かった。

了は勢い余つて側面にぶつかった反動を利用し、今度は前方に屈み踏み込んでナイフを避ける。耳元でナイフが風を切った。そこで了が再び反転しようと体を捻ったとき、”男爵”が了を後方へ押し倒した。

了は脚が絡んで倒れ、”男爵”がその上に馬乗りになる。そして左手で了の右腕を押さえると、ナイフを振り上げた。了は唯一自由だった左腕で”男爵”の右手を押さえにかかる。が、上から振り下るされる腕の力に負け、十分な阻止も出来なかった。

ナイフは頸動脈に傷がつくほどの深さで了の首を裂き、柔らかく分厚い絨毯に刺さった。

腕で阻止しなければ、死は免れなかっただろう。そのとき”男爵”の腕に引っかけた左手が、”男爵”の衣装を掠めた。了が”男爵”のタイピンを見たのは、この時だった。

血の噴出す首に手をあて、了はそれでも”男爵”を睨み付けた。ここで死ぬ訳に行かなかった。

エルシを呼ぼうとした。だが、声が出なかった。

”男爵”はそんな了の顔に自分の顔を近付け、ふっと微笑んだ。

その時、きらりと灯りが射した。その灯りはほんの一瞬だがエルシの瞳を照らした。

その瞳は、とても綺麗な緑色で、うつすらと赤茶の濁りがあつた。そして、その瞳の色を見た瞬間、”男爵”が素早く立ち上がり、廊下の端にある大窓から崖へと飛び降りた。崖下は深く緩やかな川になっており、しかしこの暗闇では、搜索は困難な場所だった。

体の自由になった了は、まだ血の溢れる傷口を抑え、首元に違和感を感じた。

鎖がない。

あのロケットの鎖がない。

ナイフによって切れてしまったようだった。

了は朦朧とする意識の中、焦っていた。

あれだけは失う事は出来ない。

何とかうつ伏せになり、顔を上げると、血溜りの中に落ちるロケットを見付けた。

出血しすぎた。腕を動かす事さえ、息をする事さえまならない。了が腕を勢いをつけて動かすと、手は運よくロケットの上へ被さった。

震える手で、ロケットを握り締める。

シャラと小さな切ない音を立てて、ロケットは了の手中へ納まった。

そして、了の記憶は途切れた。

「…あの暗闇の中、あいつも狙いを定められなかったんだろう。急所を僅かにずれて、命だけは助かった。」

その直後駆けつけた、灯りの主である捜査員の手によって救助された了は、ただちに緊急手術を施され、一命を取り留めた。

一時昏睡状態となったが、一週間後、何とか意識を回復し、日本に帰国するや否やリハビリを始めた。

一週間寝て過ごした体は、自分のものではないくらいに自由が利かなかった。

力をどこに入れば歩けるのか、指をどう動かせば物を握る事が出来るのか。

頭では理解してそうと命令しているのに、体が従ってくれなかった。

歩き、簡単な動作以外は、初歩からやり直さなければならない状況の中、了はひたすらリハビリを続けた。

筋力トレーニングから始め、階の上下には階段を使い、箸を持つという動作すら、左右の手に教え込んだ。あらゆる状況に備え、利き手が使えなくなったとき、補完出来る技術が欲しかった。

たった一週間で失ったものを取り返すのに、数週間かった。

だが、約一カ月後、退院した時には、周りが驚くほどに体も鍛えられていた。

「そんな、危ない目に…。」

了の話の区切りを見付けたユリが、呟いた。

この病室に来て、”男爵”の話聞き始めてから、何となく責任を感じていた。

泣きそうな顔をするユリの心中を悟った了が、苦笑した。

「…海外での仕事は、こんなもんだけどな…。」

だが、この言葉は何の慰めにもならなかった。

ユリを巻き込んだと思ってしまったと了は思っているが、ユリに

すれば、了を巻き込んでしまったのは自分や家族だった。そして、巻き込んだばかりか命まで危険に晒してしまった。

それも二度もだ。

例え、大元はユリに全く関係のない事でも、ユリにとって責任重大な事だった。

そして、いつの間にか寄りかかっていた了という存在が、もしかしたら今日、こんな風に笑えなかったかも知れないと思うと、心臓が締め付けられた。

もう二度と、こんな事がないようにという思いは、今はまだ叶わない。

ならば、自分の願いはただ一つだ。

「……ねえ。」

「ん？」

「……まだ、追うでしょ？」

”男爵”の事。」

ユリが問うと、了が笑顔をずっと仕舞った。

「……ああ。」

了が頷くと、ユリは思った通りの答えが返って来た事に満足し、背筋を伸ばして、ロケットを握る手を了に突き出した。

そして匠や父がやったように、指の力を抜いた。指の隙間からは、ロケットが零れ落ちた。

ロケットは何度か跳ねた後、捻れたチェーンに誘われ、くるくると踊った。

「なら、これは了に預けるから。」

ユリが了を見据えた。

確信と、信頼を込めたその表情をするユリは、了が出会ってから一度も見た事のない、凜としたユリだった。

「……。」

「お守りよ。」

こうして、一度は私の手に戻ってきたんだもん。

きつと、お父さんとお母さんが、了を守ってくれるから。持つて行つてあげて欲しい。」

ユリに言われ、まだ微かに揺れるロケットに目をやる。

どんな言葉を発するのが適切か、ユリの思いを受け取り、遂げる力が自分にあるか。今までだつて戸惑いがなかったわけではなかった。だが、今までは自己の思いだけが自分を突き動かしていた。その分、楽と言えば楽だった。

だが、これからはユリの思いも背負う事になる。

覚悟がないとは言わない。が、その力が自分にあるのか。

もう二度と、笑顔を失わずに済むのか。

不安がない訳はない。

どのくらいの時間か、二人で押し黙つた後、ユリが俯いて呟いた。

「…もう…、嫌なの…。」

「？」

「嫌なの。」

私の知らないところで誰かが傷付くの。

ちゃんと歸つて来て欲しいの。」

そう言つて、ユリが顔を上げた。目は、今度は了を睨みつけていた。

だが、憎しみなどというものはなく、あの一週間で見慣れた、いつものユリの怒り顔だった。

「死ぬんだつたら、私の前で死んでよ。」

その言葉に、了が吹っ切れた。

それが望みなら、叶えられるだろう。

了は頷いて、手を伸ばし、ユリの手にぶら下がるロケットを優しく指でつまんだ。

「わかつた。約束する…。」

「絶対よ。」

ロケットを媒介にして、心が通つたかのように、二人は暫し微笑み合つた。

六年前。

カランと軽やかな音の鳴るカウベルがぶら下がるドアを開けると、愛想の余りよくなさそうなウェイトレスが匠を出迎えた。

「お一人様ですか？」

「ううん、連れが来てます。」

片手をひらひらして、店内を素早く見回し、“連れ”を見つけると、匠はそそくさと席へ向かった。

「やあ。」

陽が燦燦と降り注ぐ窓辺の四人席を陣取った高遠に声をかける。

「やあ。」

高遠が同じように返した。

いつも通りに、ピンクを基調としたコーディネートが、乙女チックだ。

「悪いね、呼び出して。」

高遠がそう言いながら、隣の椅子に置いた薄っぺらな革靴に、手にしていた書類の一部を仕舞った。

昔馴染みにも見せられない書類なのだろう。

「いいや。」

暇してるからねえ。」

匠がのんびりと返し、高遠と目を合わせ、二人でにやりと笑う。

「お兄さんの…」

落ち着いたかな？」

「うん。何とかね。」

つい先日、兄の貢とその妻の奈津子の四十九日が終わったばかりだった。

まだまだ航空会社との協議などやる事は残っているが、葬儀を済

ませた事で、心にも一つ区切りがついた気がしていた。

「姪っ子ちゃんは、相変わらず…か。」

「うん。そこはもう、自然治癒力に任せる事にしたから。カナエもいるしね。」

「そうか…。」

声ほど余裕のある状況ではない事は、高遠にも解った。

こんな時ほど、自分の職業の難儀さを感じる時はない。

「それで？」

柄にもなく落ち込む高遠に、匠が切り出した。

「…うん。」

どうにも、状況が動きそうなんですね。報せに来たのよ。」

早々に気分を切り替え、高遠が返した。口調も、いつものオカマ口調に戻る。いつの間にか癖になってしまった口調だった。自身にそういった趣味はない。

「？」

首を傾げる匠に、高遠がにやりと笑って一枚の書類を手渡した。

「今、目をつけてるコ。」

「その口調で言われるとぞっとする」と苦笑して、匠が書類を受け取り眺めた。

明らかに隠し撮り風な斜め角度の顔写真に、氏名、簡単な経歴がまとめられた資料だった。

カブラギ
トオル
蕪木 了

…

国立帝都大学校 国際法科学科 英語圏専攻 次席修了

国立帝都大学院 法科学科 次席修了

新司法試験 次席合格

国家I種試験 次席合格

取得資格

国内総合馬術競技 二位

小笠原流弓馬術礼法 会得

弓道小笠原流 準師範

弓道本多流 準師範級（推定）

茶道裏千家 茶名取得

：

内容に目を通して、「なにこれ？」と匠が笑った。

「次席の君」。

今、法務省をほんの少し賑わせている、現職刑事のオトコノコ。」

「へえ。」

尚もその気を感じる口調に含み笑いをしながら、匠が高遠を見た。

「狙ってるの？」

「うん。」

即答する高遠に、匠がにやりとした。

「この間うちに来たよ。」

「知ってる。あの事故調べてるんでしょ？」

「うん、そう言ってた。」

匠が頷いた。

まさか、同級の口からこの名前を聞くとは。

「話は一旦変わるけど、今、野党議員の一部が法務省と内閣府の一部官僚と談合して、政権与党潰しを企んでるの…。」

「おいおい。」

即座に、高遠の話を、匠がぶつ切りにした。

「そんな話…。」

「まあまあ。」

周りの一般人に躊躇う匠を、お気軽に高遠が制した。

「もちろん内密な情報なのよ。まだマスコミにも漏れてないのコレ。」

んでね、法務省官僚は、次期法務大臣を狙う、大鳥和良とその取り巻き。

内閣府は、誰だか知らないけど。」

「大鳥って、純・フォーラムの？」

「そぞ。アソコの御曹司。」

その大鳥の活動資金、メインの出所が面白いのよ。」

近所のおばちゃんよろしく、高遠は向かいに座る匠にぐいと顔を近づけて、片手を上下にひらつかせた。

「中東の小国」なの。」

「中東？ 外国なの？」

思わず、高遠の口調が伝染った匠も、高遠に顔を近付けた。

「そうなの。」

” シリング王国 ” っていうんだけど。

そこ、王政国家なんだけどさ、面白い国なのよ。

既に亡くなってるんだけど、当主の王妃がバツイチなの。」

「は？」

何が面白いのかと匠が眉を顰めると、それまでニヤニヤと笑っていた高遠が、ふつと真顔になった。

だらりと背中を丸めて頬杖を突いて、窓の外を眺め、くしゅくしゅと口髭を弄る。

「一度死んだ事にして、双子の姉妹として国王に嫁いだの。」

二人子供がいたんだけど、その子供は母親が死んだと思っているらしいよ。

実際その後、服毒自殺して亡くなったんだけど。

その毒を入れた容器は、元夫から貰ったもので、何とか言う宝石を容器と判らないよう加工して作ったらいいんだけどね。元夫と対で作ったとか言ってたな。

その宝飾品は今は国宝になってるとか言ってる…、名前は何だったかなあ…。」双子の泪”とか”紅い泪”とか言ったかなあ…。

まあ、そんなゴシップはいいか。

その国がさ、今海外に向けて観光やら企業やらを誘致してて、便宜を図って貰う理由で大鳥に資金援助をしているらしいのね。

正確に言っと、大鳥本人には金は行つてなくて、法人への金なんだけど。

法人と大鳥間にも金の流れはないんだが、法人の金は大鳥の実家に入るからね。

実質、金が入っていると見ていいでしょう。」

「へえ。まあ、よくある事だね。」

「まあね。」

でも問題はここから。」

姿勢を変えず、斜め上目遣いに匠を見て、高遠が言った。

「与党潰しは基本的にマスコミと世論を使うでしょ？」

一先ず汚い金の流れを全部暴いちゃおうってやってるらしいの。

今あの党も少しぐら付いてるから、ちょっと突つつけば崩れるのは早いと踏んでるんだろうね。

ただ、それで世論が完全に野党側にぐらつくかと言ったら、有り得ない訳。」

言い切るほどに、今の政権を握る党の支持率が高い。

「そこで、メイインターゲットを大殿様ではない、優良武將に絞ったのよ。」

「うん。」

「現、法務大臣。」

”法務大臣”という単語を聞いて、やつと匠の中で突つかかっていた事が流れた。

「あ、”カブラギ”……！ どっかで聞いたと思つたら……。」

「何よ、匠、法務大臣の名前も忘れたの？」

高遠に突つ込まれ、匠が困惑した表情で頭をぼりぼりと掻いた。

「忘れてたよ。ぼろつと……。」

「駄目だなあ。元公安の敏腕捜査官がそんなんじゃ。」

高遠がかつたるそくに笑った。

「ごめんごめん。世間に興味ないのよ。」

匠が肩を竦めて苦笑した。

「でも、蕪木大臣って、金に関してはジャンプさせたって小銭の音すらしないくらい無駄な金は持たない使わないで有名じゃない。

自己資産だけで活動資金は賄えるから、汚い取引には断固応じない、そのクリーンイメージで支持率は国内議員ナンバーワン。

そのお蔭で十年間、法務大臣に着任してるじゃないか。」

「そのとおり。教科書通りだね。

実際、金の動きに疚しいものはないの、あの人。」

「じゃあ、どうやって…。」

「噂立てちゃえばいいの。」

高遠が即答する。

「噂って…。」

「何かつまらない、小さい噂をいっぱい。」

大きな噂では、嘘だと気付かれるのも早い。

しかし、電車の釣り広告を見る程度の大多数の国民へ、確認出来ないくらいの小さな噂を流し続けると、その噂は国民の中で、”真実”になってしまう事は、しばしばある。

「そんな時間かけてやるつもりなの？」

「みたいだよ。」

あの人^{ウチ}が崩れちゃうと、東京地検特捜部は困っちゃうのよね。
ウチ、あの人の派閥だから。

そこでね、このコなの。」

そう言って、高遠が先程の資料を指差した。

「蕪木大臣には五人の息子さんがおられてね。

この息子たちも面白^{おもしろ}いんだけどね。

長男の覚^{おぼ}と次男の駆^かが双子、三男の弥^{わたる}と四男の至^{いたる}も双子。最後の五男も本当は双子だったの。六男は生後すぐに死んじゃったんだだけだ。

さらに、長男、三男は裁判官、次男は弁護士、四男は司法書士。

まあそんな話はいいか。

で、五男の了とあるがこれ。」

「蕪木一族は、現法務大臣の一穂いちほの父親も、その父親も、代々司法関係や法曹界に偉人を輩出してゐる家だぞ。

その息子じゃ、サラブレッドじゃないか…。」

「古臭いでしょ？」

呆然とする匠に、高遠が笑った。

「あの”爆破事故”の日さ、このコ、空港にいたのね。」

「え？」

唐突な話に、匠は今度は驚いた。

「しかも、件のシリングの外交官を連れて空港にいたのよ。

爆破された飛行機に乗るはずだったんだって。でも到着後に爆破された。」

「しかも、しかもね。」

「どうやら、こいつが犯人みたいなんだよね。」

「…。」

匠はあんぐりと口を開けたまま、高遠の話の続きを待った。

頭の中では、先日、あの”カブラギ”という青年が、何故あんなにまで姪のユリに詫びていたのか、やっと合点がいったところだった。

「いい偶然でしょ？」

「偶然じゃないと思ってるだろ。」

「おちやらせる高遠を、匠が叱った。」

「偶然にしなきゃいけないんだよ。」

このコ、今、警視庁国際課の刑事なんだけどさ、あの当日、シリングから外務省に、大使を空港へ送迎して欲しいと謎な要請があつてさ、不信に思った大鳥派の担当…、名前なんて言つたっけな…、北…、まあいいか。

その担当が、このコに送迎任務を依頼したのね。

内々で、さっきの噂は立っていたから、カンが働いたんだろうね。

暢気に言つて、高遠は醒めたコーヒーを啜った。

”爆破事故”のニュースは、のほんと平和なこの世の中でゴシップを乞う連中には打って付けのニュースだった。

航空会社や乗客の一部に関して、ある事ない事噂の火を炊き付け、マスコミが面白おかしく書き立てていた。

そんな中に蕪木の名が挙がれば、大した噂を生み出すだろう。

「罨に填ったのか……」

「そう。まんまと。」

警視庁は噂知らないし、来ちゃった以上引き受けなきゃいけないから、機転の利いた担当の勝ちって感じだね。」

未だだらだらとする高遠が、そう言つて漸く姿勢を正した。が、今度は両腕で頬杖を突いた。

そして、不敵ににやりと笑う。

「でもね、動いたからこそ、あつちの負けよ。」

「シリングの大使？」

「うん。シリングについては、主要官僚や外交官の口座は粗方洗つてあつたんだ。」

その中で、ちょっと不思議な金の流れる口座を持つてた外交官がいてね。

それがその大使だったの。」

あ の とき、 と それ から 12

それから数十分、高遠から聞かされた話は、三文小説でも読んでいるような、現実離れしていて、筆舌に尽くし難い奇妙でややこしい話だった。

状況証拠だけではあるが、真犯人は特定出来た状況で、それでも高遠は別れ際、「待っていてくれ。耐えてくれ」と言って匠に頭を下げた。

高遠の立場を考えれば、ここで“爆破事故”を事件として無事解決したところで、国内事情がただでは済まなくなる。

諸々一斉に片付けるためには、少なくとも数年かけ、元から崩さなければならなかった。

その事情は、十分理解出来るものだった。

遺族感情とは、こんなところで燻るのかという発見を、匠は今している。

探偵事務所を開く前、警視庁の公安部外事課の捜査員をしていた。その頃は、遺族感情は捜査に入れてはいけなさと徹底された。

法と差異が生じるからだ。

無機質に振る舞う事を教えられ、無感情になる事は禁じられた。

そのやり方に反抗しなかった訳ではない。

どうあっても、行く先々の現場には感情が溢れていた。

静寂な筈の殺人現場に、耳が痛くなる程の悲鳴を聞いた時もあった。

耐えられなくなったと言えば嘘になるが、確かにそれに近いくらいの絶望感を背負い込んだ時期もあったし、この積み重ねによって、仕事への熱意を失った事は事実だった。

高遠とは、大学を卒業してからも、こういった仕事で関わり合った。検事になった高遠は東京地検特捜部員、刑事になった匠は外事課員として。時には敵を演じなければならぬ事もあったが、変わ

らず友人として付き合う、無二の親友だ。

精神的に崖縁に立った時、退職を奨めたのも高遠だった。

その頃から、高遠には構想があった。

「国内権力の総てを、一瞬でも超えた権限を持てる捜査機関が欲しいんだ。」

高遠は今、その構想のために検事をやっている。

その実現のために一番重要な人物もまた、今回の保護対象である蕪木 一穂法務大臣だった。

高遠は、その息子まで駒に挙げた。本気だと言う証拠だと思った。だから口出しは出来ない。ただ解決を待つしかない。

匠は帰って来て即座に座ったダイニングテーブルの椅子の上で、小さく溜め息を吐いた。そして、項垂れた。

外事課にいた頃も、よくこうして項垂れたものだった。

そんな匠の様子に構いもせず、隣のキッチンで洗い物をしていたカナエが声をかけた。

「高遠さん、元気だった？」

カナエも、高遠とは大学の同期だ。

「うん、相変わらずだったよ。」

もうあのオカマ口調は抜けないんだろうね……。」

「うふふ。」

いつからあんなになっちゃったかしらね……。」

「いつからだっけ……。」

言われて、ふと頭を上げて記憶を探る。

そう言えば、兄夫婦が結婚して暫くしてからではなかったか……。

「あの人、ナツの事好きだったのよねえ。」

でもナツはずーっと、貢センパイの虜だったから。」

カナエが優しく呟いた。

「……そうだったのか……。」

知らぬ事実だった。

そう思うと、あの口調も理解出来ぬものでもない気がしてくる。

そんな話をしていると、何にせよ、どんな事情があるにせよ、親族の関わる事件の調査をしてくれるというのならば、有り難いと思うべきなのかと、思えてきた。

「任せちゃっていいかなあ……？」

匠が呟くと、カナエが水道を止めた。

「いいわよ。」

恐らく、何についてなのか全く理解していないと思われるカナエだが、不思議とカナエに言われるとそれでいい気もして来た。

「いいか。」

「大丈夫よ。」

「そうか。」

ならば、それでいい。

匠はそう言い、窓の外を眺めた。

姪が独りで住む兄夫婦の家の灯りが見えた。

一つだけ、恐らく姪の部屋の照明だ。

「ユリはどうだった？」

「んー？」

相変わらずね。

でもあの子も大丈夫でしょ。

ちよつとビックリしてるだけよ。」

手を拭きながらリビングへ戻ってきたカナエが、笑った。

「頃合を見て、引つ張つてあげないといけないけどね。」

そう言つて、カナエも匠に倣つて窓の外を見た。

この頃は未だ、これから約六年に渡り、この事件が続いて行くとは二人も思っていなかった。

それから、定期的に高遠に呼び出され、匠は状況を報告された。

頼んだ事ではなかったが、望んでいた事だったので、匠も嬉々として向かった。

着々と自体が動き、進んでいく中で、高遠念願の『特別調査室』設立も決定した。

そこへ噂の蕪木 了も召喚する方針が決定した。あとは大鳥の資金源を潰し、野党幹部の揚げ足を掬えば、総ては高遠の望む方向へ、そして、それぞれが丸く収まるべく、進んでいく。

姪のユリもすっかり立ち直っているようだった。

風向きは完全に追い風。

あとは駆け抜けるだけになった。

ならば、自分も立ち止まってはいけなйдらう。

匠は、何度目か高遠に呼び出された日、言った。

「次機会があつたら、僕が加わる事を許してくれ。

どんな役でもやるよ。」

匠の要望は、高遠が待ち望んでいた事だった。

高遠は快諾し、しかし俯いた。その表情は、笑顔は浮かぶものの、いまいち冴えない。

問うと、高遠が俯いた。

「とーるちゃんがさ、入院してるんだよね。」

今回の待ち合わせで、まだ報告を聞く前だった匠は、この言葉に眉を顰めた。

「男爵”に刺されたの。結構危ない。」

”男爵”については、既にバークレイ一家のトラブルから、正体はエルシだという情報も高遠から聞いていたし、了が捜査に加わる事も聞いていたが、まさかそんな危険な目に遭うとは、考えもしていなかった。

「危ないって…。」

「まだ意識が戻らない。そろそろ一週間になるのよ。」

話す高遠は、いつもの調子をすっかり失い、幾らか憔悴していた。「出血が酷くてね。意識が回復したところで、捜査に戻るかどうか…。」

「……」

それ以上語る気になれないらしい高遠とは、その日は早々に別れた。

その数日後、高遠から電話で了の意識が回復した事を告げられ、そのまま音沙汰なく数週間経ったある日、高遠から呼び出し受けたいつも会う喫茶店に向かうと、やや弱弱しく笑いながら手を振って匠を迎える高遠がいた。

「退院したんだって？」

「うん。まあね。」

頷く高遠の声に、覇気がなかった。

「何？」

「計算、ちよつと違ったかな……」

匠が問うと、そう言つて、高遠が話し出した。

意識が回復したと聞かされた日、業務を早めに切り上げて病院に向かった高遠を、了は笑顔で迎えた。

「すみませんでした。」

謝る了に、高遠が「謝る事じゃないよ」と答えると、了は静かにリハビリを始めた。

その時、すぐに了の様子が変わった事に気付いた。今まで様々な人間を見てきた高遠にとって、今日の前にいる了は、とてつもなく危険なものに思えた。

人間、死を目の当たりにすれば、暫くは自身が生きる事に執着するものだと思っていた。それ故、過剰な行動や発想は避けるとも。

しかし、了は違った。

一見、生きる事に前向きに見えるが、高遠には死に急いでいるようにしか見えなかった。

顔つきすら変わっていた。

何かを悟ったような、そんな表情をするようになった。

高遠が時折、悪戯に「三途の川を見たんだから」と茶化したか、

内心はスウェーデンへ捜査に行かせた事を後悔していた。高遠が素直にそれを詫びると、了はにこりと笑った。

「これが仕事でしょ？ アイツはもつと辛いだろうし。」

高遠はその一言で、本当の了を理解していなかった事に気付いた。了は、全てを背負い込んでしまう。

生い立ちがそうさせたのか、そこまでは解らなかったが、高遠にとってこれは危険な事だった。

「あのコをあんなに怖いと思った事はなかったよ……。」

高遠が言つと、匠はきよとした。

「そう？」

「え？」

匠の反応に、今度は高遠がきよとした。

「うちに来た時、そう思っただけだな。」

この人は背負い込むの得意なんだろうな、って。

どうかな、一つ提案があるんだけど。」

匠はそう言つと、高遠ににやりと笑った。

「次、”男爵”から予告が来た時も、彼が担当するでしょ？」

そのとき、うちのユリを同行させて貰えないか？」

「ユリちゃんを？」

「うん。」

彼は、ユリに思いの外、感情移入してるみたいだから。性格矯正に、使えるんじゃないかな。」

「粗治療じゃない？」

「うちのユリの治癒力を舐めてもらっちゃ困るよ。」

困惑する高遠に、匠が再度ににやりと笑った。

あ の とき、とそれから 13

昔の事を思い出す。

了と出会った時の事を。

あの時は、内心、” 蕪木 了 ” などという青年の事など、どうでも良かった気がする。

ただ、あのロケットを預かりたいと言われた時、ほんの少しだけ、憎しみが沸いた。

何故だかは、解らなかった。だが、確かにあの時、あの何の関係もなさそうな青年を、憎らしいと思った。

カナエとの結婚後、兄夫婦にユリが生まれ、間もなく匠と貢の両親が死んだ。

カナエや奈津子の両親とは疎遠だったので、兄夫婦と妻と可愛い姪だけが家族だった。

その家族を、突然失った。

状況が状況だけに、悲しみや怒りのぶつけ先もなかった。

事故と聞かされた時、航空会社を憎いと思わなかった。

ただ、消化し切れぬ思いと、仕方ないという諦めと、諦める事への空しさが、体いっぱい包んでいた。

そこへ現れた青年が、家族の遺品を持っていた。

聞けば、渡せる状態にある遺品は、あのロケットだけだったという。

その、兄夫婦の生きた証の一つであるロケットを預からせて欲しいと言った青年を、憎らしいと思った。

だが、今思い返せば、あの憎しみの正体が、八つ当たりだったと言う事が解る。

誰かにこの悲しみをぶつけてしまいたかった。背負わせてしまいたかった。逃げと言われても、それでよかった。

預けてから、少し後悔していた。

解決なんてしないでいいと思う時もあった。

高遠や了には悪いが、兄夫婦が亡くなった事に変わりはない。だから、どうでも良かったというのが本音の一部だった。

あのロケットを手元に置いて、ユリに戻してやっていたら、ユリはもつと早く悲しみを実感出来たかもしれない。

しかし、匠がそう吐き棄てた時、カナエが珍しく叱った。

「それじゃ、ユリは二度と元に戻れないわ。」

高遠や了が真相を解明し、総てを解決するのは、自分たちのためではなく、ユリがユリになるために必要な事だと。

そう言われて、やっと了を赦せた。

勝手に恨み、勝手に赦し。もちろん了に言った事などないが、了は恐らく、感づいていただろう。

後々申し訳なさでいっぱいになった。

いつかの自分のように、真相をユリに告げたくないと言った了が、有り難かった。そこまで護ろうとしてくれる了が、嬉しかった。

ふと現実に戻り、辺りを見回す。

平日正午だというのに、街には人が溢れる。

一時的に喧騒から逃れたものの、最近は”直結”というキーワードを謳い文句に、一時間もかからず都の外れにある空港へ着いてしまう。

旅はこんなに早々行つものではないだろう、と思う。

そして、空港の賑やかさにも、少々辟易とする。

何でこんなに人がいるんだろう。

人間嫌いではないが、静寂を好む匠には、都会やハブ施設は居心地が悪い場所だった。

そんなつまらない事を考えながら、最近改築の終わった空港をうるつき、クレアを探す。

キヨロキヨロと見回しながら歩くと、出国手続きカウンターに向かおうと今し方ベンチを立ったクレアを見付けた。

「おい。」

何の銜いもなく大声でクレアに声をかけると、クレアがこちらを向いた。

そして、「まあ」と聞き慣れた反応をして、小走りに駆け寄る。大きな白いボストンバッグに、初日に見た白いツーピースを身につけ、髪を結い上げている。

「すみません、わざわざ見送りに……。」

「いやいや。」

ユリが来られなくて、申し訳なかったね。」

大きくお辞儀をするクレアに、匠がにこりと笑った。

「いえ。」

残念ですけど、仕方ありません。

ユリさんとカナエおばさまに、よろしくお伝え下さい。」

「ああ、伝えるよ。」

匠が返事をする、その声に被って、出国手続き終了間近のアナウンスが流れた。

振り向けば、カウンターには長々と行列が出来ている。

「あ、では、私そろそろ出国手続きをしなければ。」

「ああ、気をつけて。」

落着いたら、是非ユリに連絡してやってくれ。」

「はい！」

それでは。

色々有難うございました。」

そう言って、また大きくお辞儀をすると、ボストンバッグが重いのかフラフラと走り出した。

出会った時も、見送る今も、印象は何も変わらない。

か細く小さな、野花のようだった。

「……さて。」

帰るか。」

手続きを済ませ、ゲートへ向かうクレアの背中を見ながら、匠は左足を引き、振り返ろうとした。

が…。

ふと、クレアの後頭部に気になるものを見た。

「……ん？」

素早く視線を戻す。そして、ぽかんと口を開けた。

「……………」

匠の視線の先。

クレアの後頭部で髪を結い上げる髪飾りが、大きな大きな紅い光を放ち、クレアの動きに合わせてきらきらと輝いた。

あれは…。

”紅い泪”…。

まさか。”紅い泪”はあの日発見、回収されたはずだ…。

だがあれは、紅い宝石の大きさといい、石を包む金色の細工といい、明らかに”紅い泪”だった。

暫し啞然としていた匠だったが、程なくして「…………くふ…」と声を出してにやりと笑った。

”双子”。なるほど…。

「あの兄妹の、勝ち…かな。」

そう呟きながら、了や高遠から聞いていた”男爵”に纏わる情報の総てを理解した匠は、口元に邪悪な笑みを浮かべながら、くると踵を返し、歩き出した。

少女も兄も、さぞほくそ笑んでいる事だろう。

踊り、逸る心と足取りを抑え付けながら、家へ帰るのだろう。

これから起こるであろう、シリング王政崩壊の記事の端に、何も出来なさそうな弱弱い自分の写真が載る事を、嘲笑^{わら}いながら。

私の頭の中は、あの人でいっぱい

突然届いた、手紙のあの人

私の心を知る、あの人

”双子の流した

本当の紅く輝く涙を手に入れば、

あなたの母が、

帰ってきますよ。

それまでは、そう…

私がああなたの記憶を大事に取っておきましょう…

0504。

日の出の国の、ご友人の洋館で、

月夜にお会いしましょう…”

私の心の中は、”男爵”あの人でいっぱい…。

あのととき、とそれから 13（後書き）

このお話が誕生したのは、約十年前になります。

その後、このお話キャラたちは一度、とある検索サイトの公式キャラとして暫く活動していました。

その中で、ショートストーリーを掲載する事になり、キャラ設定を本格的にやり始めた事が、この小説の切欠になります。

暫くして、ゲーム化の話が持ち上がり、それなりの予算を組んで企画も始動しましたが、諸事情により、企画は中断。

その後、このキャラたちも一旦この世を去りました。

未だ権利は私の手中にある中で、何度か日向へ置いては、埃を拭いながら手を加え、削ぎ落とした最終形態が、この小説になります。構想当時には珍しかった警備設備も今では当たり前になり、然程の凄さも感じなくなったり、世の中の凄惨な事件の数々の中では、やはり然程の惨さも感じなくなったり、と、世に出すことも何度も躊躇いましたが、個人的事情で、このたびまとめ、彼らの世界を一度ゴールさせる事にしました。

書き進めていたアドベンチャーゲームのシナリオを文章化しました。そして、ゲーム化も進行中です。

無料配信予定につき、どこかでお目にかかるかも知れません。

総て自作による制作、いつ出来上がる事やら…。

ひっそり生み出されたこの子たちをどこかで見かけたら、少しだけでいいので、手を振ってあげて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8306o/>

男爵は嘲笑う

2011年10月7日03時22分発行